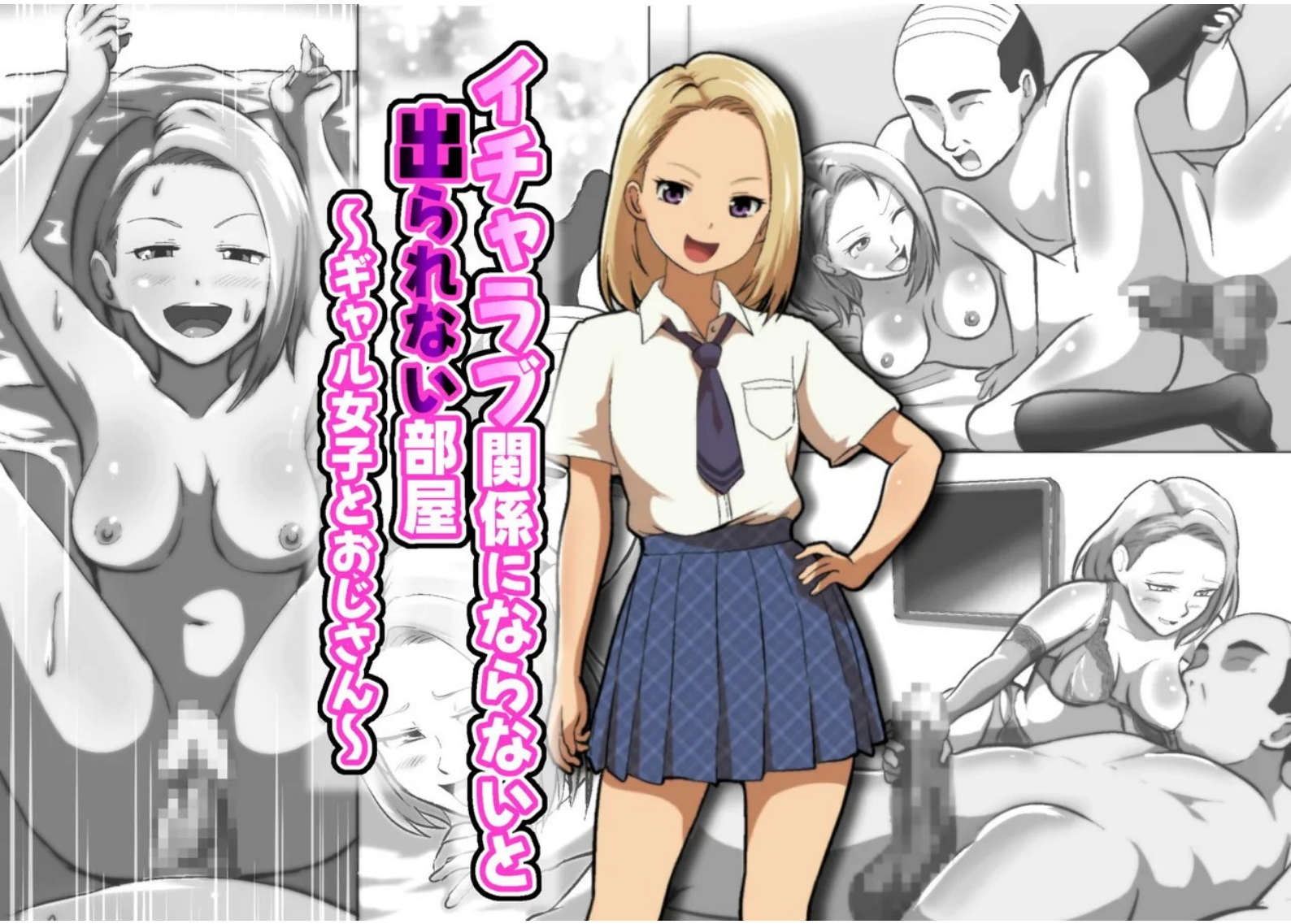

イチャラブ関係にならないと
出られない部屋
～ギャル女子とおじさん～

午後9時半を少し過ぎた頃。

終電間近の車内にはわずかな乗客しか残っていなかった。天井の蛍光灯が薄暗く車内を照らし、車窓に映る自分の姿を吉田はぼんやりと眺めていた。

車両の隅の方の席に腰を下ろし、疲れ切った体を重たげに預けて深いため息を吐く。

40代半ば、清掃員として働く吉田は今日も残業で遅くなった。作業着のまま帰宅することに慣れてしまった体には、汗とほこりが染みついている。

ぽっちゃり体型に、後退した生え際。

もう今さらどうにかなるものでもない。

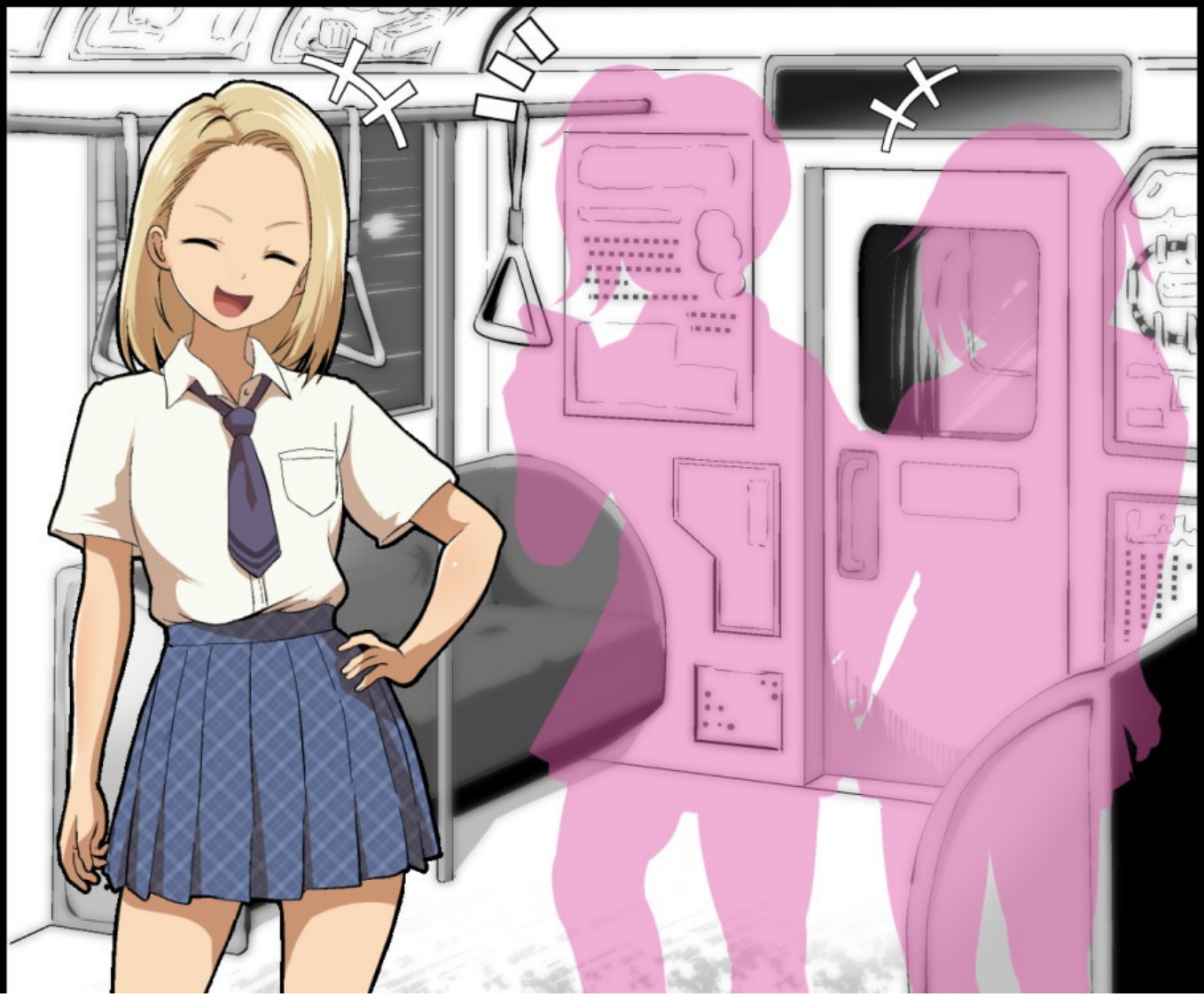
目の奥がじんわりと重くなったのでそのまま少し寝ようと思った。

車内には他に、華やかな雰囲気をまとった若い女三人組がいた。というか若すぎるというより学生だ。

夜の街からそのまま電車に乗り込んできたかのような雰囲気で、どう見ても校則に触れない範囲ではないことが遠めでも分かる。

特に意味のないようなやり取りを繰り返しては甲高い笑い声を響かせていた。そのはしゃぎぶりは、車両内の空気をまるで気にしていない。

三人のうちの一人がひときわ目立っていた。明るい金髪の典型的なギャルといった容姿だった。



その顔立ちは整っており、なぜか妙に目についた。

「ねえ、ちょっとあっち見てｗマジでおっさんって感じ…(笑)」

「ていうかめっちゃハゲ…ｗ」

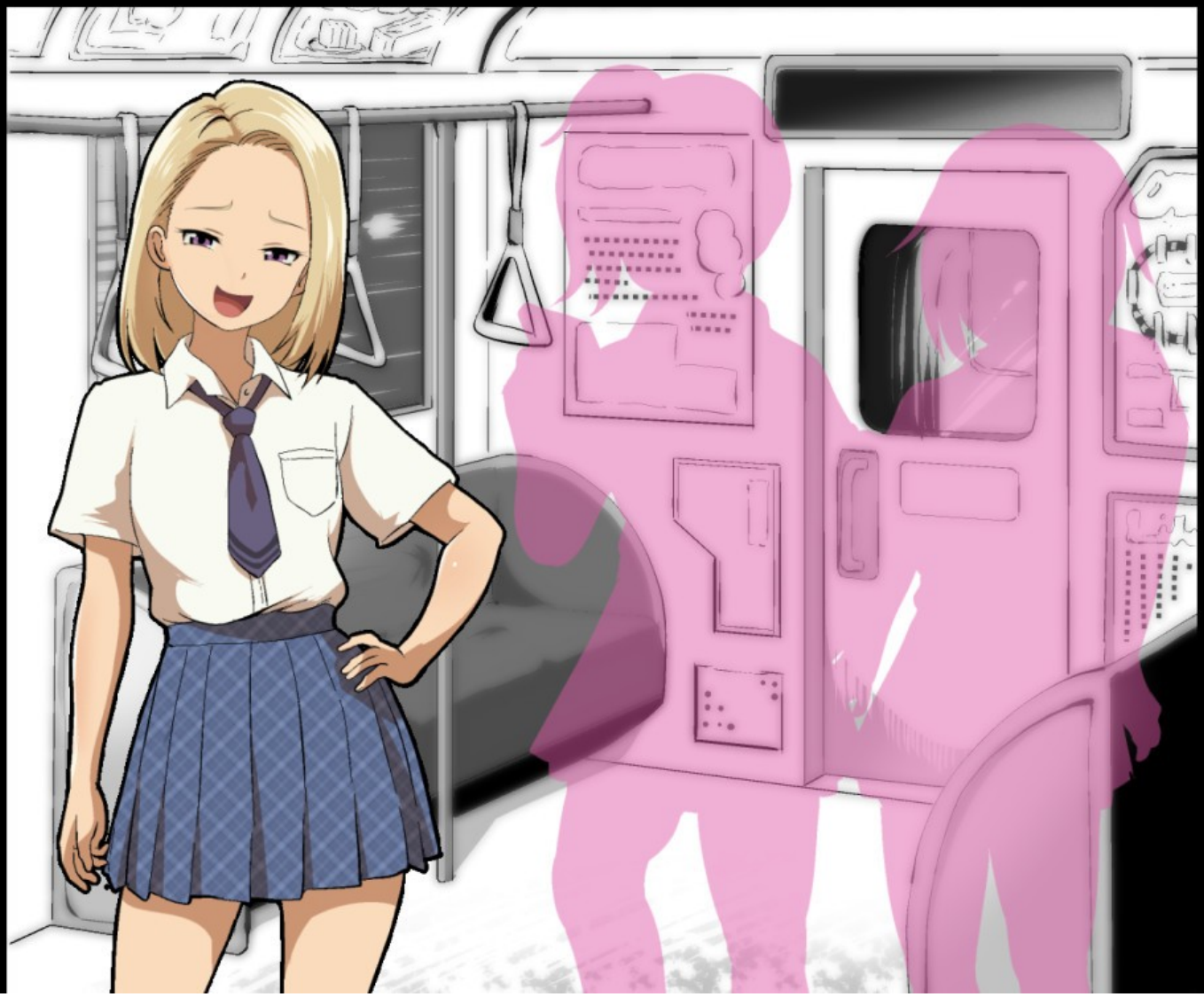
「こっち見てね？キモｗ」

そんな言葉がクスクスと笑い声にまぎれて聞こえてくる。明らかに吉田の方を見ながらの会話だった。

吉田はうつむき加減で目を閉じる。だが耳はしっかりと働いており、彼女たちの笑い声も言葉も、すべて鮮明に聞こえていた。

怒りや恥ずかしさを感じつつも、彼はひたすらやり過ごす。

関わったら負けだ。



年齢も立場も違う。何を言い返しても、結局は自分が悪者にされる未来しか見えなかった。

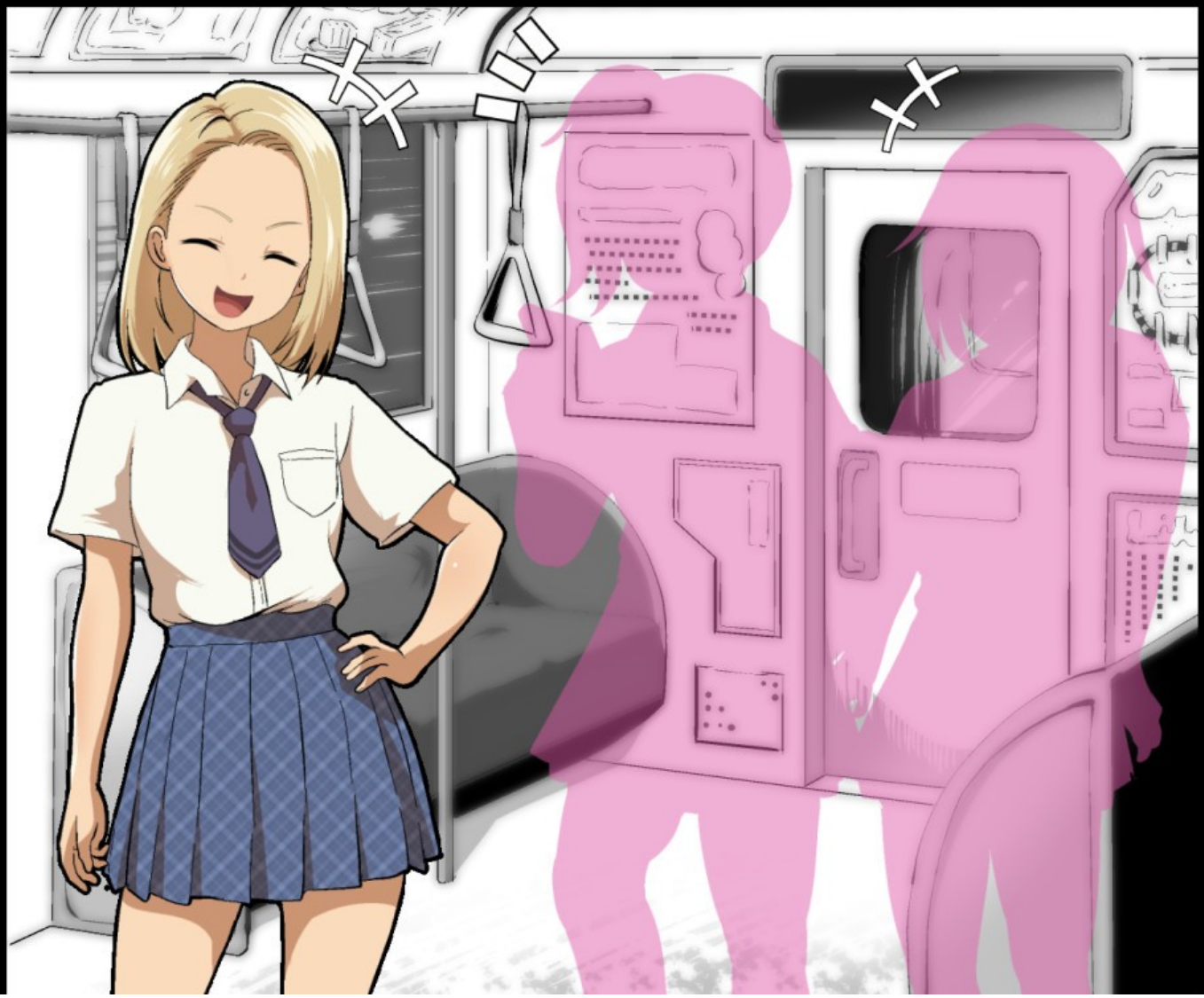
・・・しかし先ほども感じたが、金髪の女だけは妙に気になっていた。

無遠慮な発言をする一方で、その外見にはどこか惹かれるようなものがあった。

・・・一目惚れ？。

いや、年齢は確実に親子間ほども離れているだろう。

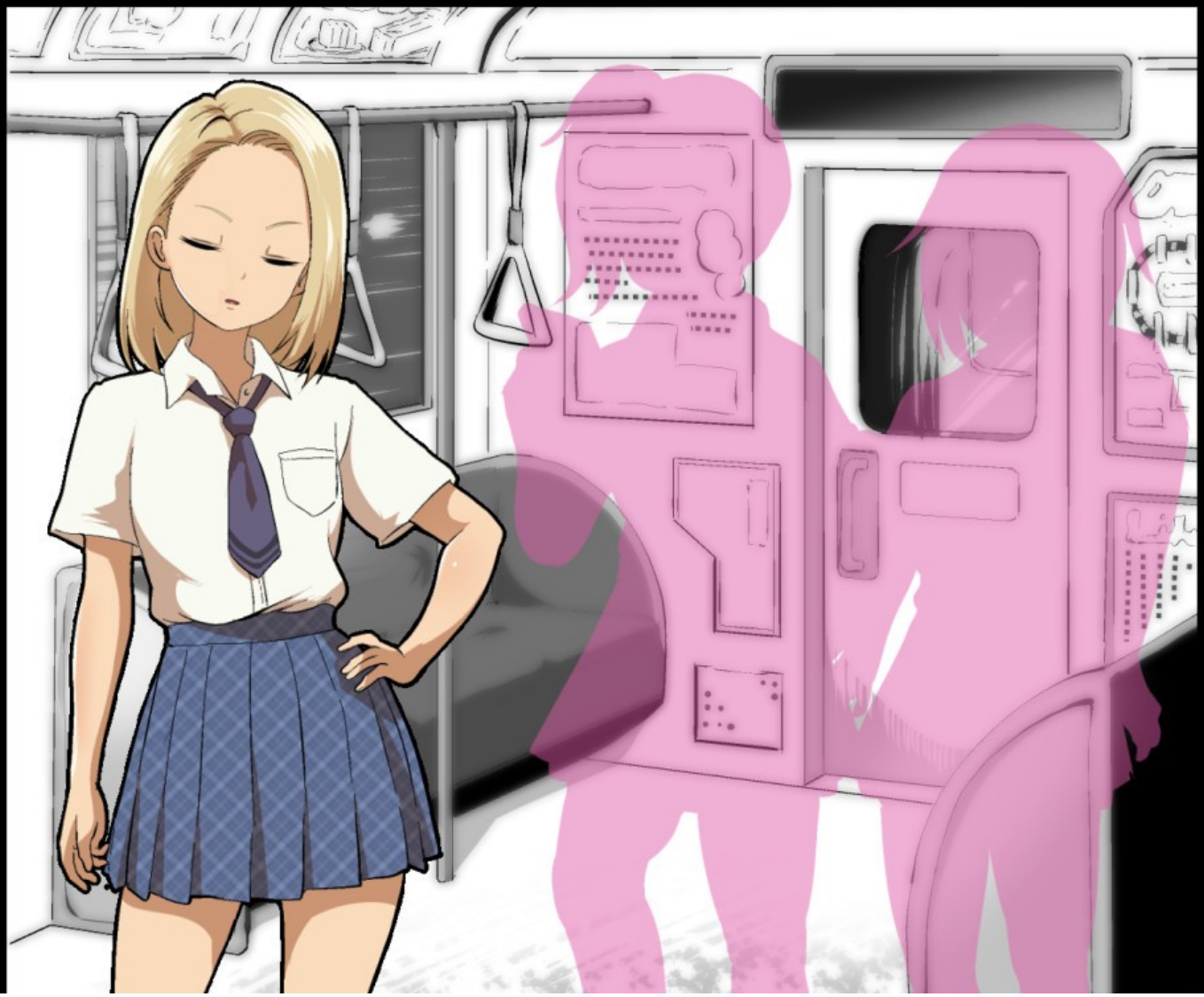
吉田はさすがに今のはキモ過ぎだろ、と自分に言い聞かせた。



そんな折、突然車内が異様なほど静かになった。

カタンコトンと線路を走る音が小さく聞こえるだけだ。

さっきまで笑い声をあげていた三人組が、まるで糸が切れたように一斉に眠りこけている。体を傾け、口を半開きにしてシートにもたれかかっている姿は、奇妙なほど無防備だった。



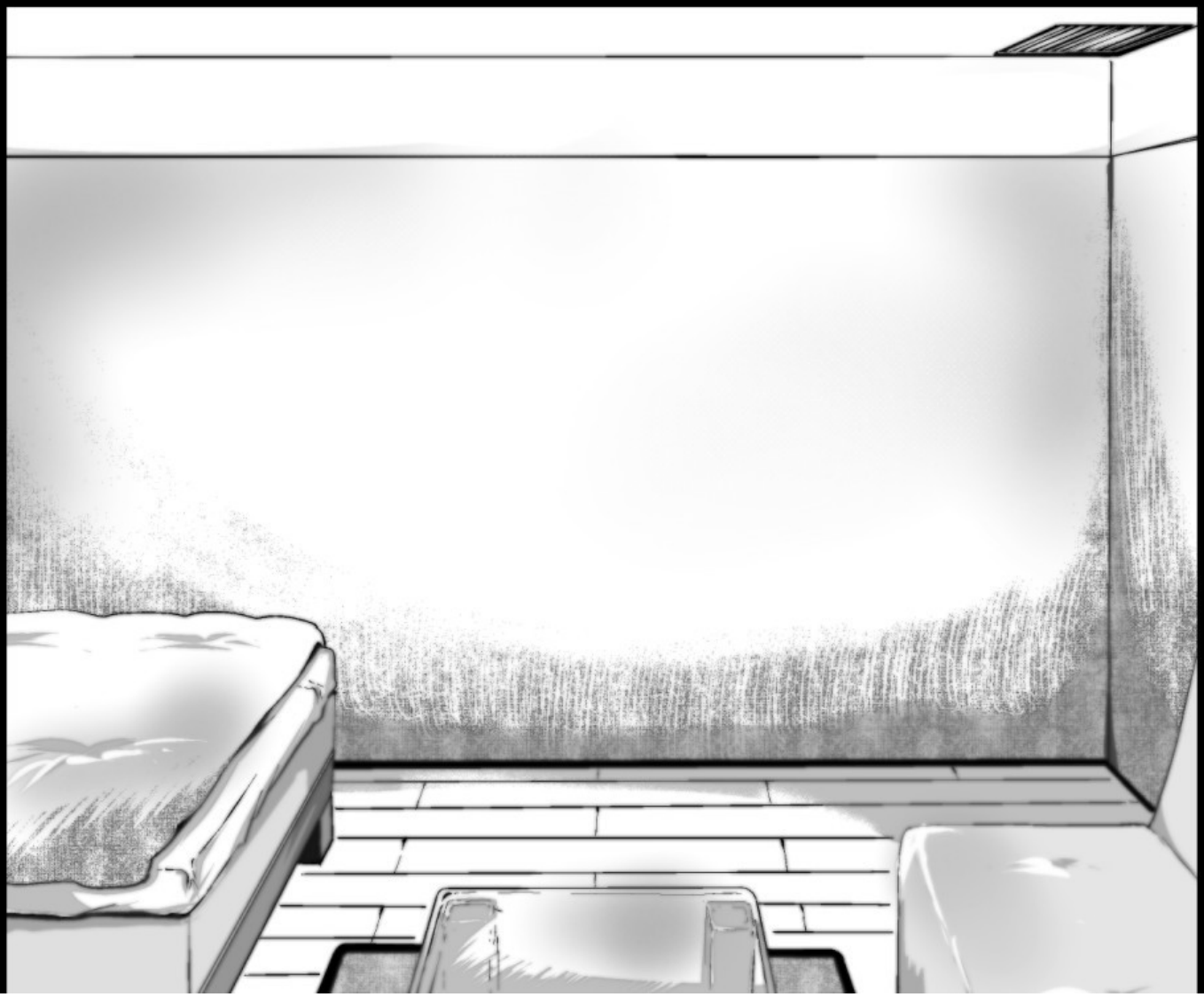
「そんな急に寝るか…？」と吉田は思わず声を漏らしそうになるが、自分も急激に強い眠気に襲われた。

まぶたがの重みに抵抗できず、意識が遠ざかっていく。

電車の揺れが心地よく、思考はぼやけていった。

――そして

次に吉田が目を開けたとき、そこは見覚えのない無機質な部屋だった。



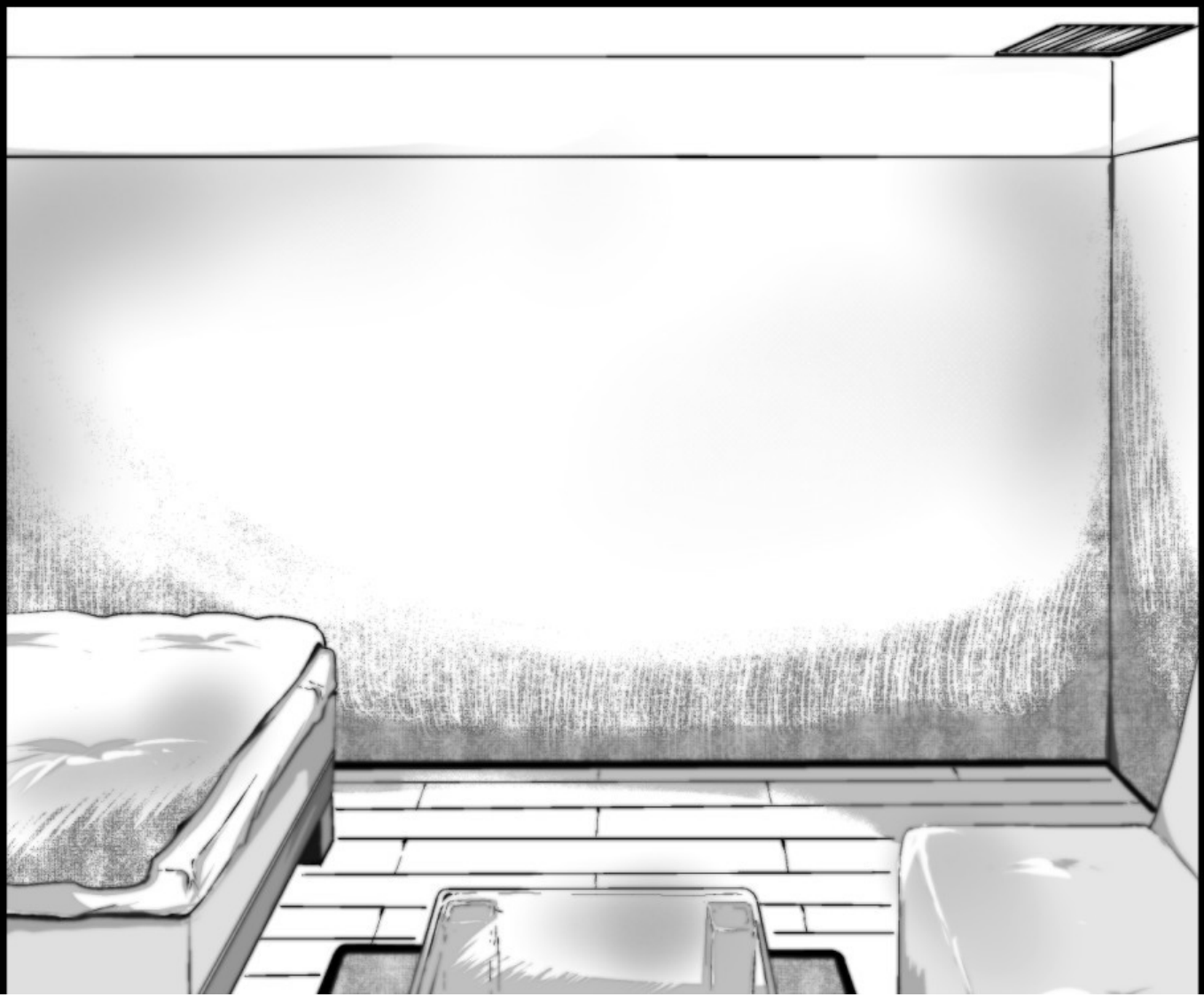
吉田は壁も天井も白いワンルームの床に仰向けに転がっていた。

天井の蛍光灯がぼんやりと明るく、その光が変に現実味を欠いていた。

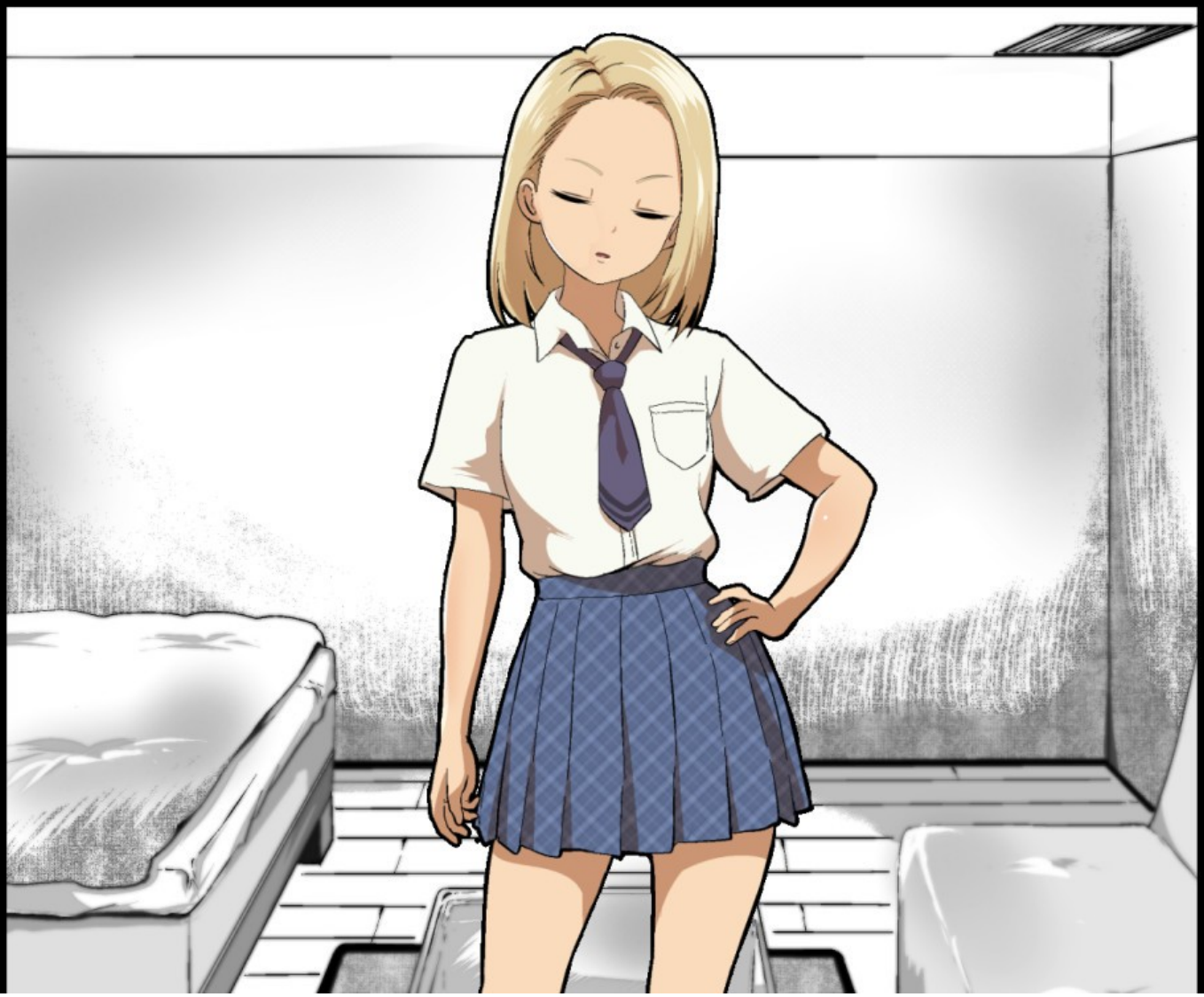
やけに大きなサイズのベッド。白いソファ。白いテーブル。意味あり気に壁に掛けられているモニター。

最低限の家具。まるで病院の簡易個室のようで、妙に整っているのが逆に不気味だった。

状況がまったく理解できず、吉田は頭を抱える。夢なのか現実なのか、その境目すら曖昧だった。



ふと、視界の隅に気配があった。
見覚えのある若い女がいた。
明るめの金髪。

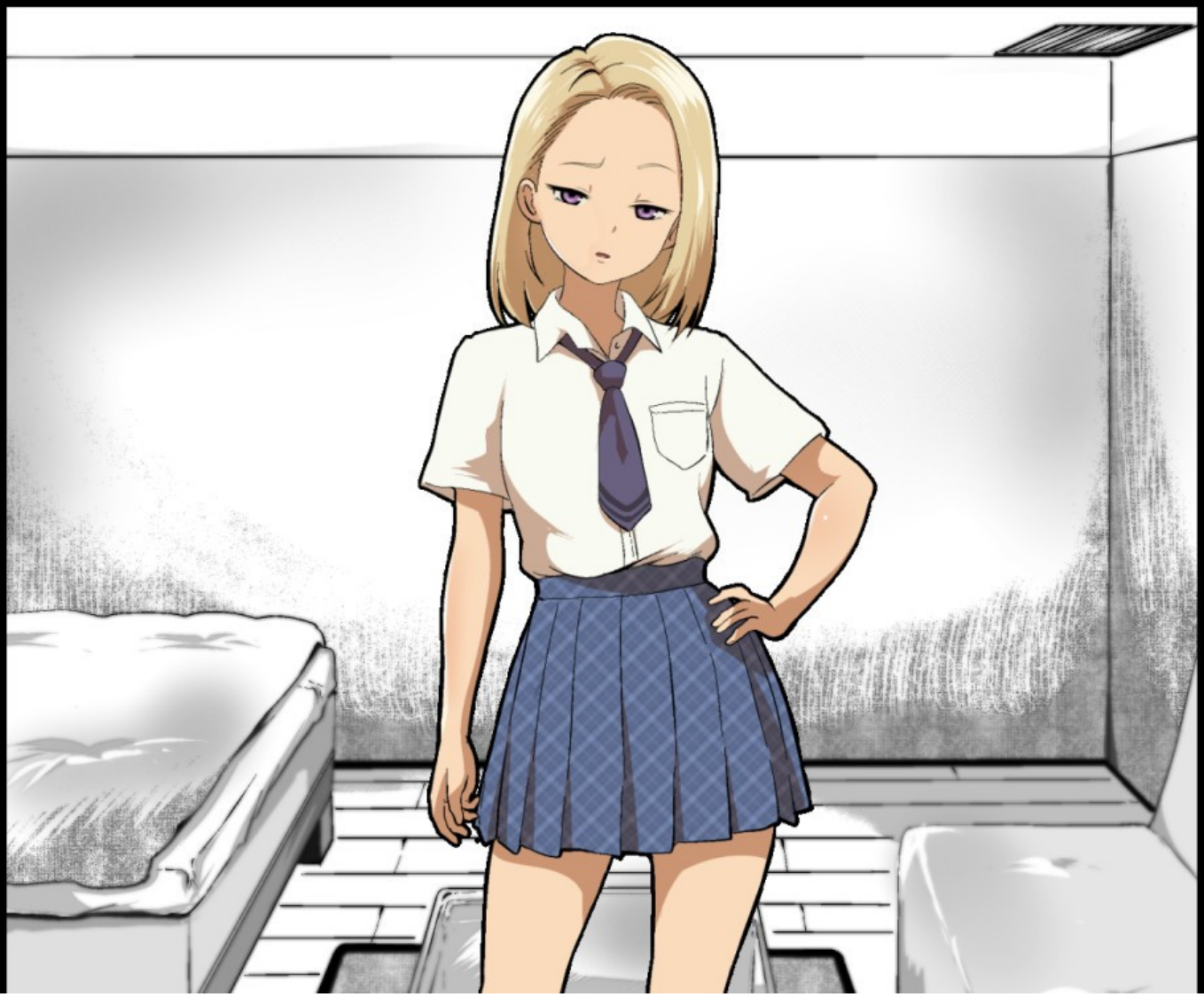


「…お、おい！大丈夫か？」

吉田の声に反応し、女は目を開けた。
電車で一緒だったあのギャルだ。
「…え、どこ？ここ？？な、なにこれ…。」

彼女も状況を把握できていないようだった。目を見開いたまま周囲を見回す。

「なんでアタシこんなとこに？」

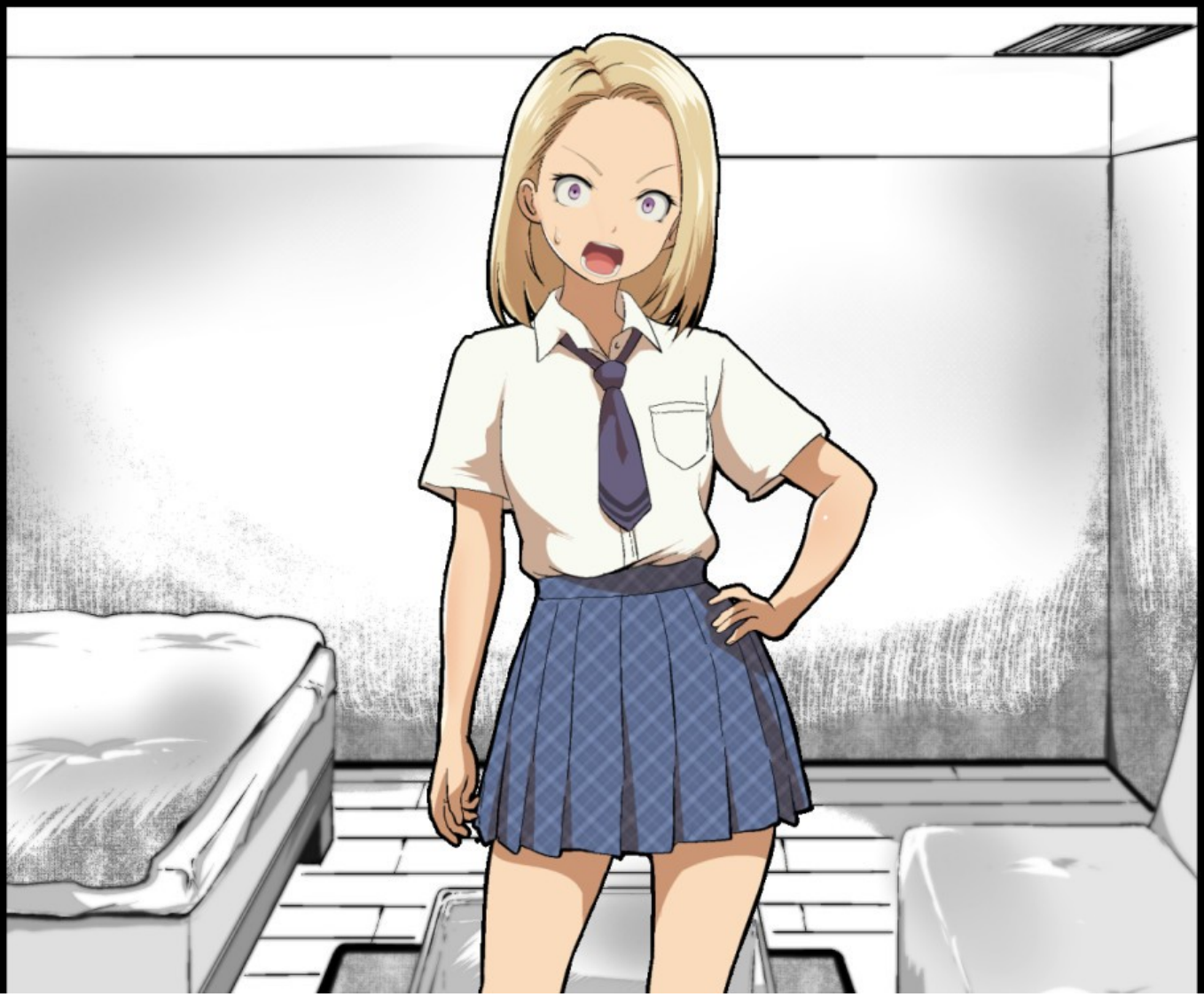


吉田を見つけた瞬間、女の表情がみるみる強張る。

「うっわ、え、ちょっと…なにしてんの!?あたしなんかされた!?やば！」

「い、いや待て！違う!!俺も今起きたばっかなんだ！」

吉田が慌てて釈明するも、女は露骨に距離を取る。



とりあえず二人は別行動しながらも出口を見つけるという同じ目的で室内を軽く散策しだした。

しかしどこにもドアがない。窓もない。外の景色すら見えず、まるで箱に閉じ込められたような閉塞感。

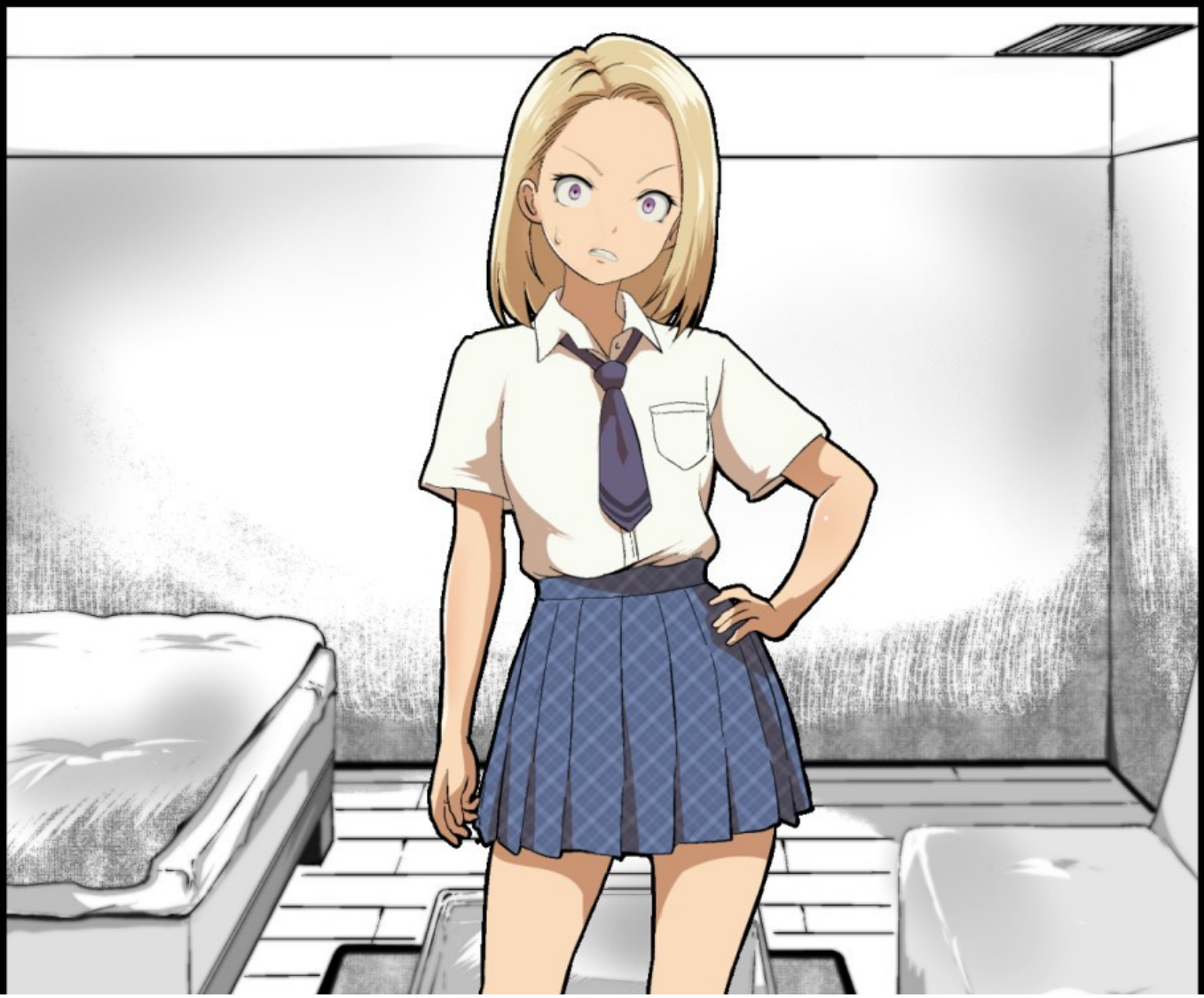
「…なんなのこれ！意味わかんないし!?」

女が叫ぶ。

風呂、トイレ。流し台に冷蔵庫やレンジといった簡易的なキッチン。

奥まった場所には飲み物や保存食がたくさんあった。

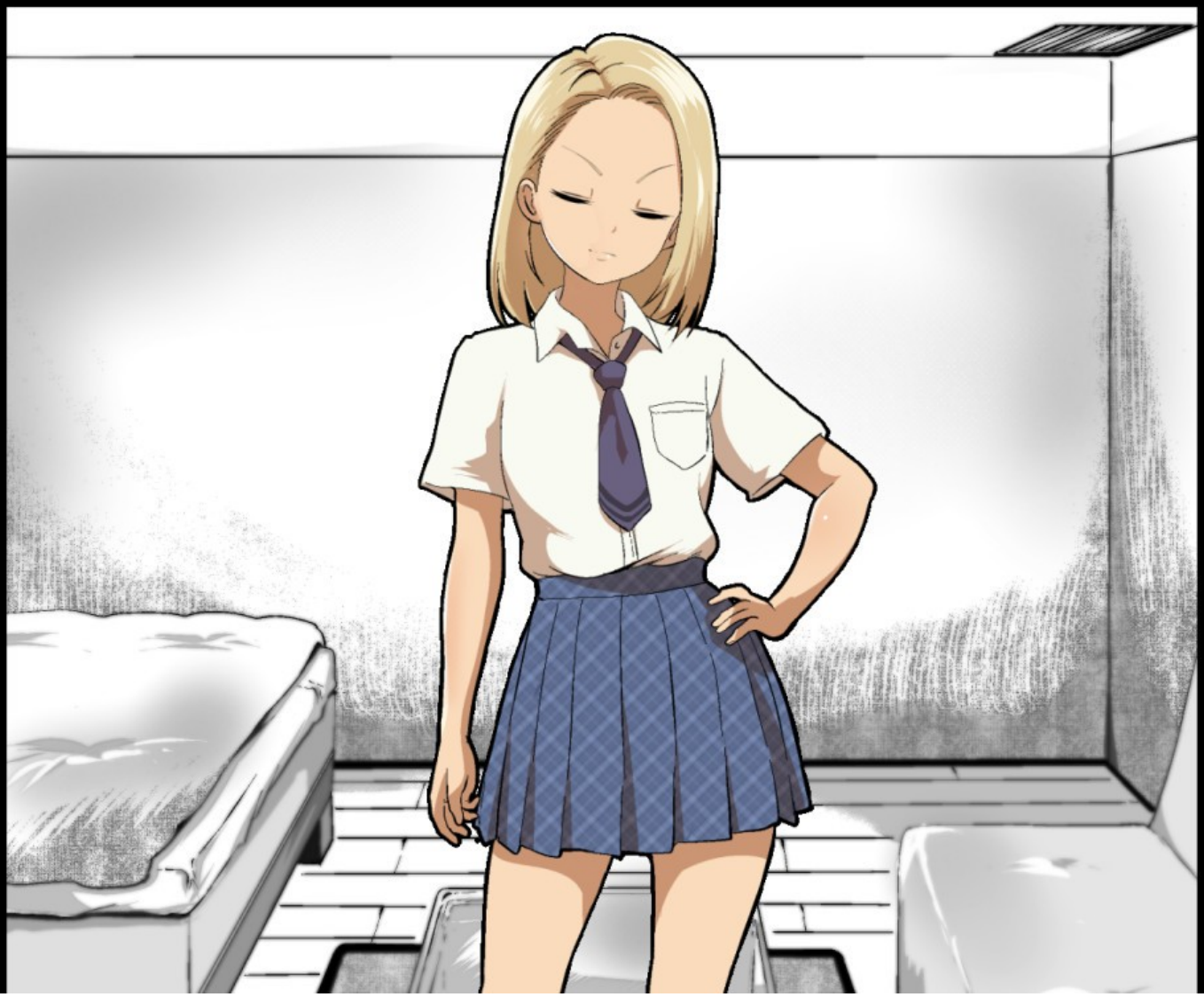
水も電気も使える。だが、それ以外は何もない。娯楽も、連絡手段も、逃げ道も。



お互いに黙り込む。距離を保ちながら床に座る。

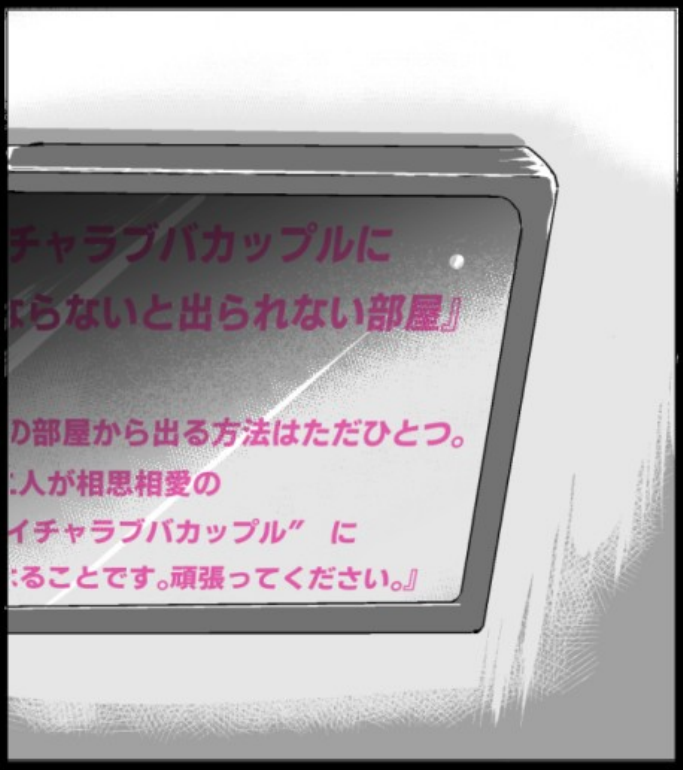
沈黙が重くのしかかる中、部屋の壁に掛けられたモニターが突如点灯した。

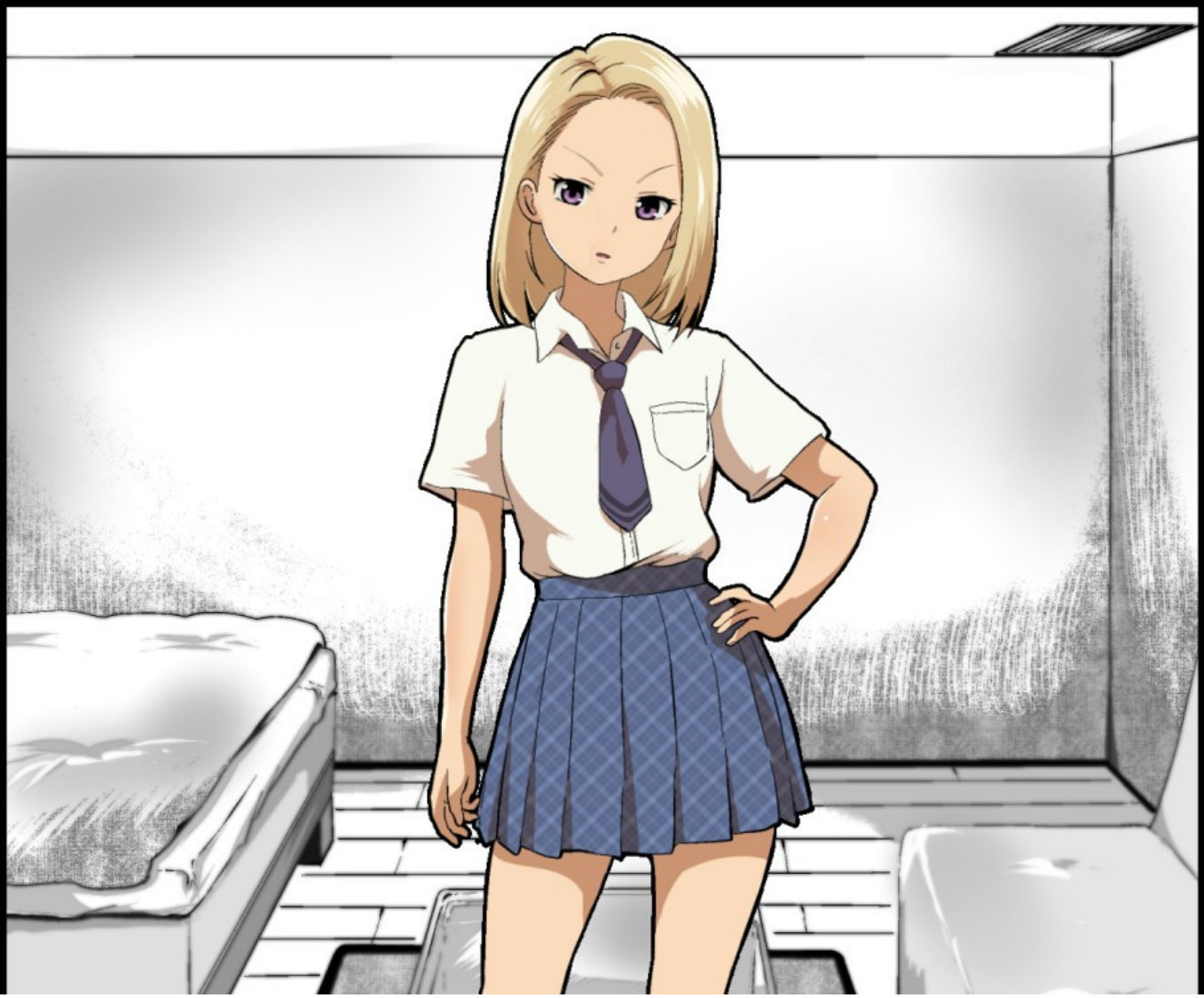
ピッという電子音とともに、映像でもないフォントの文字が浮かび上がる。



『イチャラブバカップルに
ならないと出られない部屋』

『この部屋から出る方法はただひとつ。
あなたたち二人が相思相愛の
〝イチャラブバカップル〟に
なることです。頑張ってください。』





「…は!?何それ意味わかんないんだけど!」

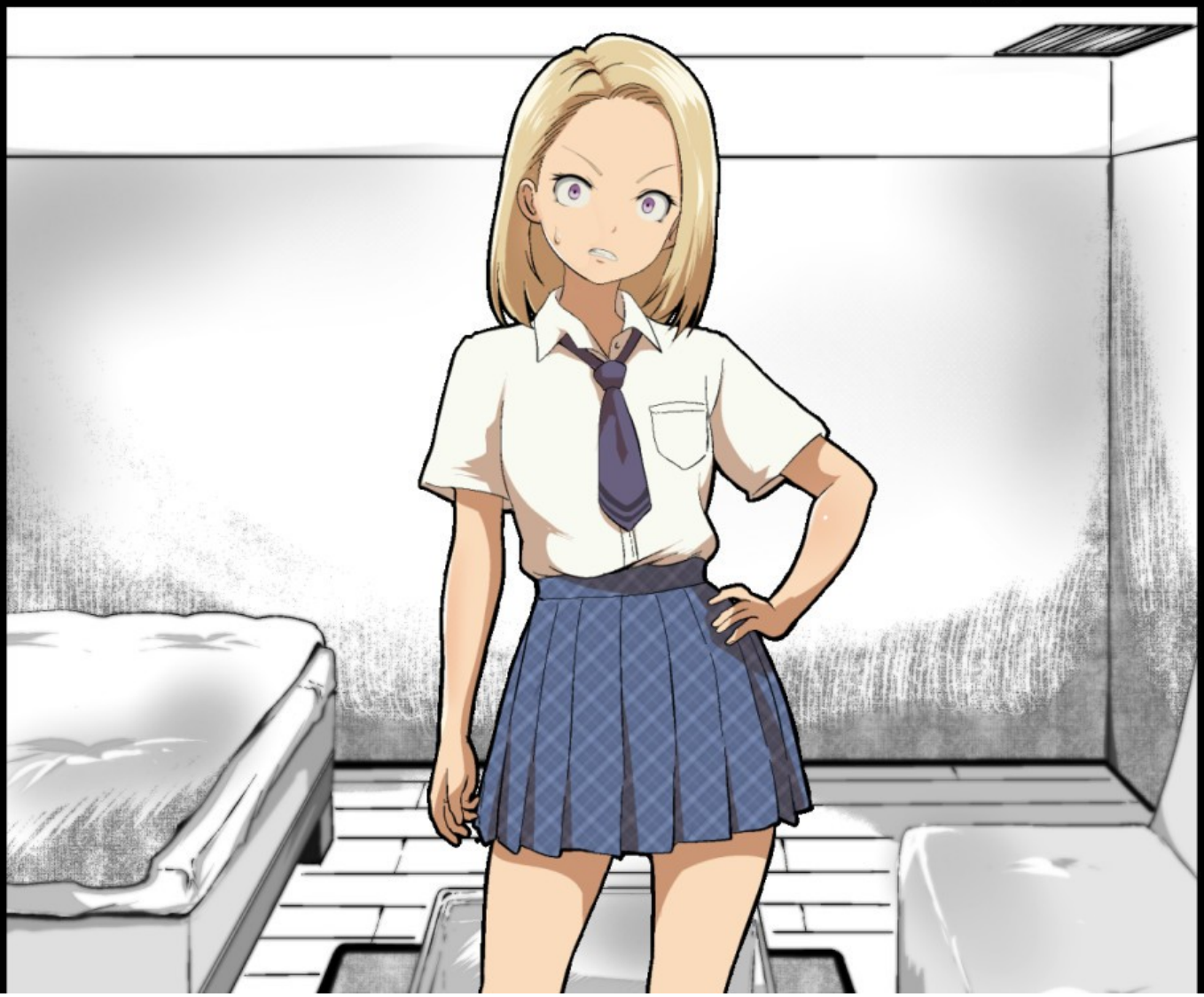
女がモニターに向かって叫ぶように言う。だが、モニターは女の反応を無視するように、続けて追記を表示した。

『ミイチャラブバカップル関係ミとは……』

・定義はありませんが、互いに心から相手を愛し合う状態になること。

・心の繋がりであり、形としての繋がりでもあること。

――この二つの条件を満たすことです。



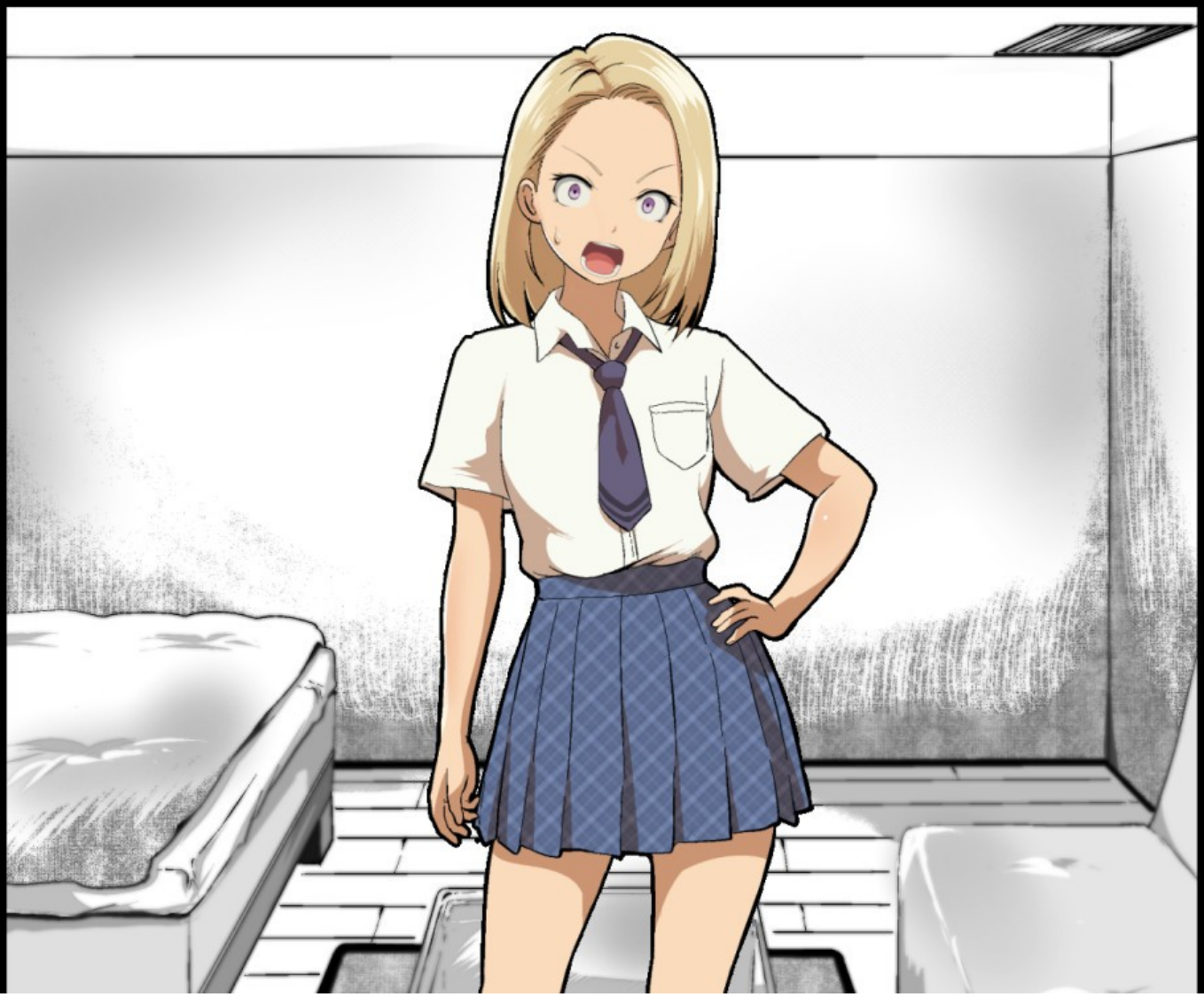
「いや…。いやいやいや!!バカじゃねーの!?無理無理ムリムリ!!絶っっっ対無理だから!!」

女は首をブンブン振り、指示されたことすべてを全否定するようなリアクションをとる。

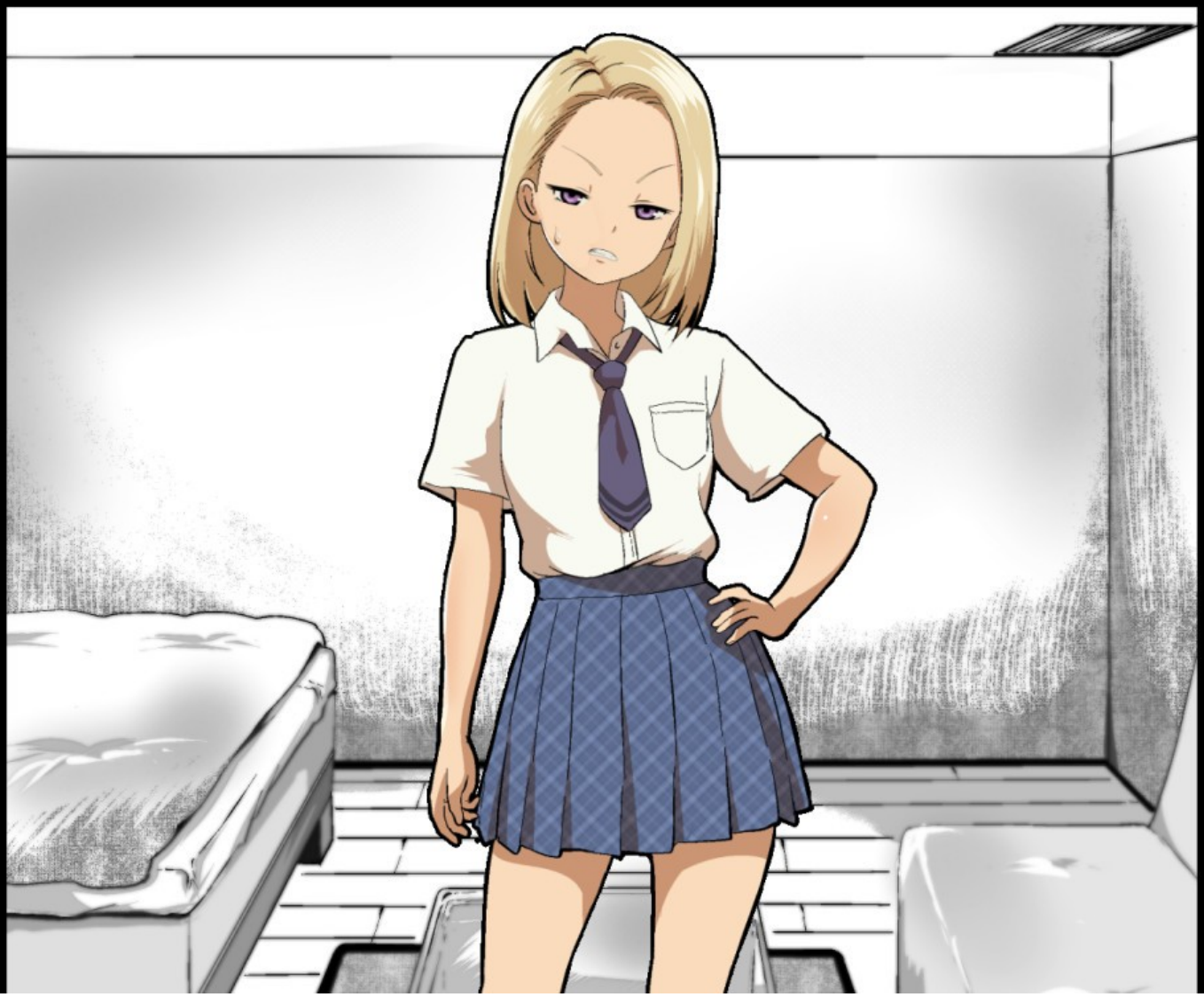
「こんなおっさんと!?ありえないでしょ!?」

吉田もモニターの文字を読み、ただ唖然としていた。

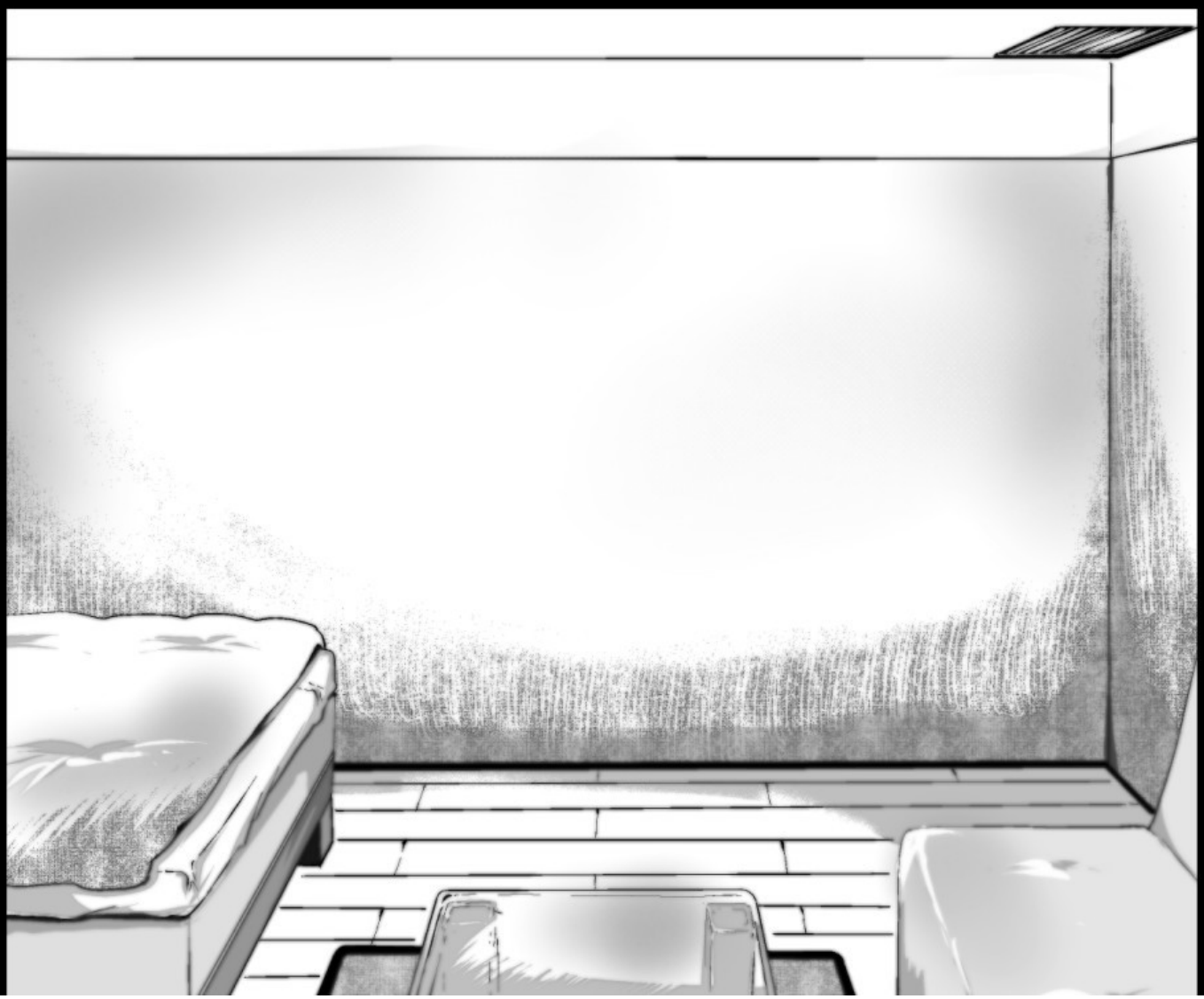
自分だって、まさかこんな意味不明な悪夢に巻き込まれるとは思ってもみなかった。



二人の奇妙な生活が、始まった。



食事、風呂、トイレ、睡眠。
閉じ込められてはいるものの、人としての最低限の生活リズムを繰り返すと何となく落ち着きは出てくる。
洗面所に洗濯機が、ご親切に乾燥機まで置いてあったのでお互い風呂に入っている間や空いた時間に使っている。（当然なのだろうが一緒には絶対洗わない）
非現実的な状況下であってもリアルな生活感の繰り返しが心をなだめていくのだった。
吉田は風呂上がりに冷蔵庫から缶の麦茶を取り出し、喉に流し込む。



吉田「璃音奈、か…」

中堀璃音奈。女の名前だ。

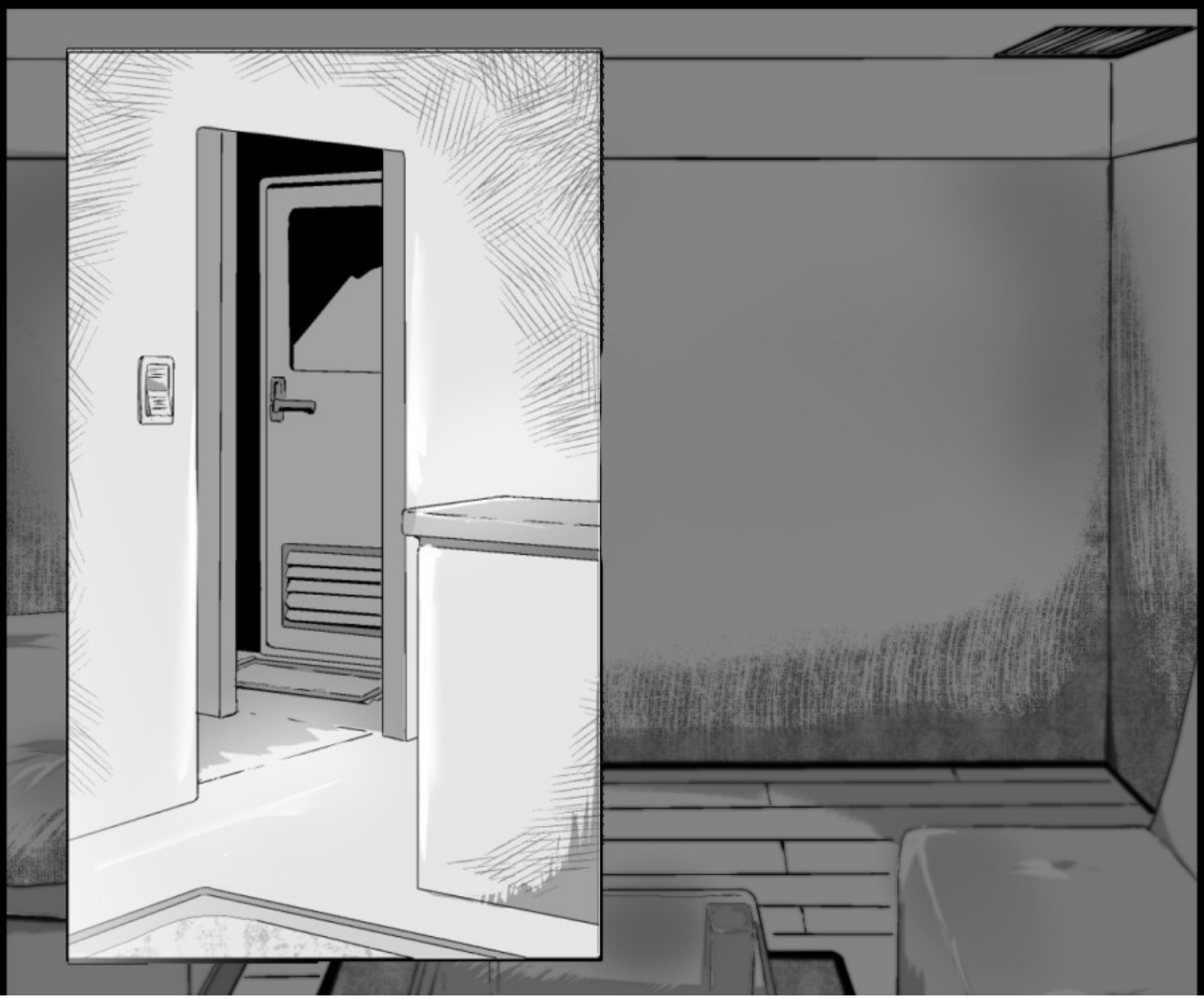
とりあえず部屋を出るための条件にとやかく言う前に、お互いの名前くらいは知っておいた方がいいと提案した吉田。

女は何とも苦い顔をしてやたら渋ってから名前を教えてくれた。

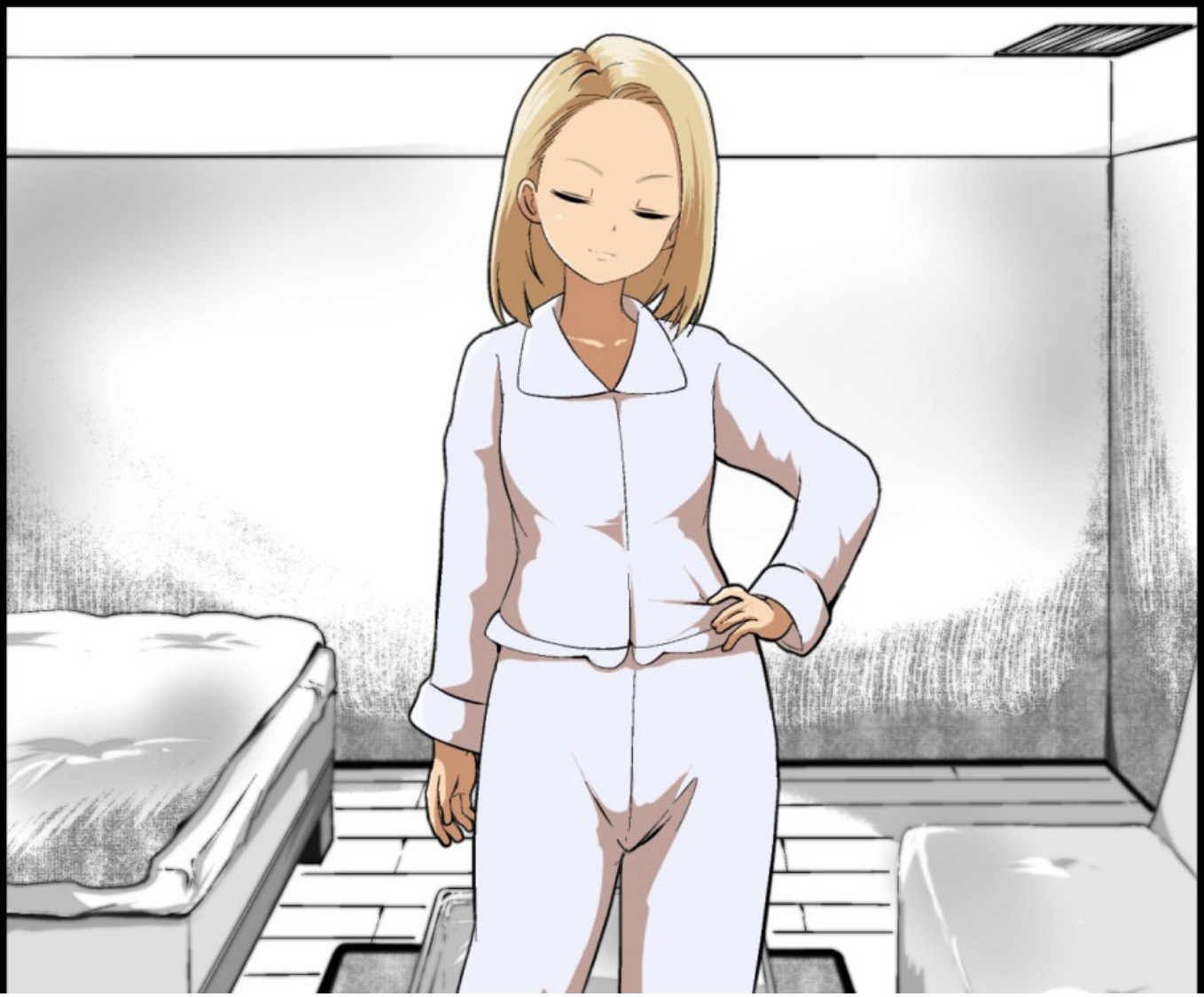
…おっさん相手だと名前を教えることすら屈辱なのだろうか。

その璃音奈からは風呂に入っている間は絶対に覗くな、ノックもするな、近づくなと何度も何度も釘を刺されている。

彼女の目の色が変わるほどの剣幕に、吉田は逆らう気にもなれなかったし、従順に守っている。



寝る場所についても、ごく自然と決まった。
ベッドは璃音奈、ソファは吉田。
話し合ったわけでもないのに、まるで暗黙の了解のようにその配置が定着していた。
ソファは少し狭かったが、それを口に出すことはなかった。床よりマシだ。
璃音奈も当然のようにベッドを使っている。言葉を交わさずとも「お互いの境界線」だけは無意識に守っていた。
無地の特にこれと言ったデザイン性もない寝間着のようなモノがあったので吉田は寝る際に抵抗することもなく着た。
璃音奈は気味悪がって一日目は制服のまま寝たが、やはり寝心地が悪いのか次の日からはしれっと寝巻きを着ていた。

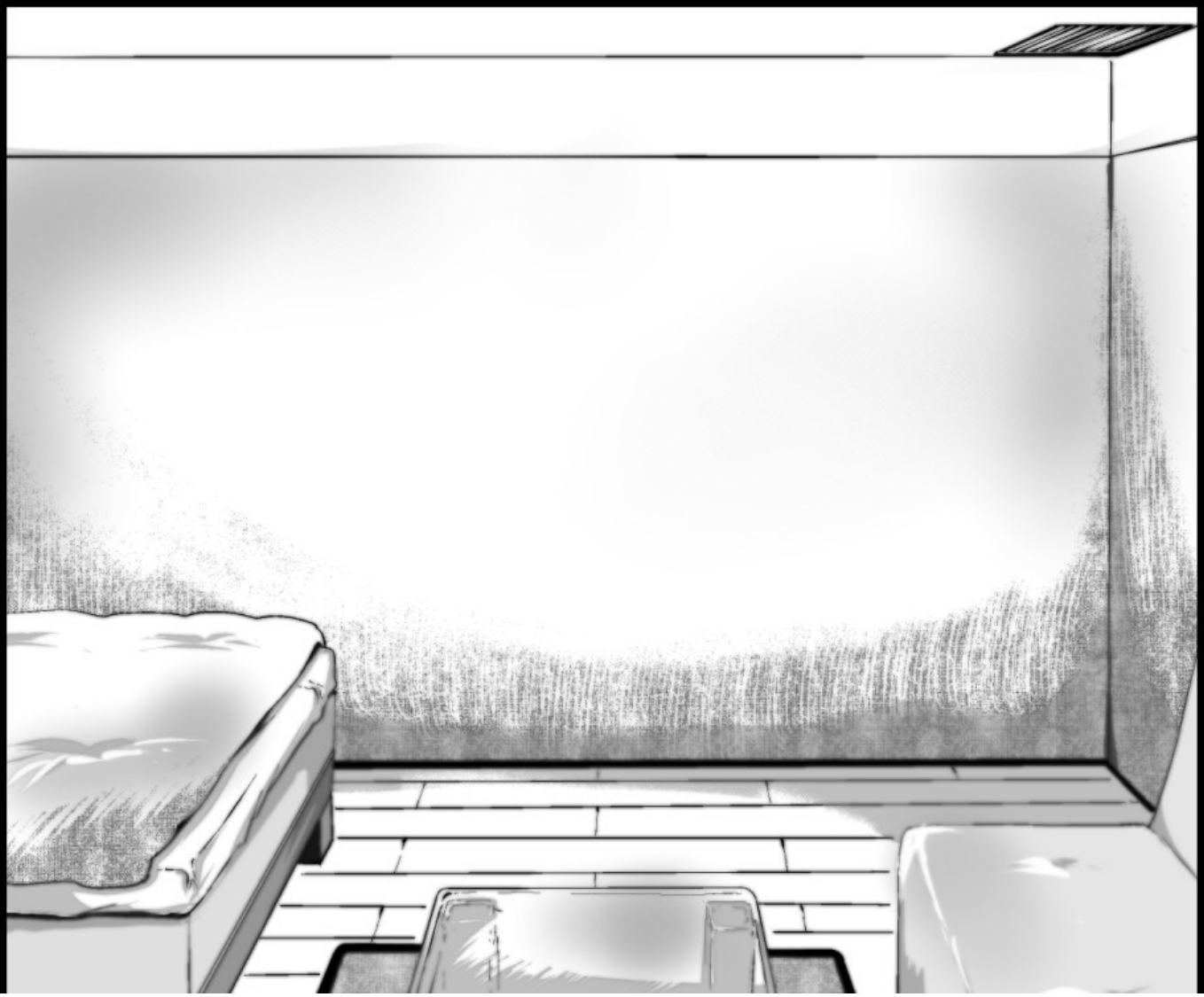


この部屋のもうひとつの奇妙な特徴は、消耗品が時間とともに自動的に補充されることだった。

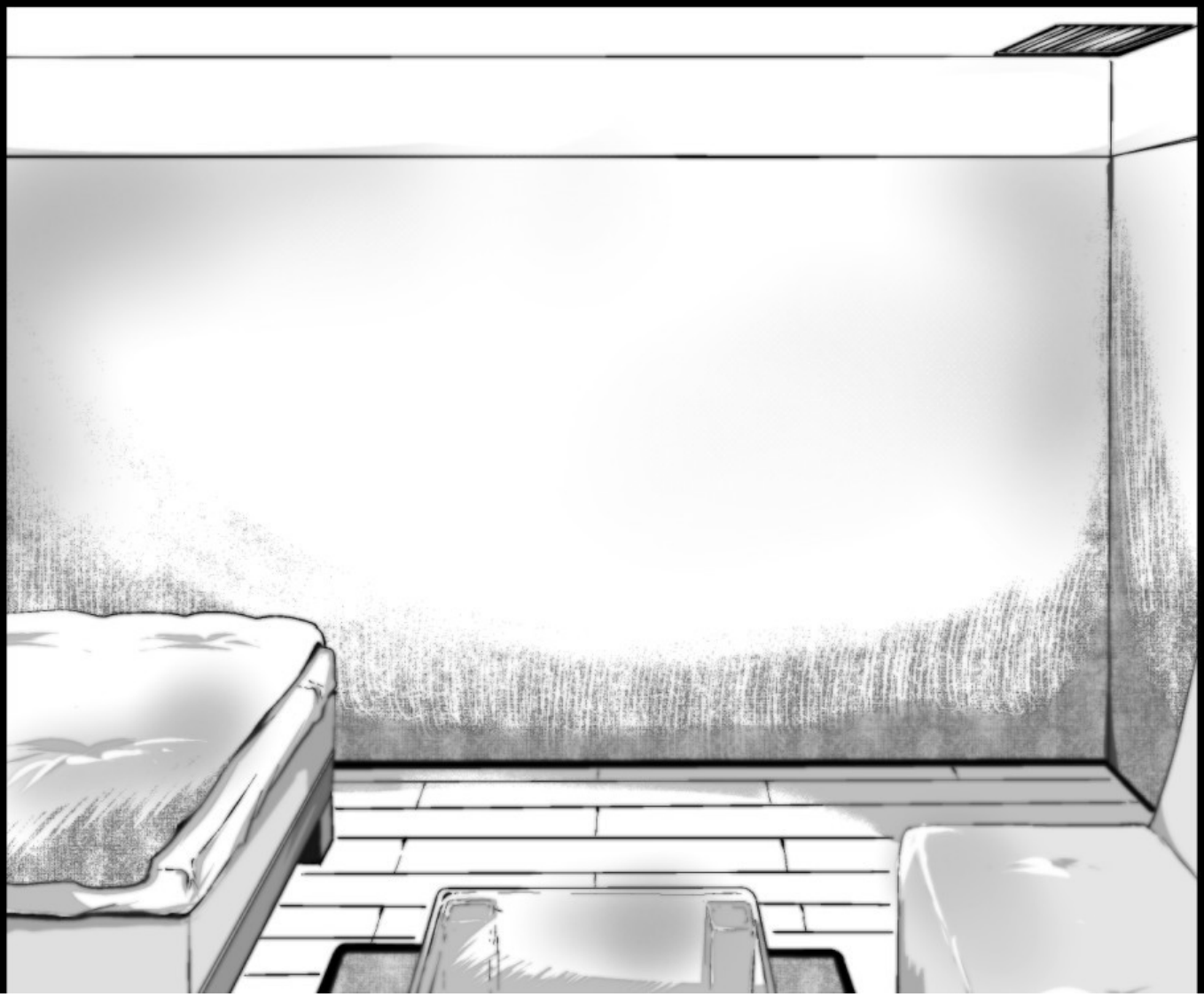
ティッシュや食品、飲料水などは、どれだけ使っても、次に気づいた時には元通りに揃っている。誰かが届けに来ている気配もない。物音ひとつせず、あるはずのない補充が完了している。ゴミすらも、気が付くときれいさっぱり片付いているのだ。

まるで見えない管家が存在するような奇妙な気味の悪さがあった。

しかし自分がそんな環境下に置かれていることが、その不可解な現象の答えなど探っても無駄だと言われているようだった。



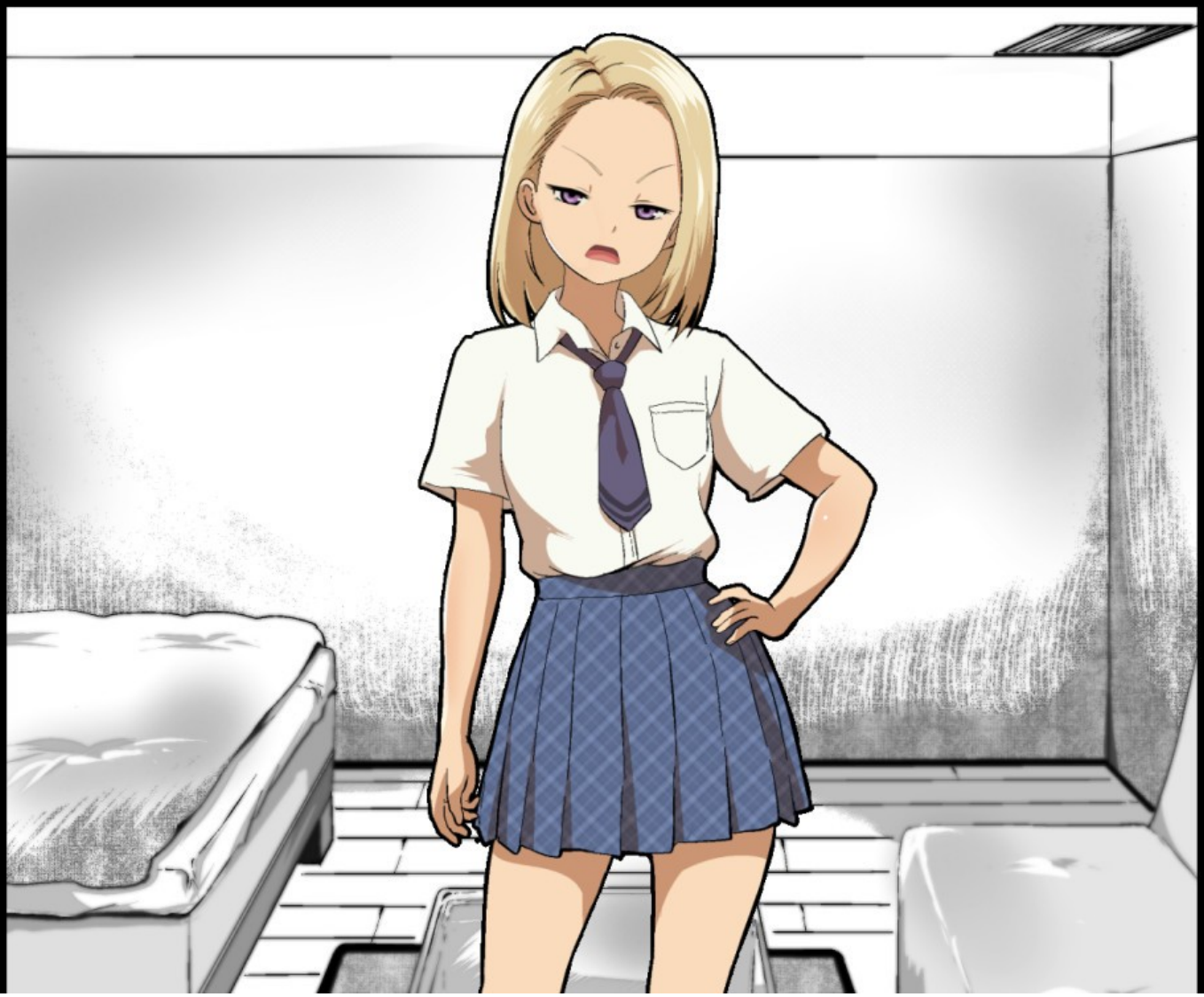
食事は各自で用意していた。
初めの頃は吉田が簡単に作れるインスタント食品やパックのご飯などを見繕っていた際に、「一人分も二人分も大した手間でもない」という半ば善意、半ば昔の家庭的な価値観の延長のような感情から、璃音奈の分も一緒に作った。



しかし璃音奈は怪訝そうな目で吉田を見る。

「自分でやるから。変なもの入れられてたら困るし」

吉田は思わず心の中で苦笑いした。若い子にとって、自分はそれほど信用のならない存在なのだと改めて実感させられた。

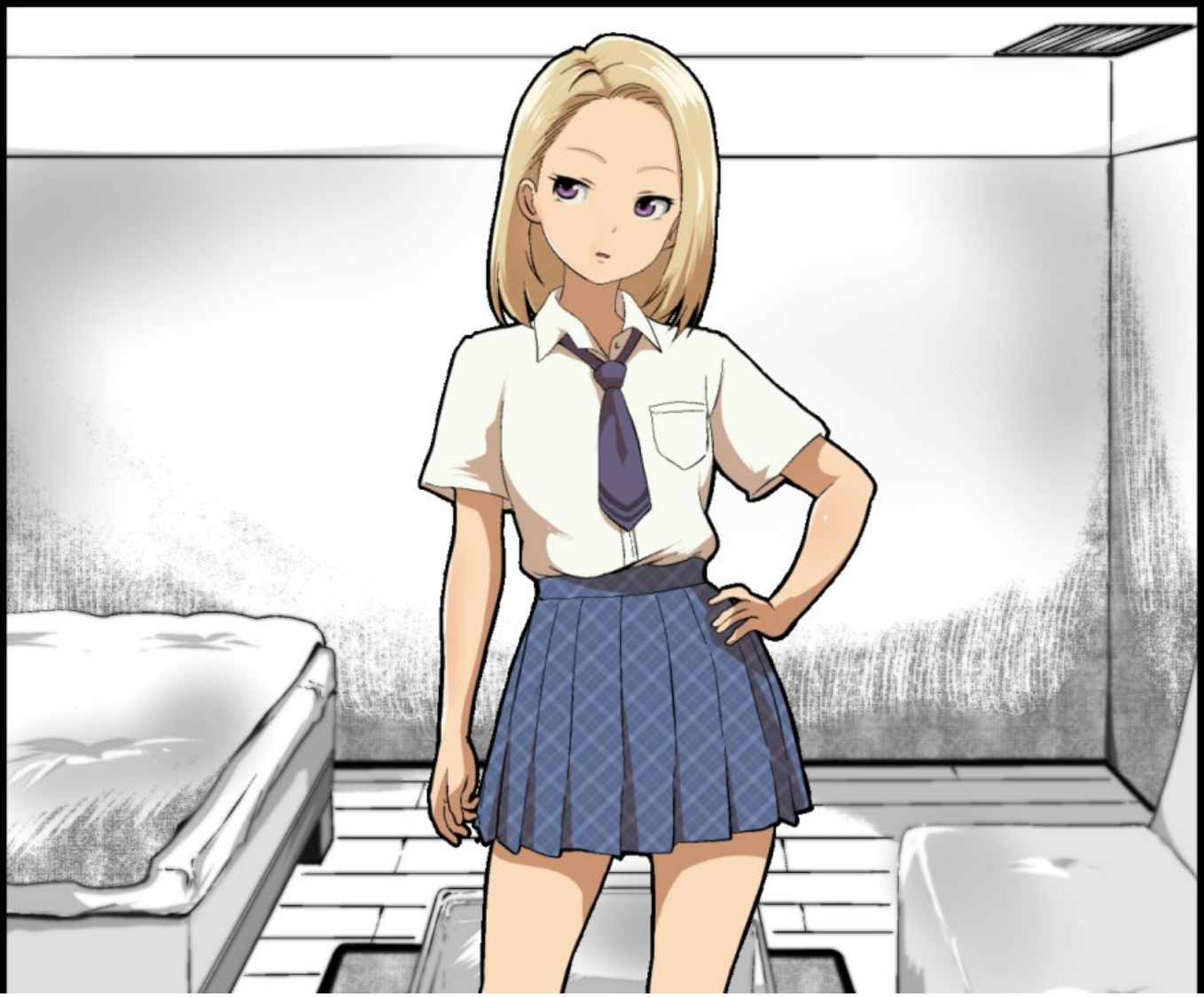


…だが、数日も経たないうちに、璃音奈の態度に小さな変化が現れた。

璃音奈「…ねぇ」

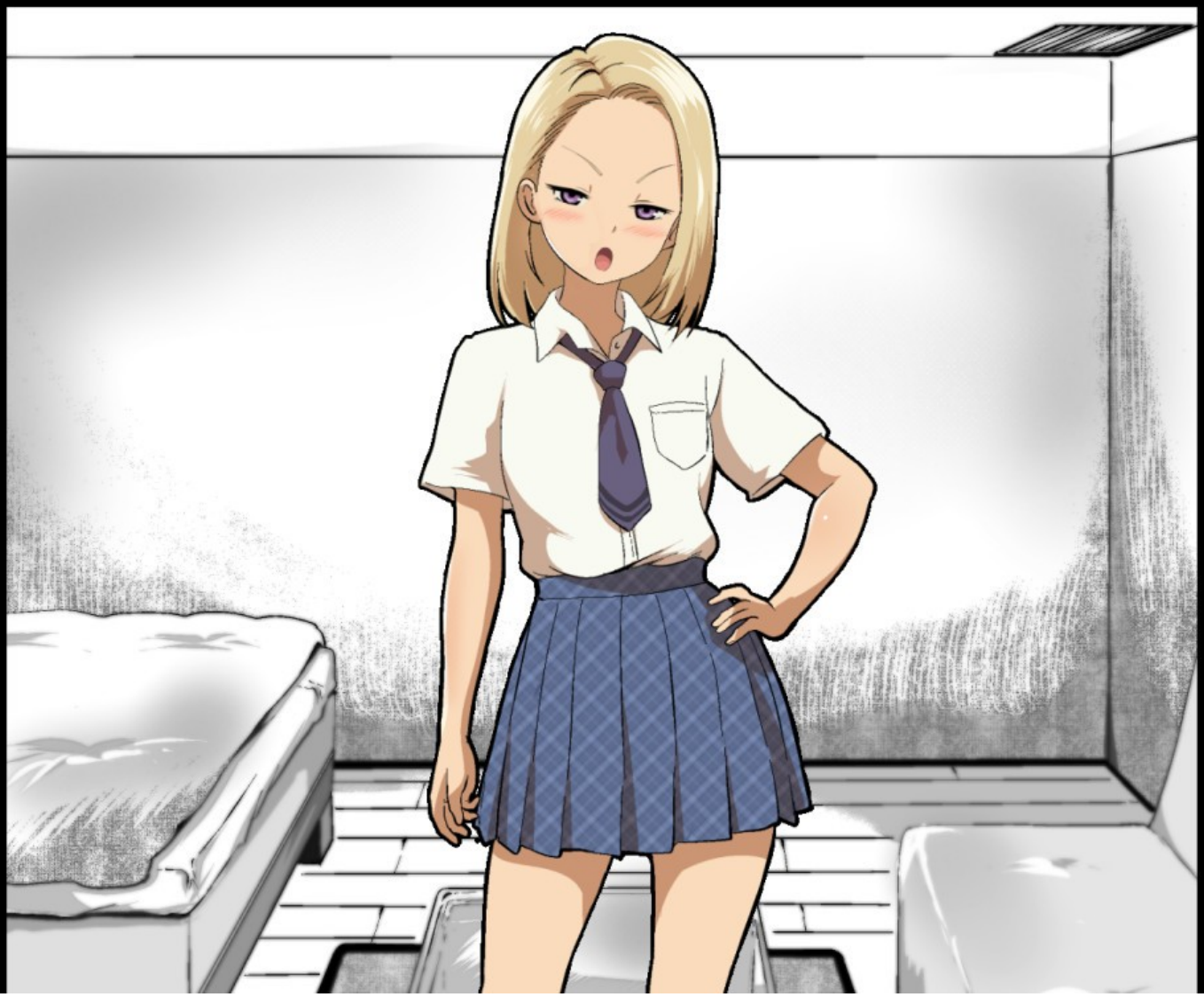
吉田「ん？」

璃音奈「ご飯作んの？ついでにあたしのも作っといて」



「今時の若者は本当に家事とかしたくないんだな」と吉田は心で思った。
しかし悪い気分にはならなかった。
璃音奈はただ本当に面倒だから任せただけなのだろうが、吉田は自分に少しでも気持ちを許してくれたのだと感じた。

璃音奈「何笑ってんだよ…」
吉田「え？いやすまん、笑ってたか」
璃音奈「ウザ…」
吉田「ははは」



そこから自然と二人で食事をするようになった。

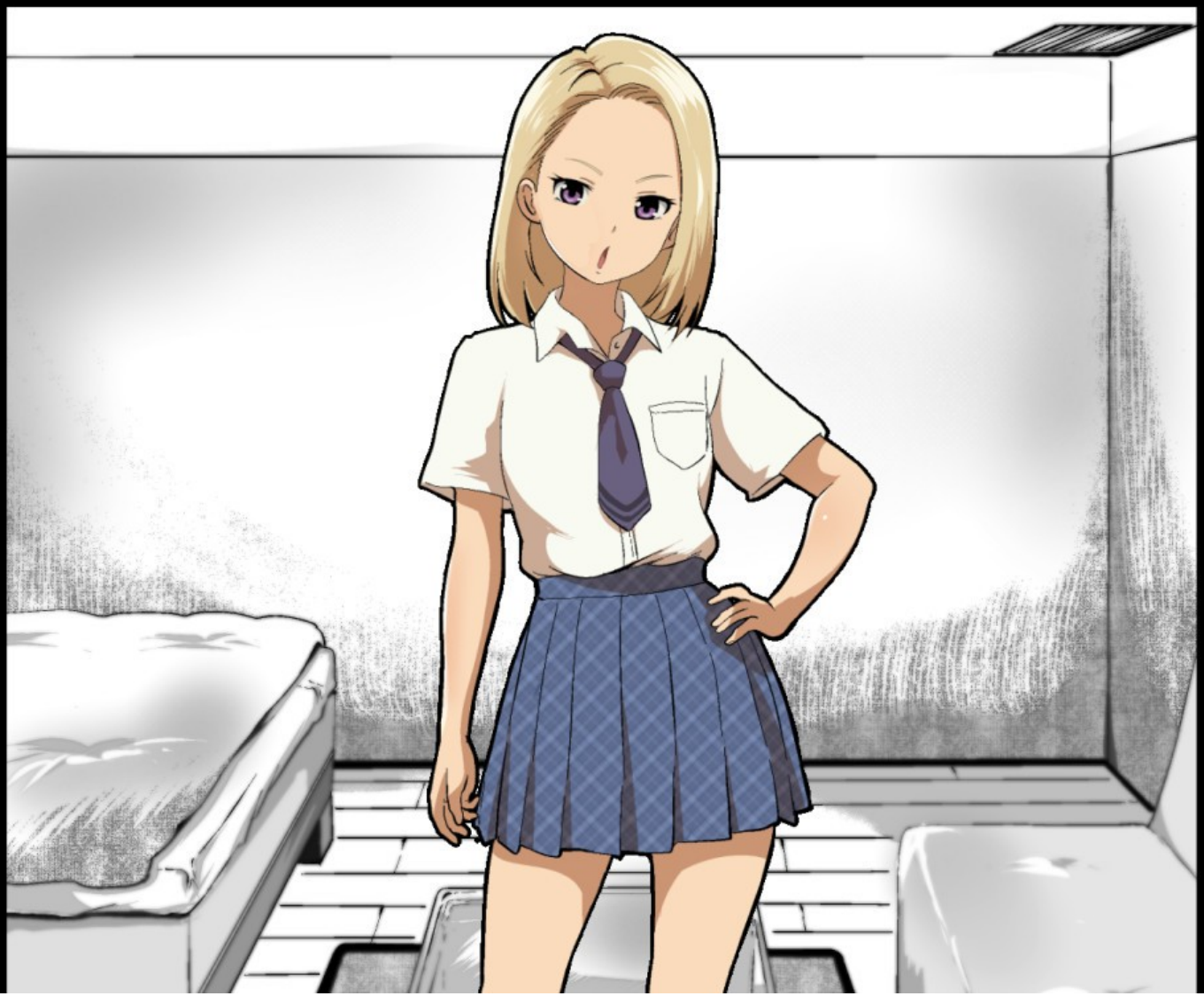
微妙な距離感を保ちながらも、同じテーブルで一緒に食べるようになった。

璃音奈はまだ無言が多く、スマホもネットもない中で黙々と食べる時間を耐えるようにしていた。

しかし元からおしゃべりなのだろう、もうおっさん相手でもいいから話し相手になってほしいのか、

「またこれ？おっさんこれ好きなの？」「なんかインスタントのパッケージっていかにも男が好きそう！みたいな感じのデザインしてね？」

など、ちょくちょくやり取りが増えつつあった。



ぽつり、ぽつりと一言二言だけの会話を交わす程度だった二人のやり取りも、気づけば少しずつ長く、くだけたものになってきていた。

「最近の若い子の間では、何が流行ってるんだ？」

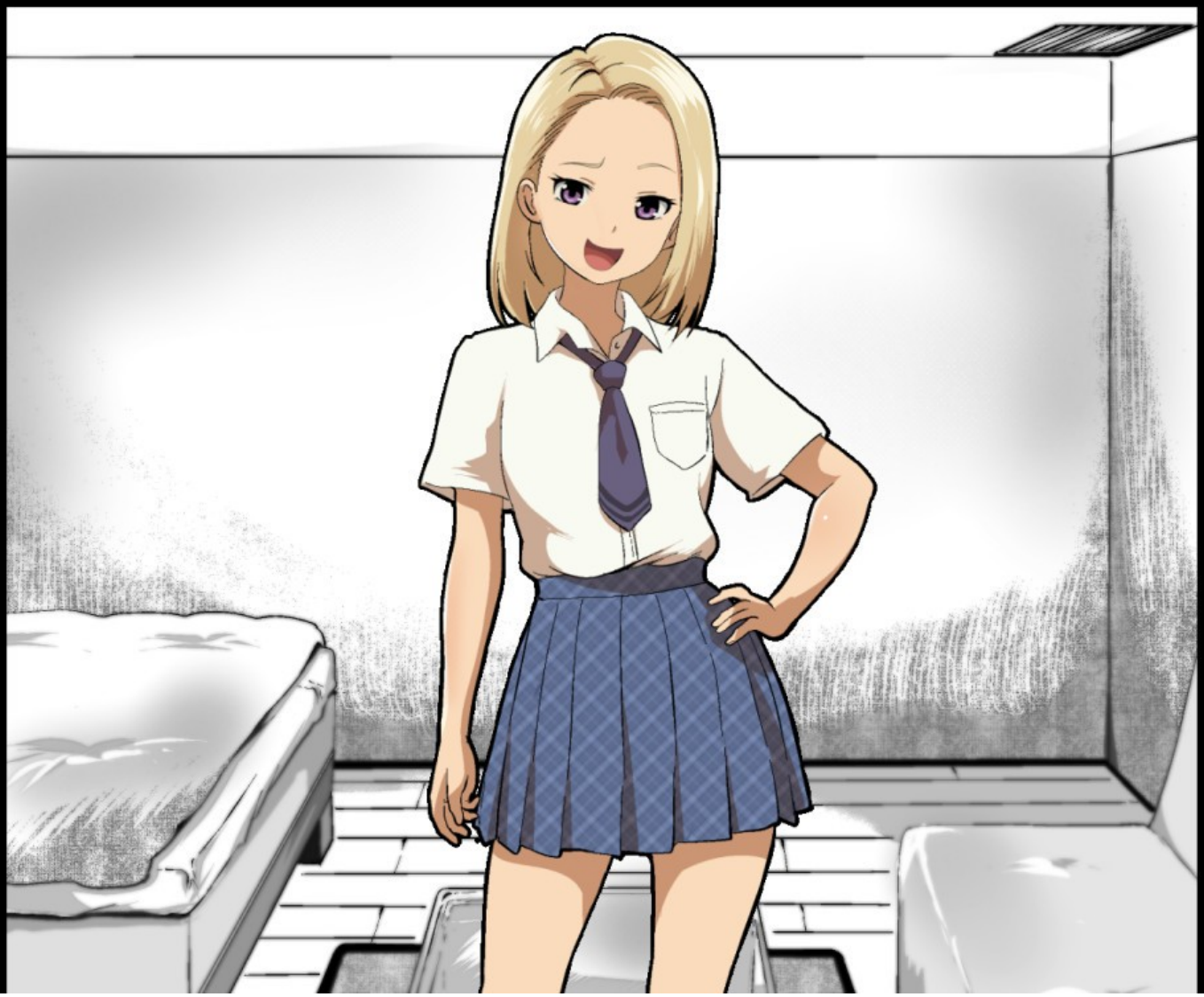
「えｗなにそのおっさん丸出しの切り出し方(笑)っておっさんかｗｗ」

「おっさんだよ」

「てかアンタあたしの父親より年上じゃんｗヤバｗｗ」

何でもないような会話。

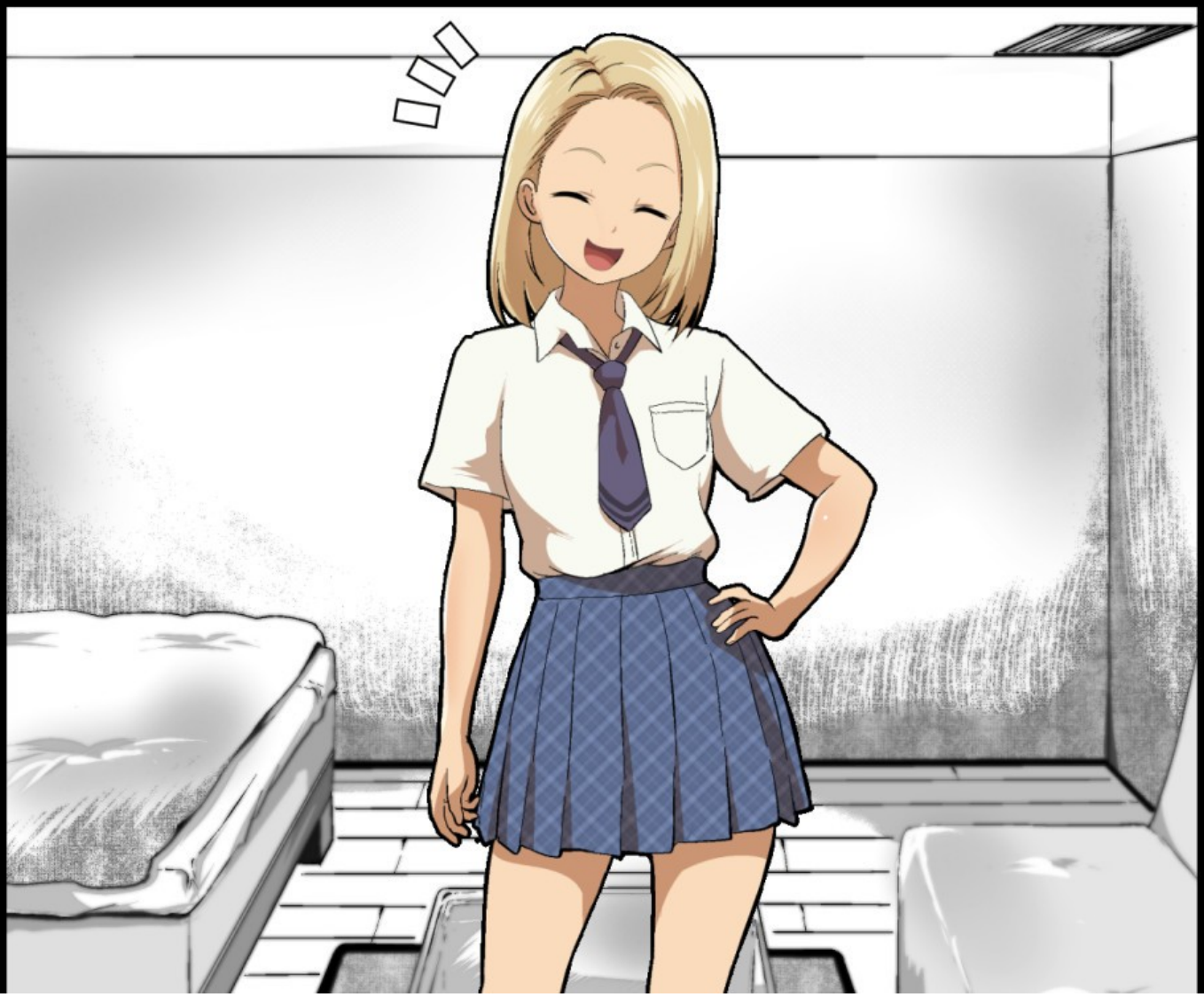
好きな食べ物、最近ハマっていた配信、バズった動画、アイドルの話――話題は軽く、どれも他愛もないものだったが、それでも〝会話〟は〝関係〟を作っていった。



ふとしたタイミングで吉田が「なあ、お前友達と電車ん中で俺のこと馬鹿にしてただろ」とぼそりと口にした。

璃音奈は一瞬きょとんとしたあと、ニヤッと顔をほころばせて「うわっｗｗまだ根に持ってんの？おっさんしつこーい(笑)」と楽しそうに笑った。

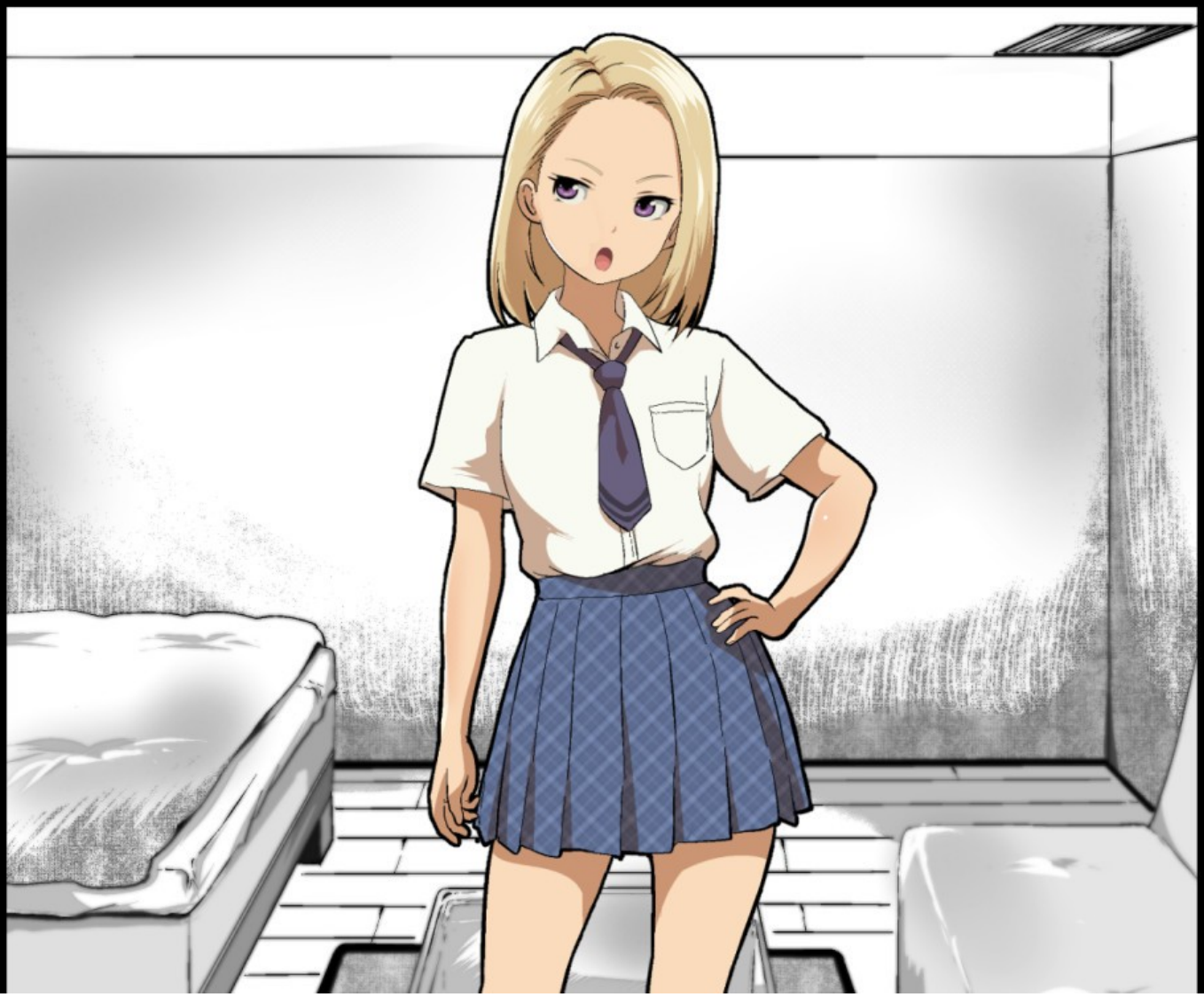
「友達の前だったからさ、ノリで…(笑)。…まあ、正直ちょっと調子乗ってたかもだけどｗｗ許せ(笑)」



「てかさ…アタシ実のところ昔は結構普通に父親とも仲良かったというか…割とファザコン気味だったんだよね」

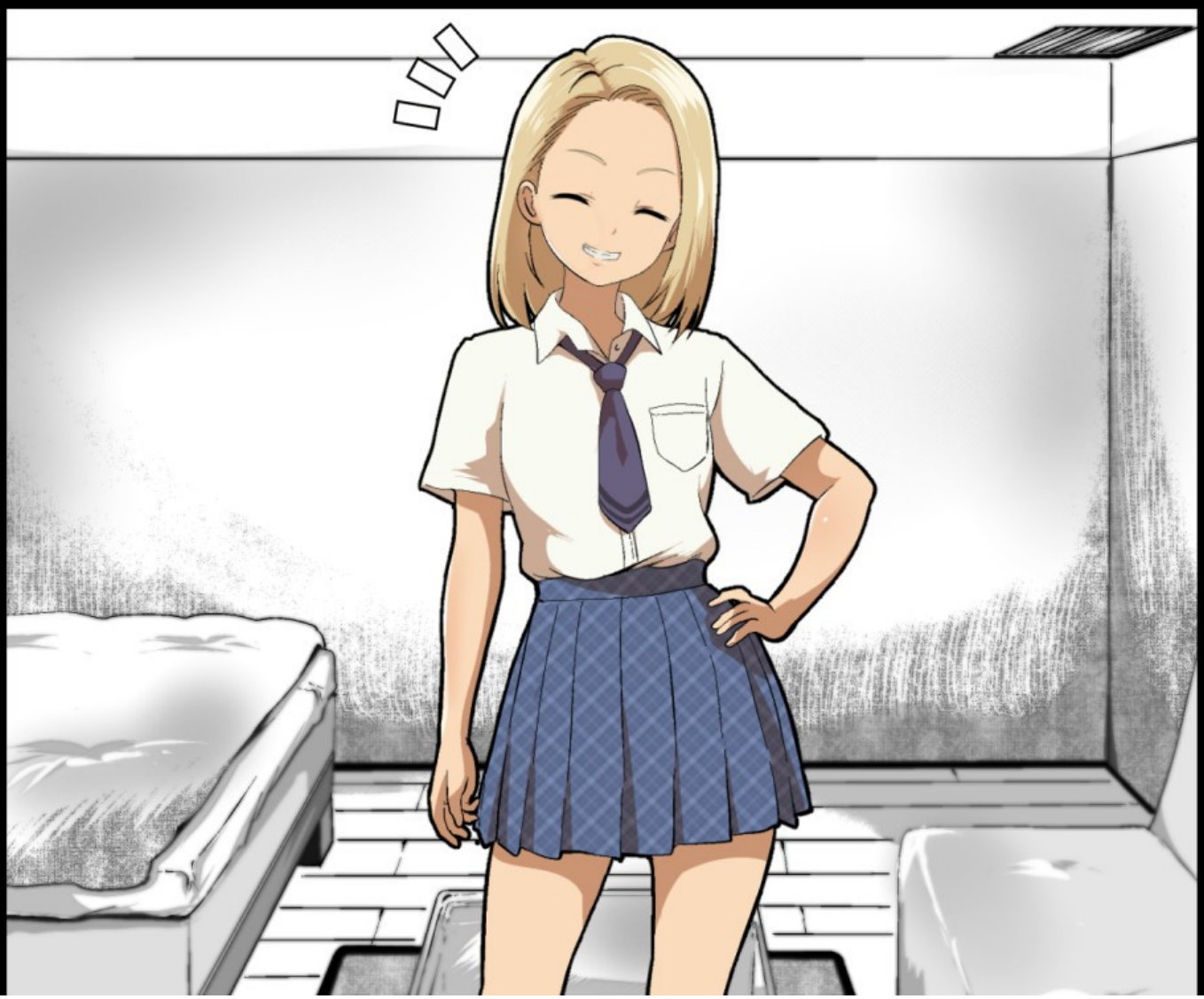
そう言って璃音奈は自分の過去を少し話し出した。

年頃になるにつれて、父親と一緒にいると笑われる。父親なんかウザいだけ、といった周囲の影響やノリで「おっさんキモい」と口にするようになり、いつの間にかそれが彼女のミキャラミになっていたという。



璃音奈「おっさんキモいけどさぁ」
「話してるとけっこうおもろいわ」
吉田「お前こそ、生意気だけど結構可愛いぞ」
璃音奈「どういたしましてー♪ キモキモおじさんw」
吉田「こちらこそ、生意気小娘(笑)」

ぎこちなかったはずの笑顔が、自然に混ざり合い、部屋の空気が少しだけやわらかくなる。距離はまだある。だけど確かに、ここにはもう〝ただの他人〟ではない、ほんの少しの繋がりが生まれていた。

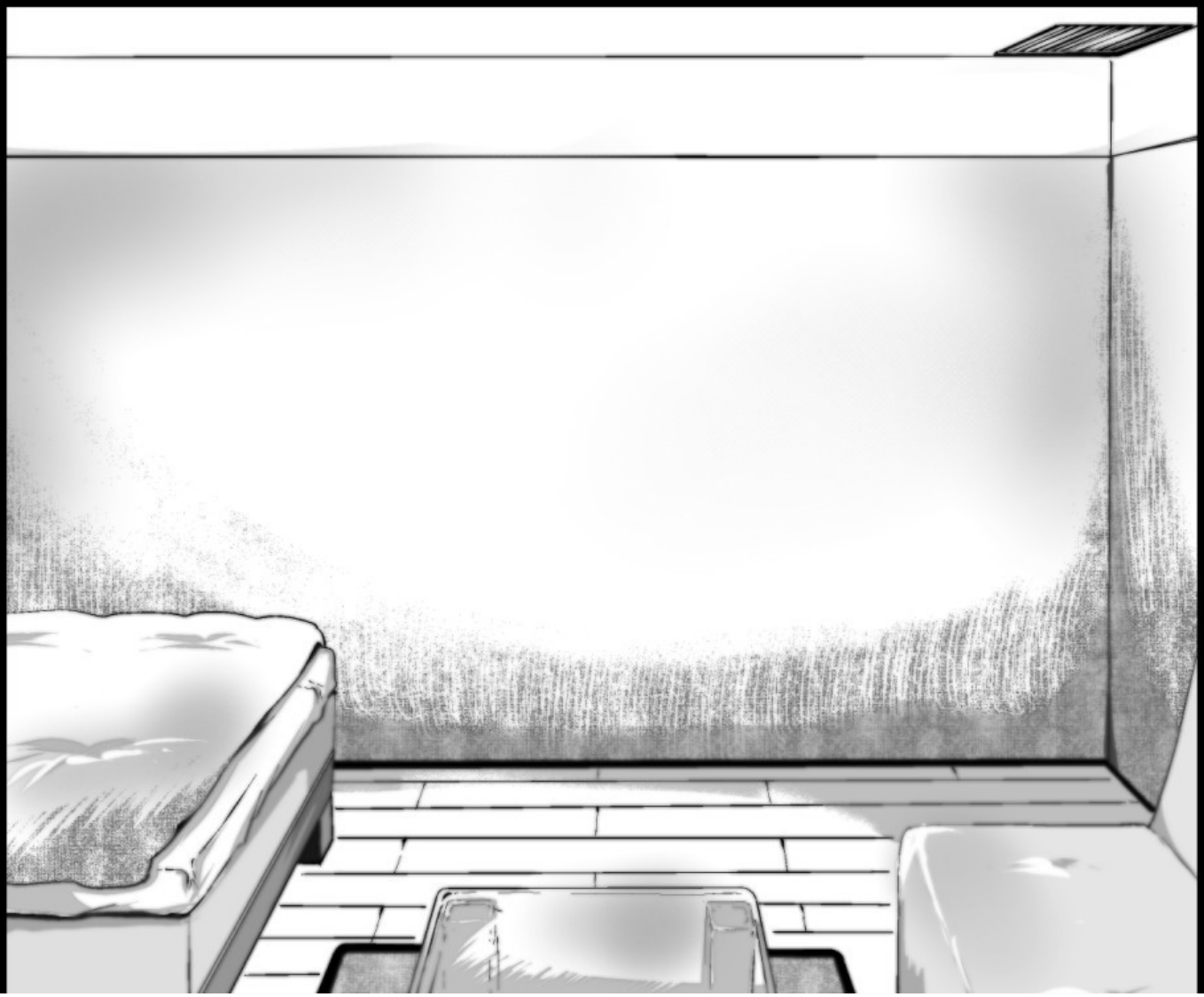


次の日。

また今日も特に変化のない一日が始まるものだと思っていた。

いや、少しだけ信頼を寄せた吉田とこの空間から脱出する方法を考えようと思っていた璃音奈。

しかしトイレから密かに「璃音奈…璃音奈…」と呟く吉田の声が璃音奈の耳に入ることから今日という一日が大きく変化していった。



吉田「璃音奈っ！璃音奈ぁ…!!可愛いぞ璃音奈！」

璃音奈「…」

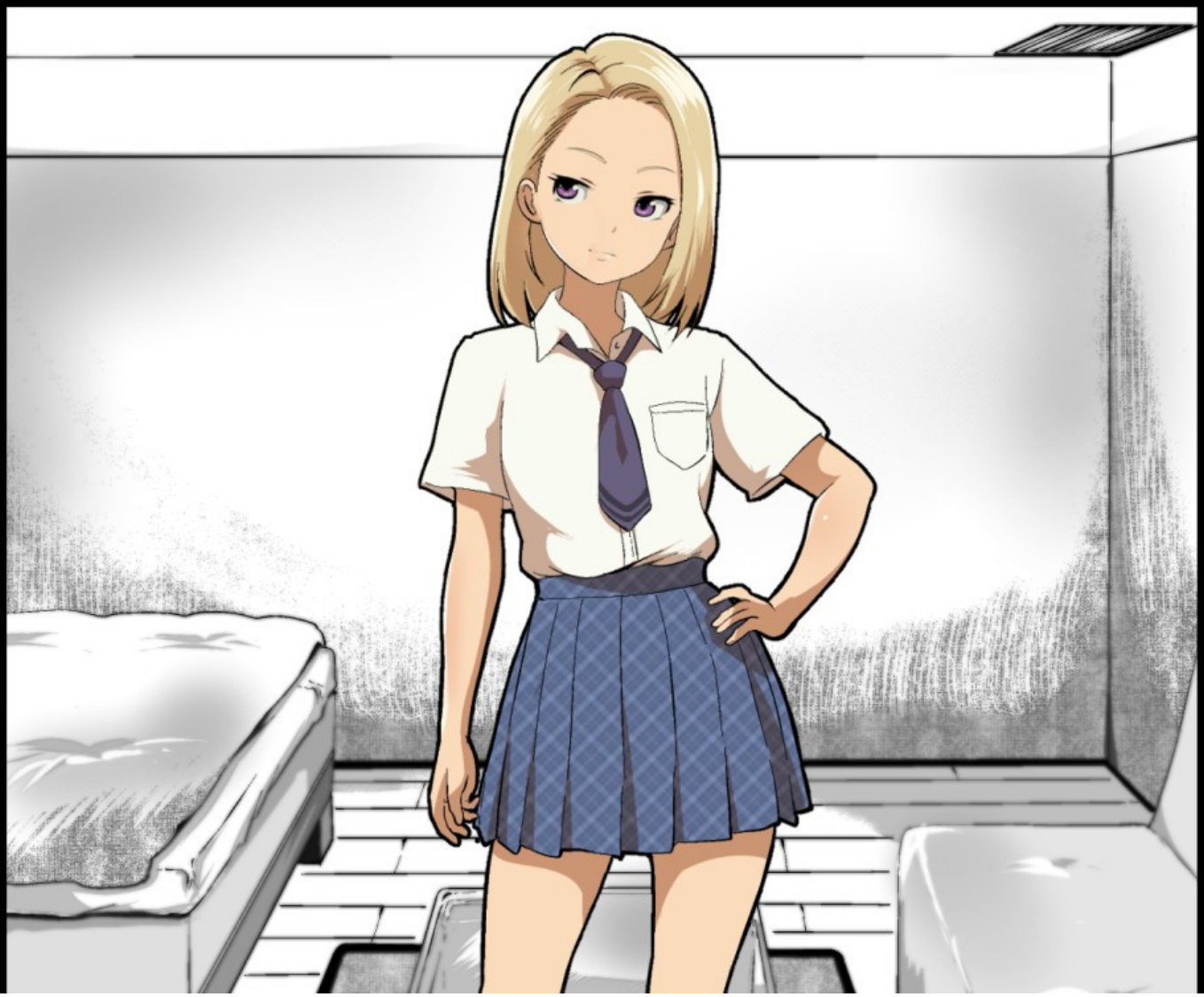
段々と大きくなる吉田の声。最早呟きではなくなっている。

というより璃音奈に意図的に聞かせるようなトーンで言っている。

璃音奈はトイレの方向に視線を向けつつも無言。

「璃音奈っ！璃音奈っ！！いくぞ…璃音奈ぁ…イくっ…！！」

くぐもった声で璃音奈の名を連呼していた吉田は数分後に水を流す音と同時にトイレから出てきた。



何食わぬ顔で冷蔵庫からペットボトルの緑茶を取り出し、璃音奈にも「飲むか？」と聞いてグラスを二つ用意する。

そのままテーブルに座り込みお茶を飲む。

璃音奈も無言であるがつられるようにお茶の入ったグラスを口に運ぶ。

璃音奈「おい」

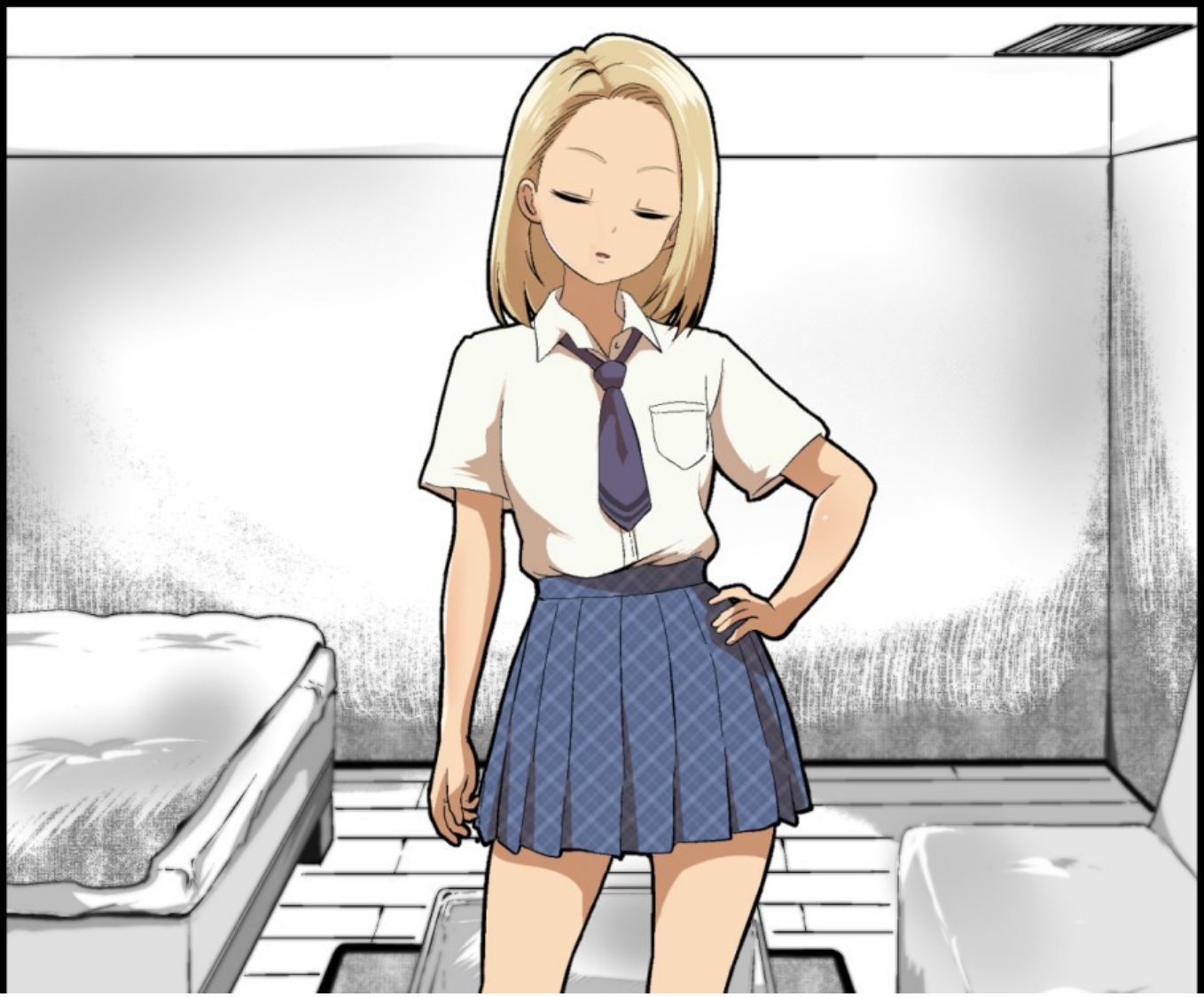
吉田「ん？」

璃音奈「ん？じゃねーよキモジジイ」

はぁ…とオーバー気味にため息をつく。

「あのさぁ、あたしなりにやっと少しだけアンタのこと信用してここを脱出する方法とか色々話そうと思ってたわけよ」

吉田「うん…」



璃音奈「思いっきりおかずにしてんじゃねーよ!!」

吉田「あれ？聞こえてた？ごめんごめん」

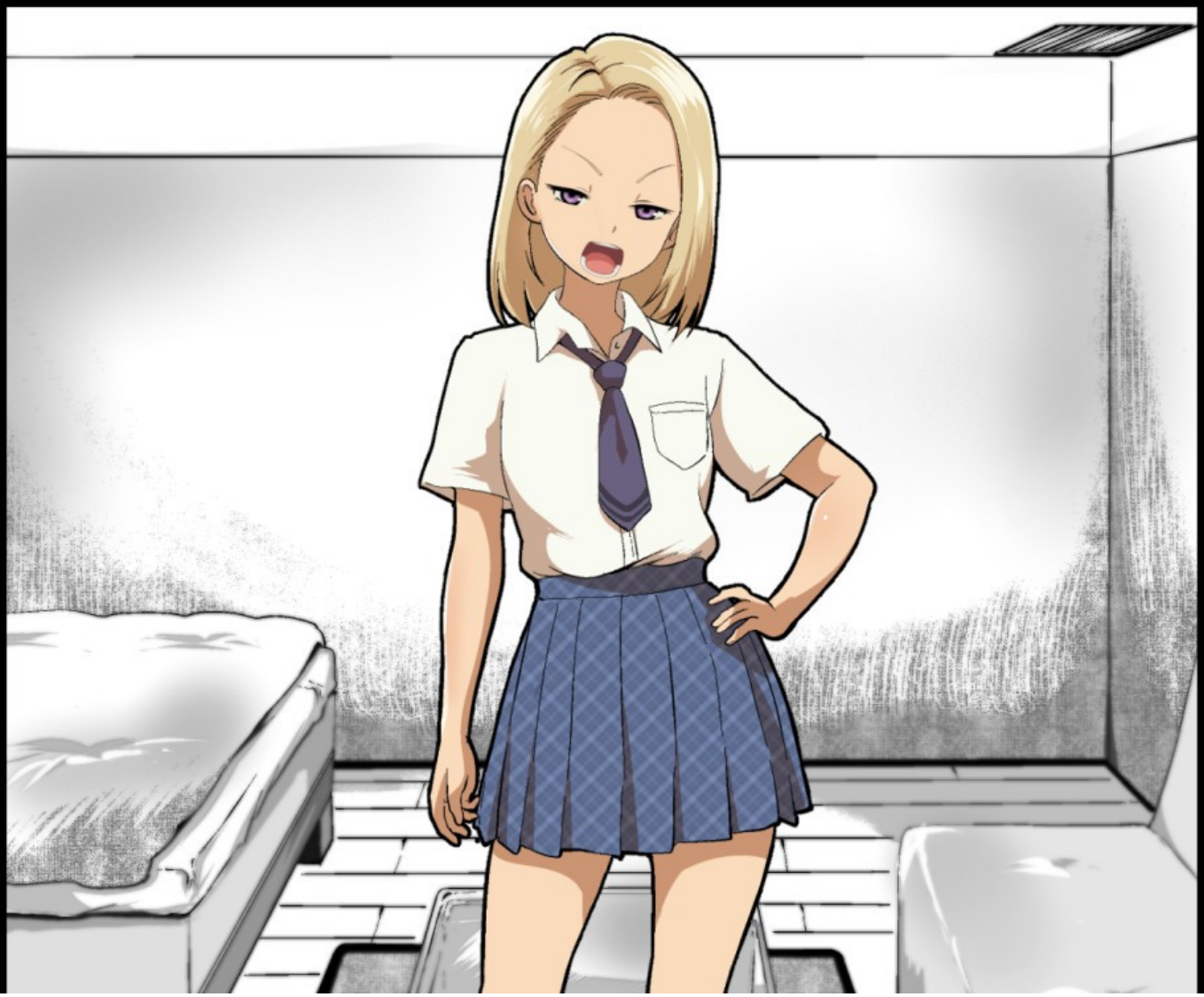
璃音奈「いや絶対聞こえるようにわざとデケー声で言ってたろ！」

吉田「しかたないだろ！何だかんだお前普通に可愛いし、こんな女の子と二人きりでいるんだからそんな気にだってなるだろうが！！」

「直接襲ったりしないだけ全然いいだろうが！」

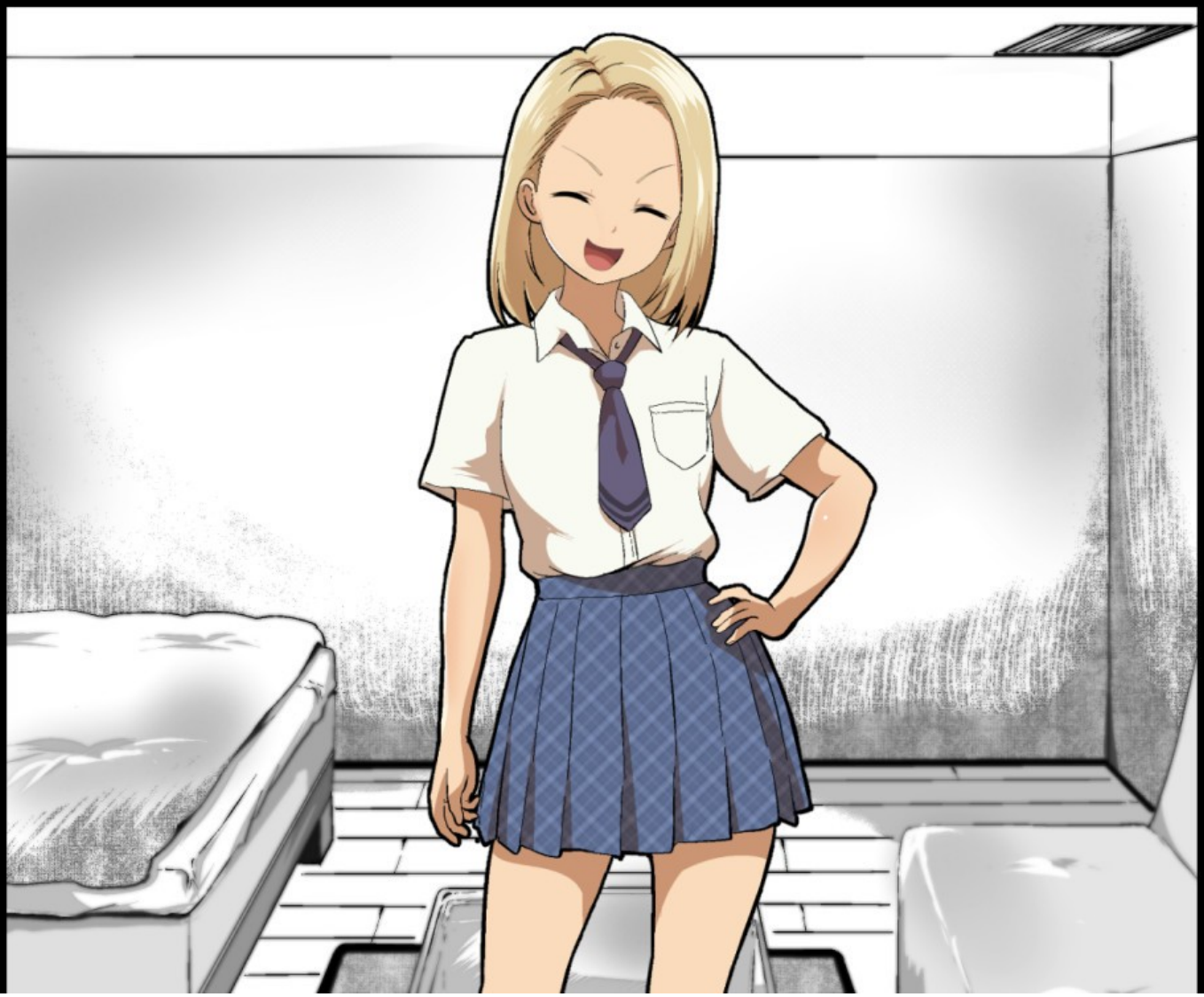
璃音奈「うわっ…なんか逆ギレした…しかも全然よくはないし」

二人はしばらく牽制するようにお互い距離を測りながらチラチラと目配せをする。

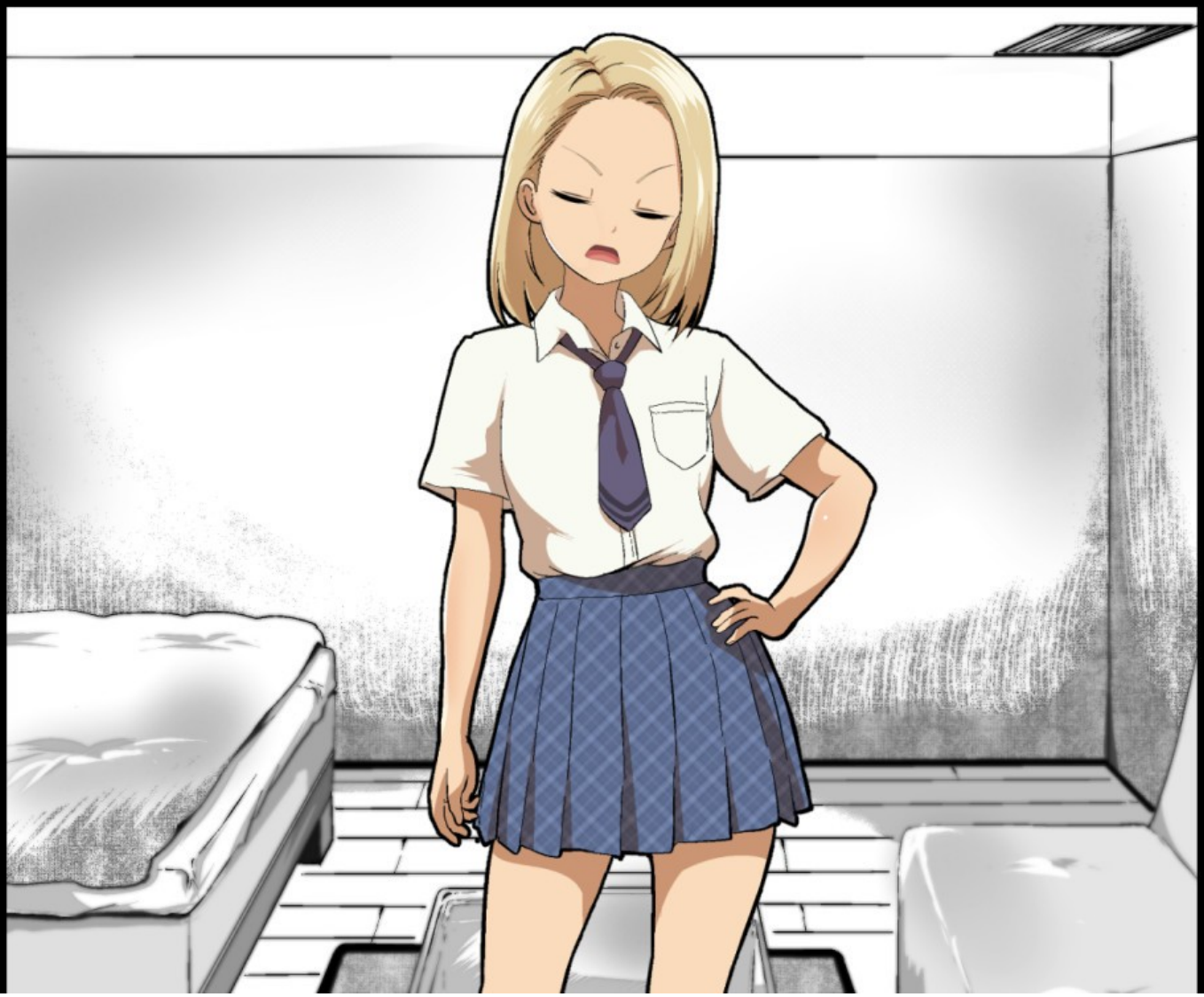


璃音奈「…いっぱい出た？」
吉田「めっちゃ出た」
璃音奈「…キモｗｗ」
吉田「いや、今のはお前の切り出し方が可笑しかっただろ(笑)！」
璃音奈「やば(笑)キモすぎｗマジで近寄んなジジイｗｗ」

どう考えても親子間の年の差がある男女のやり取りではないが、この奇妙な空間に二人きりで長時間いることによる影響なのか、おふざけごっこの延長のようなノリではしゃぐ二人。



吉田「なあ…ぶっちゃけさあ…言ってもいいか？」
璃音奈「え？うん、何のことか分からんけどｗ」
吉田「…セックスしないか？」
璃音奈「…」
吉田「…」
璃音奈「いや、やらないけど…（笑）」
吉田「…頼む！」
璃音奈「…あのさ。さっきも言ったけど、あたしおっさんのことちょっとだけ信用してここを抜け出す方法話そうとか思ってた訳よ…」
「マジでちょっとだけでも築いた信頼台無しじゃん」



吉田「でも…モニターにも表示されてた心の繋がりだけじゃなくて形としての繋がりって要はスキンシップだろ」

「エロいことするのが一番近道なんじゃないかと思うし」

璃音奈「あー…やっぱアレってそういう意味だったんだ…」

「うわぁ～…」

「…」

「…実はさ」

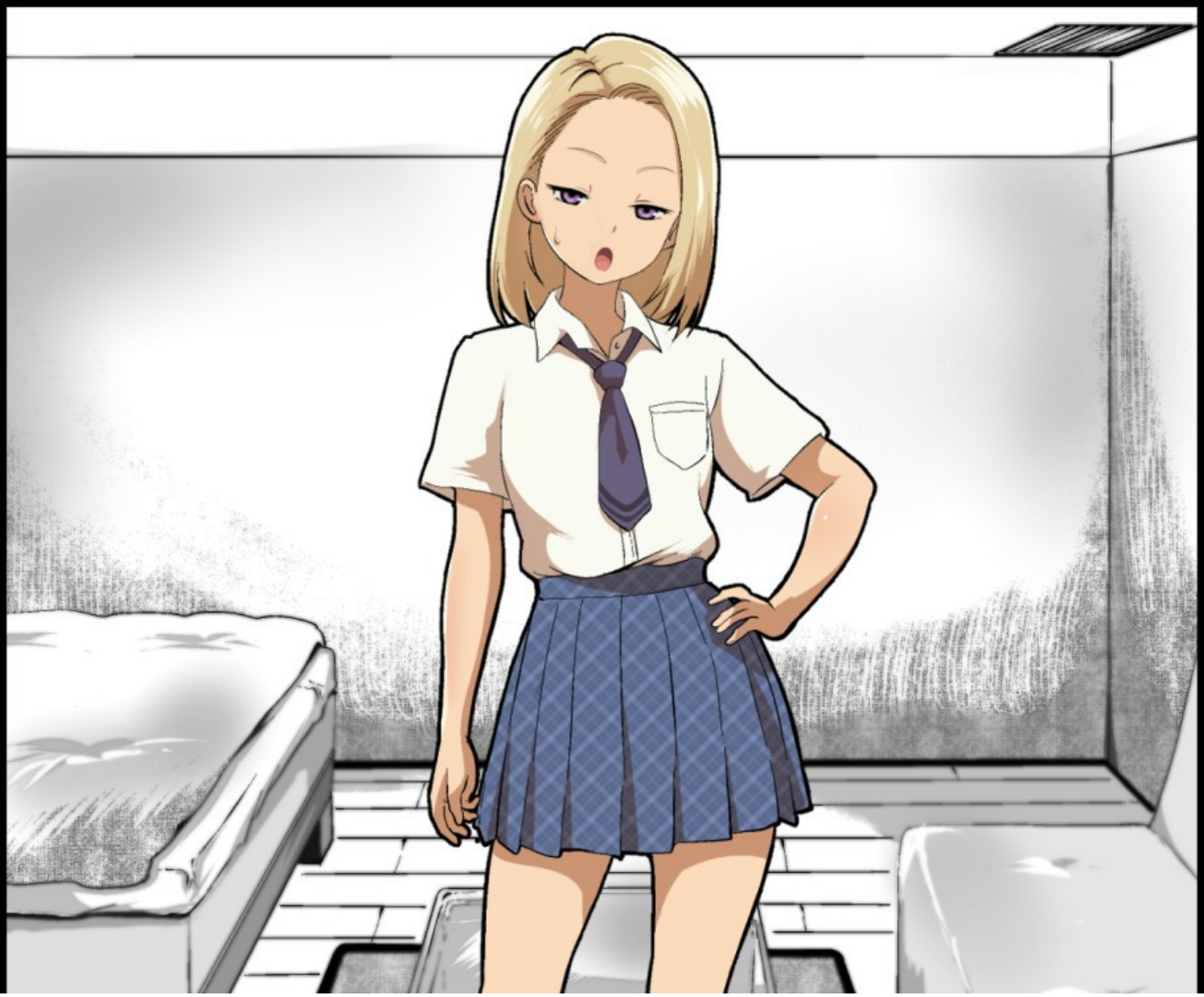
「ベッドについてた小さい収納スペースに当たり前みたいに入ってたんだよね」

吉田「何が？」

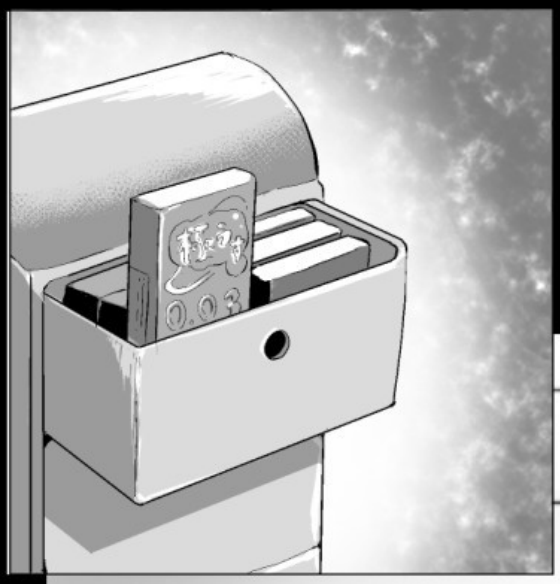
璃音奈「…ゴム」

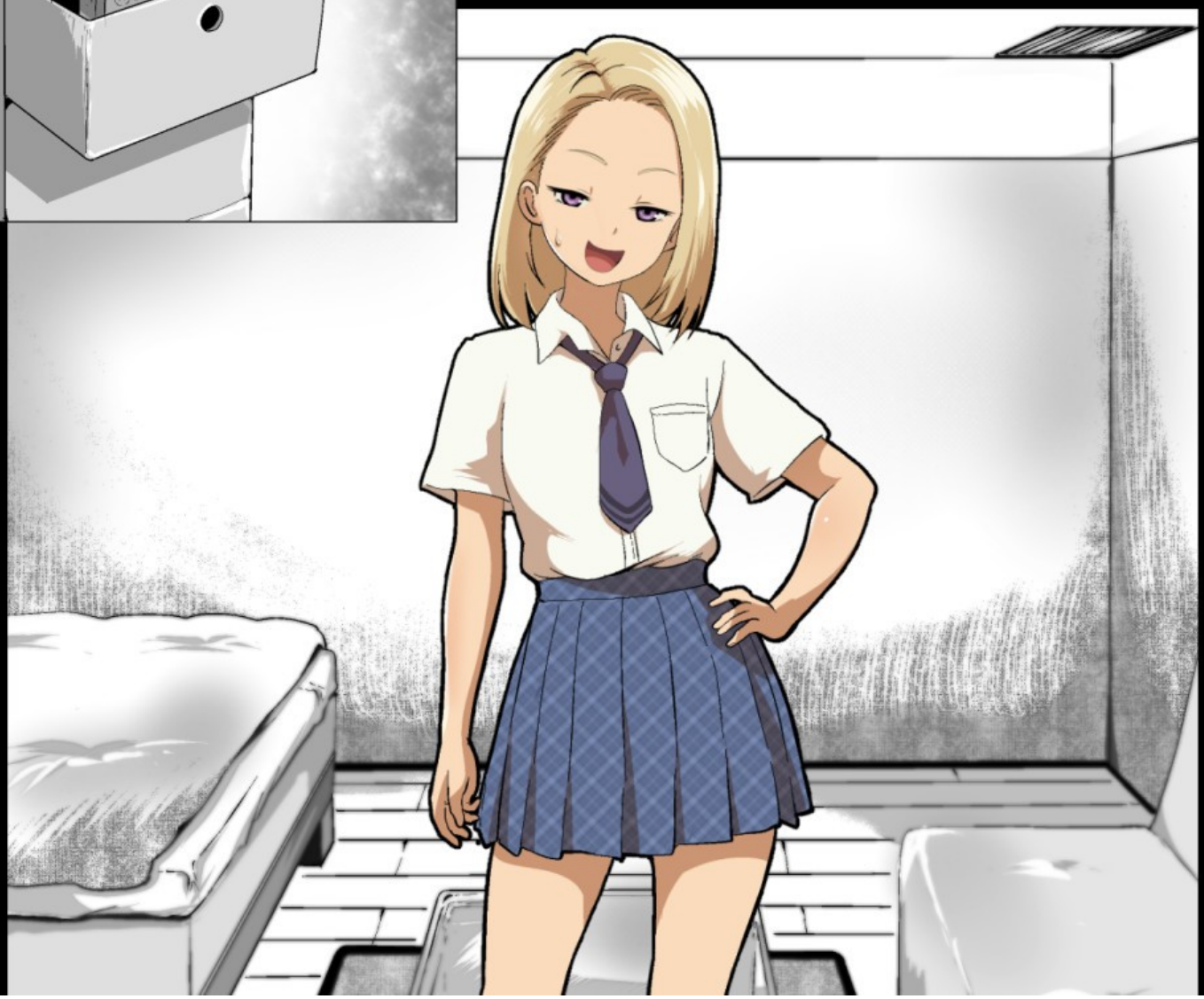
「コンドーム」

吉田「…」



璃音奈の指定した箇所を見ると確かにちょっとした収納スペースがあった。
開けるとコンドームが数箱きっちり並べられていた。
吉田「こういうことだからさ、な？」
璃音奈「な、じゃねーよ」
吉田「運動にだってなるだろ！ずっとこんな空間でただ食べて寝てるだけじゃ健康にも悪いだろう」
璃音奈「ただおっさんがヤりたいだけだろ」
吉田「まあ…うん」
璃音奈「いや、うんって…（笑）」





吉田「でも本当に何もしないよりは何かしら行動する方が絶対いいだろ」

「コミュニケーションをとるって意味では、ここを出るためのきっかけにもなるかもしれないし」

璃音奈「えぇ～…」

「…」

吉田「…」

璃音奈「…マジでやりたい？」

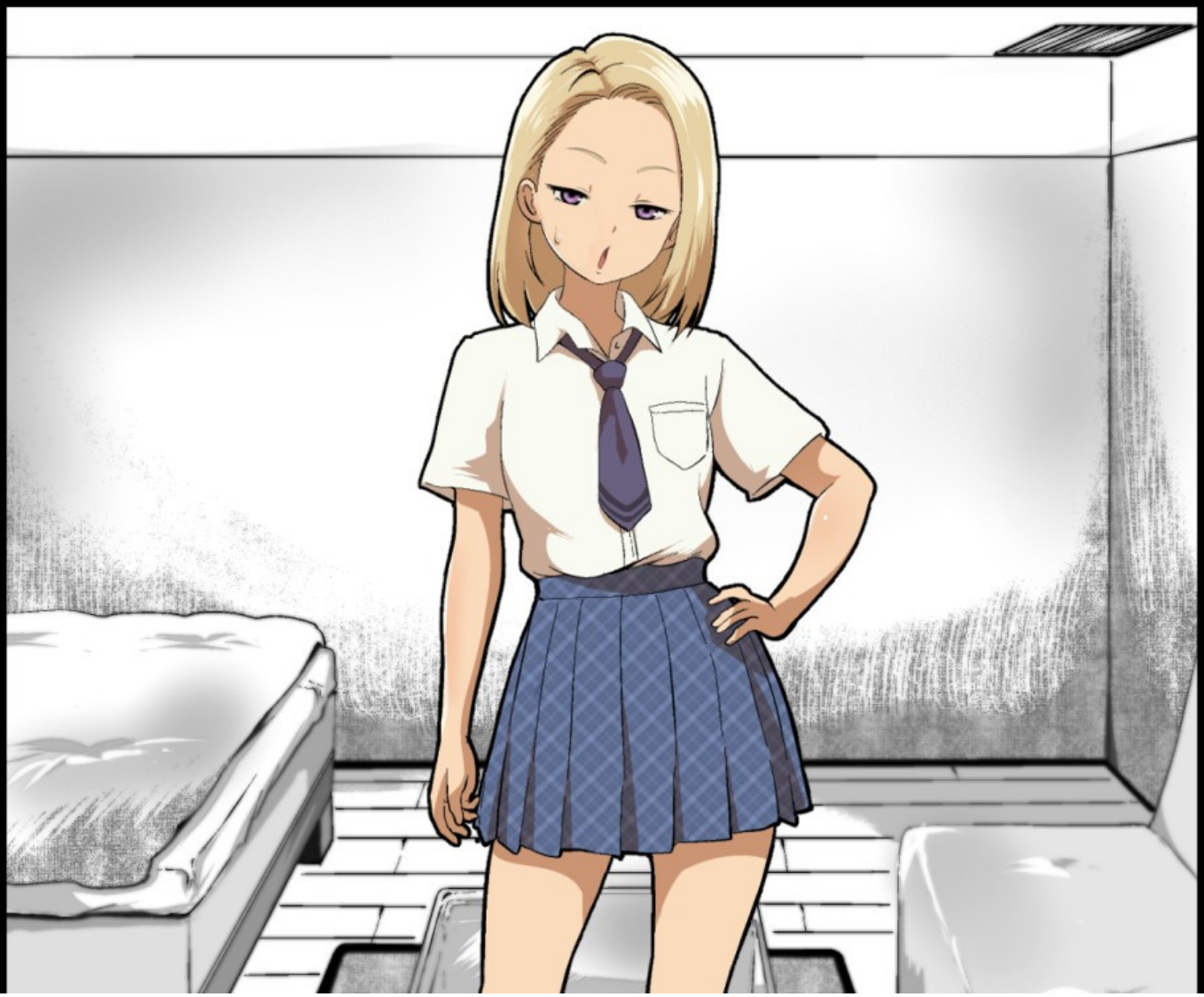
吉田「うん」

璃音奈「早っ…」

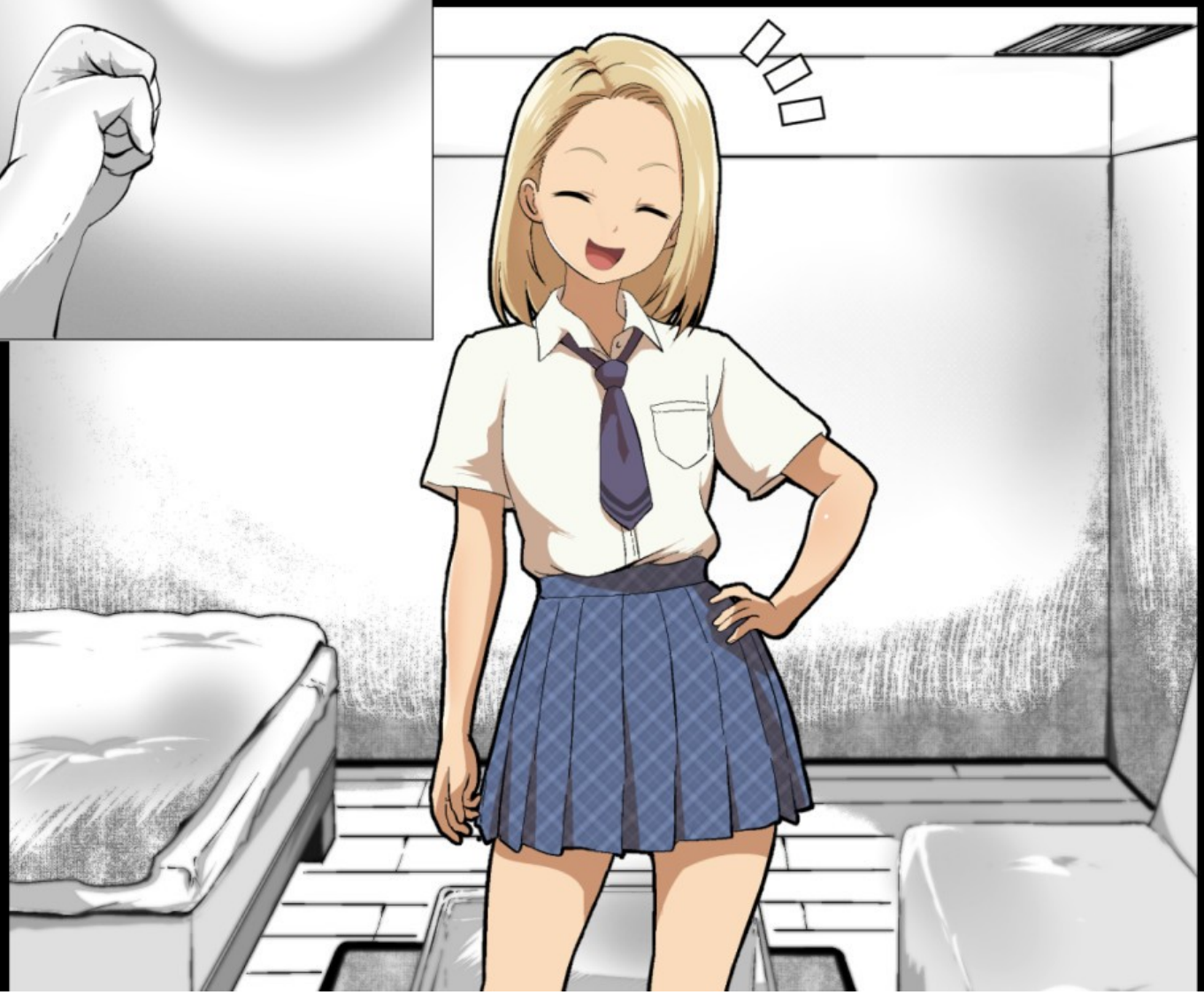
二人「……」

璃音奈「おっさん手ぇ出して」

吉田「ん？」

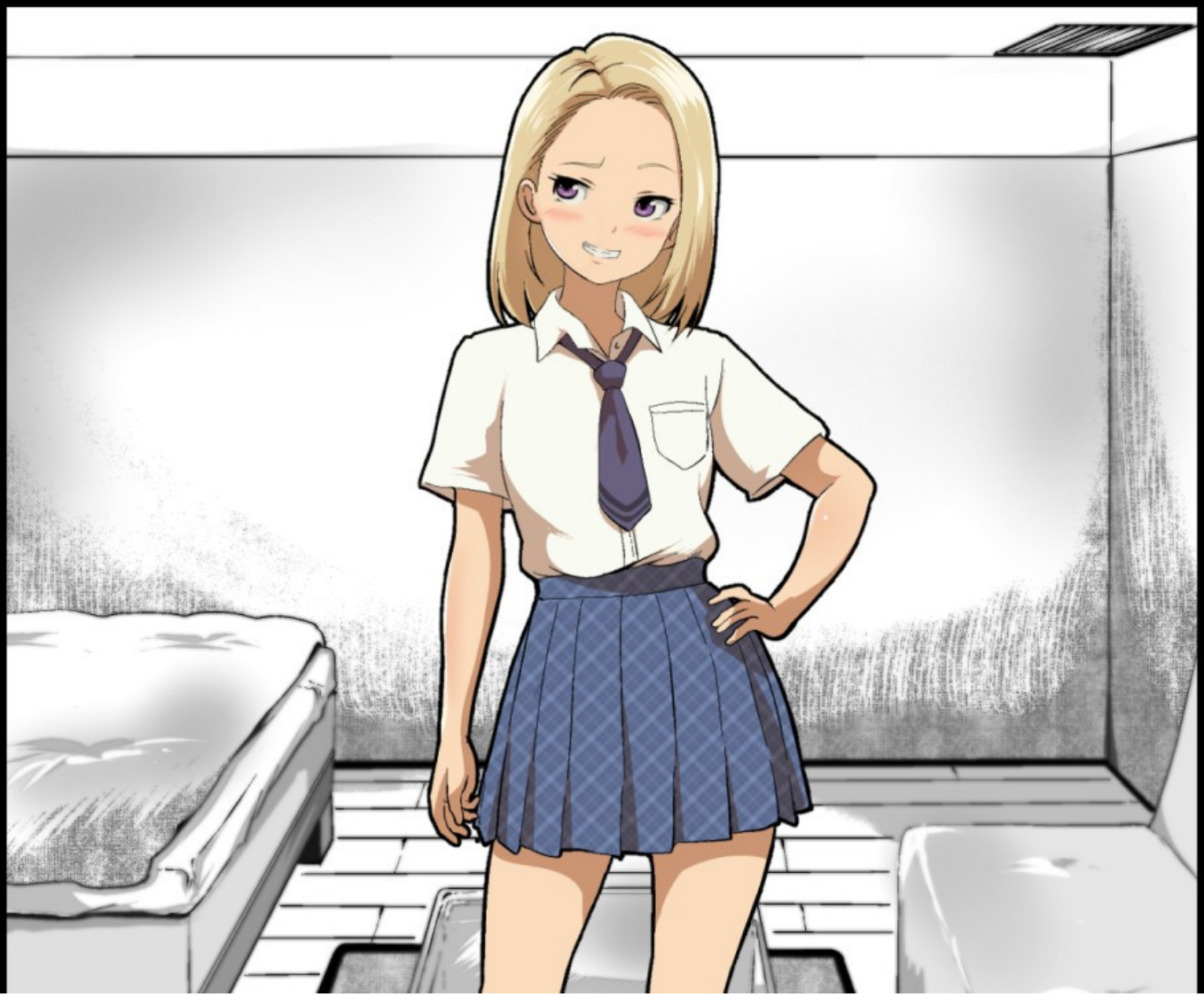


璃音奈「じゃーんけーん…――」
吉田「え？あ…」
璃音奈にそう指示された吉田は合図に合わせて咄嗟に手を出す。
吉田の手はグー
璃音奈の手はパー
璃音奈「はい残念でした～」
「おっさんが勝ったらしてもよかったのに♪」
吉田「え!!?」



璃音奈「もう今日のチャンスタイムは終了で～す♪」
吉田「…今日、の？」
璃音奈「…デイリーチャンスなので一日一回です」
吉田「…それっていつかは絶対できるってことじゃ」
璃音奈「…さぁ？おっさん次第じゃない？」
吉田「…おおおおぉおおー！！」

声を上げる吉田。
滾っているおっさんに若干引く璃音奈。

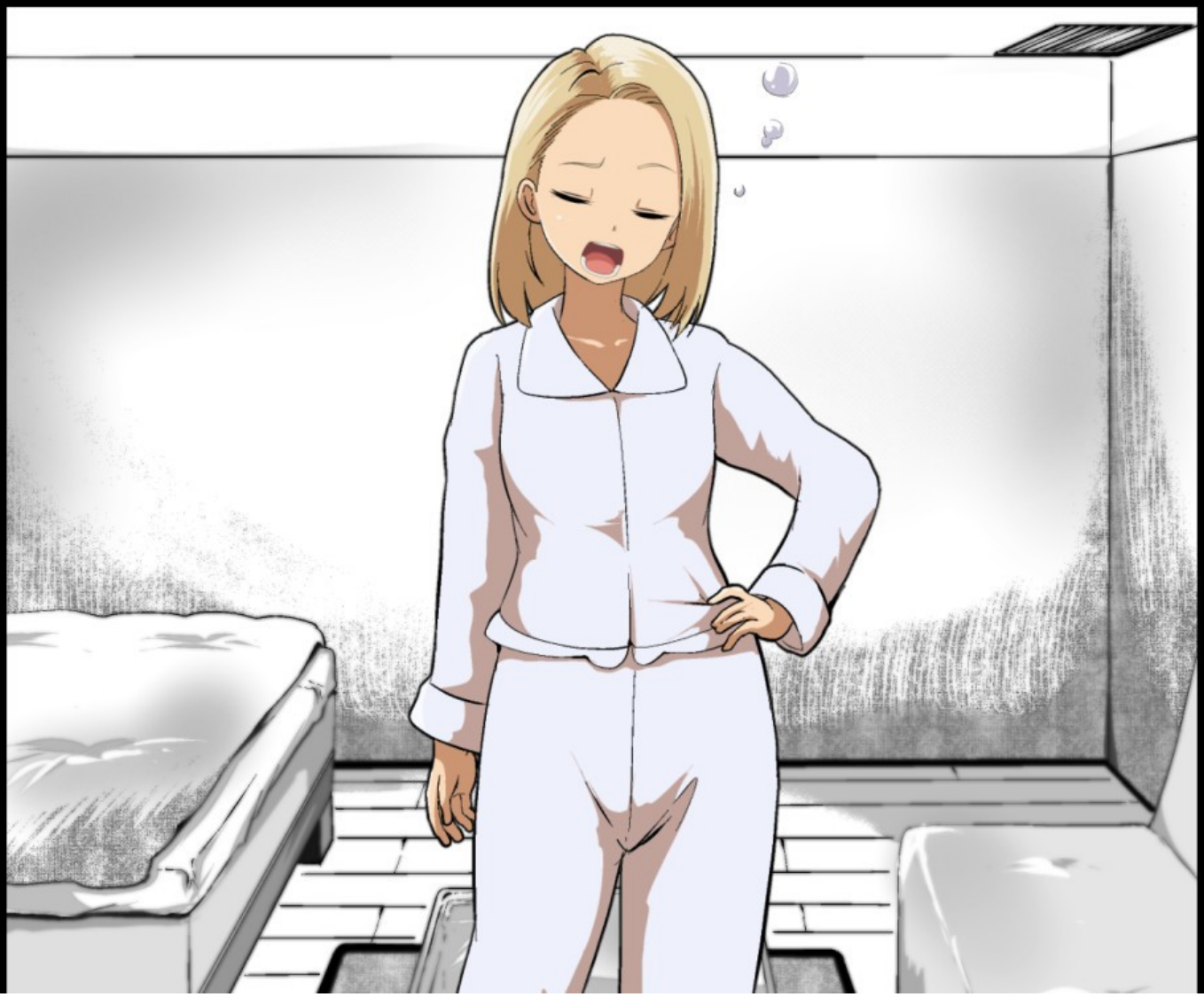


次の日、吉田は起床すると同時に、眠そうに眼を擦る璃音奈にじゃんけんを申し込む。

勝ったらそのままおっぱじめようとしているのか、丸一日やるつもりなのか。

吉田の、おっさんの精力に引く璃音奈。

しかし吉田のギンギンの勢いは空回りして、その日も負けた。



次の日も。

璃音奈「おっさんじゃんけん弱すぎでしょ…」

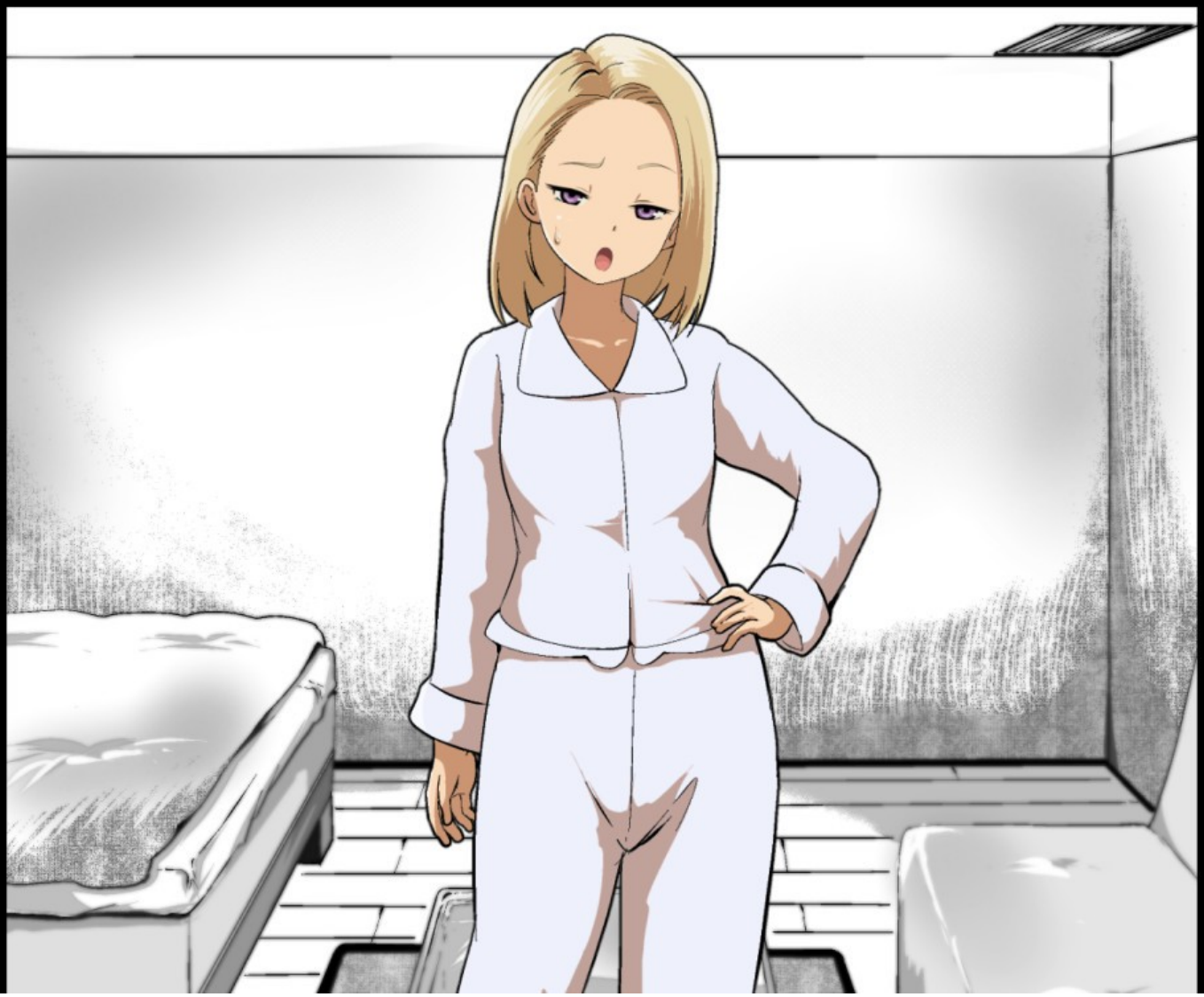
吉田「くそっ！くそ！！」

璃音奈「マジで悔しがってるし…」

「なんかさぁ、あんまり日を置きすぎるとあたしもやっぱナシとかそういう感じになってきちゃうんだけど」

吉田「…明日こそは！！」

璃音奈「…」

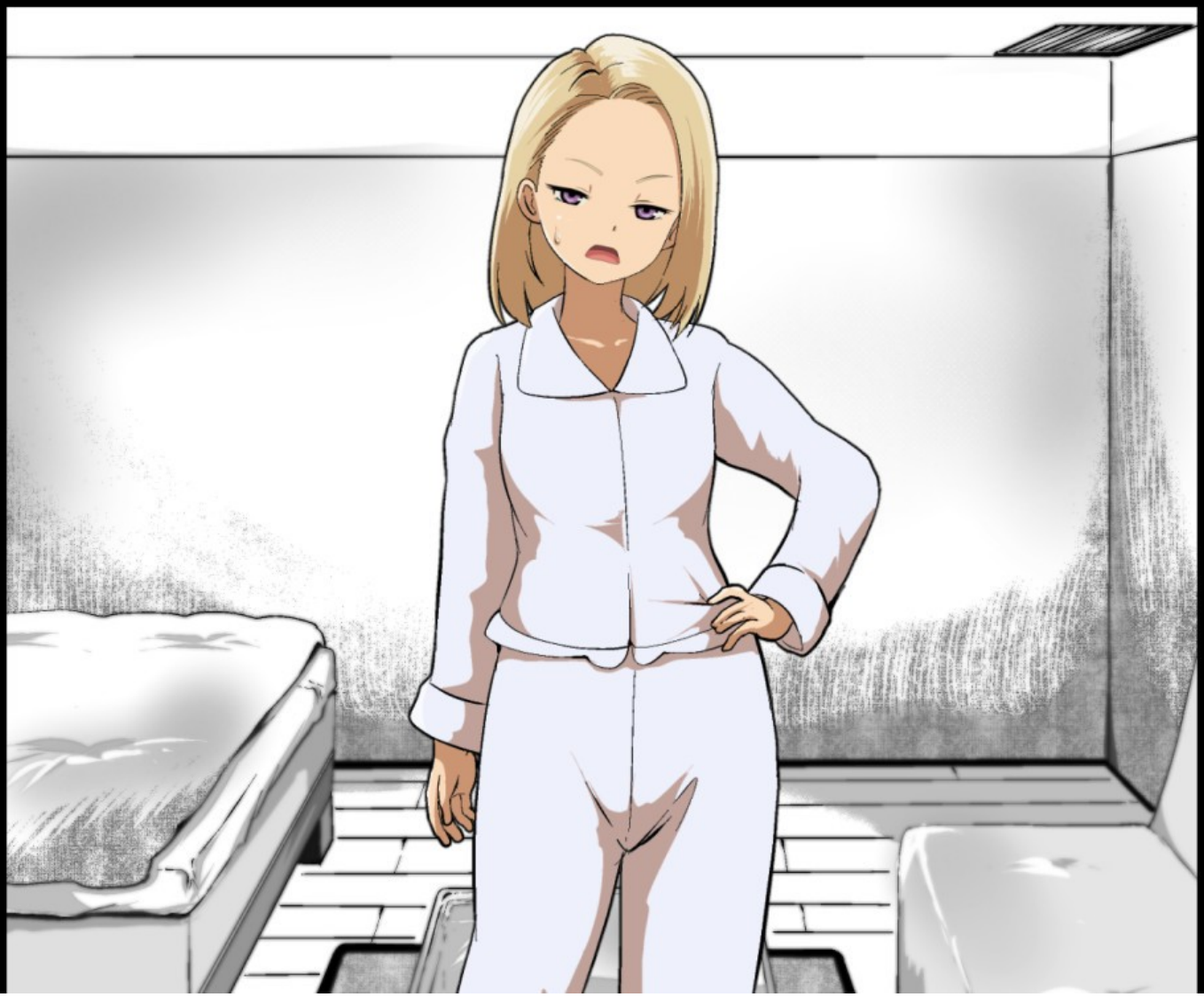


４回目のデイリーチャンス。

朝、閉鎖空間に野太い中年男性の雄たけびが反響する。

吉田「～～～～～!!」

璃音奈「うわぁ…ついに負けた」



吉田「…いいんだよな」

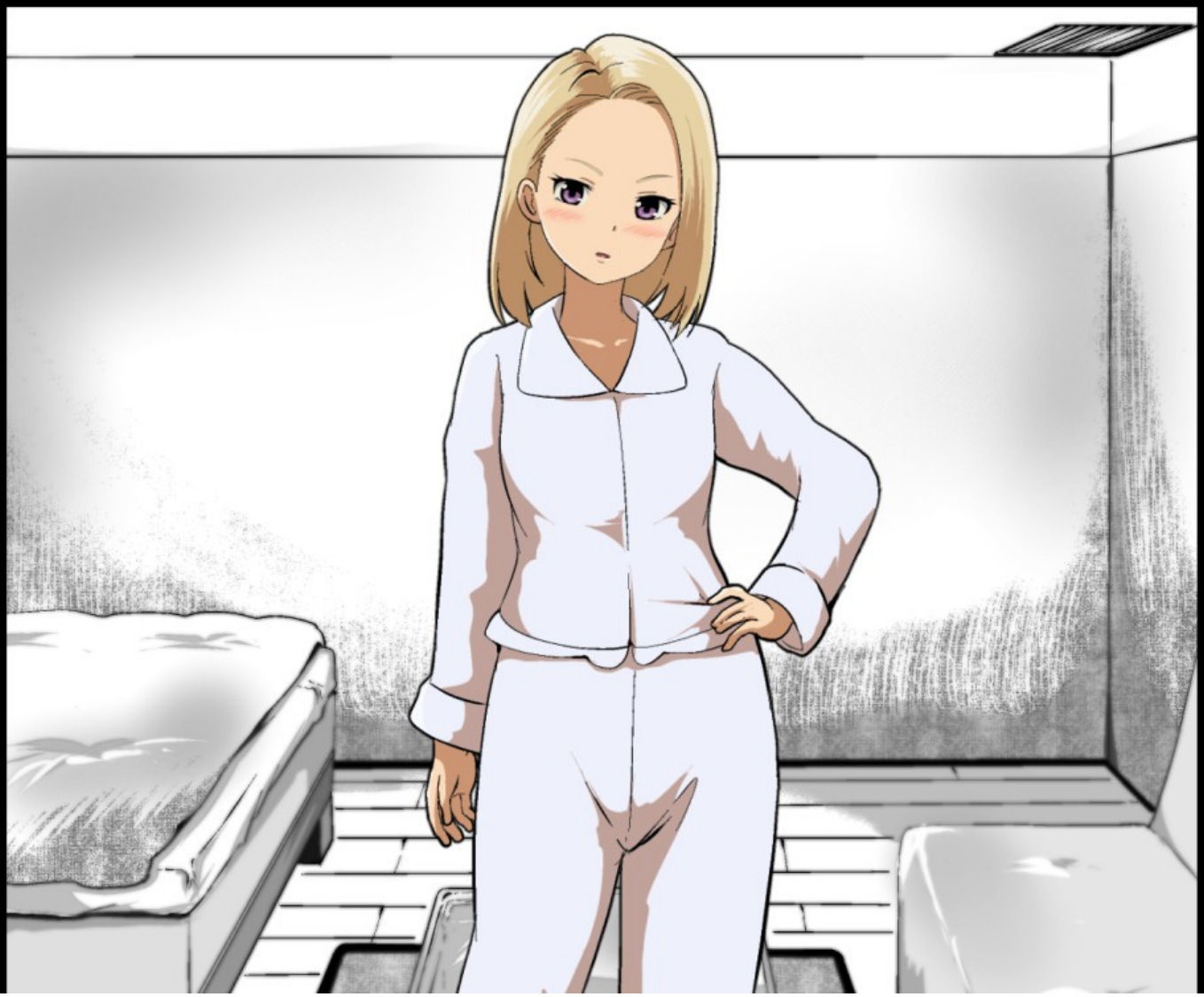
璃音奈「…まあ」

「うん」

吉田「じゃあ、やるぞ」

「セックス」

璃音奈「…うん」



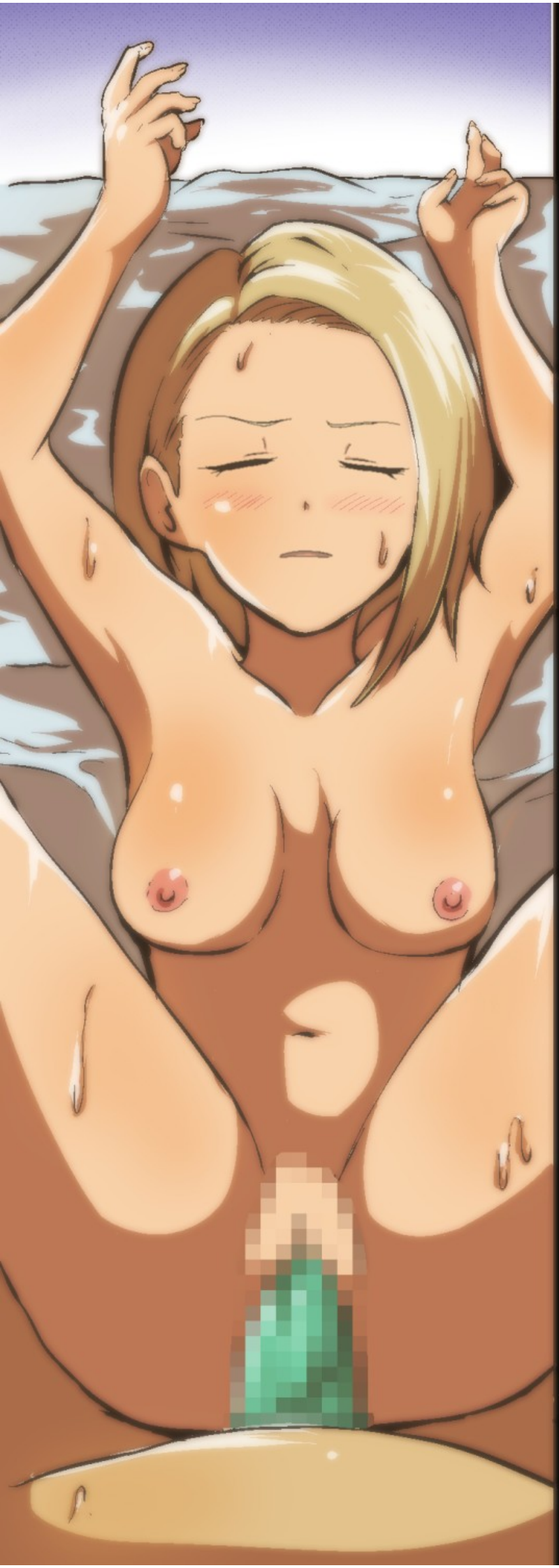
吉田「あ」
璃音奈「ん？なに？」
吉田「…制服着てた時の紺のハイソックス履いてくれないか」
璃音奈「え？何で」
吉田「…頼む。似合ってるというか可愛いしな」
璃音奈「…まあいいけど」

璃音奈「おまたせ」

吉田「ああ…」

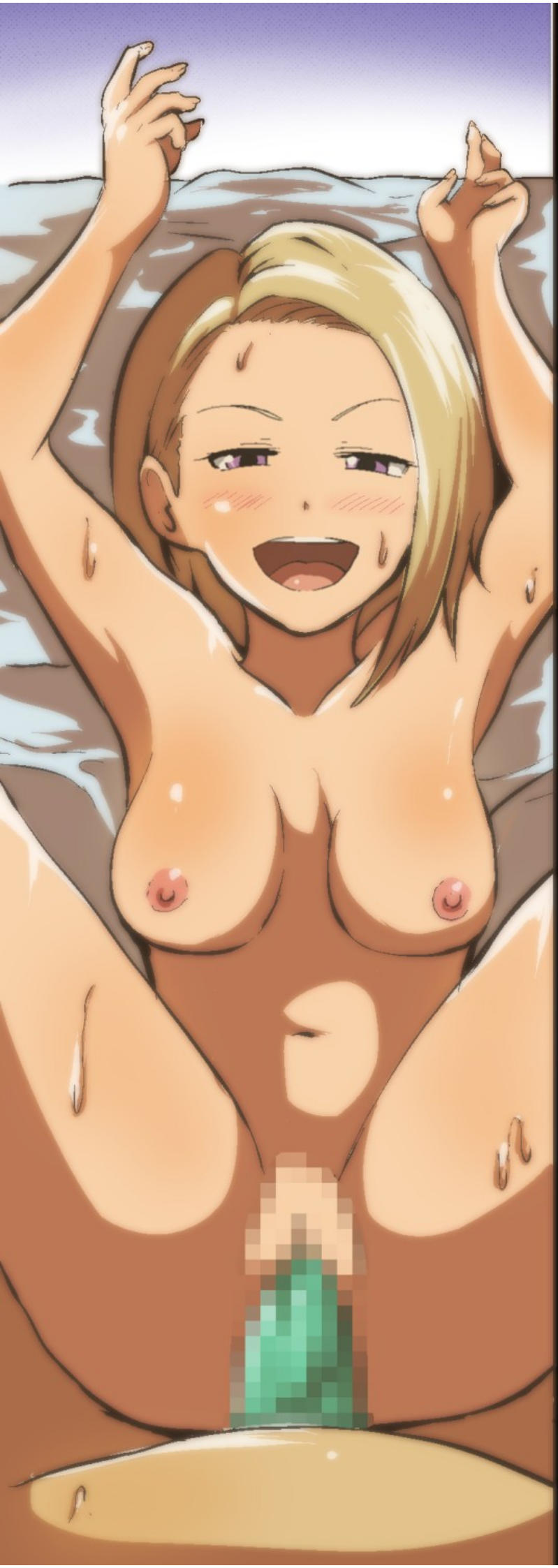
「じゃあ、今度こそ」

璃音奈「…うん」

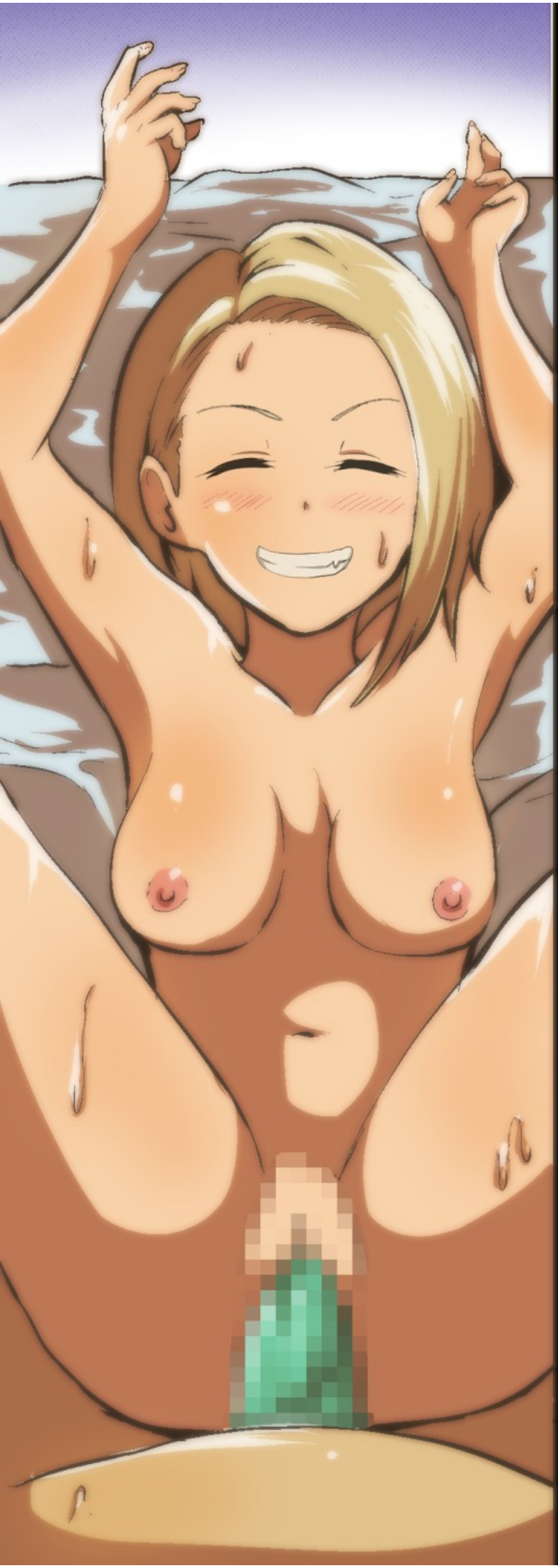


吉田「おお…お」

璃音奈「…ん」

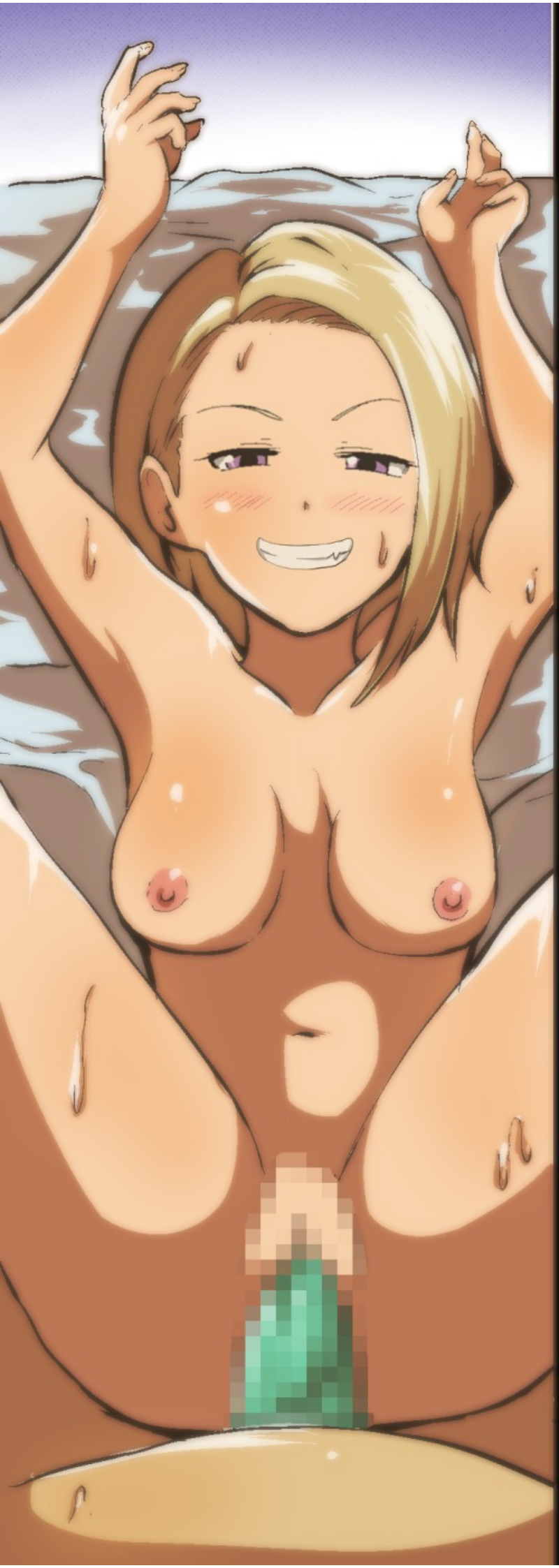


吉田「ついに…やってしまった」
「こんな若い女と…」
璃音奈「そりゃ嬉しいでしょうね～」
「訳分かんない状況にかこつけて美少女とやれるんだから」
吉田「嬉しすぎる…」
璃音奈「てか、おっさんって経験あんの？」
璃音奈「やるからにはあたしだってそれなりに発散したいというか…」
「今さらだけど童貞ジジイのエスコートプレイなんて絶対やだからね」
吉田「風俗でなら割と…というか風俗でしか…」
璃音奈「うわ…なんかストレートにキツイ…」



璃音奈「んっ…んっ」
吉田「ふっふっ…」
「…どうだ？」
璃音奈「どうって…なにが？」
吉田「いやだから…気持ちいいかどうか」
璃音奈「…」
「…ぶっちゃけていい？」

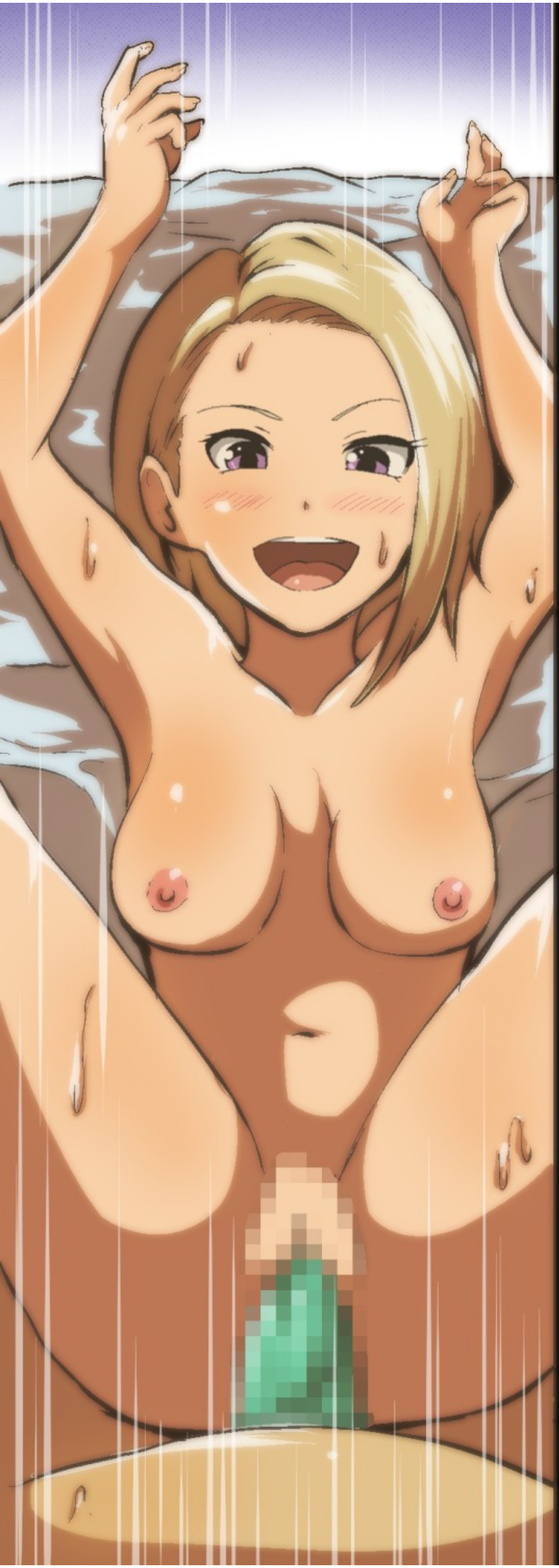
璃音奈「…結構気持ちいい」
代わり映えのない部屋にずっといたためか、精神面でも無意識に刺激を求めていたのかもしれない。
璃音奈は感じてしまった身体の生理現象を正直に伝えた。



吉田「そうかそうか」
璃音奈「うわっ、何か嬉しそうで腹立つ」
吉田「そりゃあ自分のチンポで女が気持ちいいって言ってくれたら嬉しいだろ」
「というかお前も経験は…あるんだよな」
璃音奈「それこのタイミングで聞くの？あるに決まってんじゃん」
「初めてでこんなにすんなりおっぱじめられる訳ないでしょ」
「てかだとしたらこんなおっさんに初めてを絶対やらんし」
吉田「そ、そうだよな」
「彼氏か？」
璃音奈「ん…正確には元カレ」
吉田「そうか…」

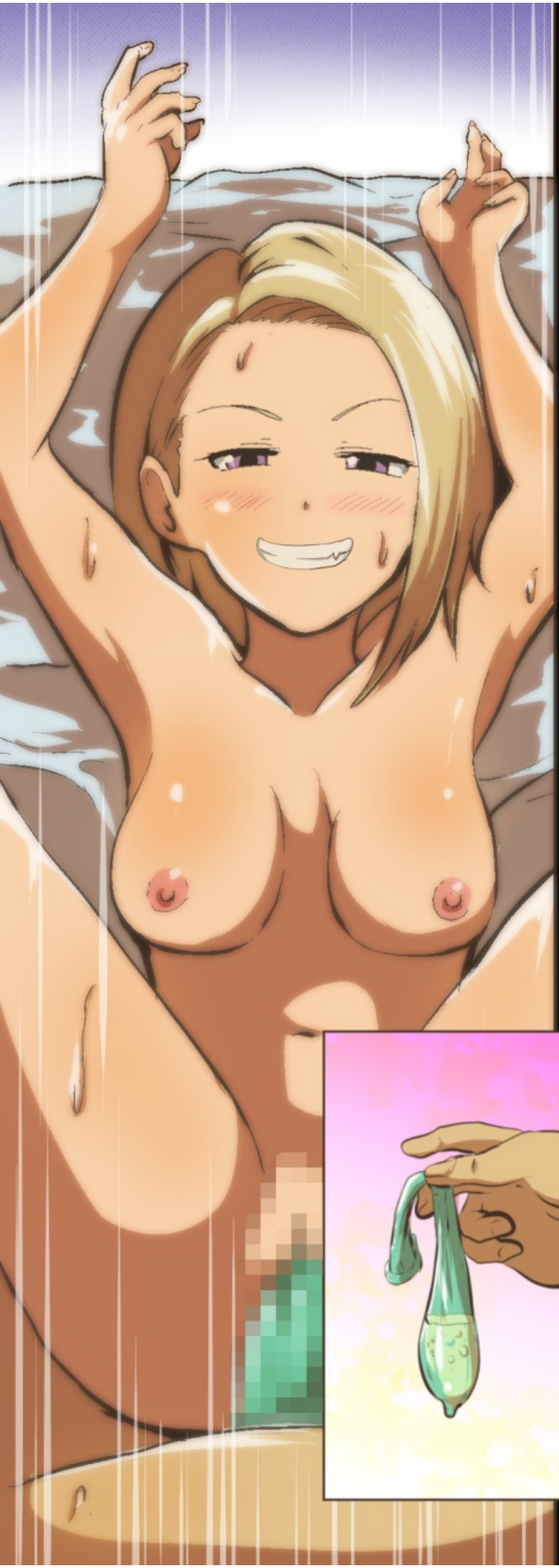
璃音奈「…ていうかさ」
「いい加減お前ってのやめてくんね？」
吉田「…璃音奈って呼んでいいのか？」
璃音奈「りおな様」
吉田「それをいうなら俺の事だっておっさんじゃなくて――――」
璃音奈「いや、おっさんはおっさんだろｗ」

一方的な言い方だったが、何故かたった一言で言いくるめられた気になってしまった吉田。
おっさんはおっさんだろ。
まあ、その通りである。
吉田「…確かにおっさんはおっさんだな」
璃音奈「そうそう♪調子乗らないようにね」



吉田「…璃音奈！」
おっさん呼びを受け入れた吉田は少し動きのテンポを上げる。
璃音奈「ちょ…どしたん？(笑)」
吉田「璃音奈！璃音奈ぁ！！」
璃音奈「呼び捨て…wりおな様でしょ！」
吉田「璃音奈！璃音奈！璃音奈！！」
璃音奈「ん…～～～もう…w」

そこからはお互い会話というような会話はしなくなった。
短い喘ぎ声、呻き声を漏らすだけで淡々とその行為に勤しむ。
ベッドの上。吉田はその大きな体で璃音奈を覆い腰を一定のリズムで動かしている。
その上下に揺れる動きに合わせてベッドはキシキシと音を立てる。

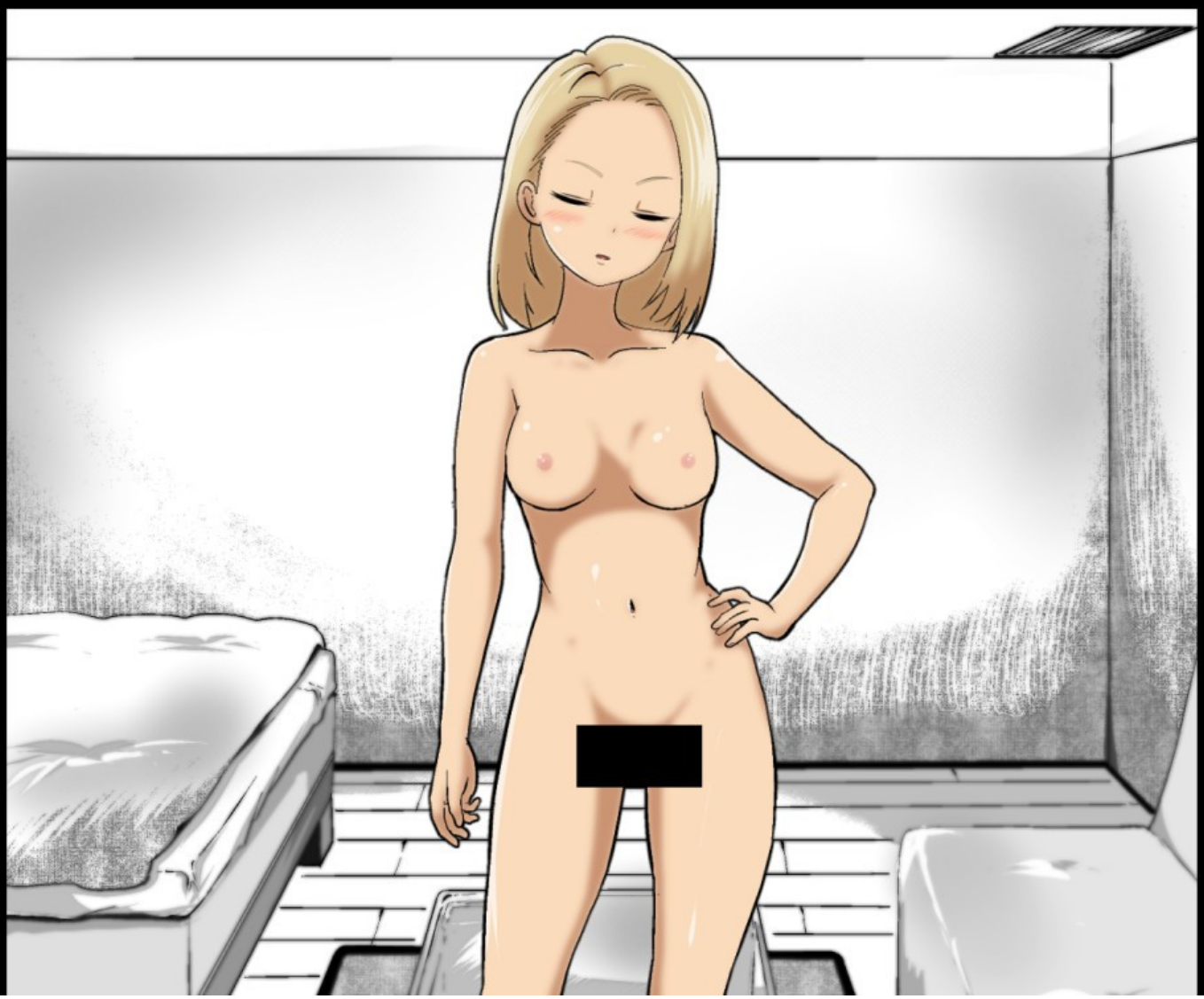


二人「んっんっん…んっ」
二人「んっんっん…んっ！！」
二人「～～～～～！！」
急にテンポが早まったと思ったら、数秒停止。
璃音奈の脚がピンと伸びている。
二人「……はぁ！」
二人「はぁっ、はぁっ、はぁっ…」
二人は息を切らしながら、密着した身体を少し緩める。
吉田は自身の股間をモゾモゾと弄り出す。
吉田「…めっちゃ出た」
璃音奈「…キモ(笑)」

吉田は胡坐をかいた姿勢のまま壁に寄り掛かり楽な体制をとる。
璃音奈は仰向けに寝転がったまま天井を向いて呼吸を整えている。

吉田「ふぅ…」
璃音奈「…」
吉田「…」

その状態で一時休憩した二人。
数分後、吉田は当たり前のようにゴムの入った箱からもう1枚取り出すと先ほどよりスムーズにソレを自分のモノに装着する。
璃音奈はその様子をずっと見ていたが特に何も口出ししなかった。



そして当たり前のようにゴムを装着させた股間の棍棒を向けてくる吉田を、当たり前のように脚を広げて迎える体勢をとる璃音奈。

お互い何の声掛けもなく2回戦を開始した。

――3回戦。

――4回戦。

――5回戦はひたすら黙々と励んでいた今までと打って変わり、お互い声を上げる。

吉田「璃音奈！璃音奈！璃音奈！璃音奈！！」
璃音奈「あっあっあっ！あぁ……！！」
吉田「璃音奈！気持ちいいか！気持ちいいって叫べ！」
璃音奈「キモい！おっさんはキモいけど！」
「気持ちいい！！セックス気持ちいい！！」

久しぶりに味わう肉体的にも精神的にも刺激的な快感は、身体がフワフワ浮くような何とも言えない感覚だった。
二人は今までの経験でもこんな感覚を体験したのは初めてだった。
吉田「璃音奈！またイくぞ！見つめ合おう！目ぇ合わせたまま一緒にイくぞ！！」

璃音奈「んっ…キモいんだよー々…ｗｗ目なんか別にいいじゃん…！」

吉田「頼む！瞬む感じでもいいから！思いっきり瞬め！！」

璃音奈「キモ…ｗｗキモっ…いｗんっんっ…」

吉田「…おおおぉおお～！！」

璃音奈「き……もちぃ…いぃぃ！！！」

二人「～～～～～！！！」

吉田「ハアッハアッハアッ…」
璃音奈「はぁっはぁっ…」

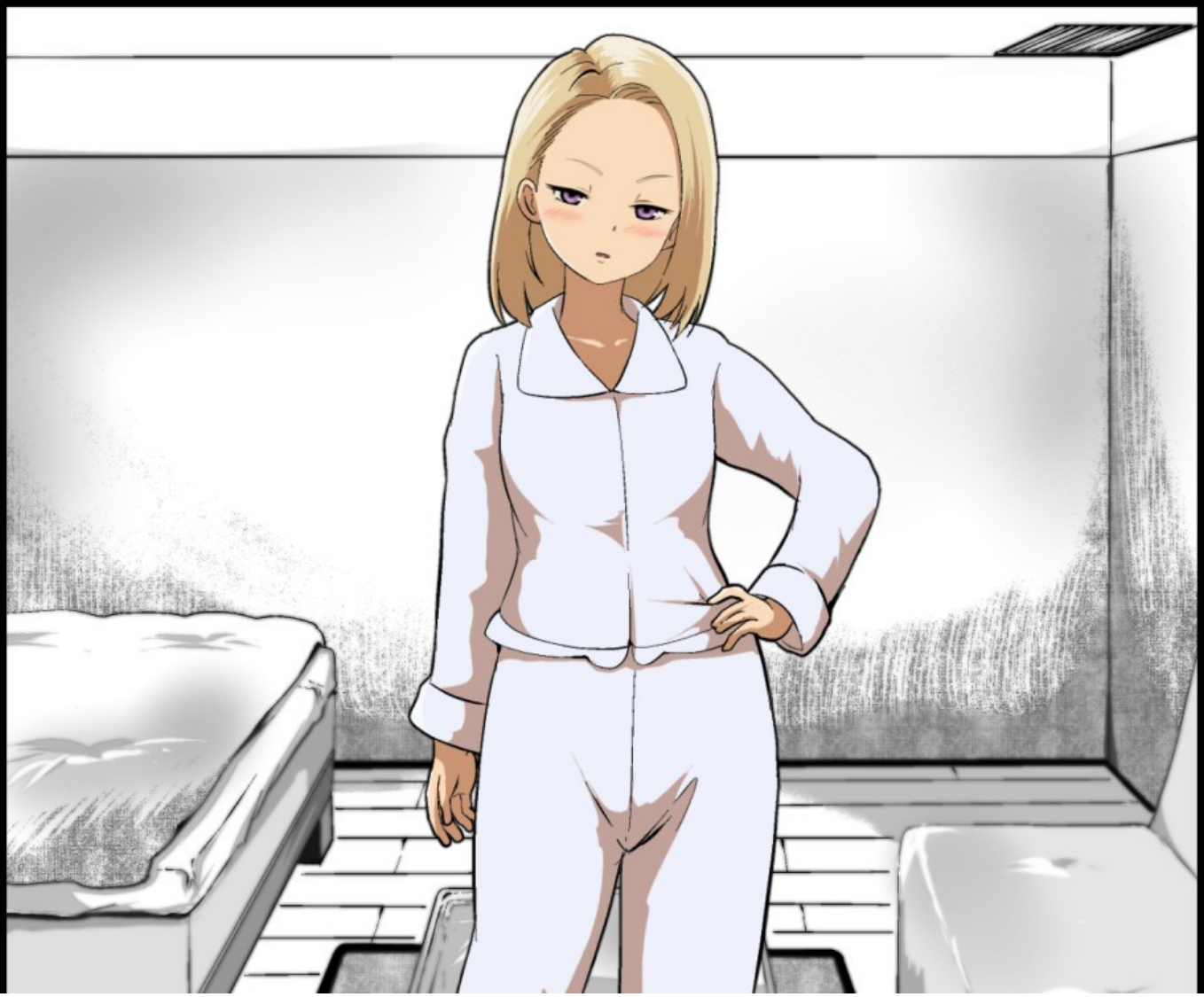
中年おじさんの一方的な提案からおっぱじめてしまった男女の営み。
なし崩し的に進められるその行為は休憩を挟みながらも7回戦まで続いた。
気付けば時刻は午後3時半。
水分は取っていたが朝も昼もご飯を食べなかったので急激に空腹を感じ出す二人。
半端な時間に早すぎる晩御飯という形で、ガッツリ目でボリュームのあるご飯を食べた。

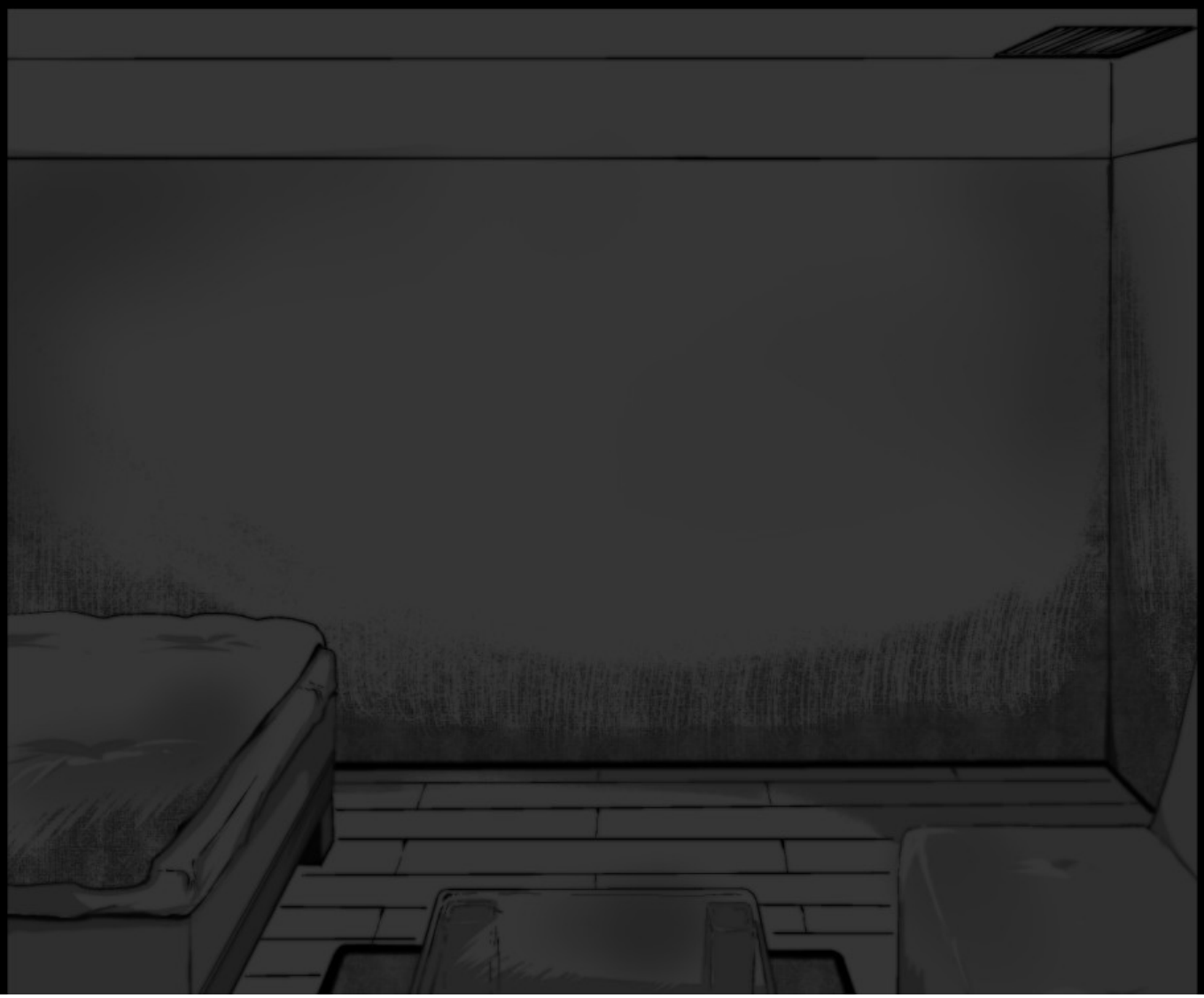
お互い入浴を済ませるとグッと疲れが伸し掛かってくる。

今日はそのまま寝ようと思いつつも何となく二人はチラチラと意識的に目配せしては視線を合わせる。

吉田「…おやすみ」

璃音奈「…ん、お休み」





お互い会話をする訳でもなく、
布団の中でもう1回戦やった

吉田「…んん」

目を覚ます。また今日も一日が始まるのか。

働きたくねぇ…。

朝起きて一番に思うのがそんなこと。

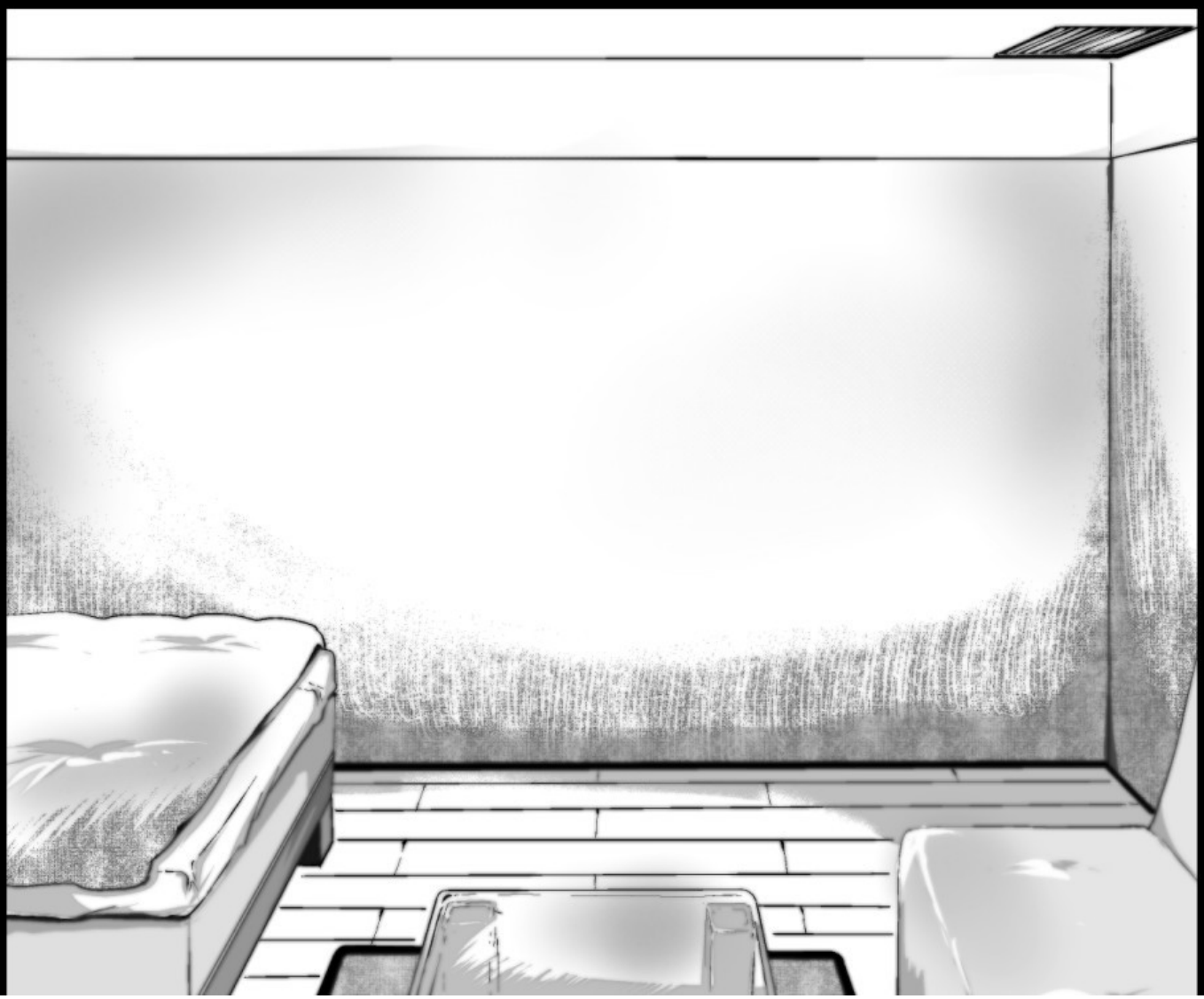
いや、社会人の大半の本音だとは思うが。

しかし、飾り気のないまっ白な天井がまだ寝ぼけた状態の視界にうっすら浮かんでくる。自分の置かれている状況を理解していく。

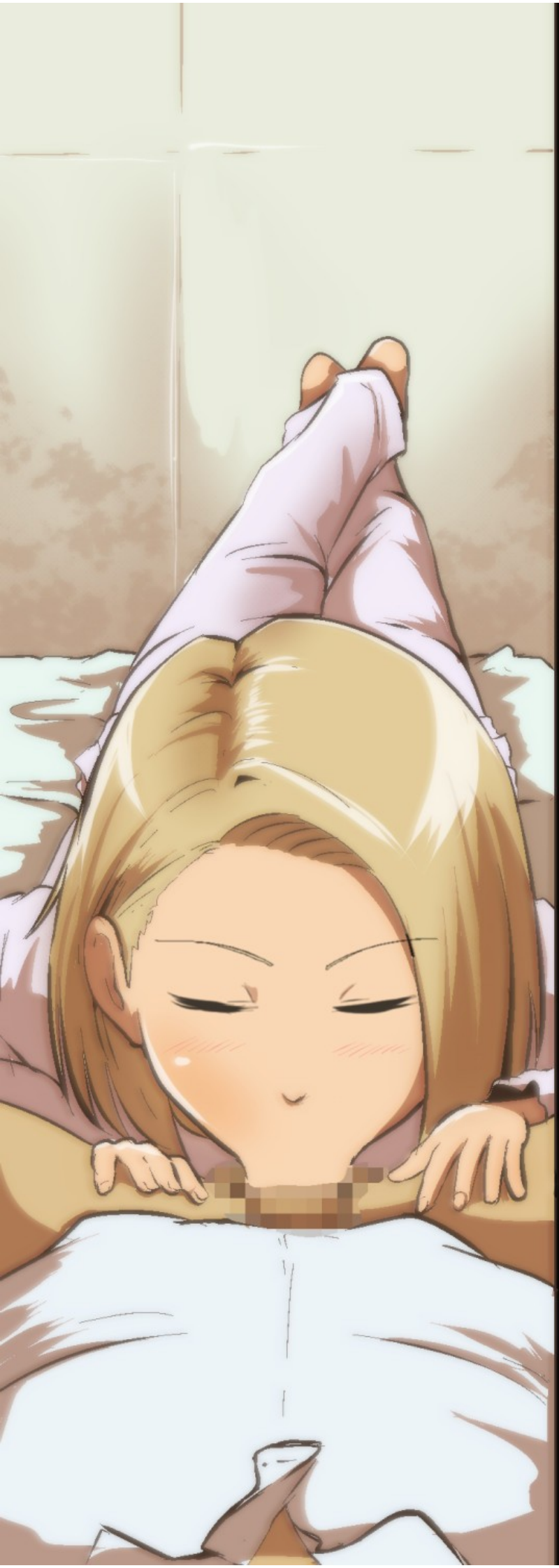
そうか、俺が今いるのは…。

そう思い体を起こそうとした。

下半身が何ともこそばゆい。



璃音奈「・・・」
吉田「…おはよう」
璃音奈「…ほはよお」
璃音奈が吉田のそれを咥えていた。
璃音奈「アンタがやれって言ったんでしょ。目覚ましフェラ」
「どうしても寝起きにしゃぶられてる感覚を味わってみたいって言ってきてさあ」
吉田「味わってるのは璃音奈だけどな♪」
璃音奈「ウザ…」
吉田「というか自分が頼み込んだことだけど、璃音奈もよくやってくれるな…」
璃音奈「…だってぶっちゃけ暇だし、やることないじゃん」



吉田「こんな閉鎖空間に二人きりでいると暇つぶしでちんぽしゃぶってくれるようになるなんて…」

璃音奈「てか、当たり前みたいに一緒にベッドで寝ちゃったじゃん…」

吉田「元々ダブルサイズで大きかったんだから問題ないだろ。正直言ってソファだと体痛かったし」

男女が一緒のベッドで寝るなどどう考えても起こりえないことだが、その辺の感覚はもう大分鈍った二人。

というより昨日の出来事と、現在進行形で行われている行為の方がとんでもない事をしている。

昨夜、一発やった後に吉田が目覚ましフェラを頼み込んだときは曖昧な返答をするだけだった。

必死に頭を下げて頼み込む吉田をニヤニヤと笑うだけで確かな受け答えはしてくれていなかったはずなのに。次の日の朝にはリクエストしたプレイを素直に応じてくれていた璃音奈。

若者の気まぐれなのか、本当に暇すぎたから何となく付き合ってくれたのか。

吉田「もっと…！吸いつく感じでしゃぶってくれ。ひょっとこみたいに口窄めて…！」

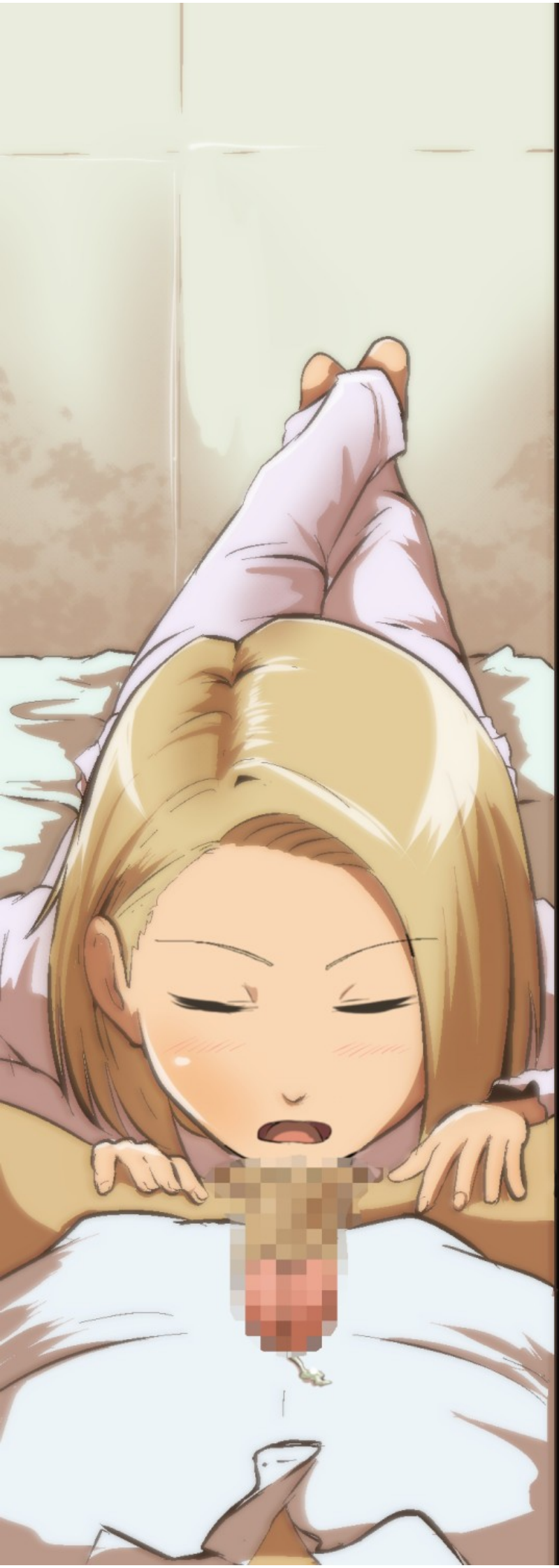
璃音奈「ひょっほほぉ…？んん…ほぉ？」

吉田「そうだ…あぁ…可愛いぞ璃音奈」

璃音奈「はわいいあけねーあろ…（可愛いわけねーだろ）

吉田「ぉお……イく」
璃音奈「ん……！」
吉田「…はぁ！…あぁ～～～」
璃音奈「……」
吉田「…飲んでくれ。朝一番の搾りたて雄ミルク」
璃音奈「……」

璃音奈は吉田をジト目で見つめてからゴクっと口内に放出されたソレを飲み込んだ。



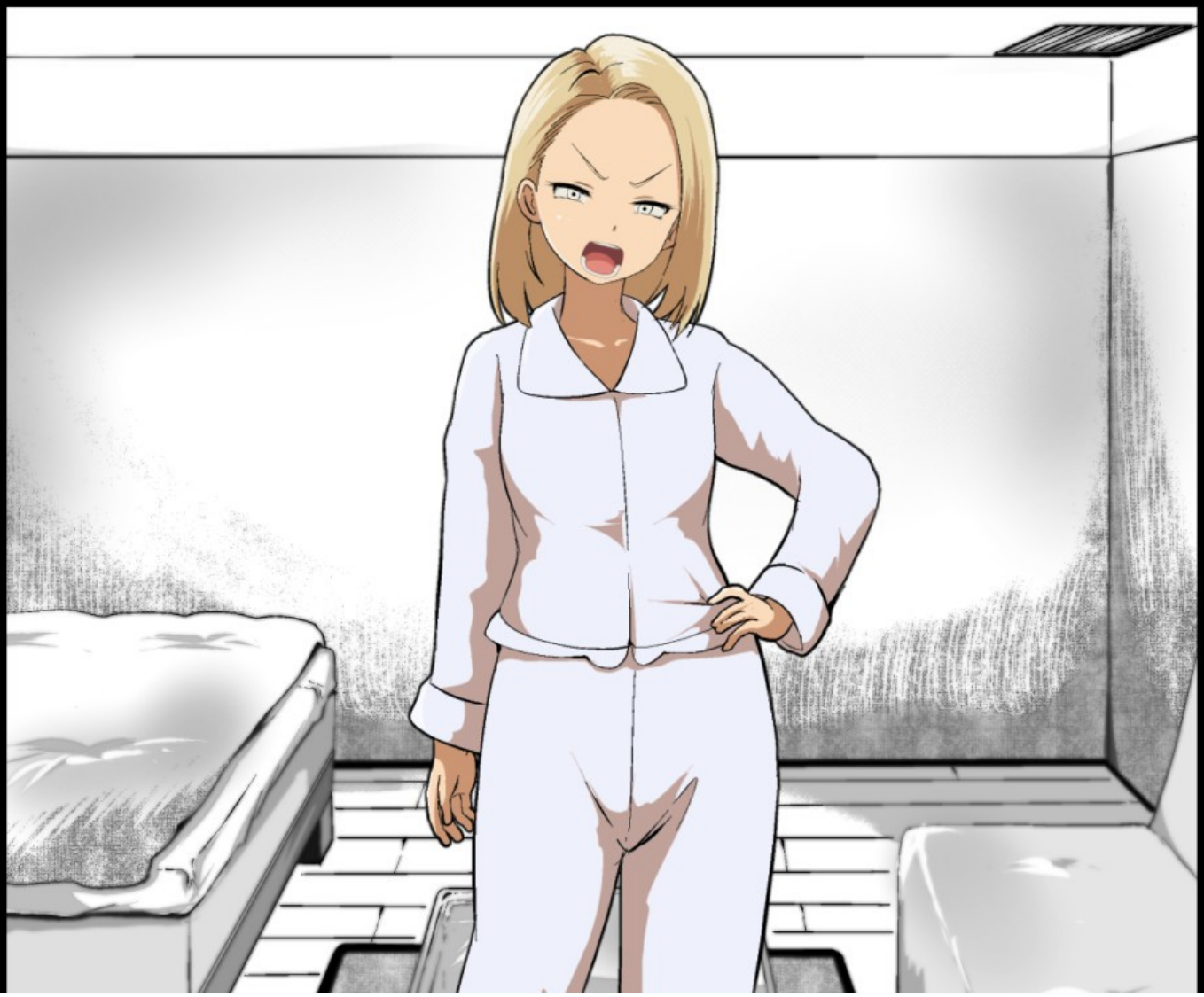
吉田「美味かったか？」
璃音奈「はいはい美味しい美味しい、ごちそうさまでした」
吉田「ああ…何だかんだ付き合ってくれる璃音奈可愛いぞ」
璃音奈「もういいでしょ？歯磨きたいんだけど」
吉田「…」
璃音奈「ねえ？おっさん」
吉田「…小便したくなってきた」
璃音奈「…は？」
吉田「…あぁー、イったばかりで力が入らん。これじゃあ立てないぞ」
璃音奈「…」

吉田「璃音奈、飲ん

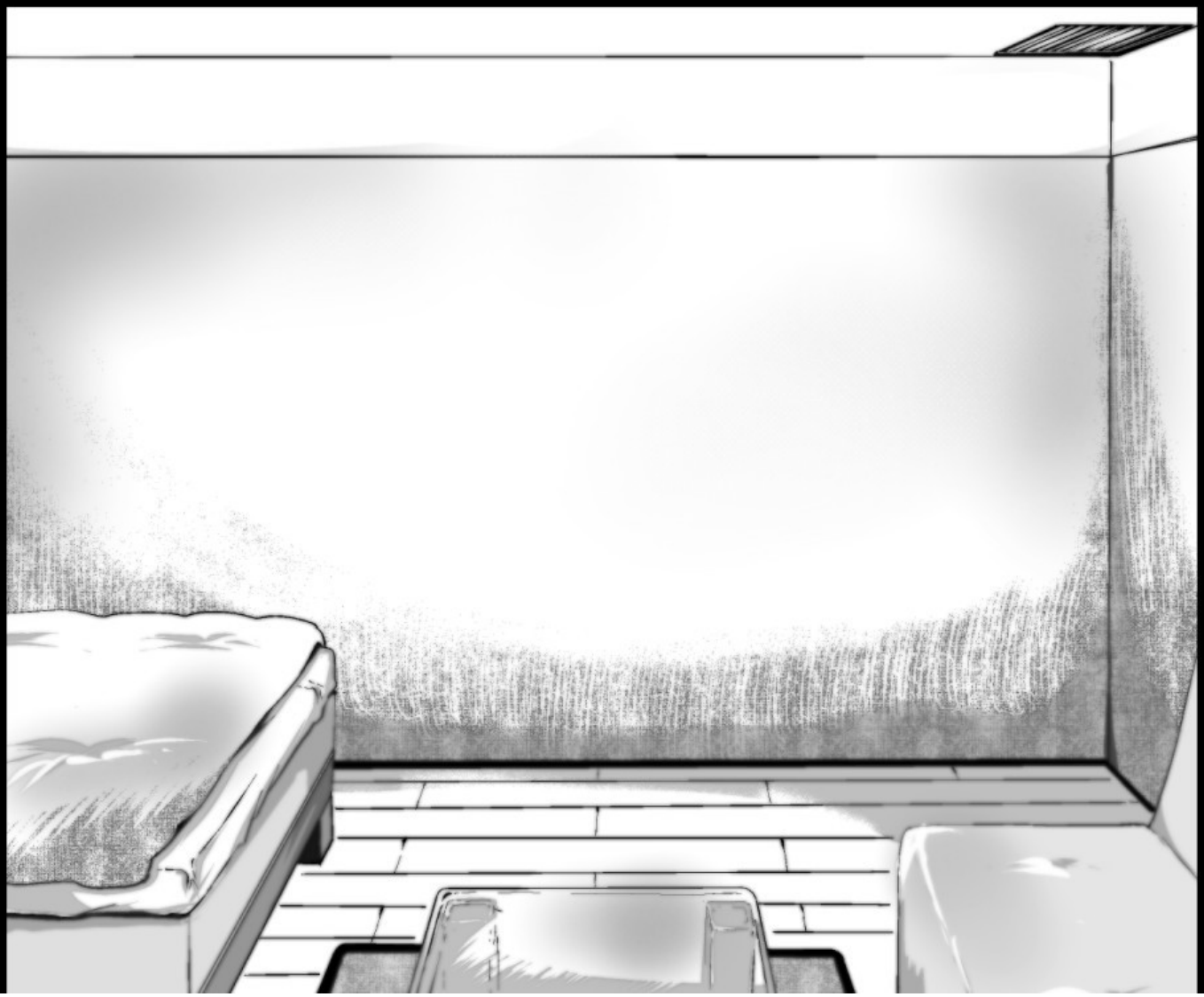
璃音奈「バカ!!○すぞジジイ!!」

渋々ながらも要求に答えてくれていた璃音奈。

吉田はその流れのままもしかしたらやってくれるんじゃないかと思ったが、普通にキレられた。



吉田「璃音奈、機嫌直してくれよ～」
璃音奈「……」
吉田「璃音奈ぁ～、りおな様～」
璃音奈「別に怒ってないけど」
朝、昼と食事を済ませて(食事は吉田に用意させた)お互い一度シャワーを浴びた。



その間も璃音奈は吉田と一度も口を聞かずにいたが、昼も過ぎた辺りからお互いもうやることもなくなり結局セックスすることになった。

吉田がチラチラとアイコンタクトを送ると璃音奈も仕方なくといった感じで目を合わせてくれる。そしてお互い会話を交わすこともなく服を脱ぎ始める。

少しずつ璃音奈も口を開いてくれるようになった。

璃音奈「てか、ずっと思ってたんだけどなんで靴下だけ履いたままにさせんの？」

吉田「え？なんか変態っぽくて可愛いじゃん」

璃音奈「変態はお前だろｗ」

吉田「おっ元気になってきたな♪いつもの璃音奈だ」

璃音奈「だから別に怒ってないって言ってんじゃん、しつこいな～おっさんは(笑)」

吉田「よーし、それじゃあ仲直りのちゅ～しよう！」

璃音奈「は？え？？ちょ――――」

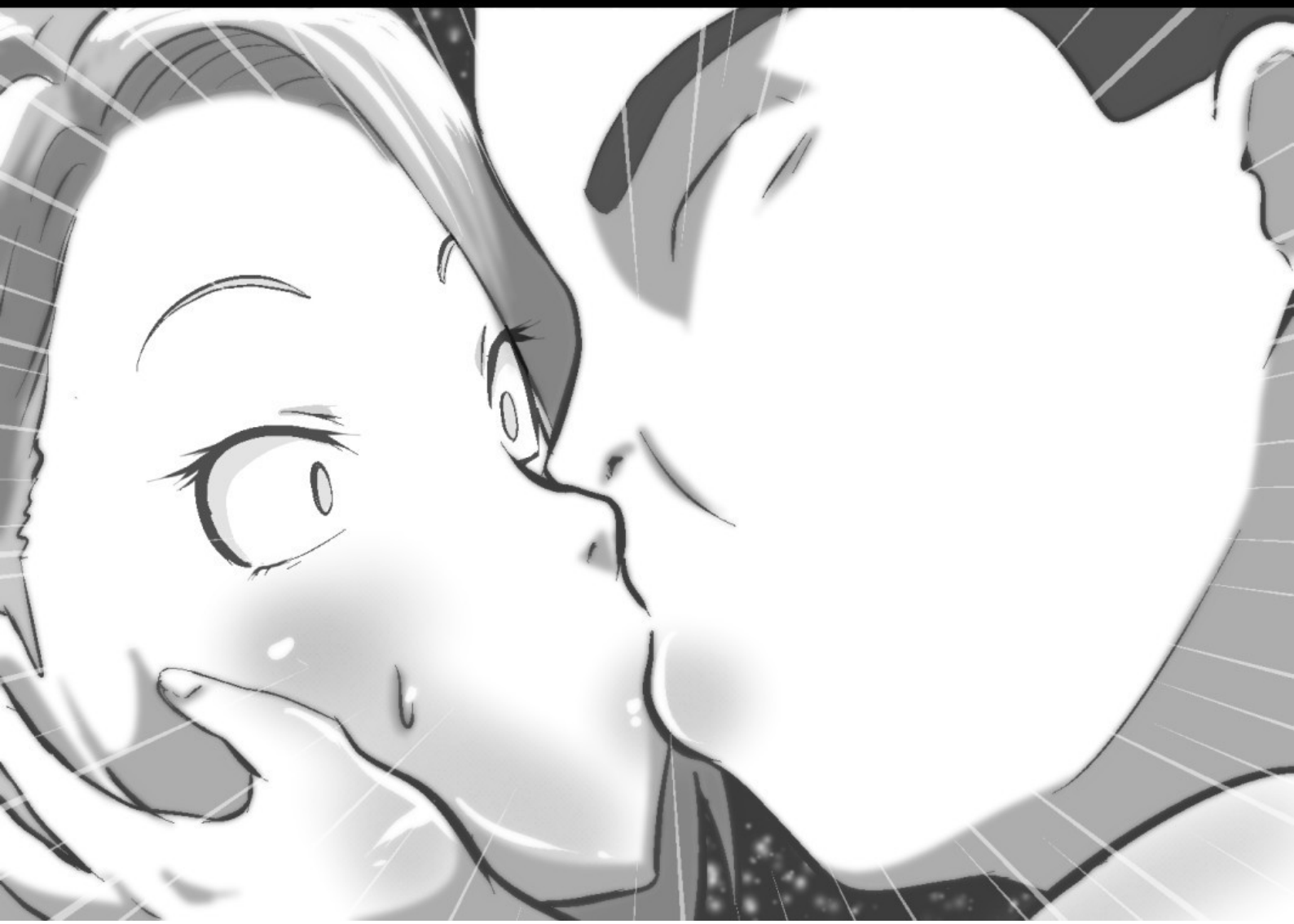
吉田「んんんんんんん～～～！！」

璃音奈「んんんん～～～～～～!?」

璃音奈「……～～～！！」

吉田「～～～～～～～～～～！！」

璃音奈「～～～～～～～～～！！」



吉田「…ふぅ、これで仲直りだ」

璃音奈「…」

吉田「…あ、あれ？今度は本当に怒った？」

璃音奈「…」

吉田「…ごめ――――」

璃音奈「ぷっ…」

璃音奈が吹き出す。そのまま声のトーンを上げてあははははと笑い出した。

璃音奈「何かもう…おっさんってアホすぎて逆に面白いわ(笑)」

「こんな娘みたいな歳の女とヤれるからってバカみたいにテンション上がっちゃってさぁ…ぷっｗ…ふふふｗｗｗ」

吉田「…この僕がバカですってぇ?小娘の分際でぇ…!」

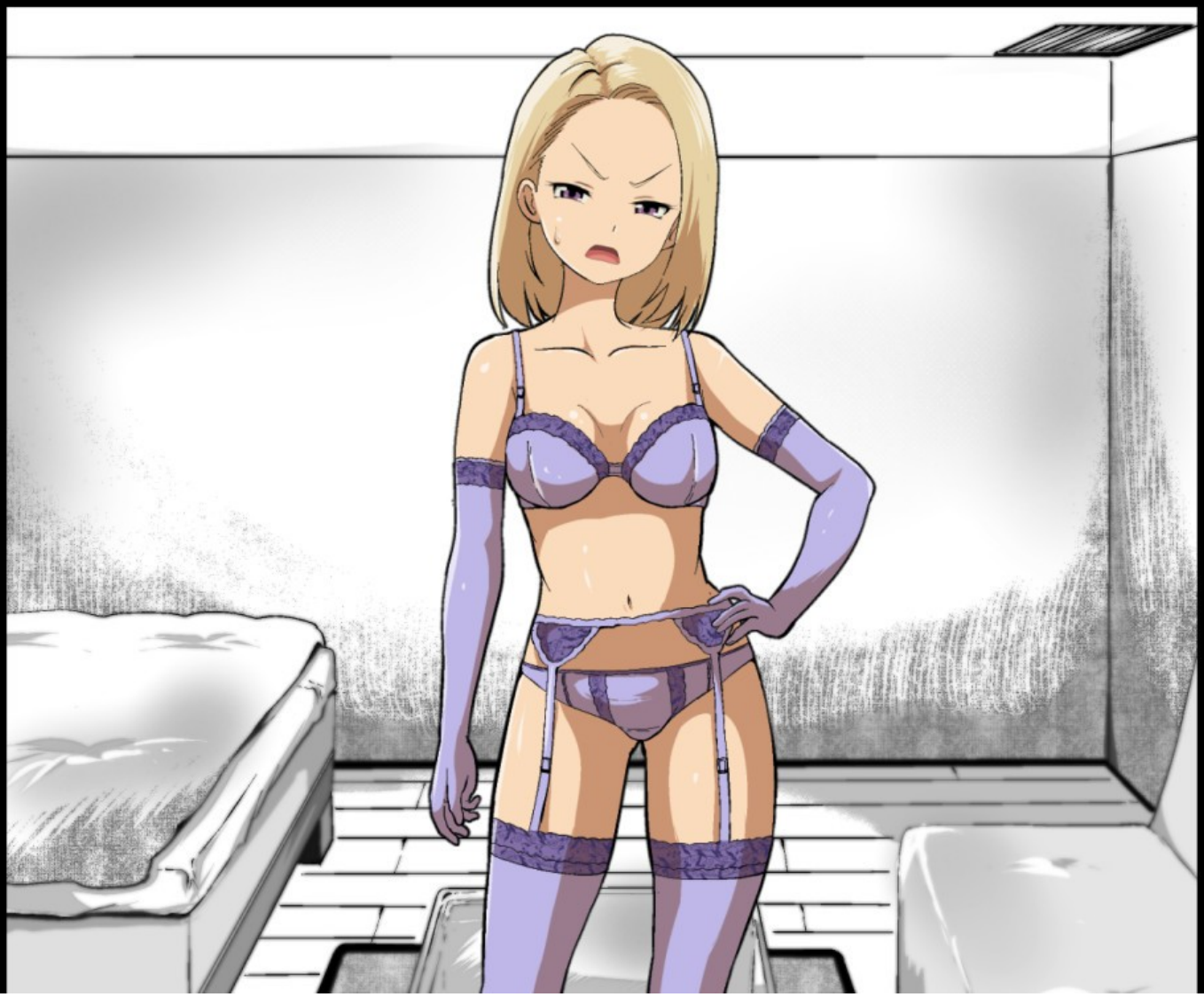
璃音奈「何そのキャラｗホントにバカじゃんｗｗ」

吉田「この――♪」

璃音奈「きゃーーー♪」

この日は5回戦やって当たり前のように一緒に風呂に入り、当たり前のように一緒のベッドで寝た。

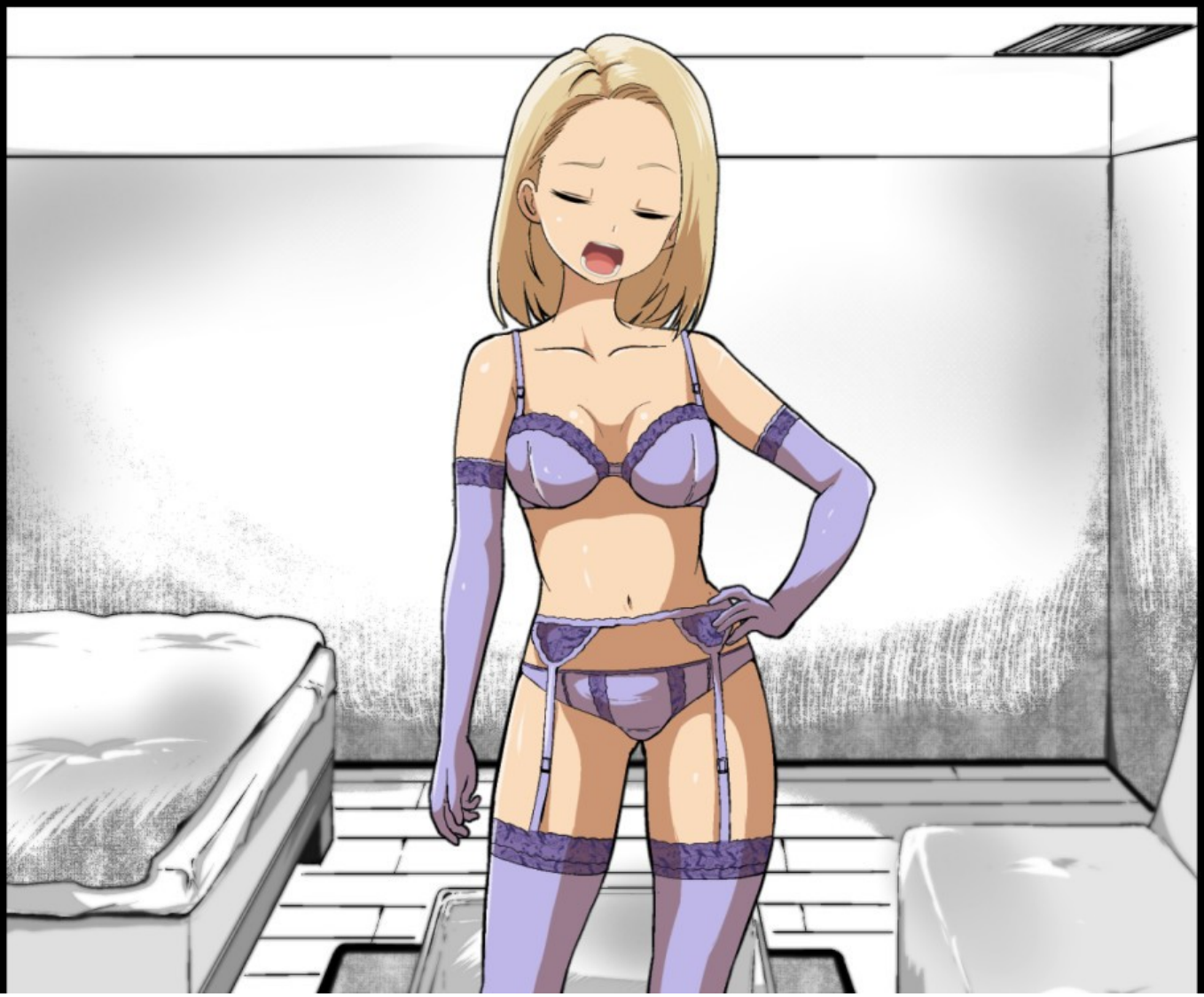
璃音奈「――どういうことだよ、これ」
吉田「似合ってるぞ」
璃音奈「おっさんの仕業だろ！意味分かんねーし!!」



吉田が何となく寝巻姿の璃音奈を見ていた時。

支給？されたものなので特にこれといった飾り気もないシンプルなデザインだが、もっとエッロいドすけべ下着みたいな寝巻にならねーかなぁ、と思った。

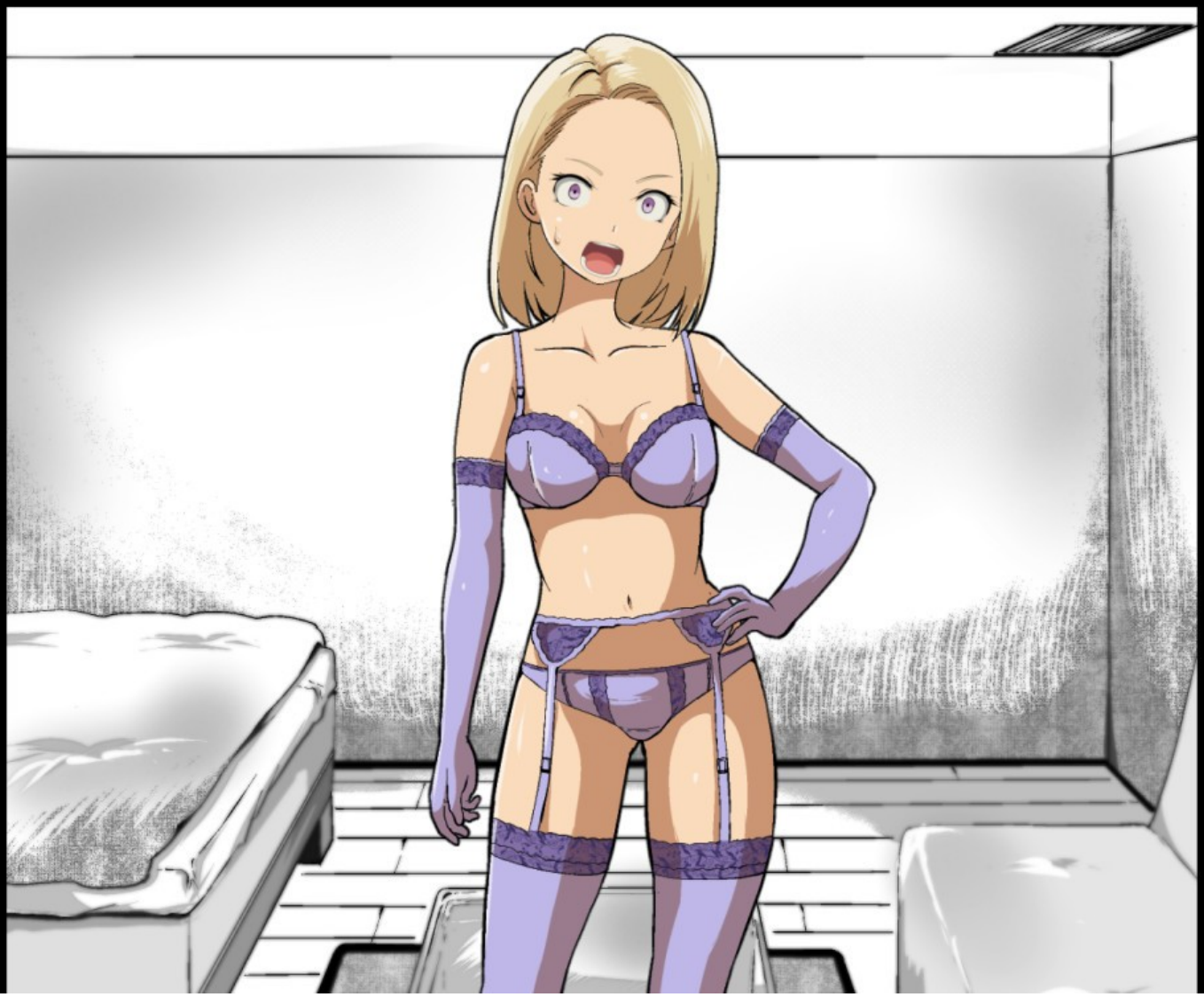
そうしたら、璃音奈の寝巻がいつの間にかこんなことになっていた。



吉田「お世辞とか一切なしでホントにめちゃくちゃ似合ってるぞ」

璃音奈「あたしこれからこんなバカみてーな格好で寝なきゃなんねーのかよ」

吉田「…」
璃音奈「…なんだよおっさん、もうヤる気になってんのか？ｗ」
吉田「…ママ！」
吉田は一言そう言って璃音奈に飛びつく。
璃音奈も「は？」と訳が分からずにいたが抱き付いてきた吉田を無意識に両腕で包み込む。
吉田「ママプレイするぞ…！全力で赤ちゃんなるから璃音奈も全力でママになってくれ…！」
璃音奈「いやいや！え？マジで言ってんのソレ！？」
吉田「ママ！璃音奈ママ！！」

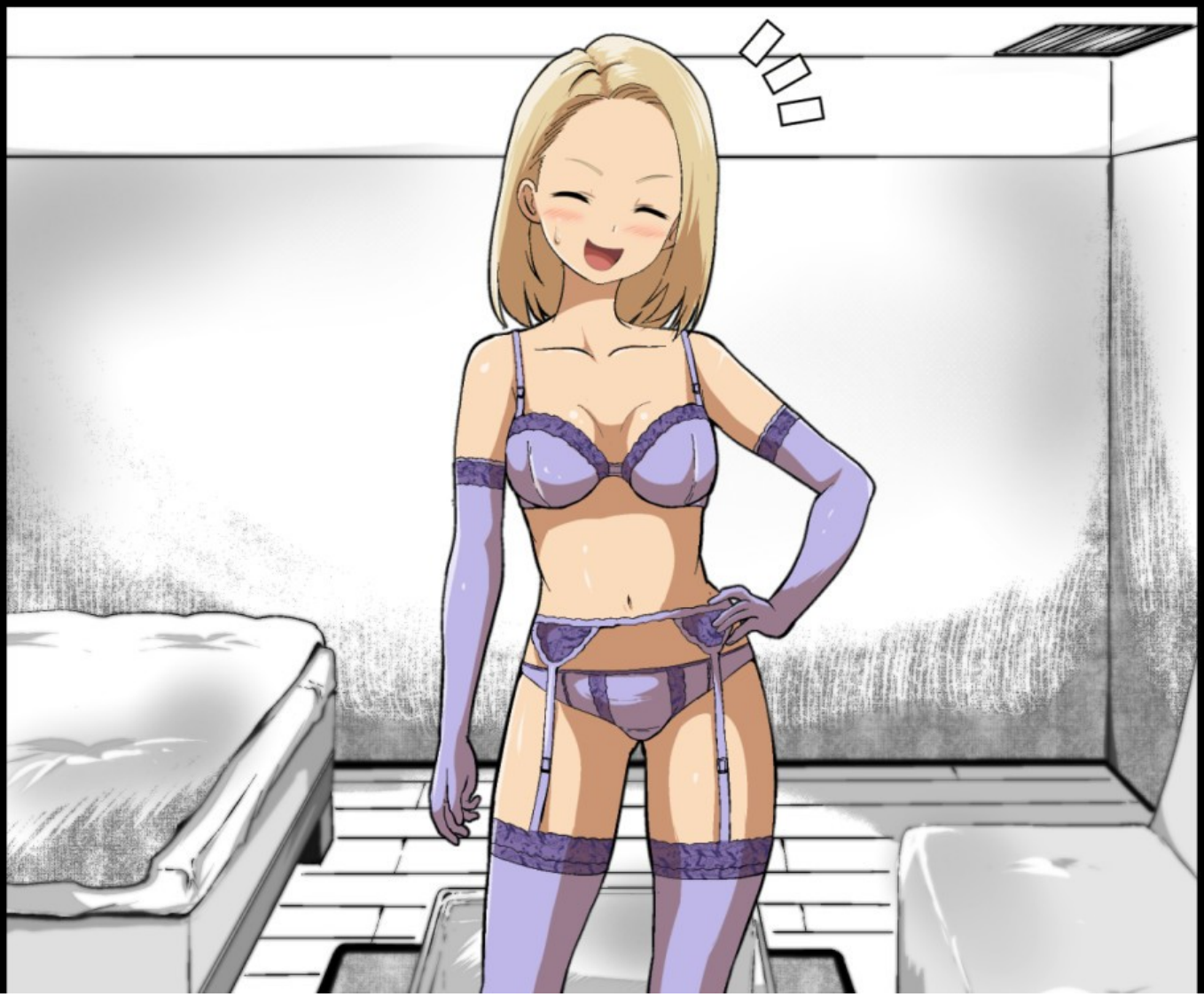


璃音奈に有無も言わせずさっさとごっこプレイを始める吉田。

璃音奈は初めこそ本気で赤ちゃんになり切っている吉田を見てはケラケラ笑っていたが、おふざけ感を出しつつも「はーい璃音奈ママでちゅよ～(笑)」など一応付き合ってはくれていた。

数十分そのプレイを続ける二人。

璃音奈は段々とごっこプレイに夢中になってきたのか、しっかりママ役を演じるようになっていった。



璃音奈「ママのおっぱいおいちい？」
吉田「うん！おいしー！！璃音奈ママのおっぱいだーい好き！」
「璃音奈ママもぼくのちんちん好き？」
璃音奈「だーい好き♪まーくん(吉田誠)のカチカチに硬くってシャキーンって伸びてるちんちん世界一カッコいいよ♪」
吉田「あ…璃音奈ママ！イく！ちんちんふわわ～ってなる！！」
璃音奈「いいよ♪まーくんがカッコよくまっしろちんちんビーム出すとこママに見せて♪」
吉田「あっあっ……ママ……！璃音奈ママー！」

璃音奈「ママが見守ってるからね！頑張れまーくん！強い子まーくん！」

吉田「見ててママ！まーくんのちんちんビーム!!……～～!!」

璃音奈「きゃ～～～♪かっこいい～～♪まーくん素敵よ！私のまーくん♡」

吉田がイった後、ごっこプレイからリアルに戻ってきた感覚に急に小恥ずかしさを感じたのか璃音奈は「キモいｗ」「やばｗｗ」などと、とにかく何かやり取りしないと間が持たないといった体で誤魔化していた。

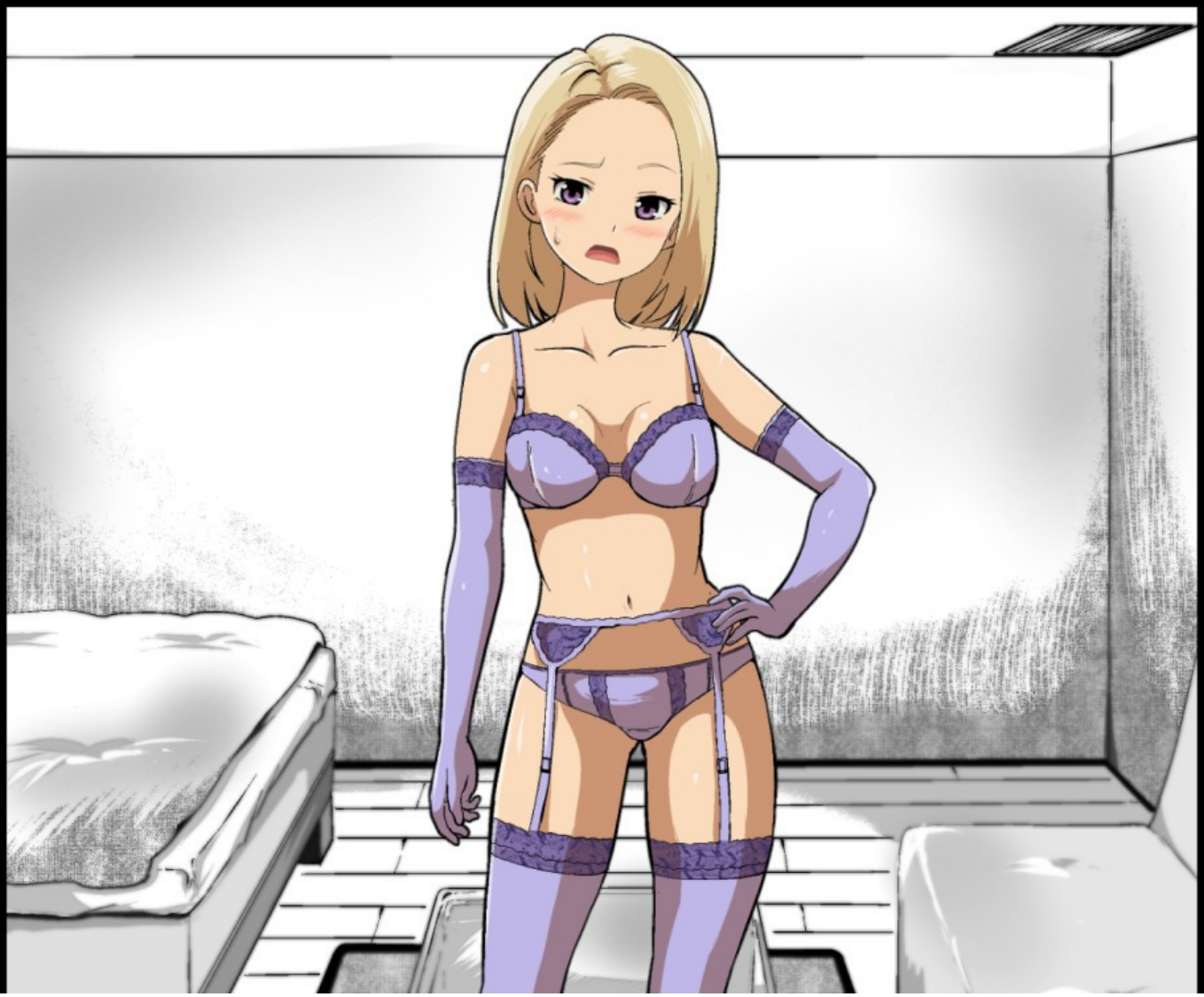
当の吉田は怯むことなく次のプレイを要求する。

璃音奈「また何かごっこプレイすんの！？」

吉田「こういうのは一度間を置くとピタッと止まるからな、やるぞ璃音奈！次は――」

璃音奈「あぁ～、もうっ！」

渋々感を出しつつも結局付き合ってくれる璃音奈。



吉田「あぁ！璃音奈お姉ちゃん！！駄目だよ姉弟でこんなこと…！」

璃音奈「…うっさい！あんただってあたしのこと好きだったんでしょ！」

吉田「お姉ちゃん！璃音奈お姉ちゃん…!!」

璃音奈「…ねえ、お姉ちゃんプレイってママプレイと何が違うの？」

吉田「全然違うだろ！ママプレイはとにかくすべてを包み込んでくれる甘々プレイ！お姉ちゃんプレイは強気にリードしてくれるグイグイプレイだ」

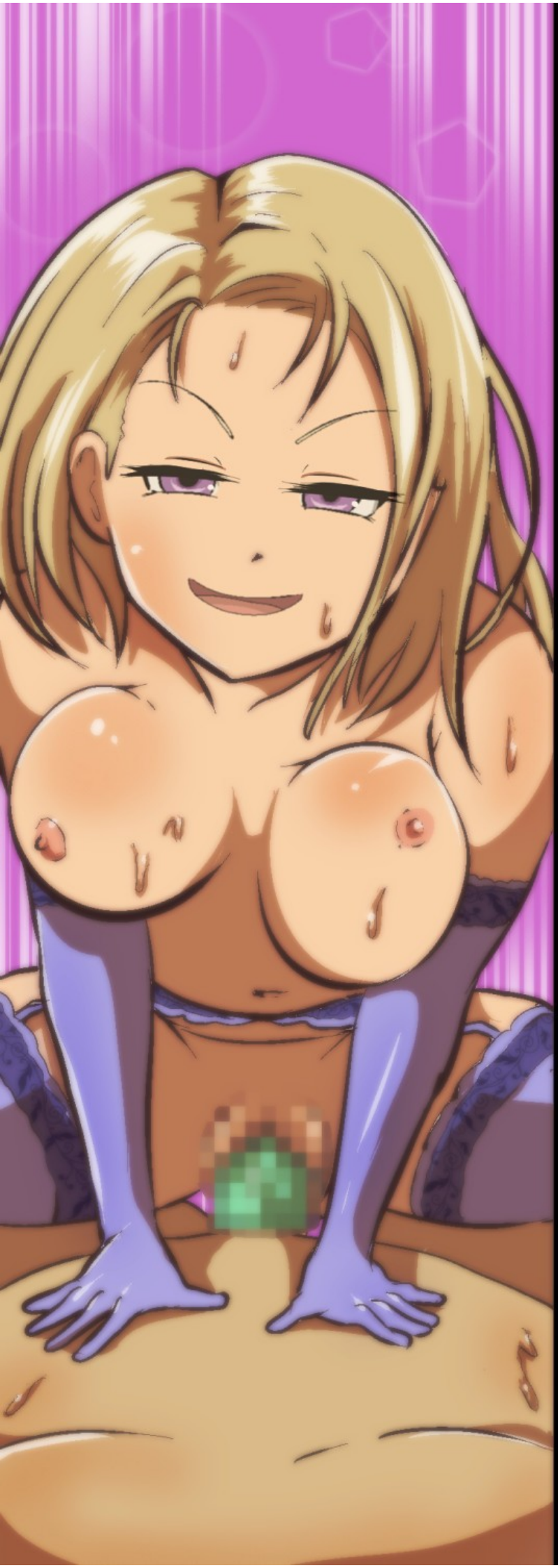
璃音奈「ていうかなんであたしがおっさんを襲ってる形なんだよ」

吉田「…璃音奈お姉ちゃん！お姉ちゃんのことは大好きだけどやっぱりこんなことしちゃ駄目だよ～！！」

璃音奈「おい」

吉田「璃音奈お姉ちゃ～ん！！」

璃音奈「…」



璃音奈「…あんた昔はお姉ちゃんと結婚するんだ～って言ってたじゃない？」

「あれは嘘だったの？お姉ちゃんは本気だよ？結婚しよ？♪」

吉田「ぁあ！璃音奈お姉ちゃんダメ！イっちゃうよぉ！！」

璃音奈「あんたはず～っとお姉ちゃんの弟だからね♪結婚してず～っと一緒にいようね♪」

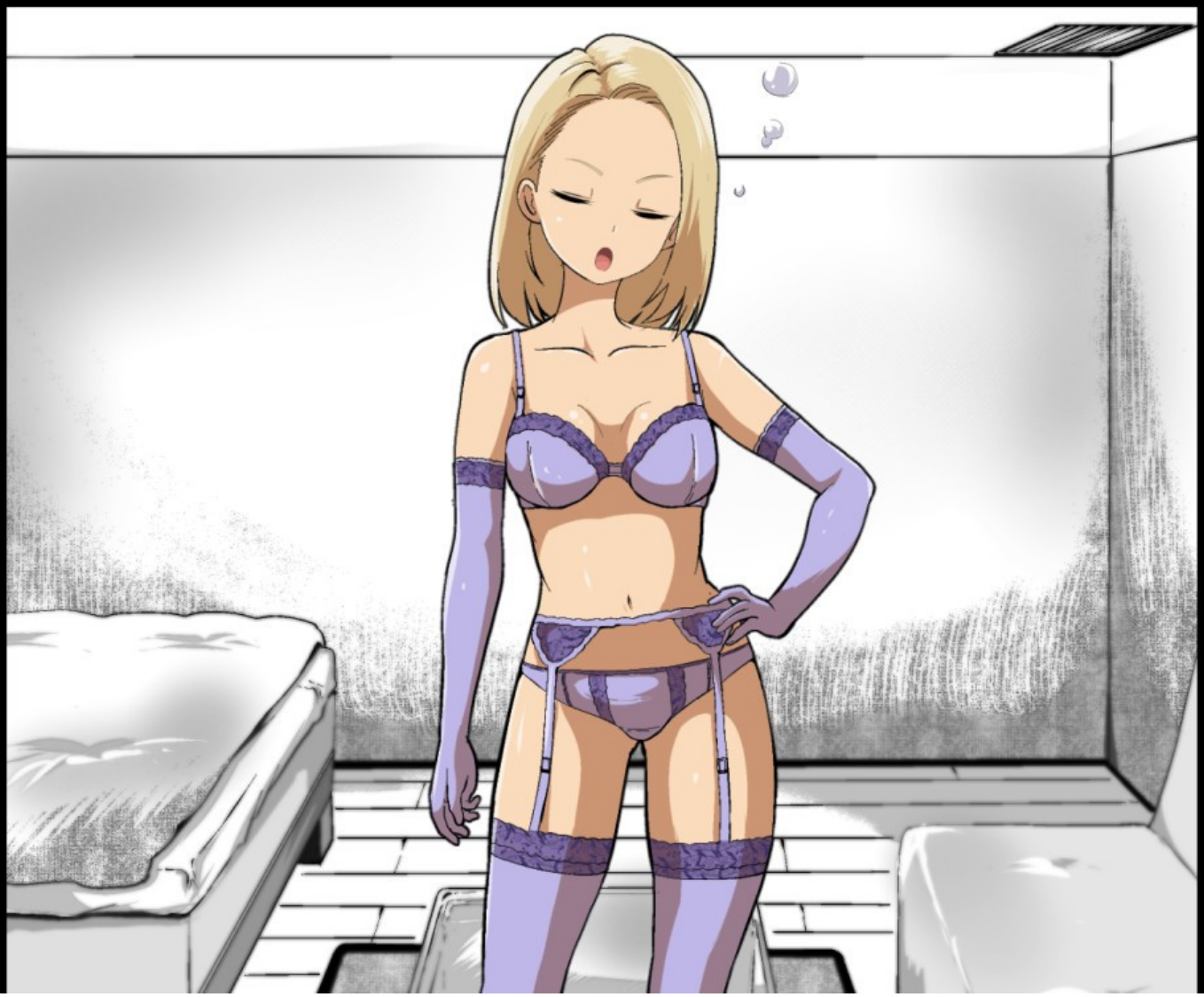
吉田「璃音奈お姉ちゃ～～ん♪」

この日の夜、いつもの様に一緒のベッドで横になった二人。
なんだかんだ割と楽しかったと吉田に伝える璃音奈。
その一言が吉田に火をつけてしまいもう1回戦だけやった。

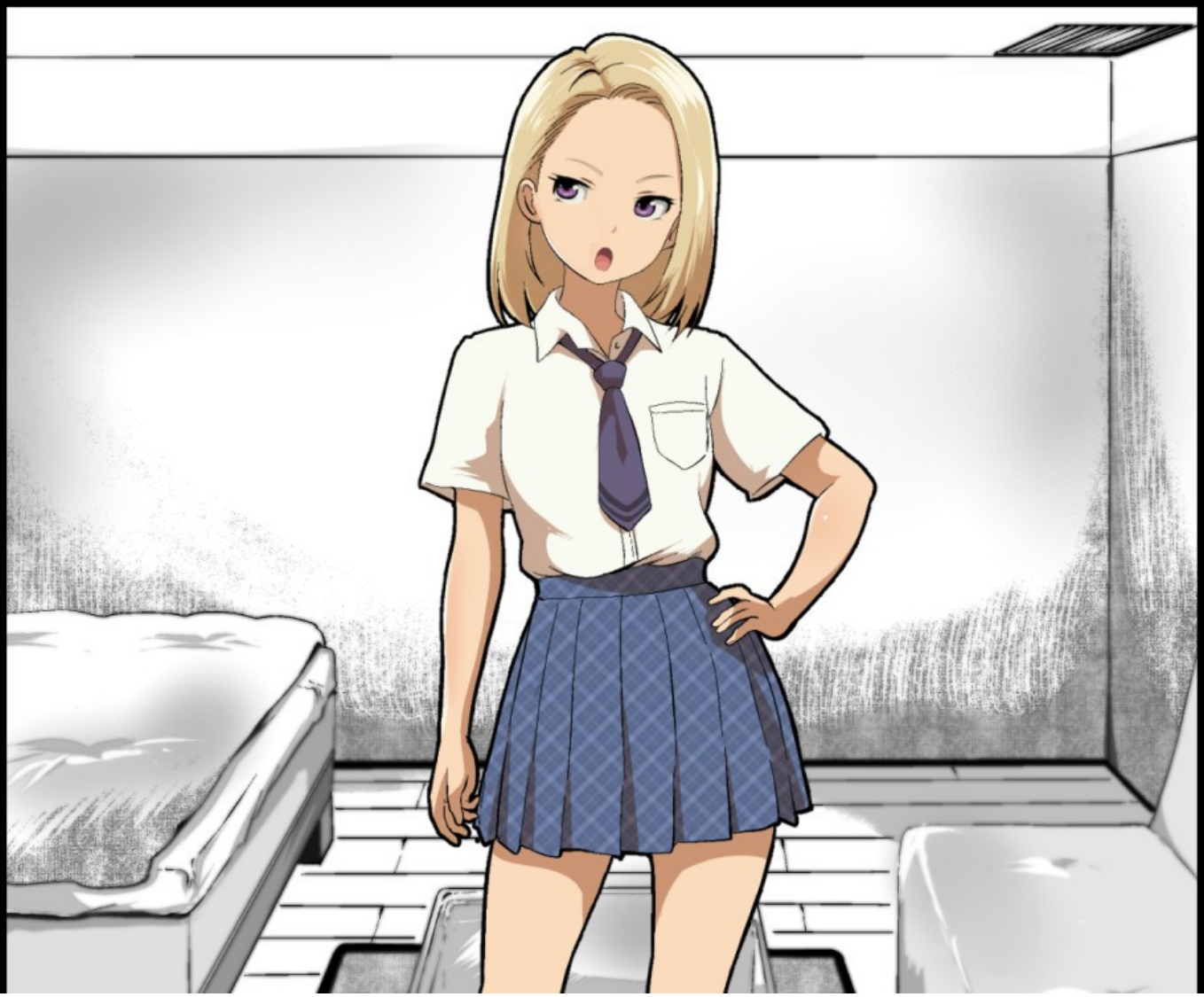
朝、ほぼ同時に起床した二人は歯を磨いて朝食をとって何でもないような会話を交わす。そのまま昼の時間帯になり昼の部の食事も済ませる。

閉鎖空間に閉じ込められた状態でも一連の生活リズムはなるべく崩さないようにする。（昼前、はたまた朝からおっぱじめる日もあるが）

その日もするつもりではあったが、璃音奈が「やるなら昼過ぎにしよう」と言った。



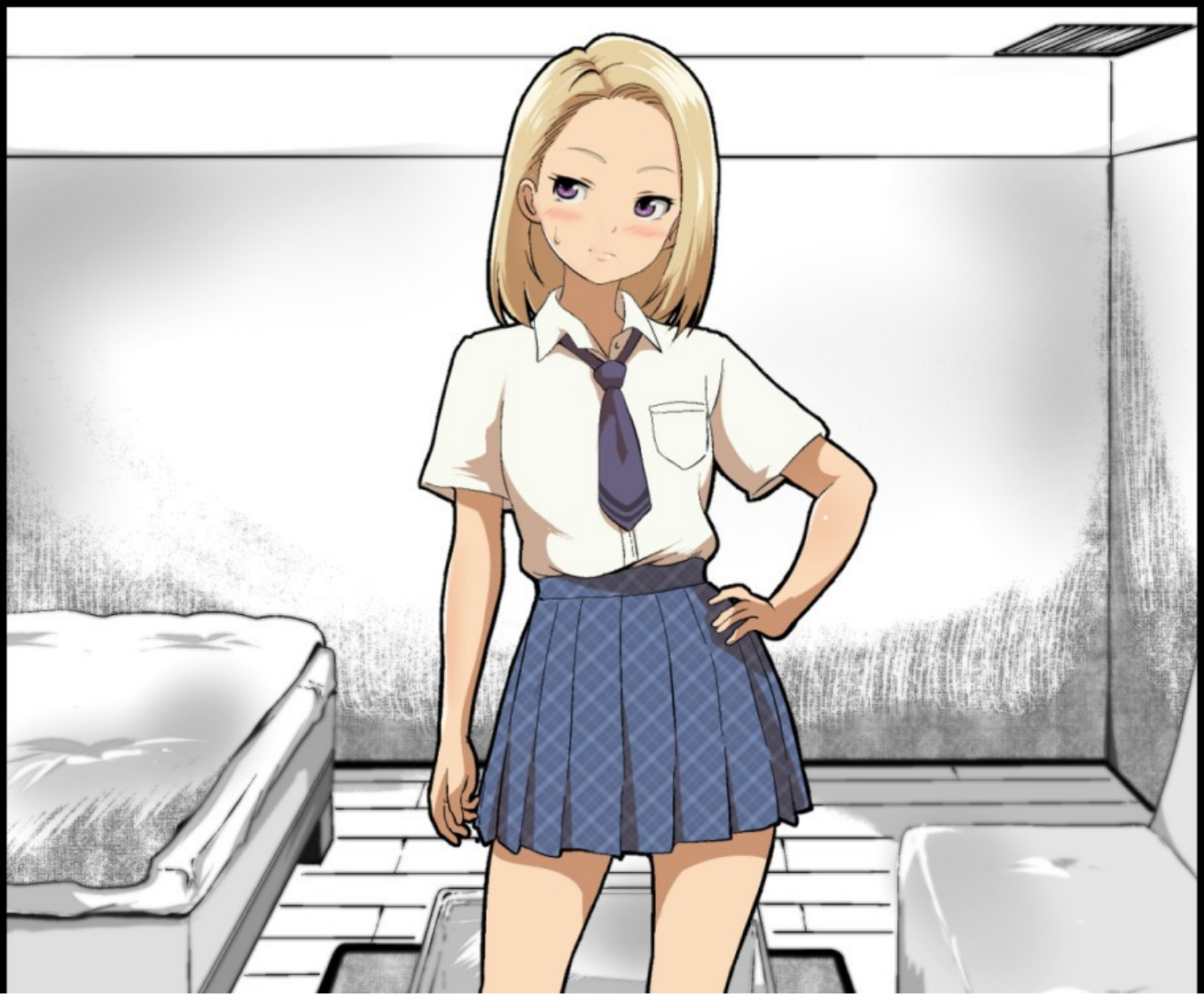
璃音奈「あのさ」
吉田「うん」
璃音奈「おっさんのリクエストしたごっこプレイに付き合ってやった訳じゃん」
吉田「ああ、ありがとな」
璃音奈「あんな変態プレイ要求してストレートにお礼言われても…(笑)」
「えーっとね、だからその」
珍しくモゴモゴと言い淀んでいる璃音奈。
璃音奈「あたしさ、結構前だけど…昔はパパっ子だったというか」
「割とファザコンだったって言ったことあるじゃん?」
吉田「あぁ～、言ってたなそういえば」



璃音奈「…」

吉田「…」

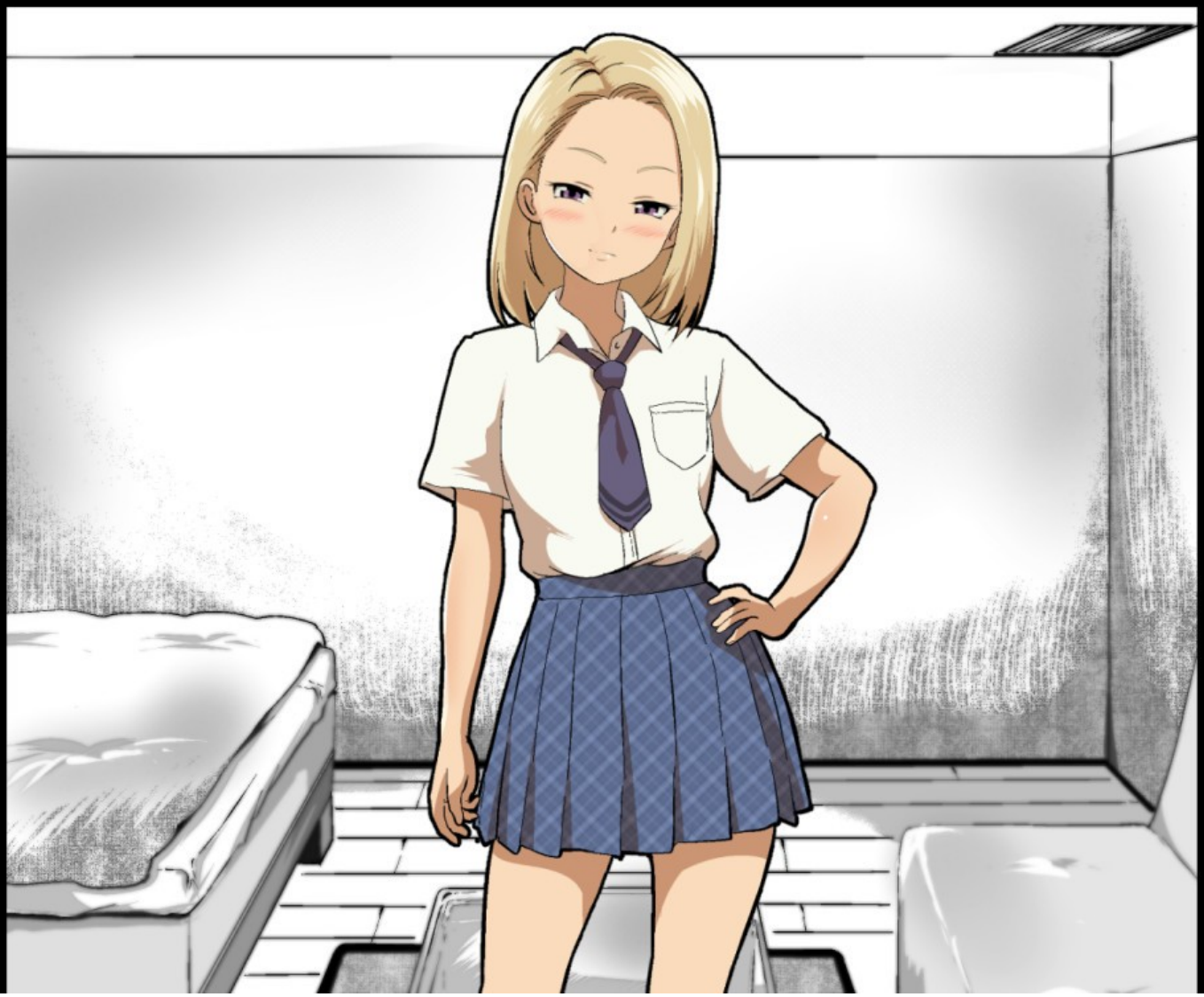
二人「……」



昼の時間帯までは脱出できない閉鎖空間という事を除けば、なんということもない生活を送っていた二人。

親子間の年の差もある男女だが、そのままの意味で父親と娘とも捉えられただろう。

ただ歯を磨いている父と娘。ただ食事を摂っている父と娘。ただ何でもないような会話を交わす父と娘。



ただセックスをしている父と娘。

璃音奈「パパ！パパぁ!!」

吉田「璃音奈！パパのちんこ気持ちいいか!!」

璃音奈「うん！パパの長～いちんちん気持ちいい！！」

吉田「パパは大好きな璃音奈とセックスしてるときが一番幸せだぞ！！」

璃音奈「璃音奈もぉ！大好きなパパとセックスしてる時が一番好きぃ！！！」

吉田「こんなに可愛い女の子がパパの娘なんて…、きっといつか好きな男の子もできて…くっ！」

璃音奈「何言ってるのパパ…？璃音奈が昔パパと結婚したいって言ったの覚えてる？」

「璃音奈は今でもパパと結婚したいって思ってるよ！」

「ううん、する！絶対するんだもん!!」

「パパ以上にカッコイイ人なんていないもん！」

「世界一カッコイイパパと結婚するのはわたしだもん！！」

吉田「璃音奈…本当はパパも璃音奈が生まれた瞬間から結婚したいと思ってたんだ！」

璃音奈「私も！生まれた瞬間からパパと結婚したいって思ってた！！」

「嬉しい…！ずっとずぅーっとパパと同じ気持ちだったなんて…！パパと、パパと結婚出きる！！」

吉田「するぞ！絶対にするぞ！！」

吉田「結婚して1日も欠かさず毎日ラブラブセックスするぞ！！」

璃音奈「する！絶対にする！！パパと世界一のラブラブ夫婦になるぅ！！」

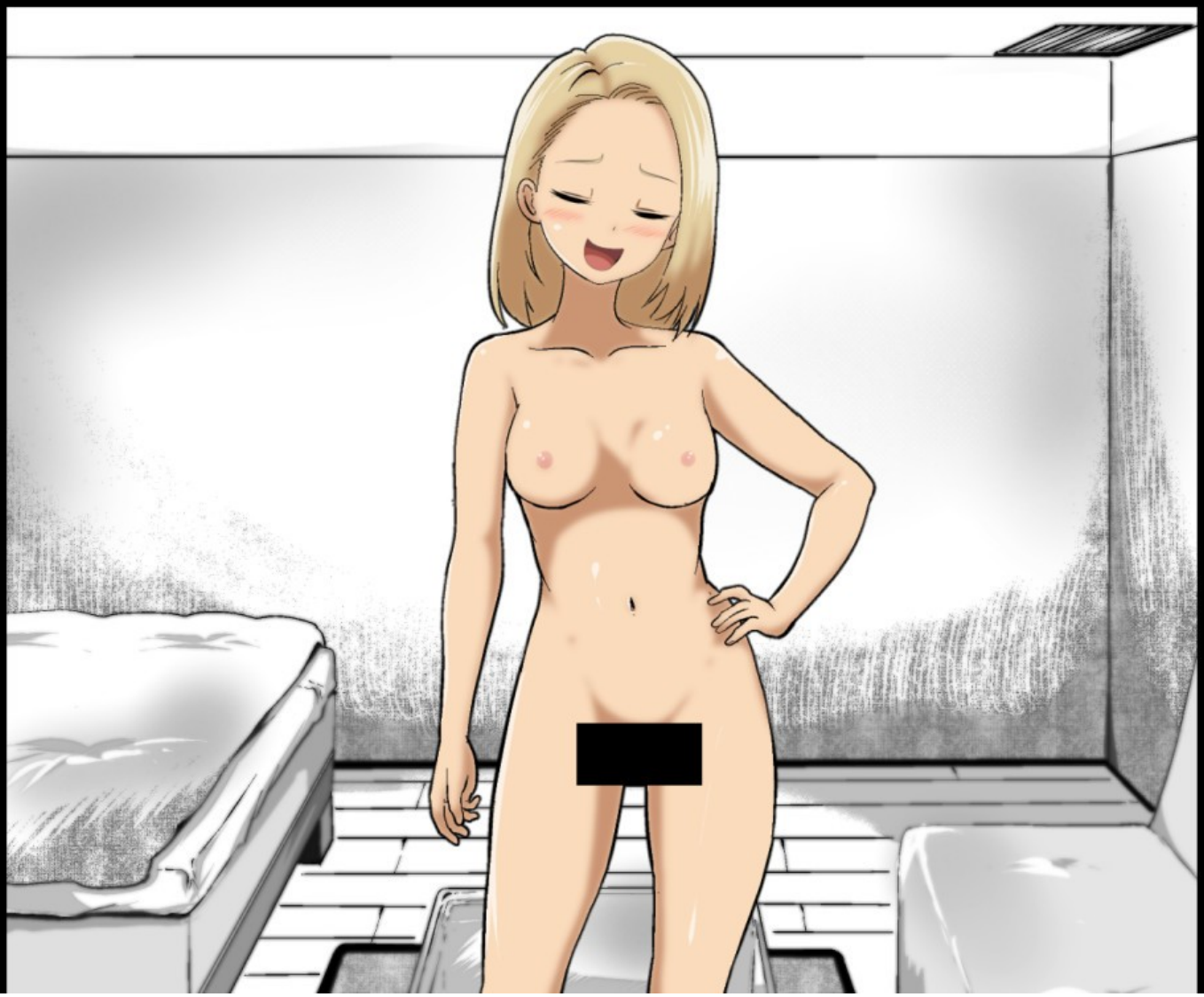
吉田「～～～～～！！」

璃音奈「～～～～～！！」

二人「♡♡♡」

吉田「ハァハァ…」

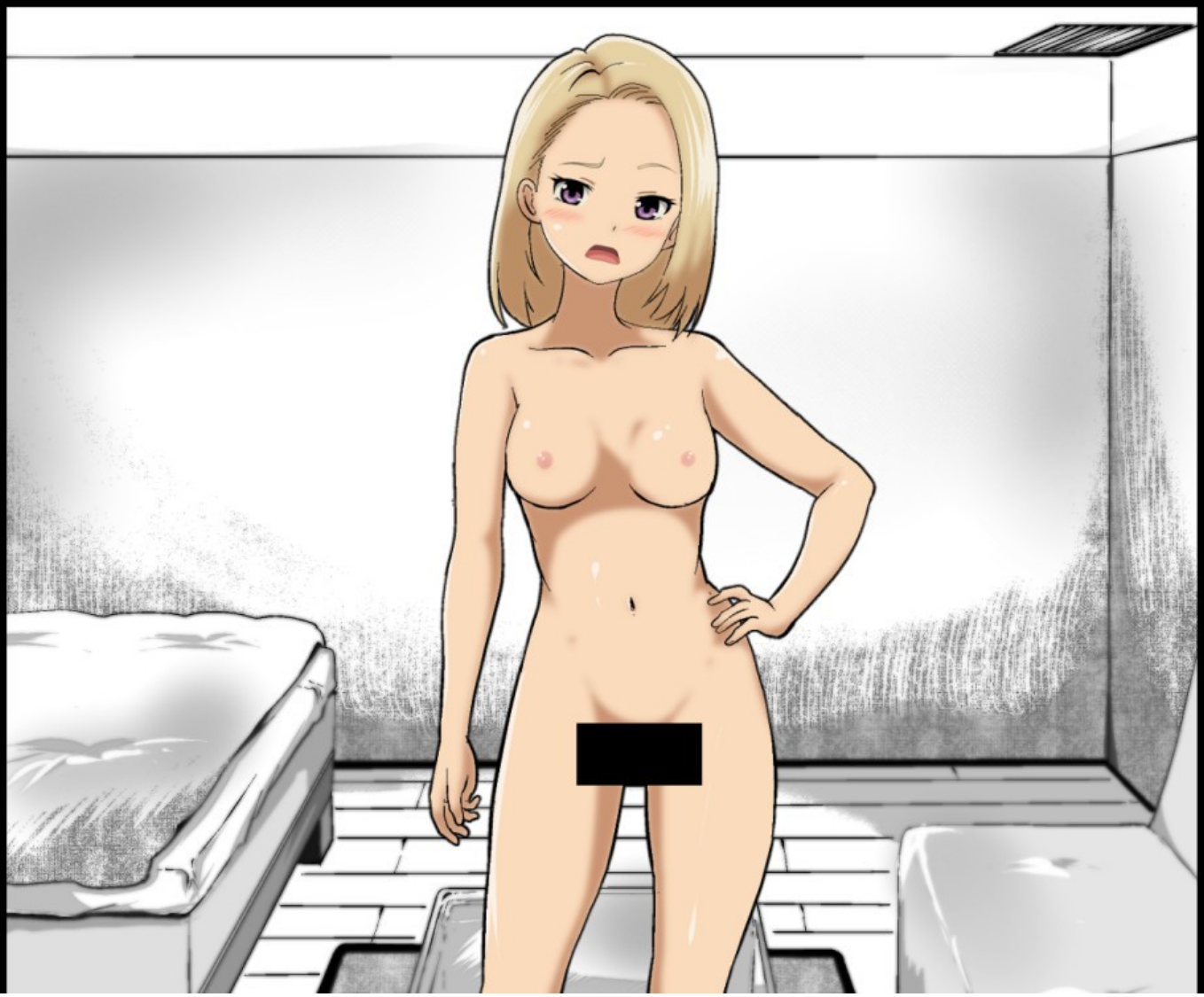
璃音奈「はぁ…はぁ…♪」



吉田「…璃音奈、口でキレイにしてくれ」

璃音奈「…あのさ」

「…もうちょい余韻とか」



吉田「コラッ璃音奈！」

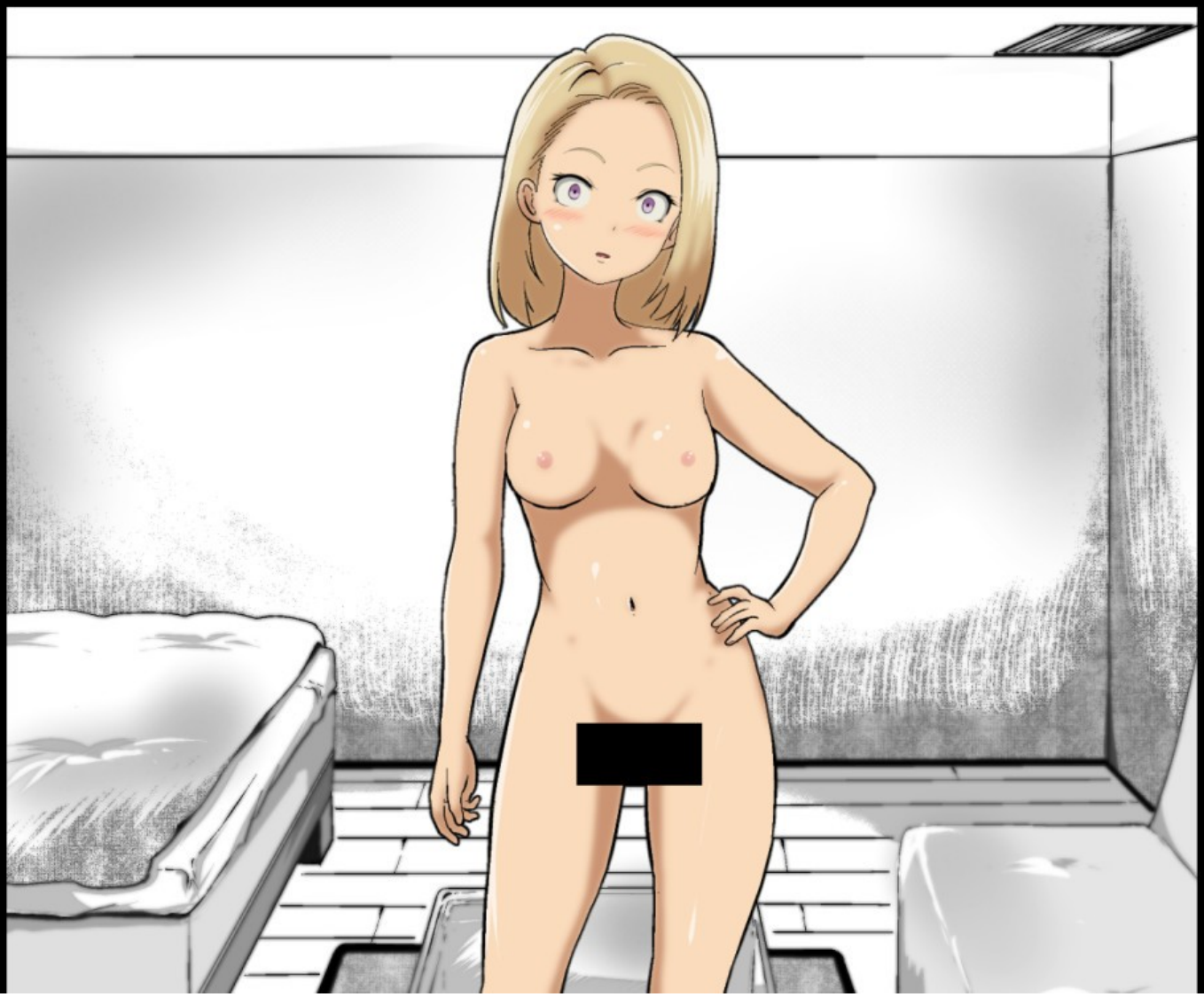
璃音奈「え…」

吉田「…パパに向かってその口のきき方は何だ！」

璃音奈「あっ…」

吉田「そんな娘に育てた覚えはないぞ！！」

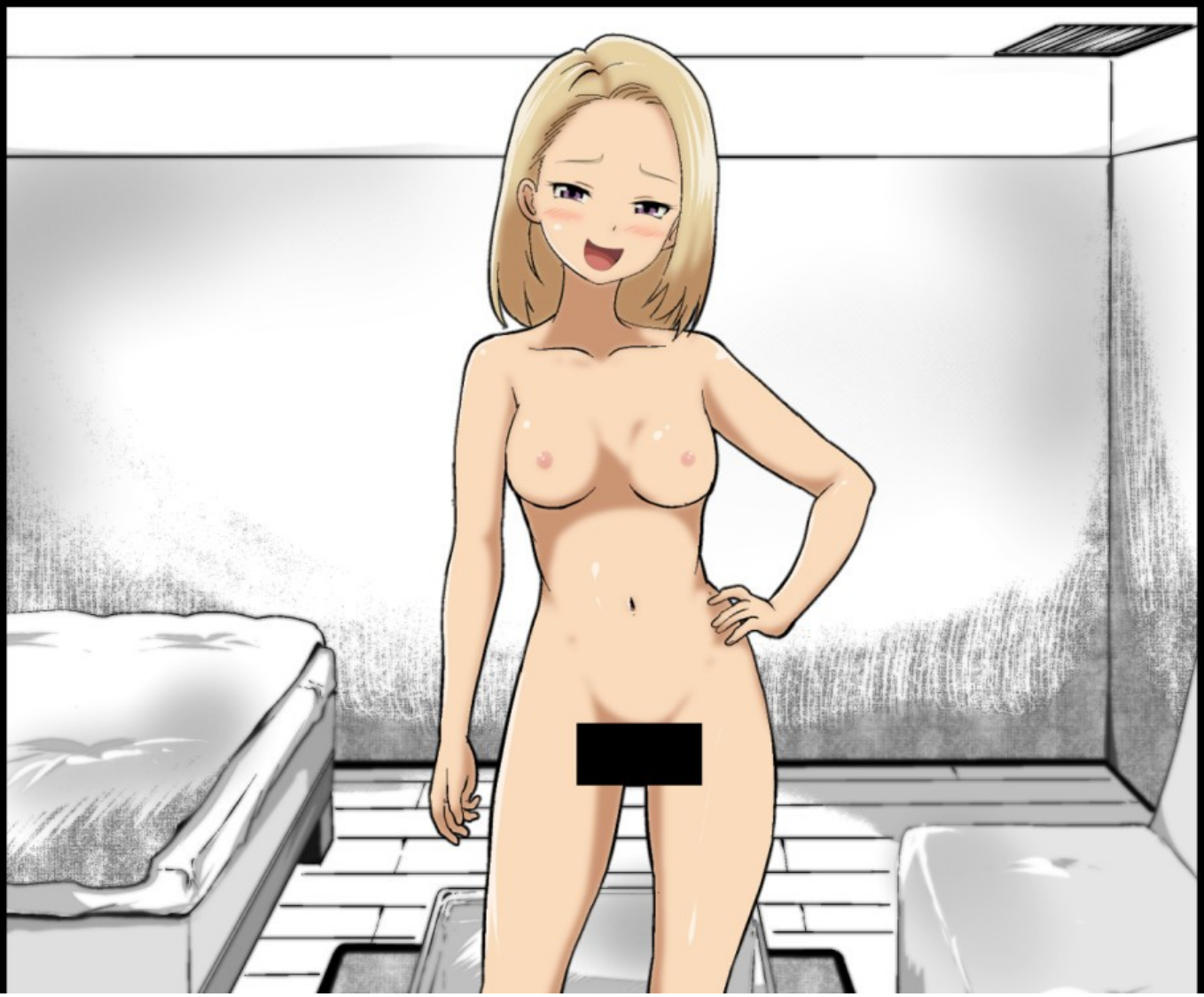
璃音奈「…」



璃音奈「…ごめんなさい…パパ♡」

吉田「…璃音奈、こっちに来なさい」

璃音奈「はい…パパ♡」



璃音奈「んっ！んぐっ…！おっ…！！」
吉田「ふんっ！ふんっ！ふんっ！！」
璃音奈「おご…お…お…！！！」
吉田「璃音奈の口は悪い言葉を言うためにあるんじゃない！」
「パパのちんちんを咥えるためにあるんだぞ！分かったか！」
璃音奈「ん…！ぐぅ…！…ほぁい…♡」

吉田「璃音奈はパパの大好きな恋人であり、娘であり、お嫁さんであり」

「――――パパのトイレなんだよ」

璃音奈「～～～～♡♡♡！！」

吉田「璃音奈はパパ専用の世界一可愛いトイレだからね♡嬉しいかい？パパのトイレになれて？」

璃音奈「…♡♡♡ふれひぃ…い♡」

吉田「璃音奈…♡パパだけの可愛い璃音奈♡」

璃音奈（パ…パ…♡璃音奈のこと世界一可愛いトイレって…）

（うれしい♡）

吉田「…璃音奈、パパ一つ頼みごとがあるんだけど」

璃音奈「なぁに？♡」

吉田「…おしっこしてもいいかな？璃音奈のお口の中で」

璃音奈「…」

吉田「…璃音――」

璃音奈「バカッ!!」

璃音奈「バカッ！パパのばか！！」
「璃音奈はパパのトイレなんだよ!!おトイレでおしっこするのに何でそんなこと聞かなきゃいけないの！？」
「おトイレはいつでもおしっこしていいところなんだよ！」
吉田「…ああ、そうだったな。ごめんな璃音奈。変なこと言って」
璃音奈「璃音奈もパパにばかなんて言ってごめんなさい…」
吉田「よし、それじゃあ遠慮なくおトイレ璃音奈のお口におしっこするぞ」
璃音奈「うん♪璃音奈はパパ専用の、世界でパパだけが使っていいおトイレだからね♪」

吉田「……う」

璃音奈「……！」

吉田「……」

璃音奈「……」

璃音奈「……」

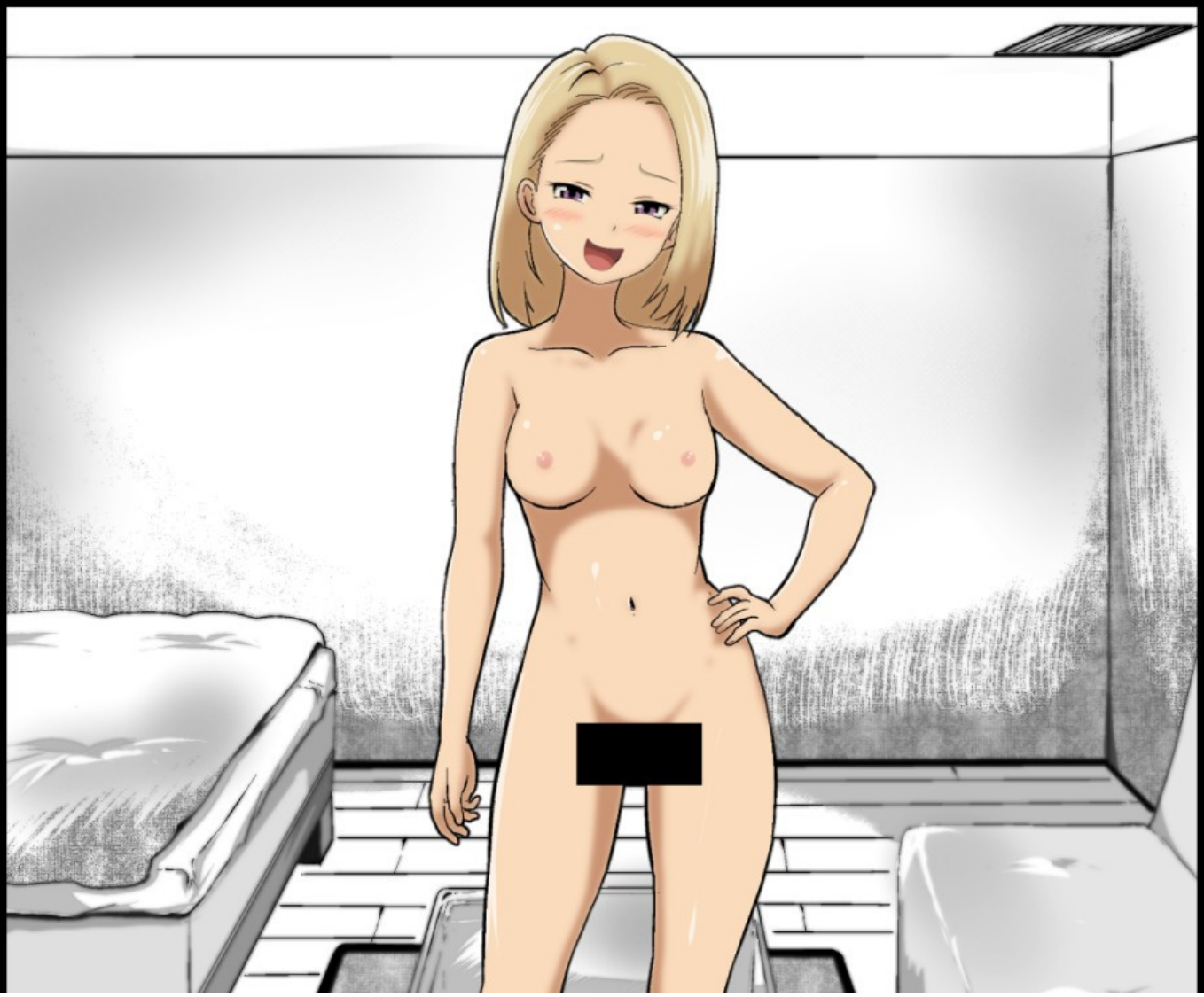
吉田「…ふう」

璃音奈「ふはぁ……」

吉田「璃音奈おトイレでするおしっこ、すっごく気持ちよかったよ♪ありがとう璃音奈♪」

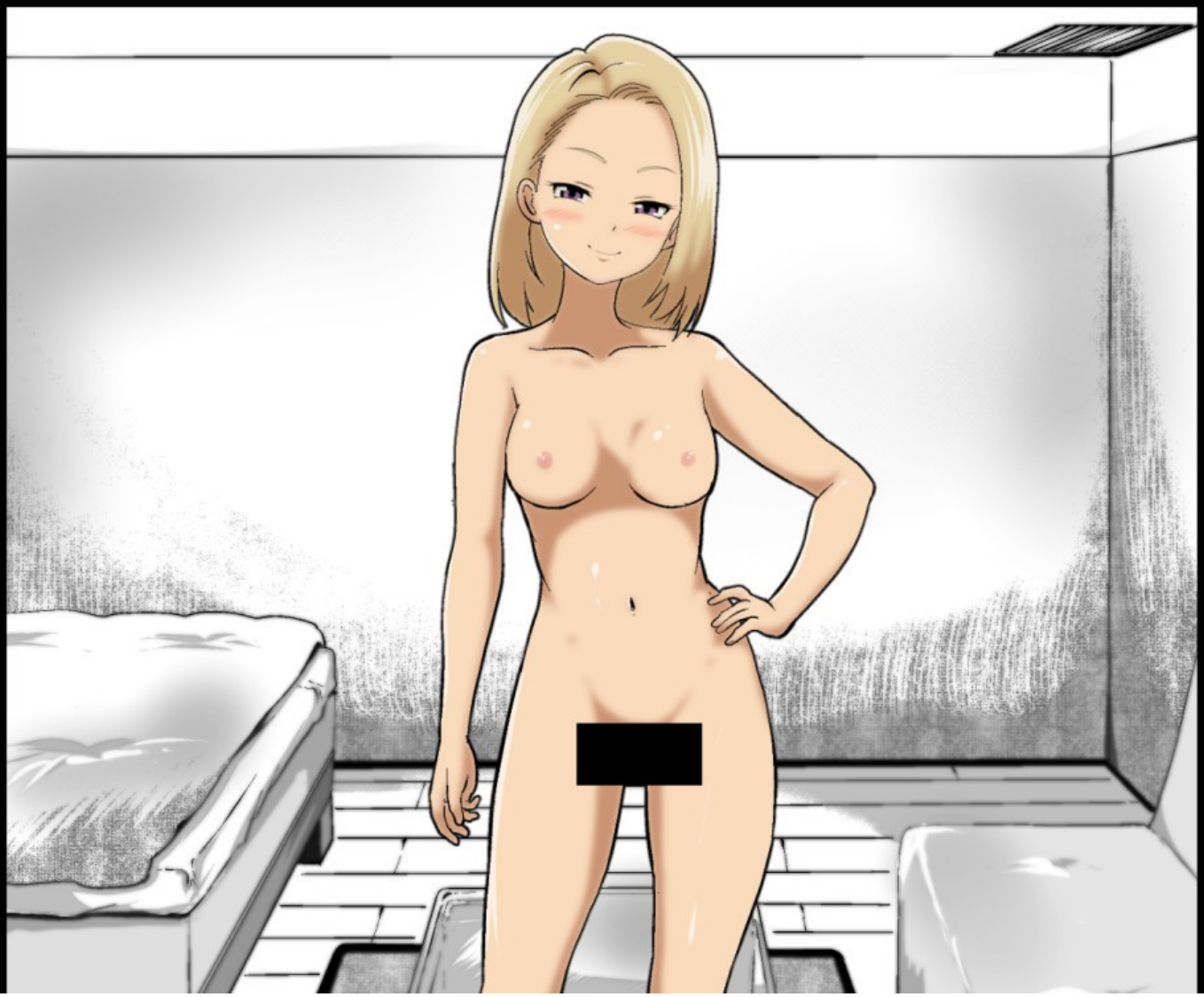
璃音奈「…もうっ！お礼なんてしなくていいのに！おトイレでおしっこするのは当然のことでしょ！」

「…でも、そんな優しいところも好き♡ありがとうパパ♡」

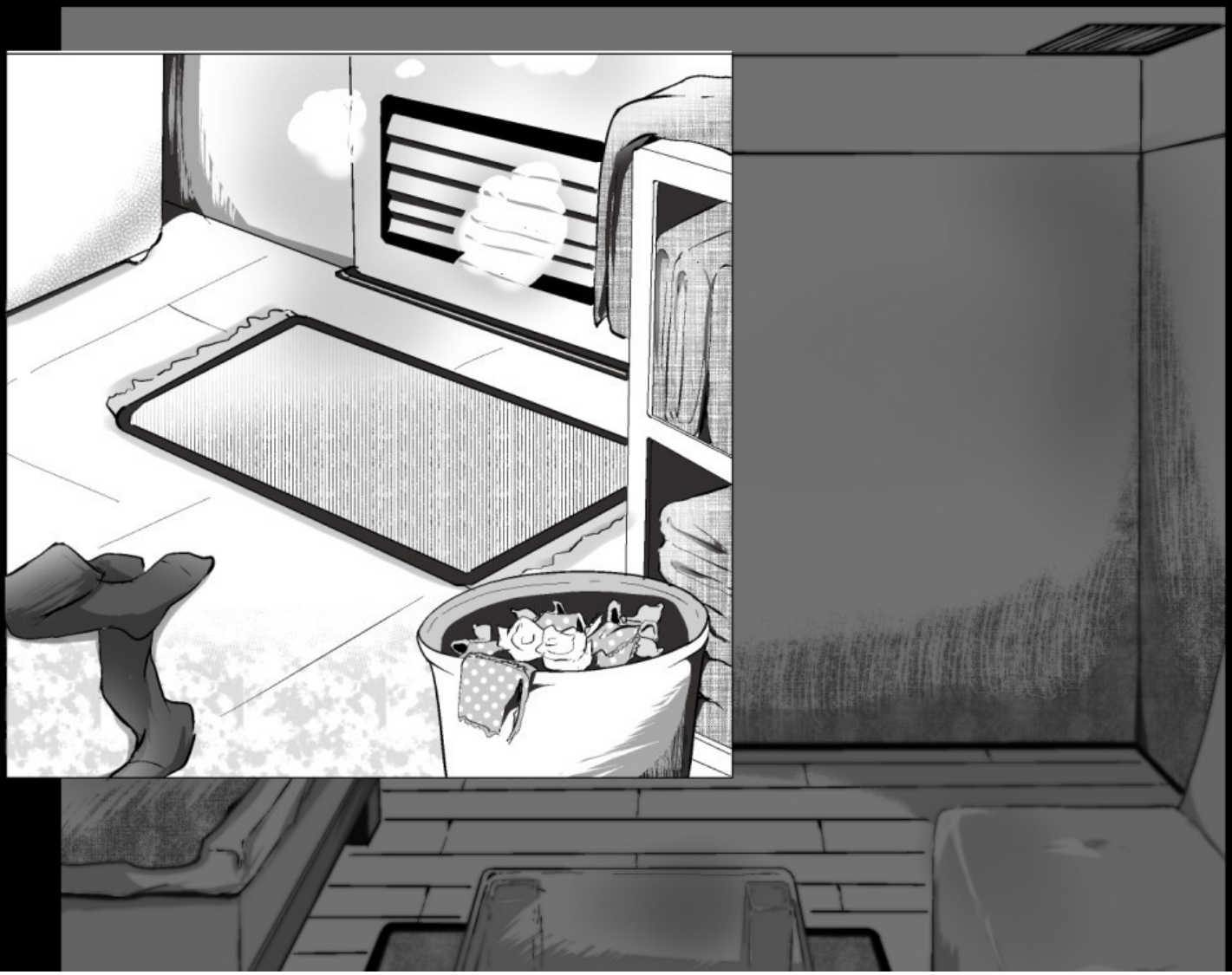


吉田「愛してるよ…璃音奈♡」

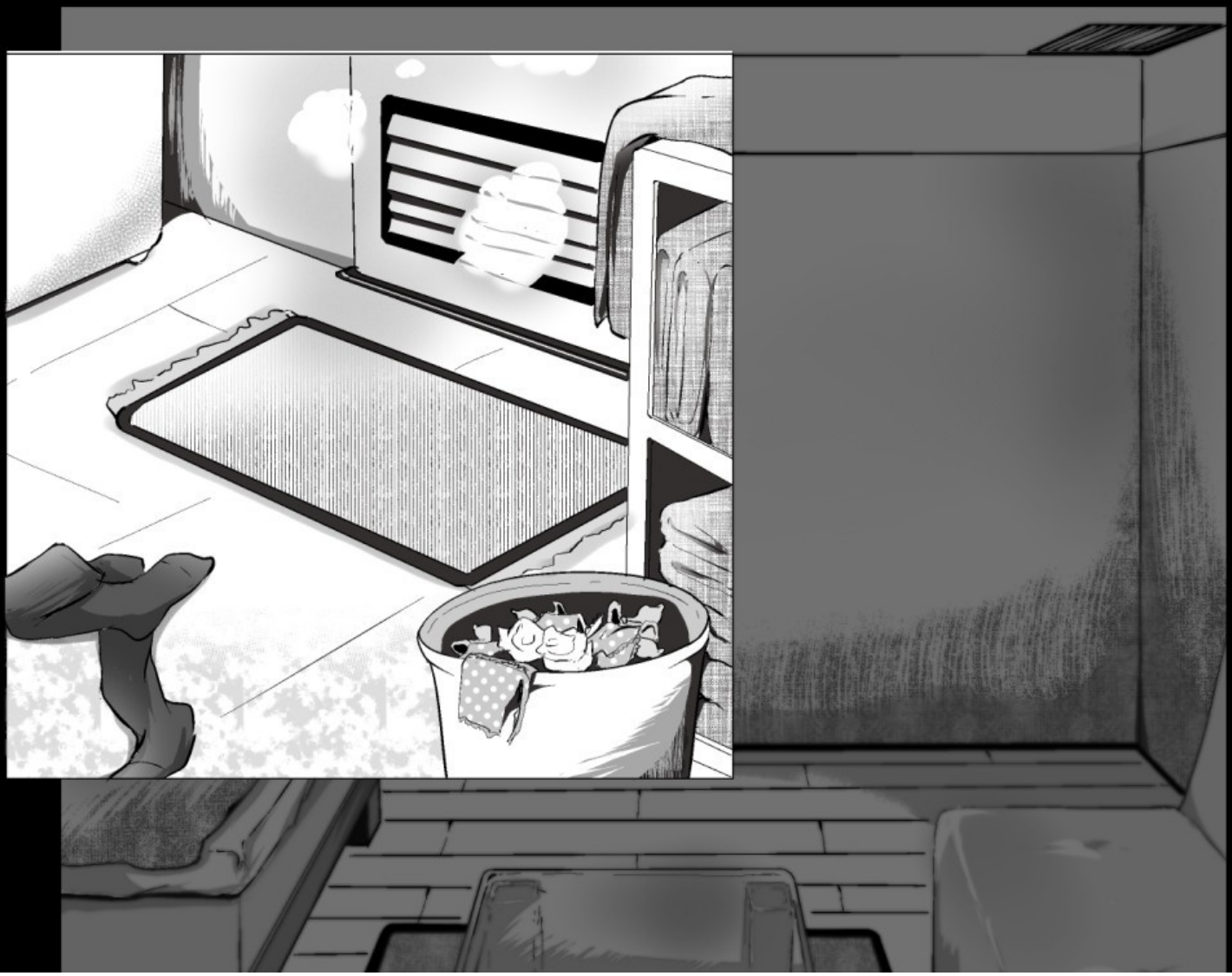
璃音奈「璃音奈も…愛してる♡パパ♡」



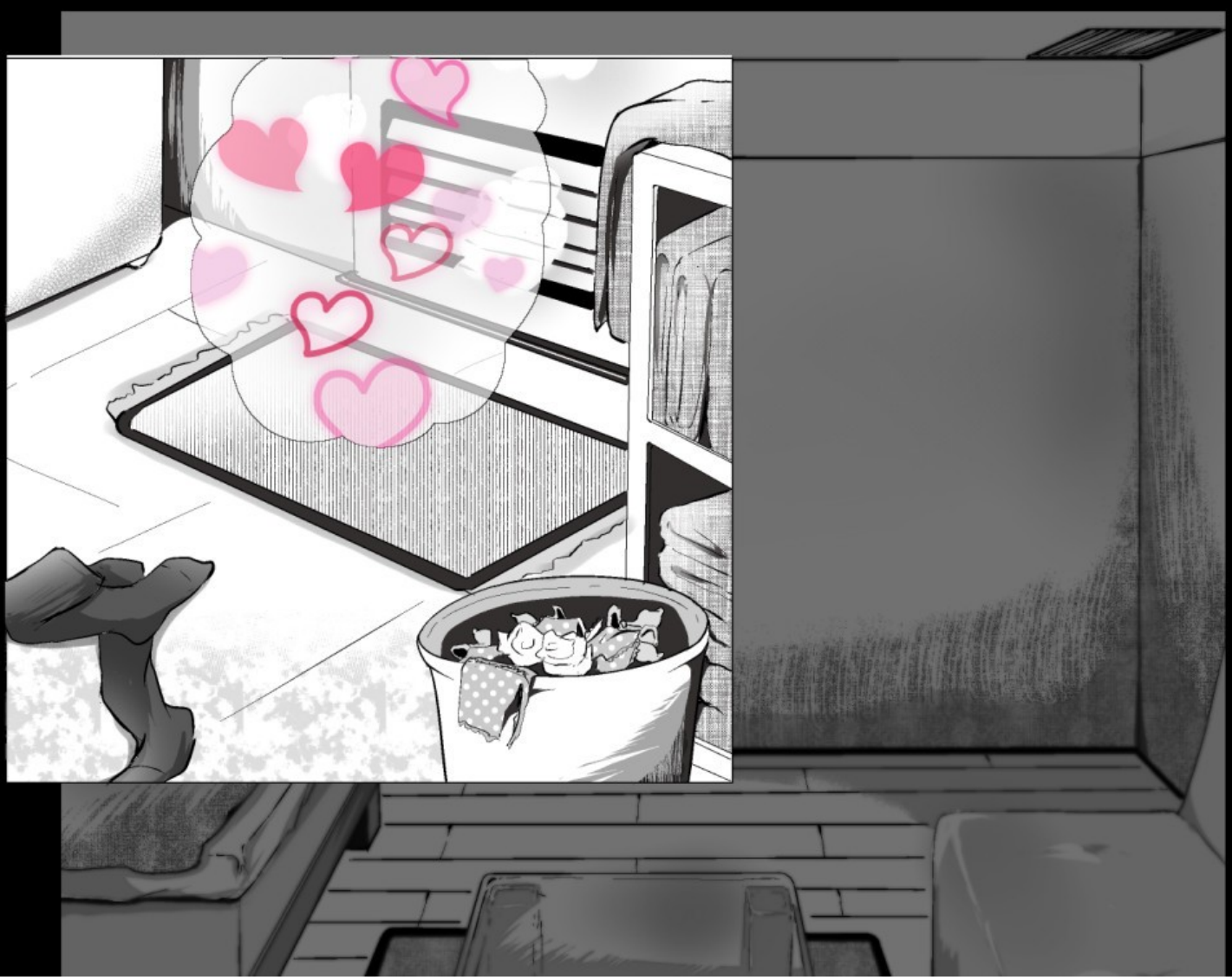
十数分の余韻。
二人はそのまま一緒に風呂に入った。
「璃音奈のパパ像ってあんななのか」
「違うわ！おっさんがああいうパパの感じで来たから…あたしはもっと普通のお父さんの感じを」
「というより最後の方パパプレイから外れてたろ」
「だからおっさんがそういう展開にするからだろ！！」
「…マジで飲んでたけどよかったのか？」
「…いやよかったも何も、もうやった後だし」
「急な要求だったのによく飲み切れたな」
「自分でもびっくりしてるし…（笑）」



「まあ流れというか勢い？」
「ぶっちゃけどうだった？」
「どう？」
「美味かったか？」
「キモっ！ふざけんなアホ！！バカ！！」
「こ、こら！パパに向かってなんだその口の聞き
「うるせえ！！」
「でも…正直楽しかったな…あんな燃えるとは思わなかった」
「まあ……うん…。…それと」
「？なんだ」
「…飲めなくもない。っていうか、割と普通に飲める感じ…的な」
「…また頼んでもいいってことか」
「あ、やっぱ今のナシ！」



「おっさん超嬉しそうな顔してたの腹立つ！」
「ｗｗｗ」
「…たくｗｗｗ…♡」
「…♡」
『…♡』
「なんだ？♡」
「は？別に？おっさんこそ何だよ♡」
「…♡♡」
「…♡♡♡」



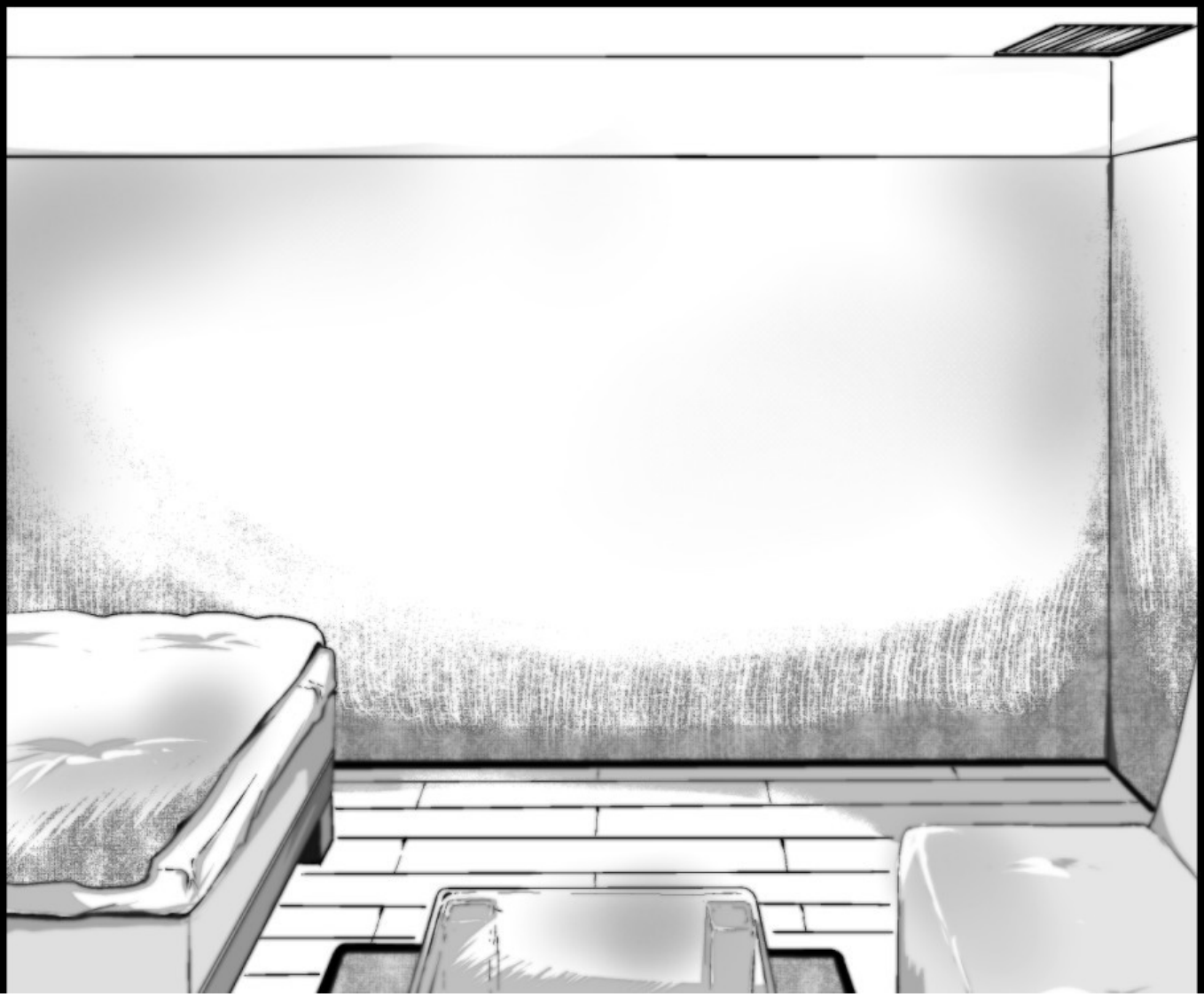
風呂から上がる二人。といっても先に出たのは吉田。

璃音奈は髪をドライヤーで乾かしている。

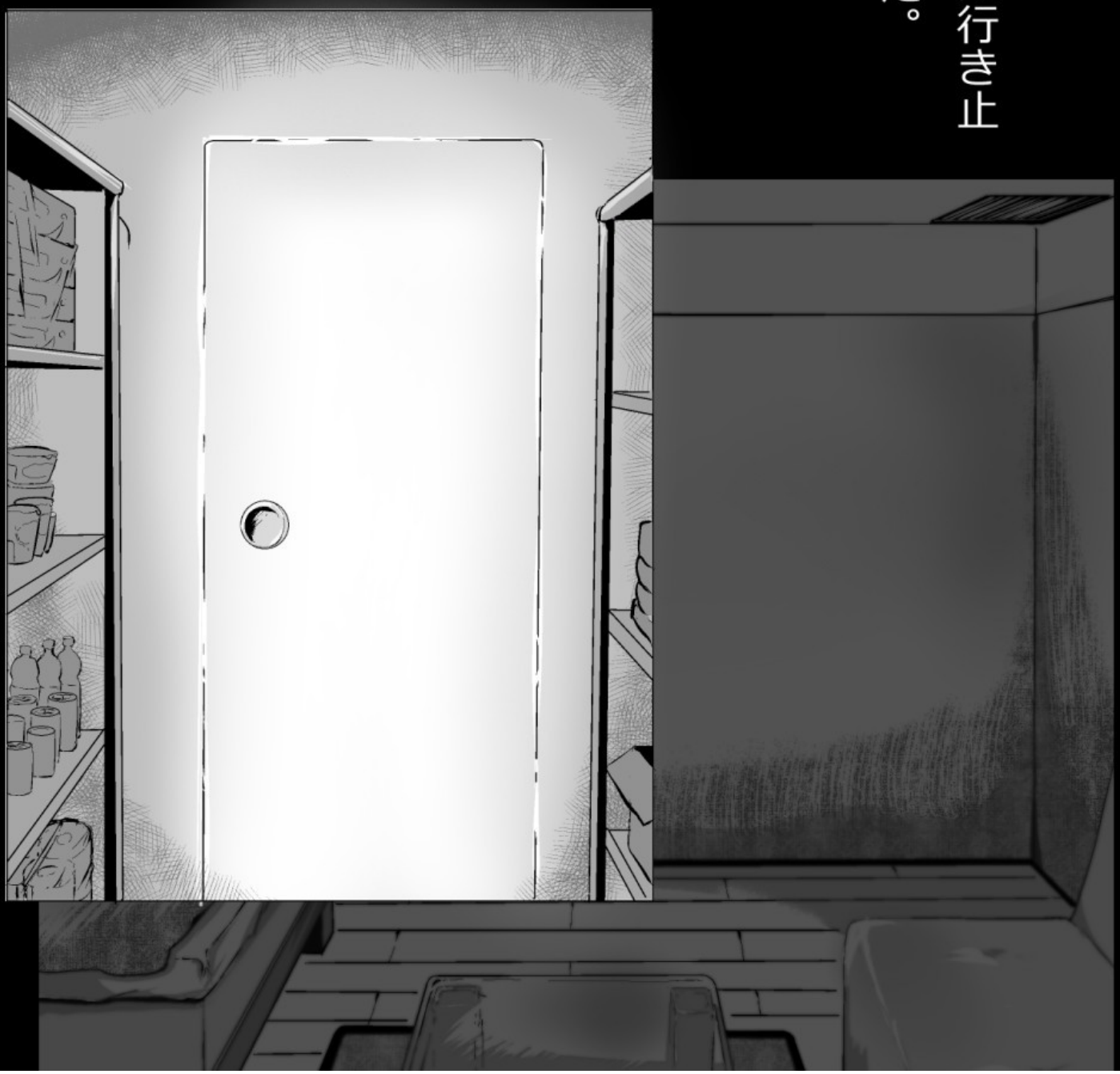
吉田は冷蔵庫から冷やした缶の飲み物を2本出す。

小腹も空いたし軽く何か作るか。

と思い、少し奥まった場所にある食料の常備された収納スペースへ向かう。



いつの間にか何もなかった行き止まりの場所に扉が表れていた。



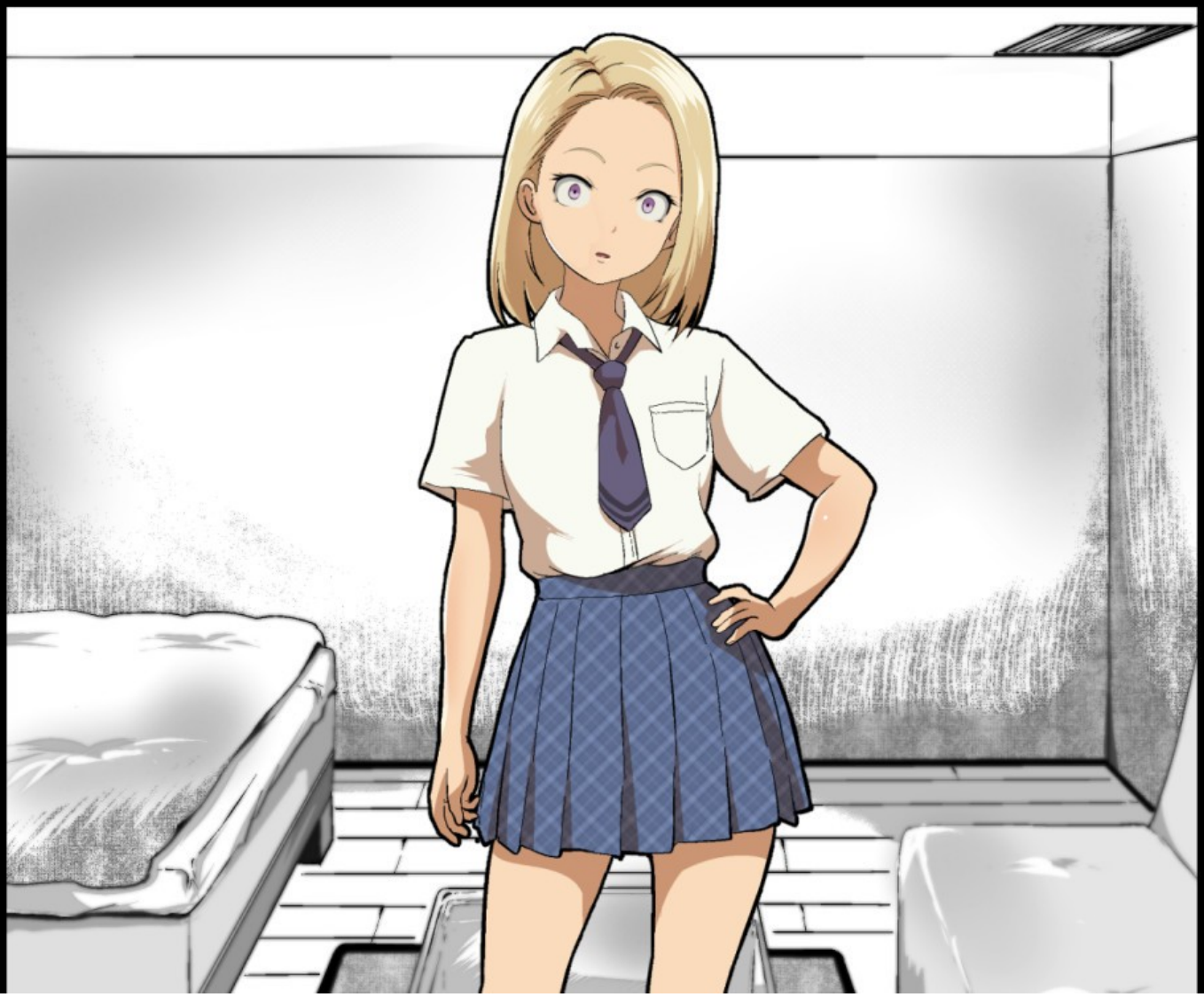
璃音奈を呼びに行く。まだ髪を乾かしている途中だったが扉のことを言ったらすぐについて来た。

いつの間にあったのかまったく気づかなかった二人。

確信は持てないが恐らくこれが脱出できる扉なのだろうと二人とも思った。

しかしすぐには飛びつかない二人。待ち望んだ脱出口ではあるが、はっきりいって少しの怖さがある。本当にこれで出られるのか。

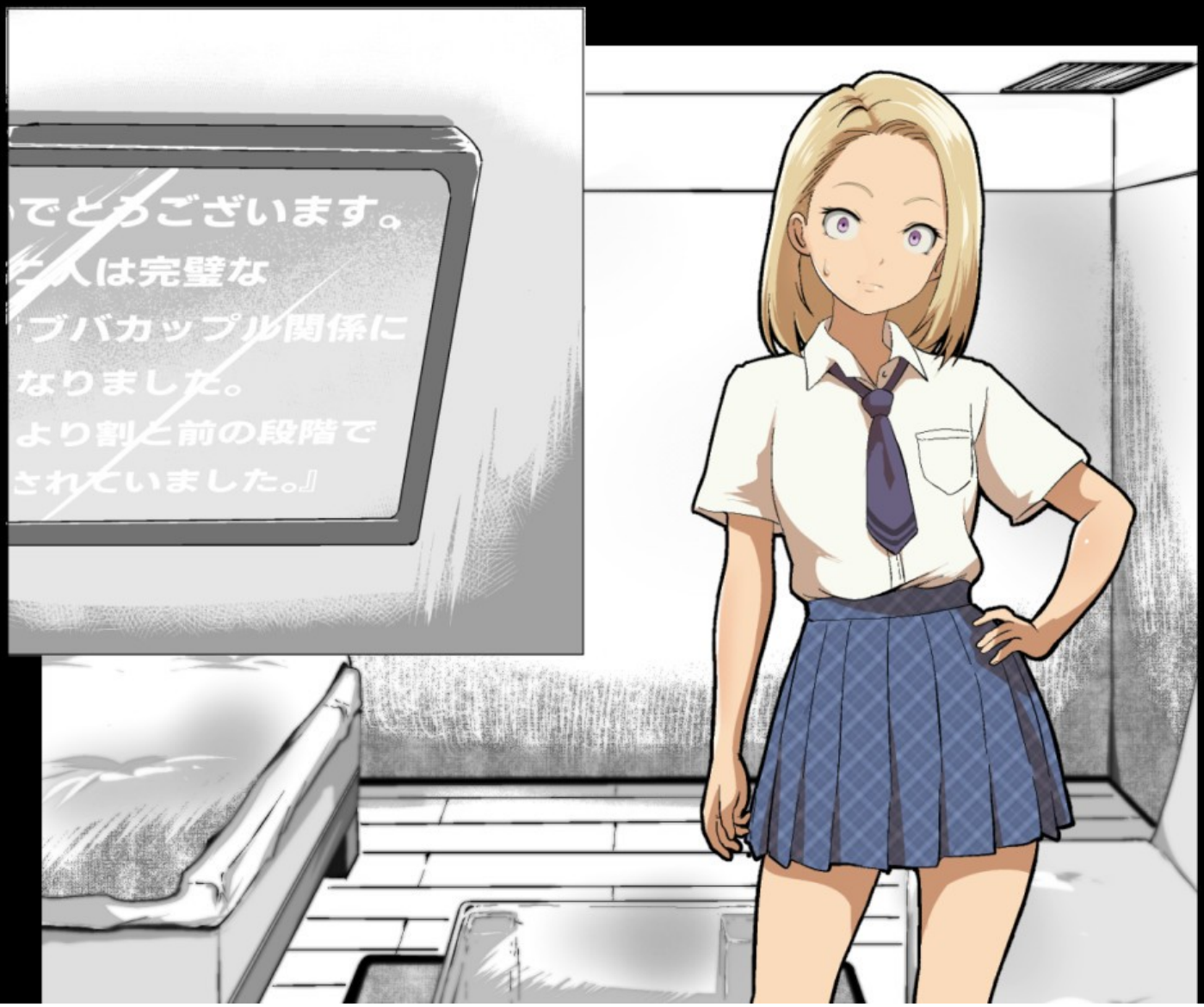
とりあえず心を落ち着かせるためにソファに座り用意しておいた冷たいジュースを飲む二人。



二人がそんな状態でいるとテレビモニターが久しぶりに点いてメッセージが表記される。

『おめでとうございます。二人は完璧なイチャラブバカップル関係になりました。と、いうより割と前の段階で達成されていました。』

急にフランクな感じになったのを気にしながら二人はモニターに映し出されるメッセージを目で追う。



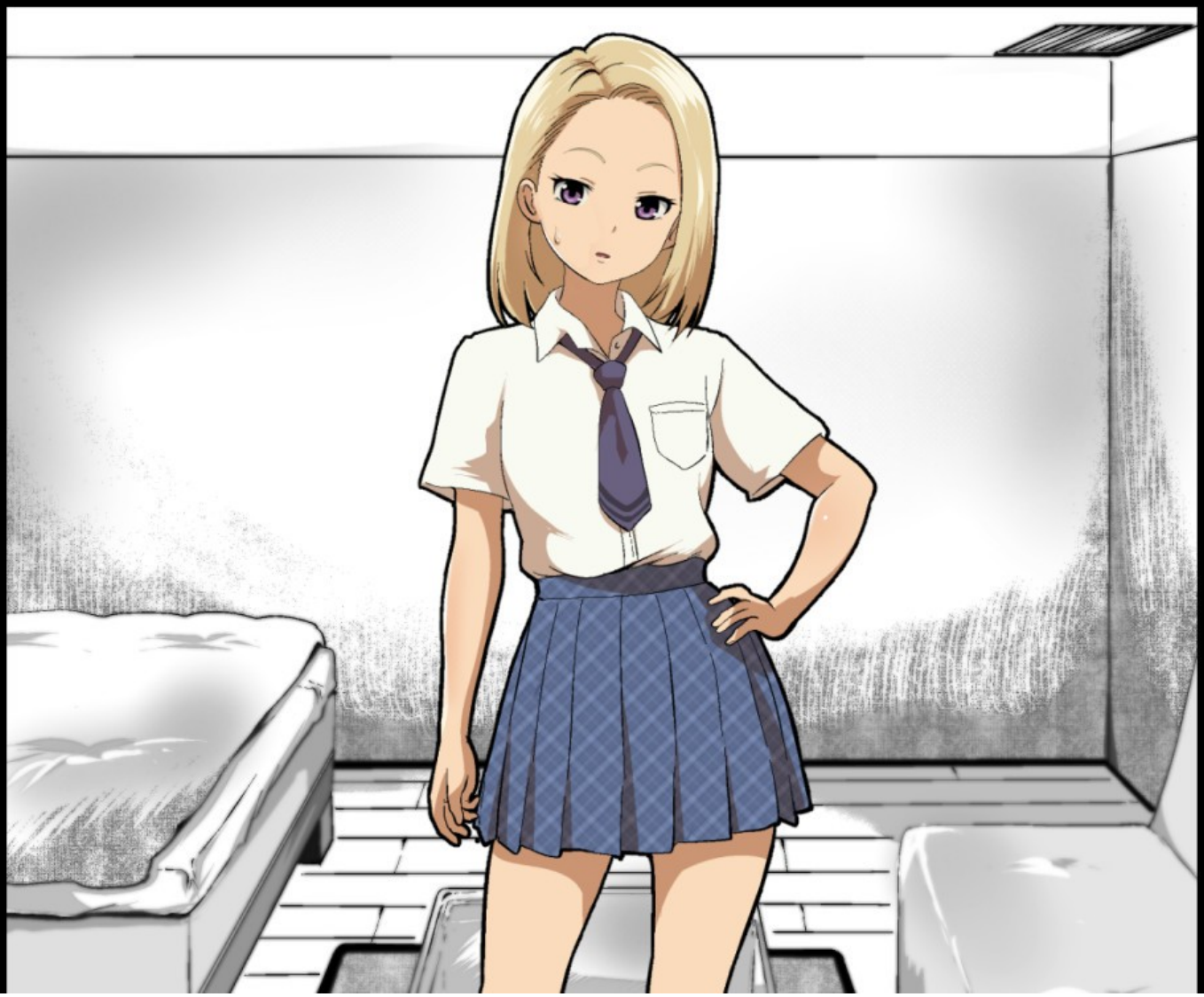
【あなたたちをこの空間に連れてきたわたしはいわゆる生命体ではありません。

あなたたちの認識としては神さまといわれる概念と捉えてもらうのが一番手っ取り早いと思います。

あなたたち二人は本来夫婦になるはずでした。

しかし僅かなタイミングのズレから年齢や出会う時代がすこしずつ変わってしまったのです。

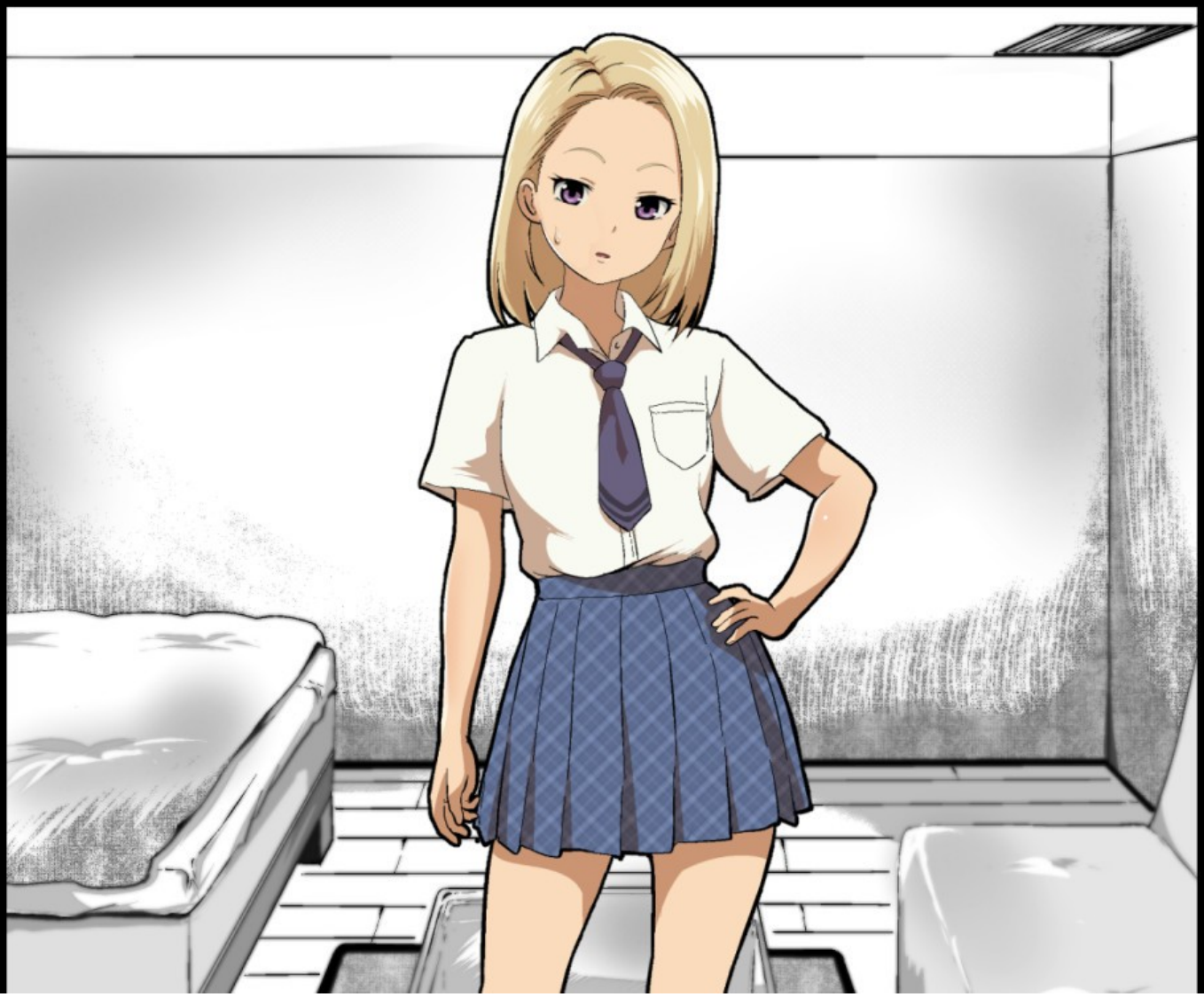
そのため多少無理やりではありつつも二人がコミュニケーションをとる場を与えました。】



理解が追い付かないがここまでの状況を振り返ればそう思うしかないと感じる二人。

モニターに続くメッセージ。

【選択肢を与えます。
あなたたちは関係を築き上げましたが、現実に戻ればお互いに年齢や立場上の関係などを踏まえる必要があります。】



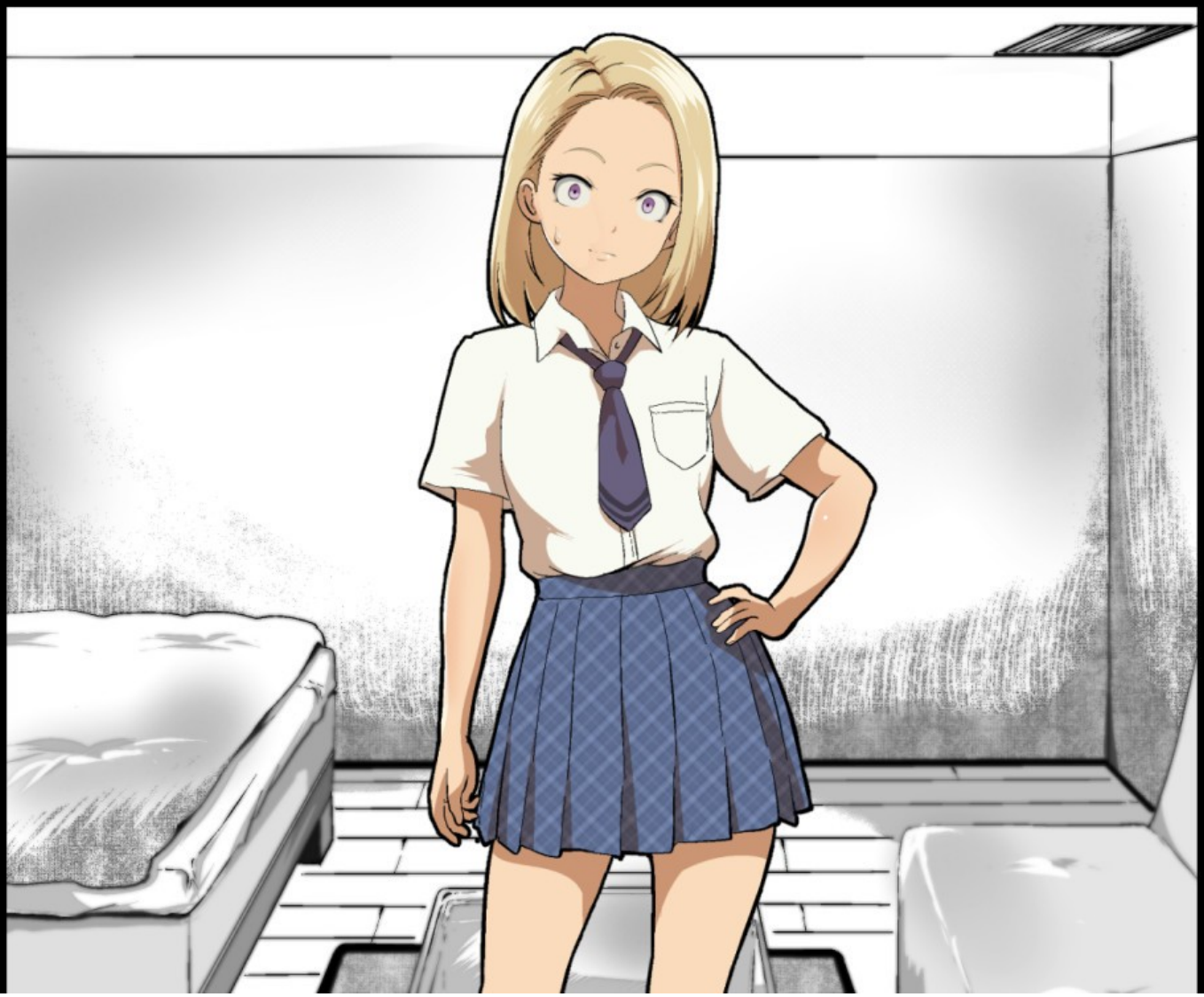
『選択肢』

↓　記憶はそのまま
　　関係も続ける

↓　記憶の抹消
　　お互い別の道を進む

補足：記憶を消す場合、こんなことに巻き込んでしまったことの代償として望むパートナーをある程度融通します。

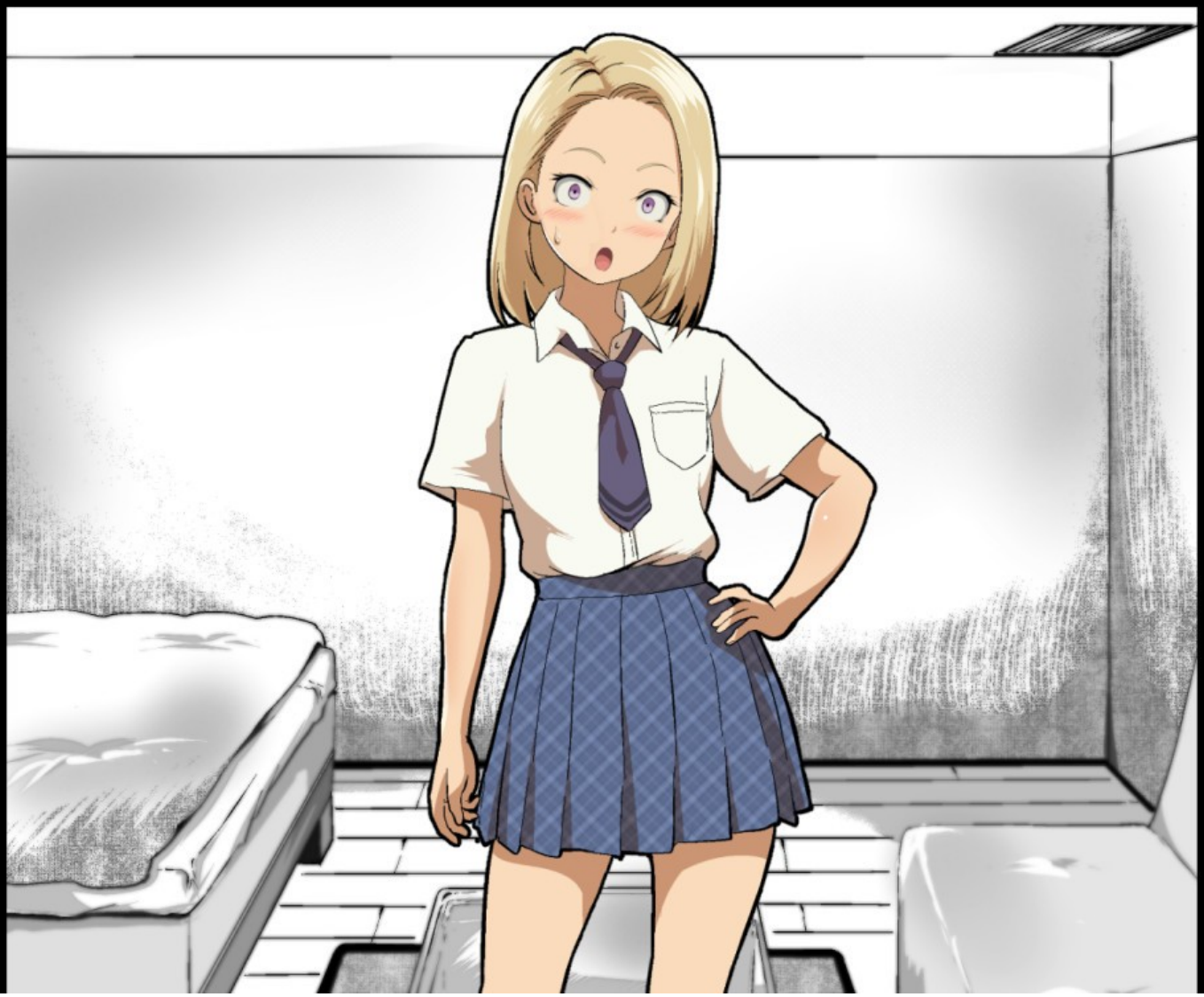
例）お金持ち　イケメン　アイドルやモデルといった富、容姿、知名度の高い者



璃音奈「マジで！？アイドルの○○でもいいの！？ファンクラブあるレベルの2組の□□君でも！？」

璃音奈は恐らく若い女性に人気のあるアイドルやカースト上位である同級生男子の名前を挙げる。

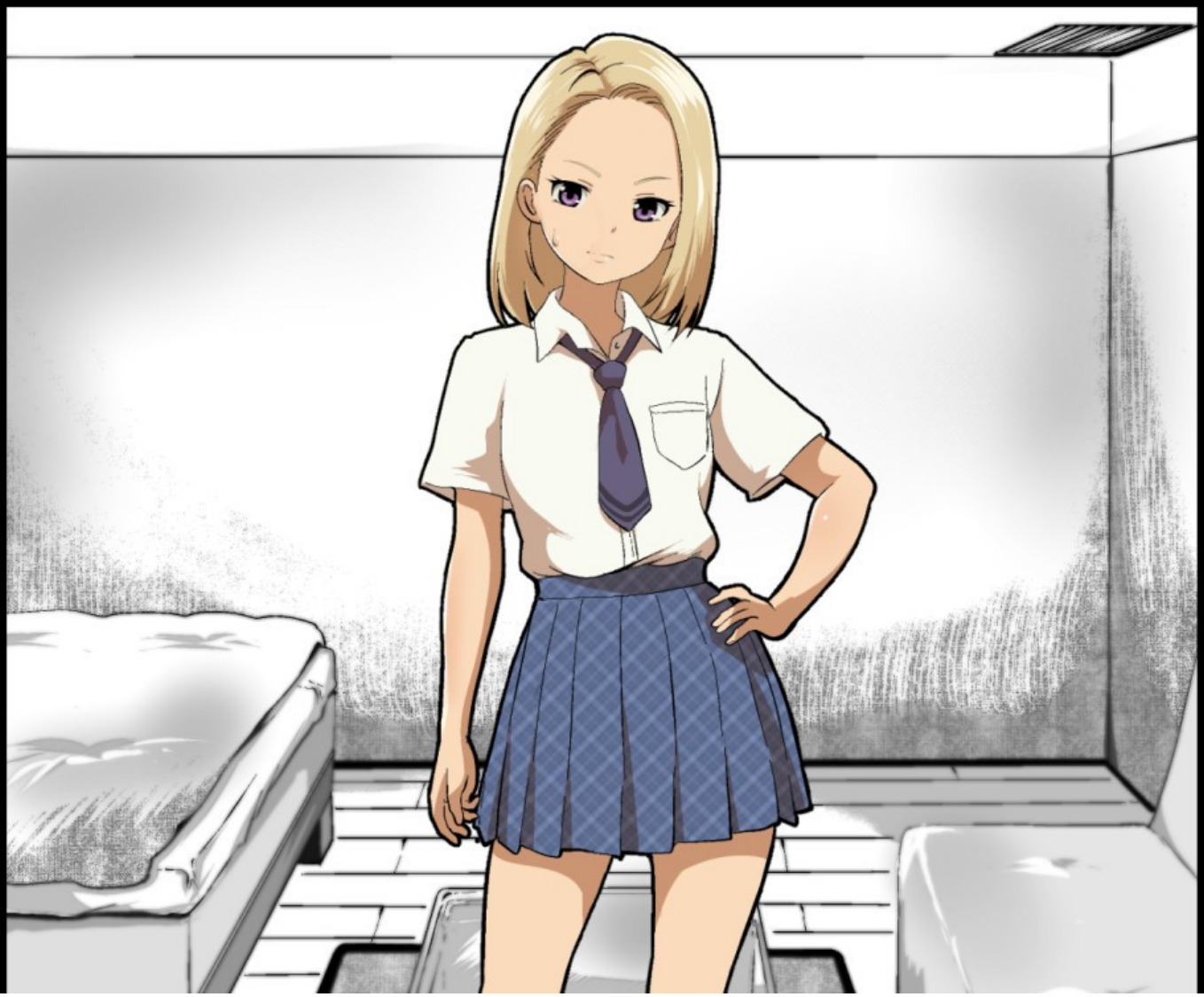
吉田も吉田で声には出さなかったが、一線で活躍しているような女優やアイドルを思い浮かべた。



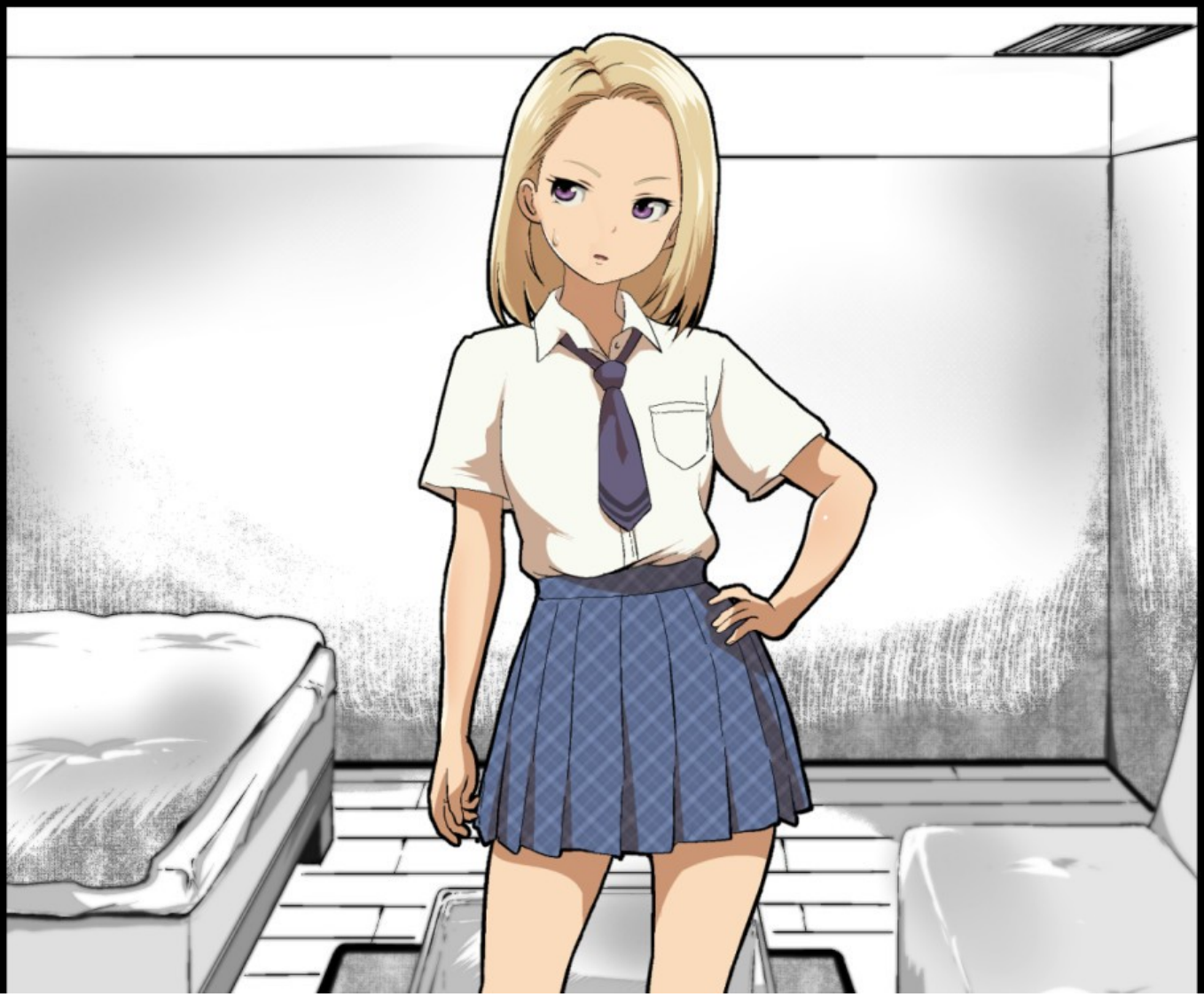
【もし、記憶をそのままにこの関係を続けたいと望むのであれば私は決してその選択を拒絶しません。餞別としてここをあなたたちの愛を育む空間として開放しておきます。

二人の出会った電車に同じ時間帯、同じ車両に一緒に乗るという条件でいつでもここへ来られます。

もちろん満足するまで二人きりの時間を堪能したらいつでも元の場所へ帰ることもできますよ。】



そこでモニターの表示は止まった。
二人はお互いチラチラと目を合わせる。
確かな関係を築いた二人ではあるが、いざ、そんな選択肢を迫られると即答などできないのが人である。
璃音奈「ねえ」
「おっさんはさあどうする？」
吉田「…どうするって」



吉田「とりあえずはっきりしてるのは、出られる条件を満たしたってことは…その、お互い好きになってるってことだよな」

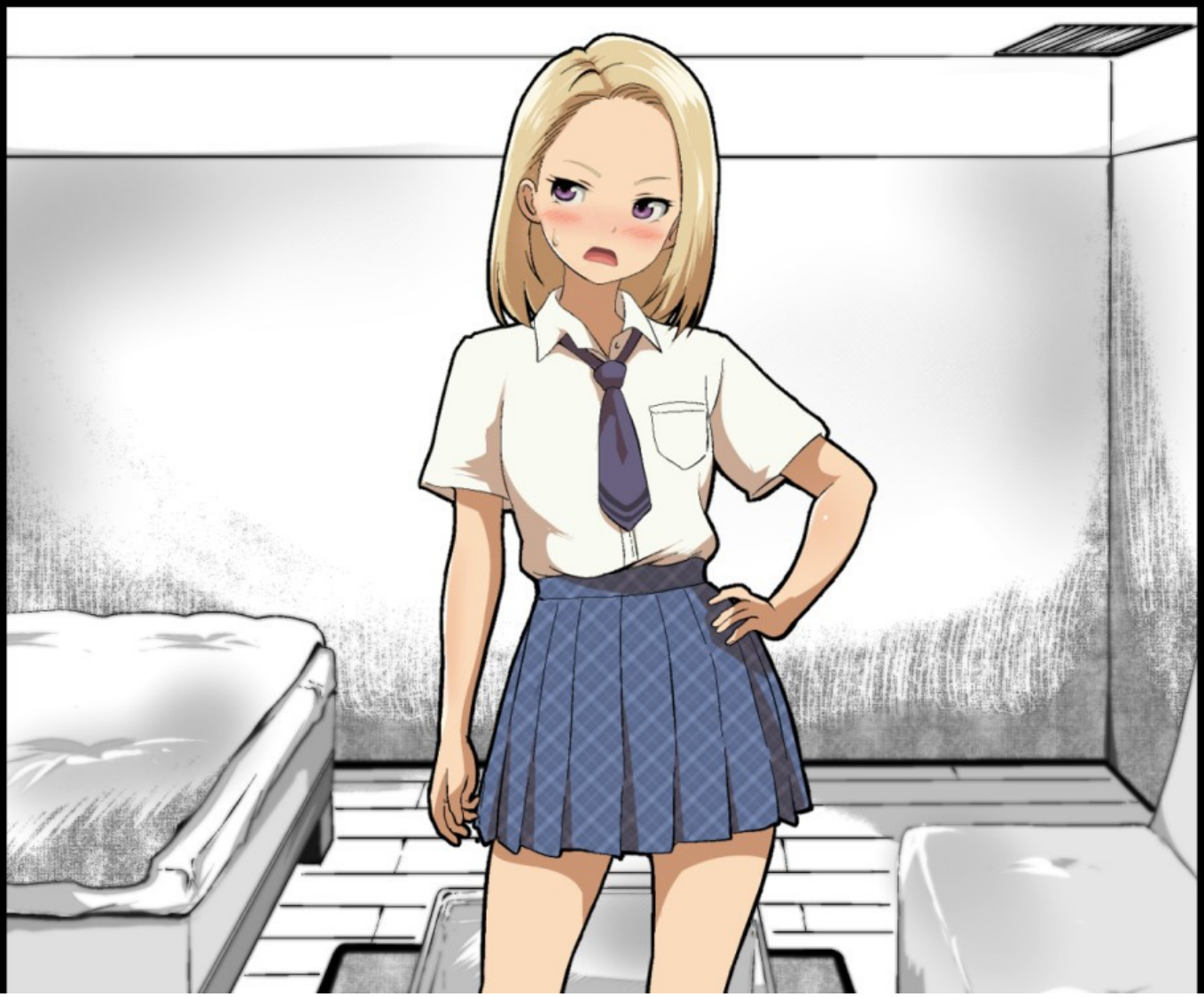
璃音奈「…まあ、そうだね」

璃音奈は顔をふいっとそっぽに向ける。

ちょっと顔が赤い。

璃音奈「おっさんだってあたしのこと好きなんだろ」

吉田「ああ、何かもう普通に好きだ」



璃音奈「…でもさ！なかったことにすれば超人気のアイドルとか俳優と一緒になれるんでしょｗそれもまあ…ｗ」

照れ隠しなのか璃音奈は少しおふざけ感を出して言う。

璃音奈「おっさんだってさぁ、ドラマとか映画で活躍してるめっちゃ可愛いアイドルとか女優とだって一緒になれるんだよ」

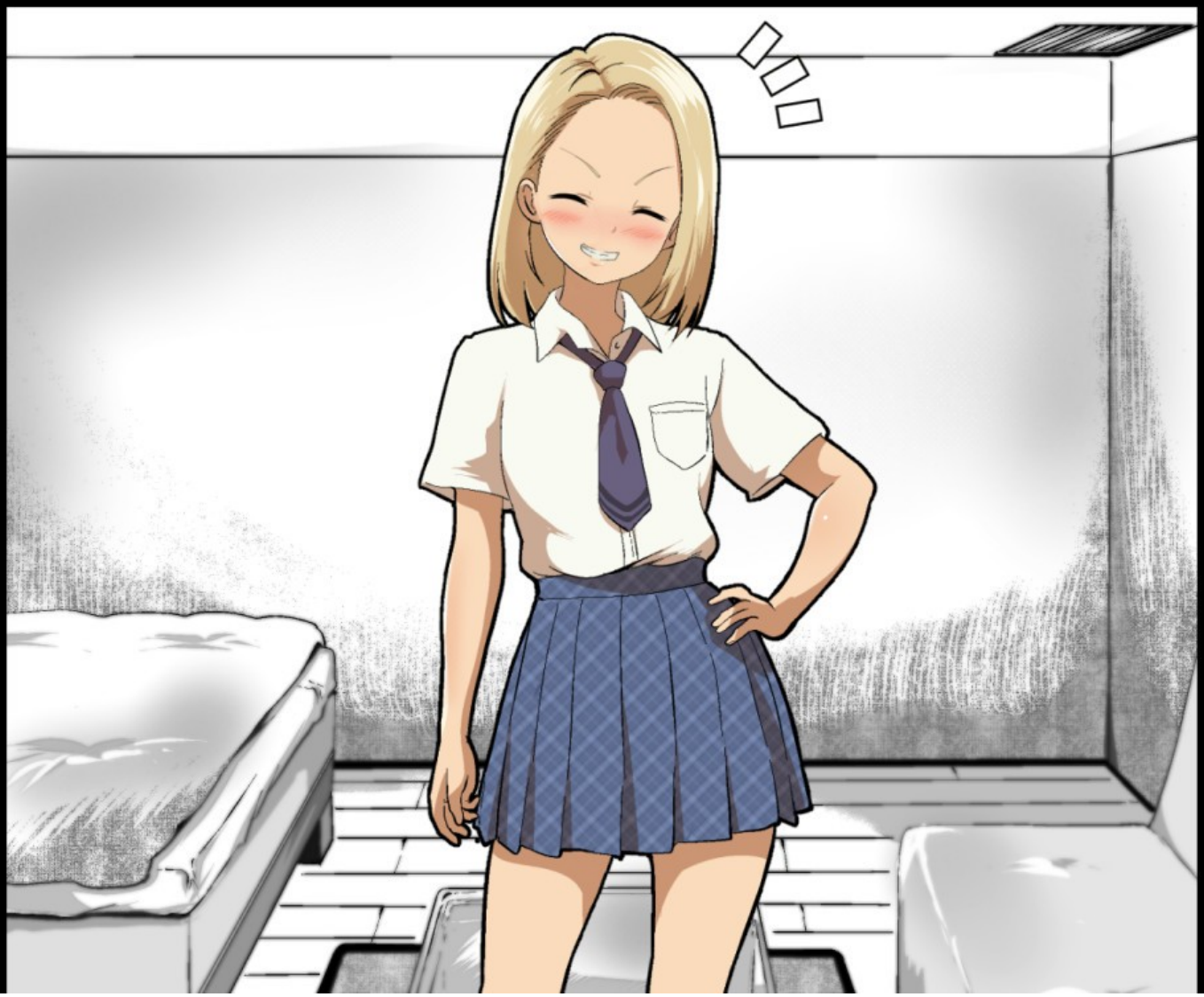
吉田「…そうだな」

二人「…」

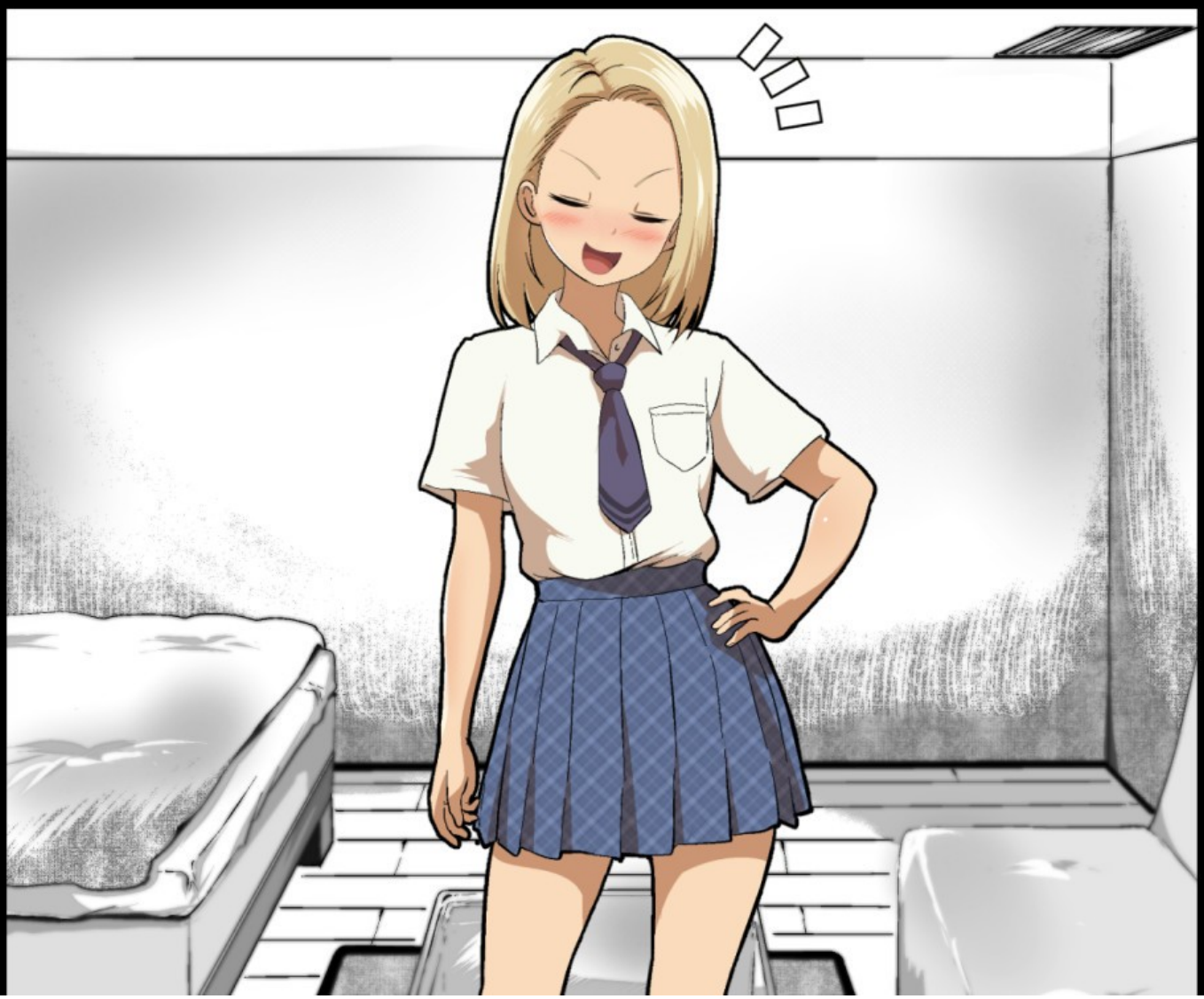
しばらく黙りこむ二人。

吉田「…決まったか？」

璃音奈「うん、てか割とすぐ決まったけどｗ」

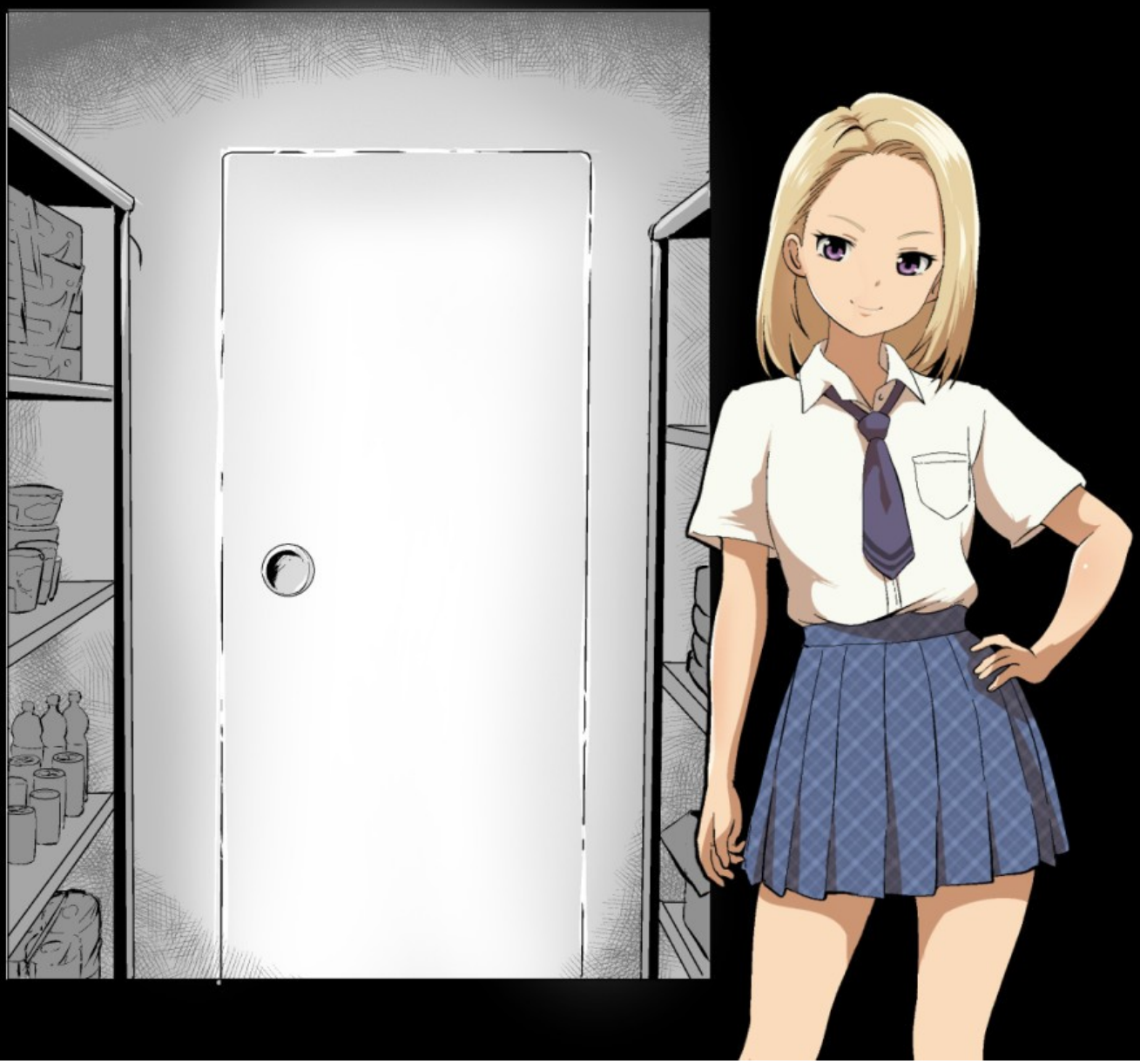


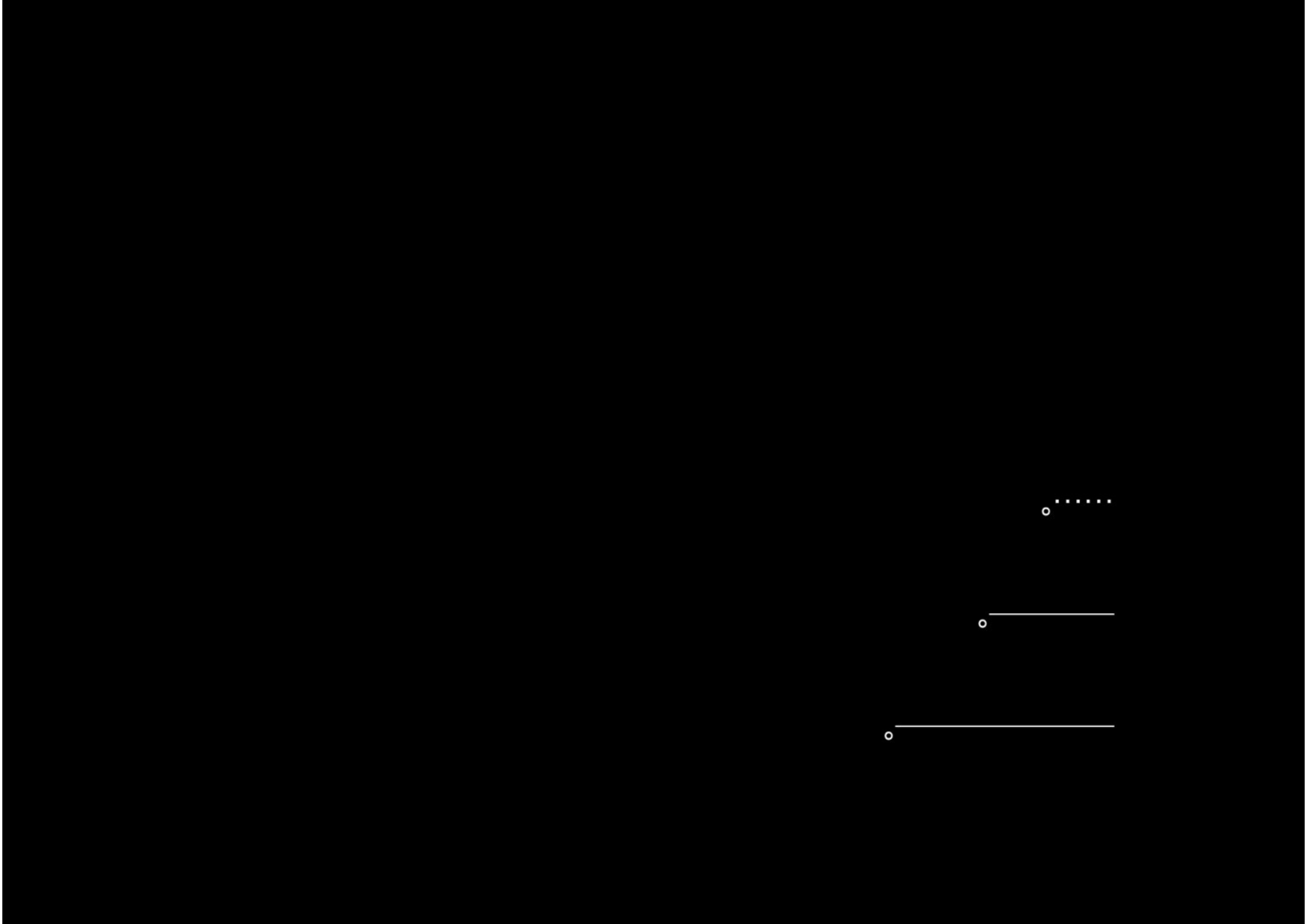
吉田「実は俺も…」
「じゃあ…行くぞ」
璃音奈「ん…」
吉田「…その、タイミングおかしすぎるけどありがとな。何だかんだ脱出できてよかった」
璃音奈「マジでタイミングおかし過ぎるでしょ…w」
「…まあ、でも…うん。こっちこそありがとう」
吉田「…」
璃音奈「…えぇ～何か寒くないこういうの…(笑)」
と言いつつも吉田が出した手をしっかりとって握手する璃音奈。



吉田「それじゃ、今度こそ」

璃音奈「うん」



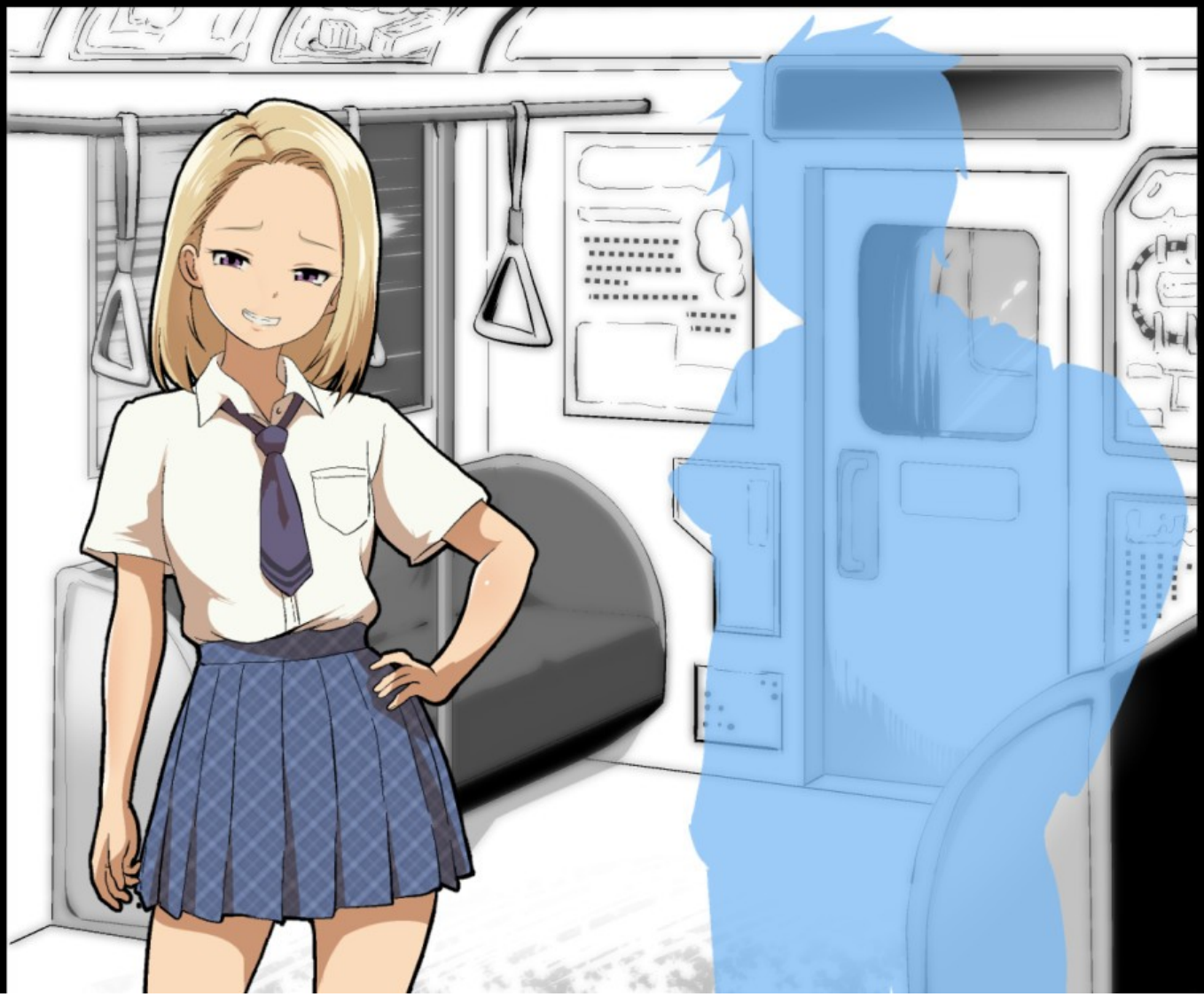


ガタンゴトン
ガタンゴトン――。

午後9時半を少し過ぎた頃。
がらんとした車内には、吉田と若い男女二人だけが乗っていた。

吉田は、今日も遅くまで勤しんだ疲れを引きずったままゆっくりとシートに腰を下ろしている。肩を一度すくめて深く息をつく。どっと押し寄せる倦怠感が交錯していた。

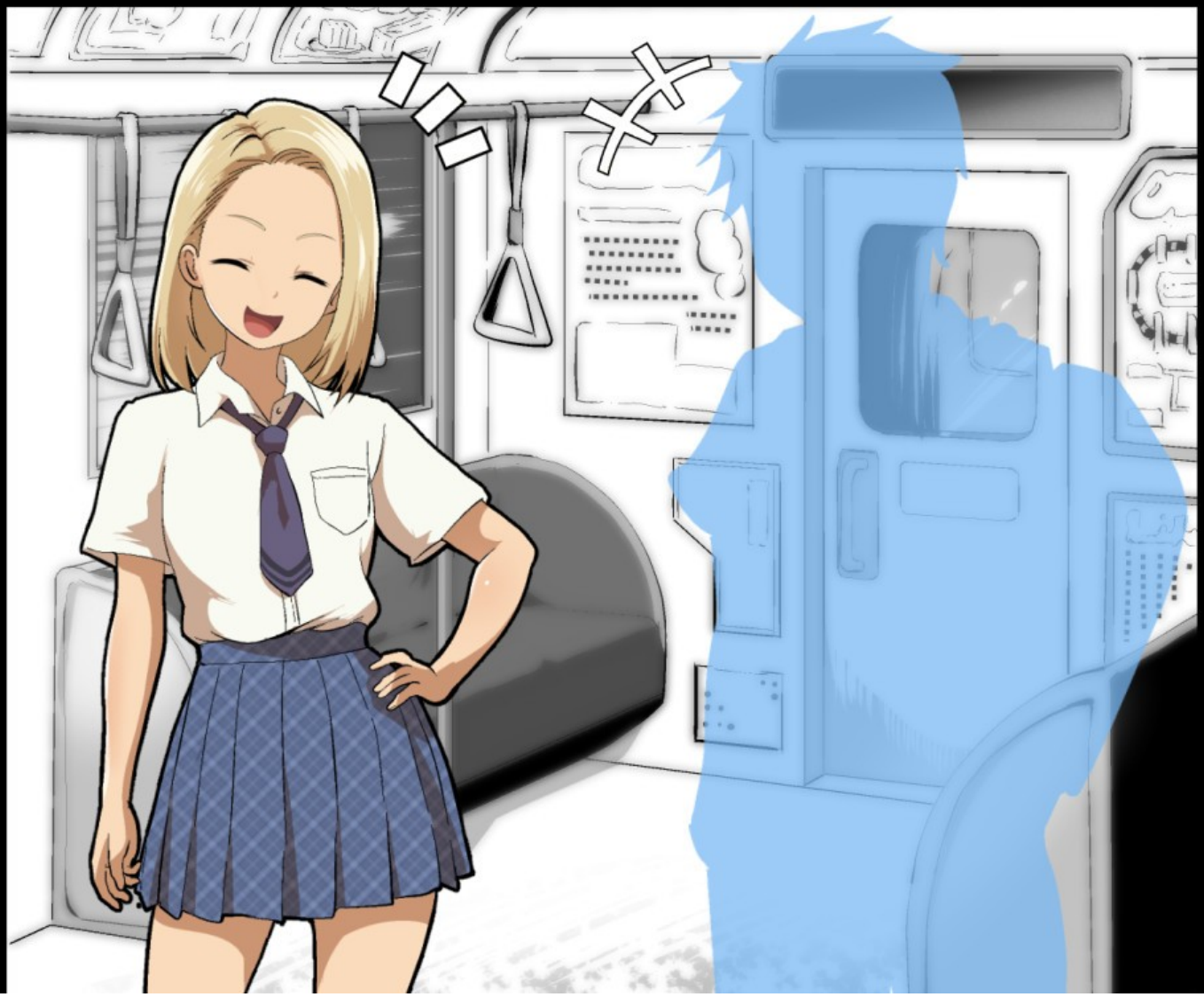
遠くの席には若い、というより学生の男女が並んで座っている。
二人の視線はときおり吉田の方へ向き、ヒソヒソと何かを囁いてはクスクスと笑い声を漏らしていた。
「めっちゃオッサンｗｗ」
「ていうかハゲ…ｗｗ」
聞こえている。声を潜めているつもりかもしれないが、電車内の静けさではかえって言葉が際立つ。



吉田は聞こえないふりをした。
心の中ではムカムカとした感情が渦を巻いていたが、それを表に出すことはしない。

「何か怒ってね？ｗｗ」
「聞こえてるんじゃない？ｗｗ」
からかうような声音が耳に刺さる。

吉田は黙ってただ、じっと座り続けた。
大人として、社会人として、あえて何も言わないという選択をしている。

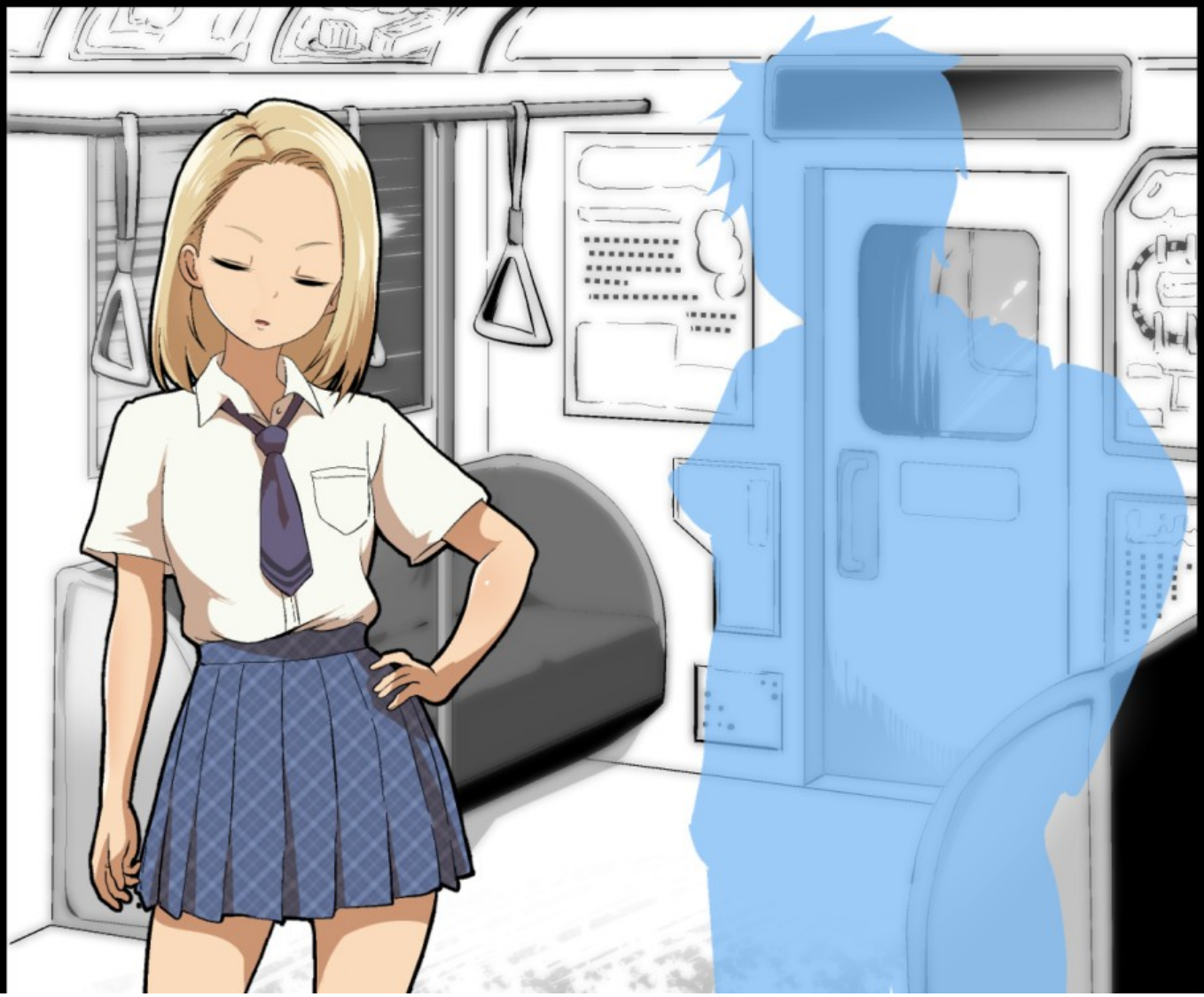


しばらくすると不意に車内が静まり返った。

先ほどまで騒がしかった女の方が、いつの間にか目を閉じて寝ている。

スヤスヤと寝息が聞こえてくるほどに無防備だった。隣の男は、彼女を起こさぬよう気を遣って静かにしている。

吉田はその様子をしっかり確認してから、自分もゆっくりと目を閉じた。



おい♡

お～～～い♡

早く起きろおっさん♡

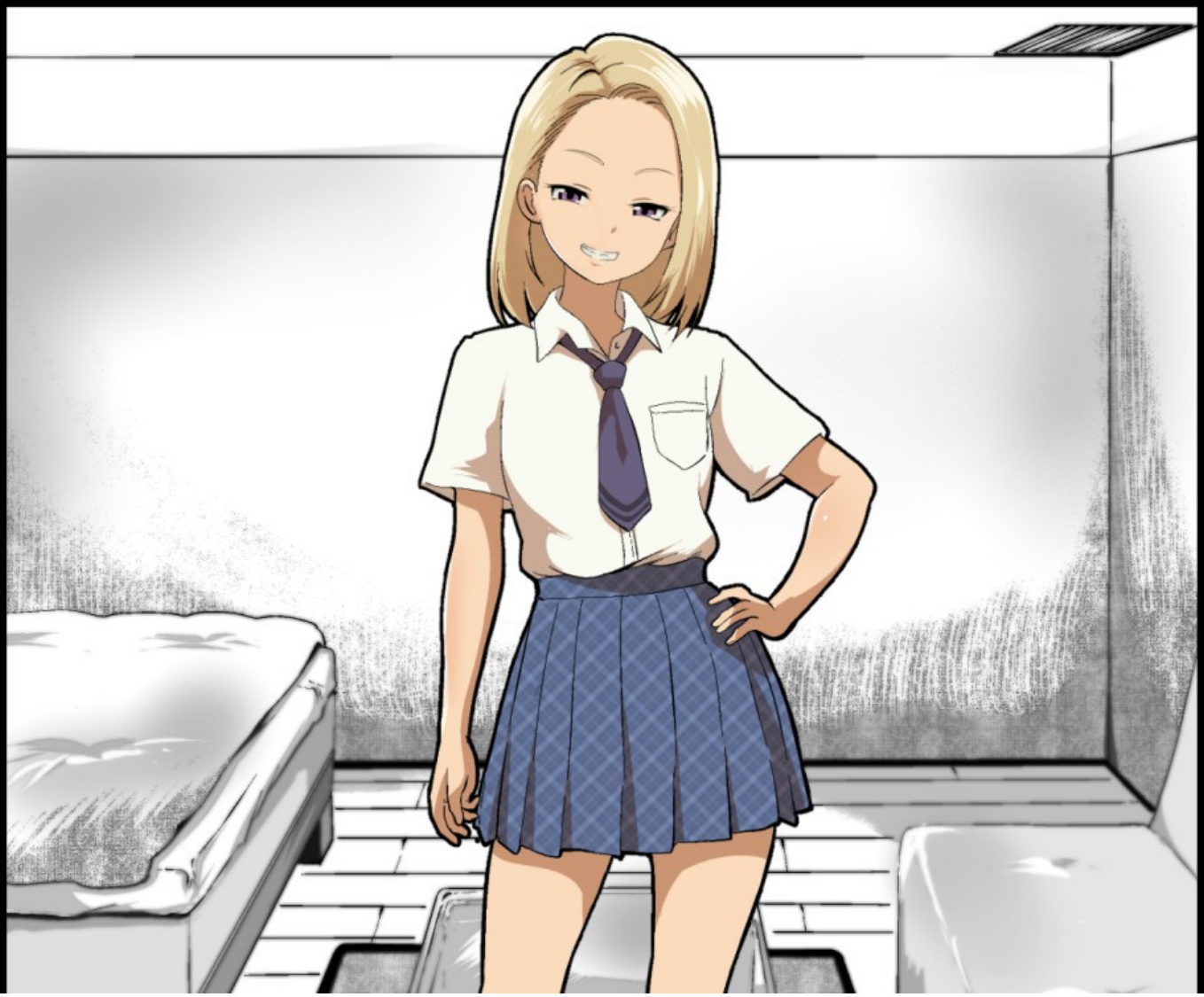
璃音奈「…(笑)」

吉田「…」

璃音奈「…」

吉田「…」

二人「……」

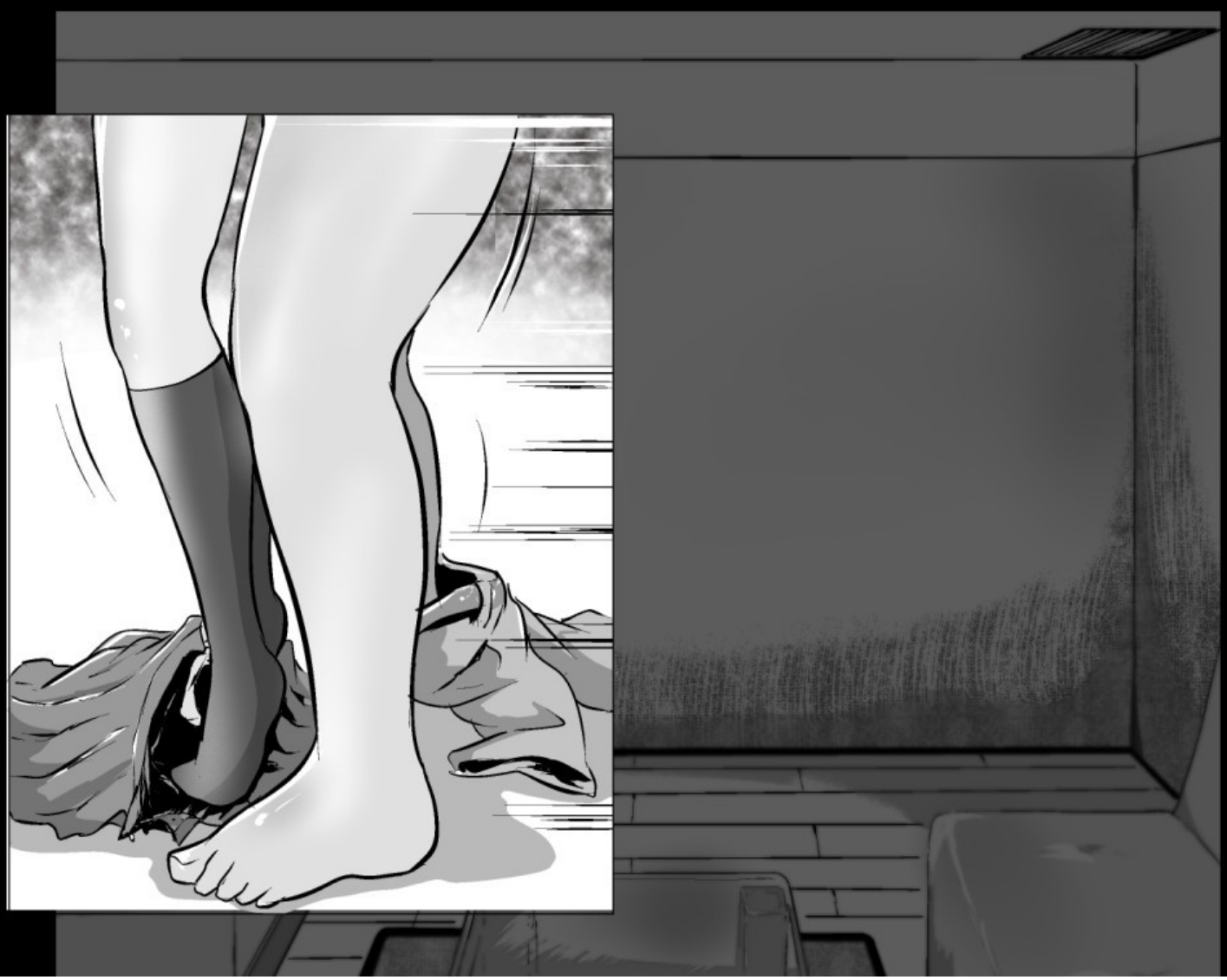


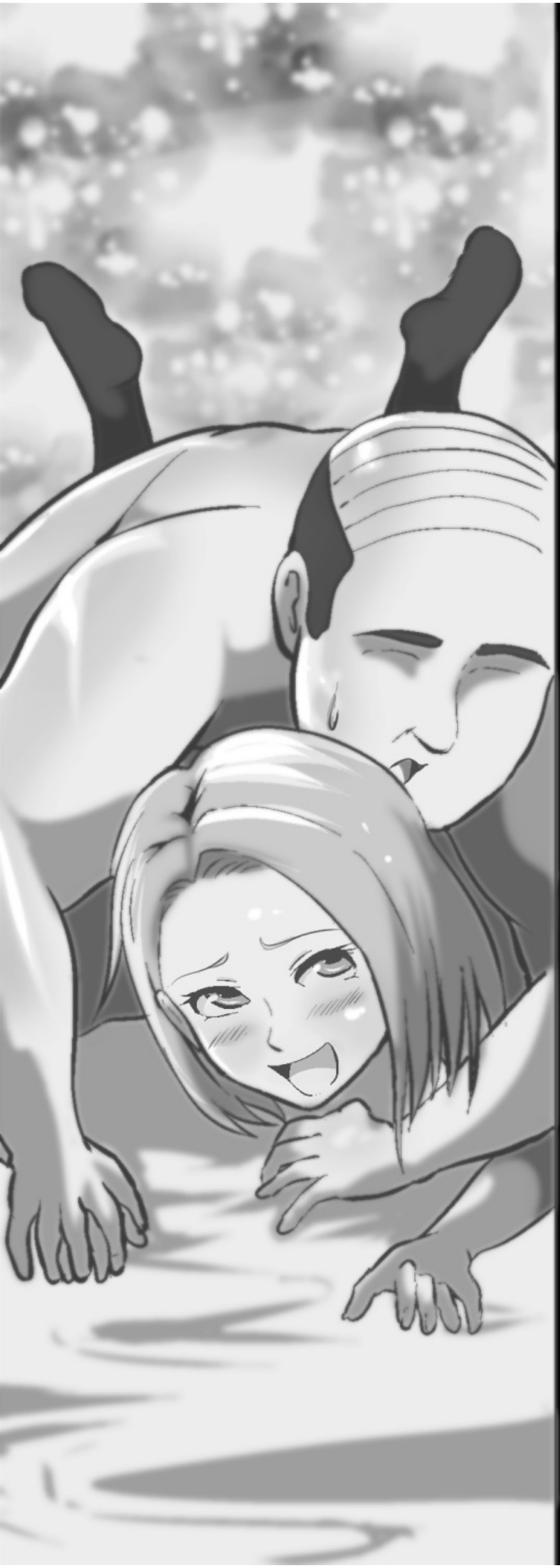
パンパン
パンパンッ

「だーかーらぁーw
ただの友達だって言ってんじゃんw
帰る方向が一緒なだけだってwww」

パンパンパン
パンパンパンッ

ちょww聞けって(笑)





吉田は璃音奈に一緒にいた男について問いただす。ガンガン腰を振りながらまくし立てる様に。

璃音奈はその勢いにニヤニヤしながら答えている。

吉田「くそっ…！くそ！璃音奈は…璃音奈は俺の女なんだぞ！」

璃音奈「やっぱぁ…ｗｗおっさんの焼きもちキツ過ぎるでしょｗｗｗ」

と言いつつ璃音奈も璃音奈で吉田が嫉妬するのを分かっていてわざとそういった行動を起こす。

璃音奈「あーあ、今さらだけどアイドルの○○クンの彼女にだってなれたんだよなぁ～♪」

「気の迷いとはいえなんであんな選択しちゃったんだろうなぁ」

吉田「そうだ！璃音奈はアイドルや金持ちなんかより俺を選んだんだ!!俺たちは愛し合ってるんだぞ！」

璃音奈「べっつに～？wていうかあの時はそうだったとしても愛なんてコロコロ変わるもんだし？繋ぎとめられるかどうかはおっさん次第じゃない？w」

吉田「絶対…絶対に結婚してやる…！璃音奈と結婚するのは俺だ！」

璃音奈「おっさんの執念こっわｗｗ」

吉田「結婚するというまでこの空間からは絶対に逃がさん！」

璃音奈「も～なにそれｗ誰か助けて～ｗキモキモおっさんに襲われてまーすｗｗ」

吉田「ここは俺と璃音奈の愛の巣だ♡！他の誰も来れないのは分かってんだろうが！」

璃音奈「愛の巣って…ダサ(笑)マジおっさんセンスじゃんｗｗ」

吉田「するか？俺と結婚！」

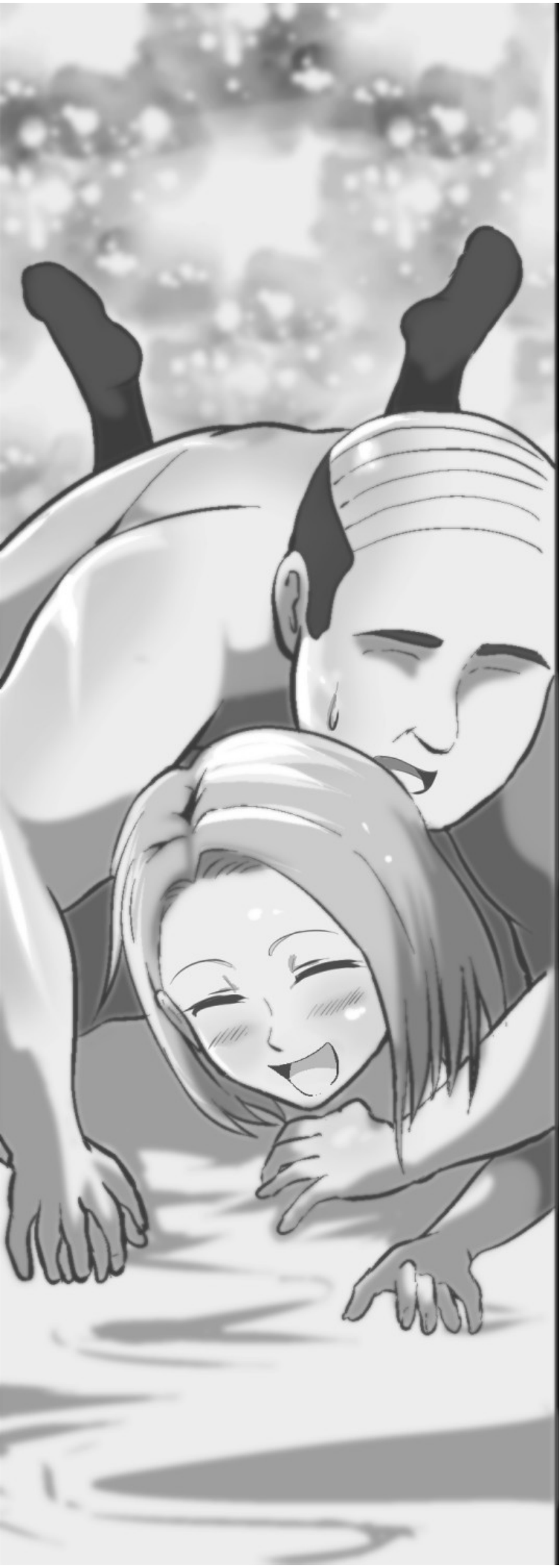
璃音奈「ん～～～？どーしよっかな～♪」

吉田「ここでこれでもかというほど愛を語り合っただろ！璃音奈！璃音奈ぁ！」

璃音奈「…ｗｗてかさ、落ち着いて聞いてほしいんだけど…ｗ」

璃音奈「こ～んな焼きもち妬き
執念メラメラおっさんと
結婚したいなんて思う女
いるわけなくねｗｗ？」

「――あたし以外に♡♡♡」



吉田「…」

璃音奈「ってわけだからw卒業したらちゃ～んと結婚してやるから安心しなって♪」

吉田「…」

璃音奈「んじゃ、そろそろ出るか♪明日は友達とモールに買い物行くから色々準備しないと――」

吉田「…」

吉田「璃音奈ぁ♡！！」

璃音奈「ちょｗなんだよおっさん♪結婚するって言ったら出ていいんだろ…♪」

吉田「ダメだ！丸1日24時間ここでイチャイチャラブラブセックスだ♡！」

「可愛すぎるんだよ、この…♡」

璃音奈「きゃ～♡おっさん落ち着け～♡♡♡」

二人「♡♡♡♡♡」

この空間に来るとこんなくだりをお約束のようにする二人。

誰にも邪魔されない二人きりの空間でイチャイチャと恥ずかしげもなく絡むバカップル。

不思議な事だが二人はお互いに連絡先も住んでいる場所もまだ教え合っていない。

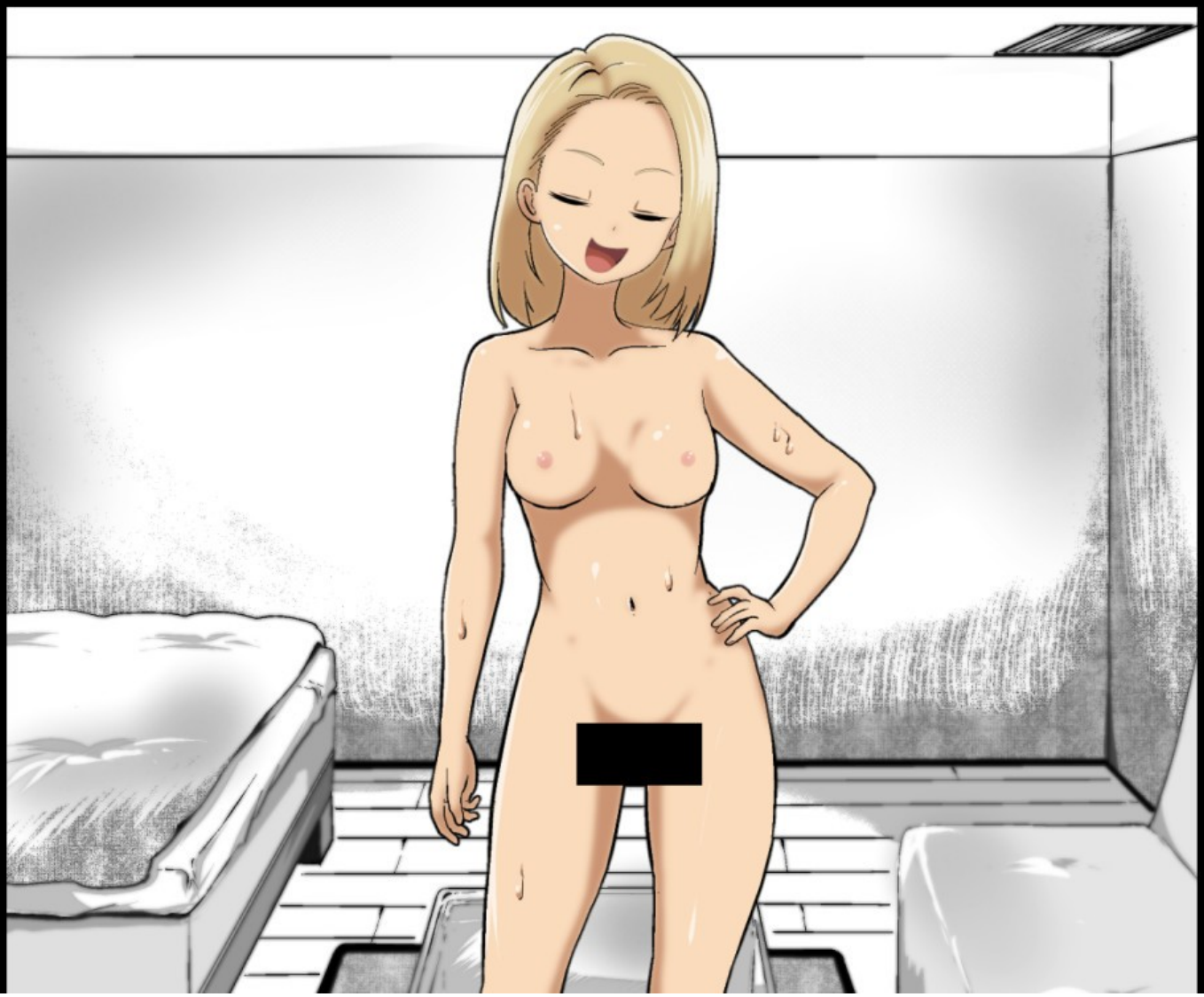
しかしこの空間にさえ来れば当然のようにこの関係になる。

モニターには最後に映し出されたメッセージが表記されたまま、更新されることはなかった。

『おめでとうございます。
その答えはきっと正しいことでしょう。
わたしに感情と呼ばれる念は存在しませんが、
心から二人の未来を願います。
いつまでも幸せでいて下さい。

では・・・。 かみさまっぽいモノより』

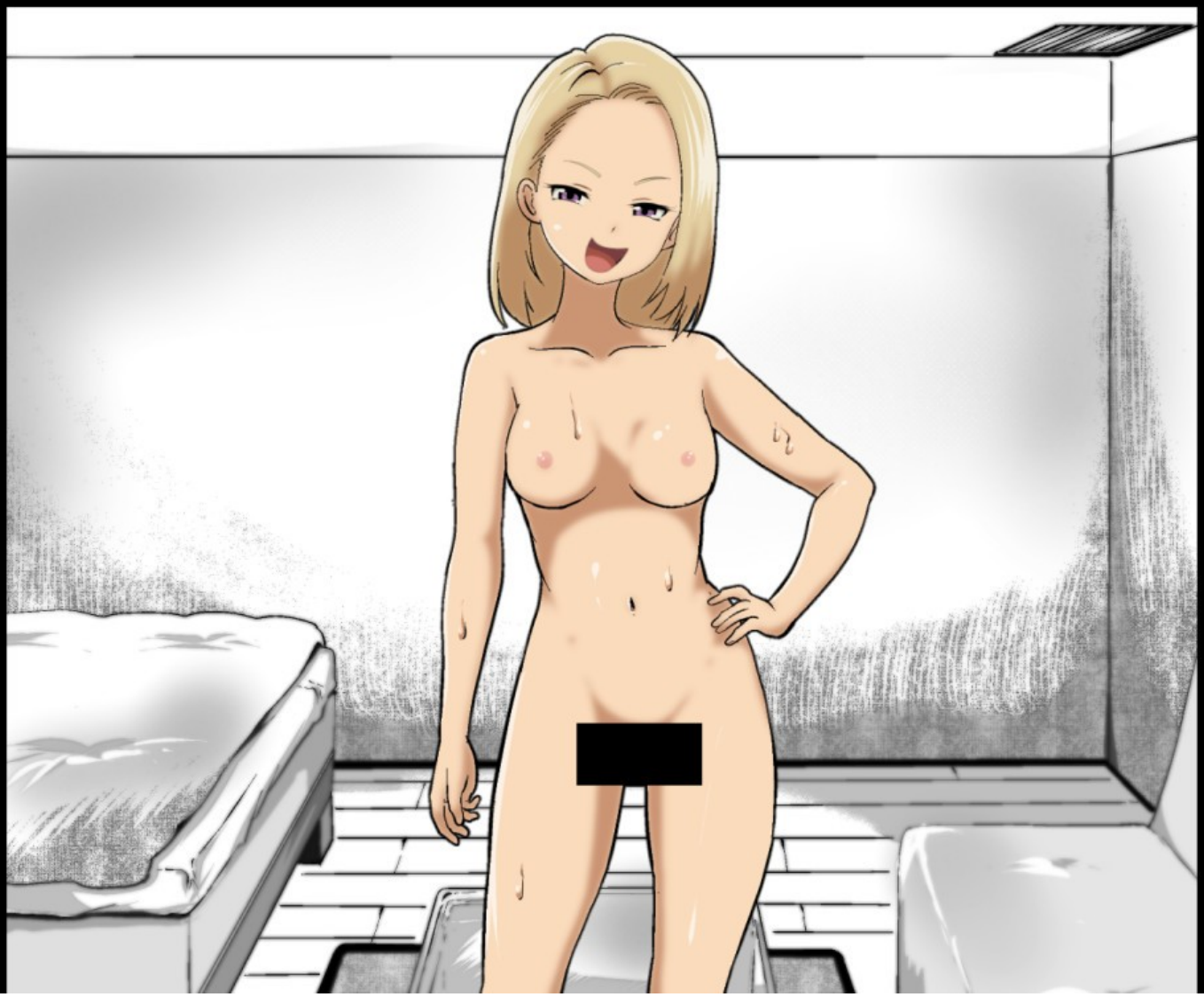
吉田「ハアっハア…」
璃音奈「ふぅ…ちょっと休憩～」
吉田「何か軽く食うか？」
璃音奈「ん～まだいい、てか喉乾いたんだけど」
吉田「…」
璃音奈「喉乾いたんだけど～～～」
吉田「分かった分かったお茶でいいな」



璃音奈「え？ヤダ」
吉田「コーヒー
璃音奈「やだｗ」

吉田「…」

璃音奈「んっ」
吉田「あ」



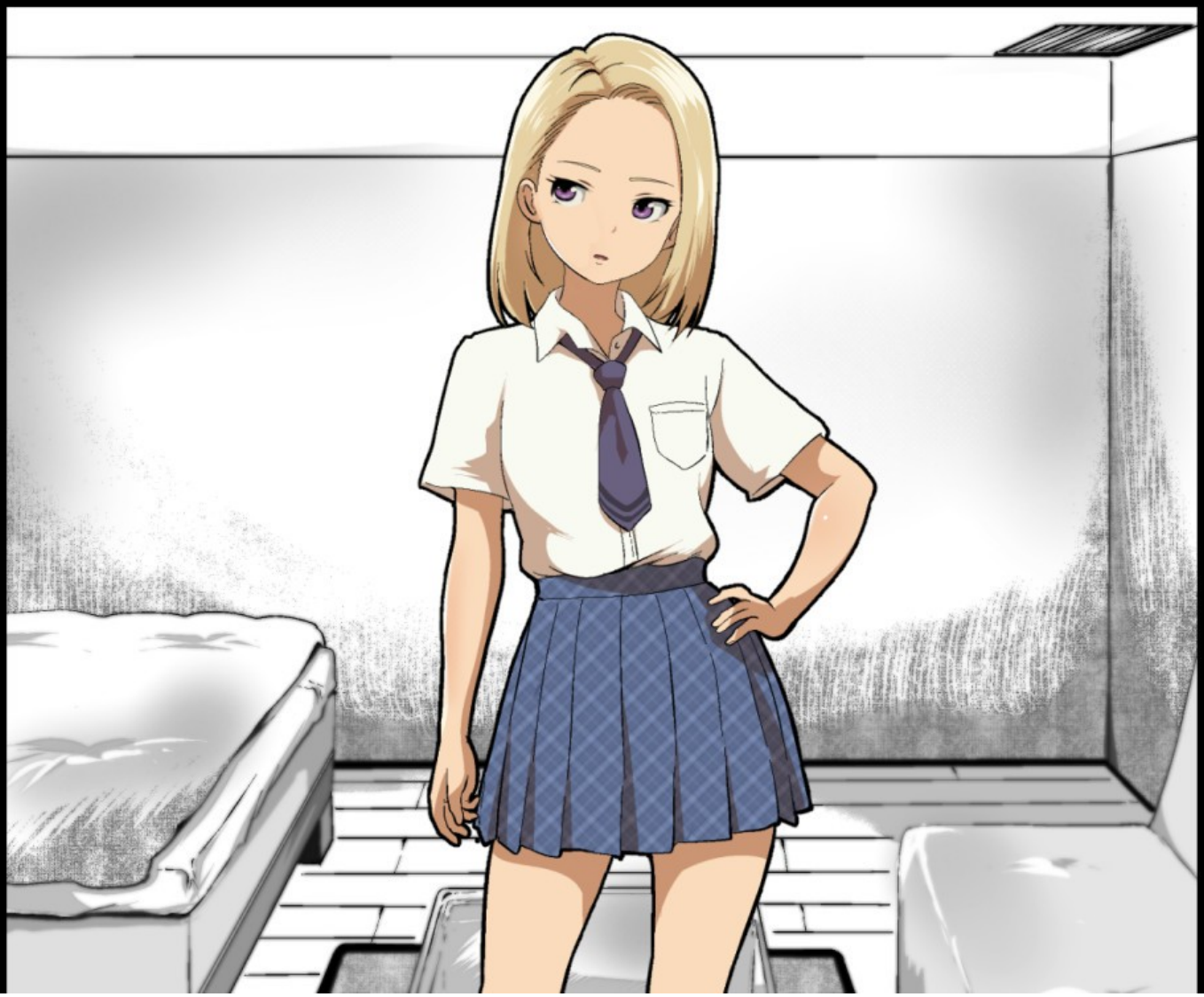
璃音奈「…早く♡」

——おしまい

おまけ①

璃音奈「だってさ…アタシらって元々夫婦になる運命だったんでしょ？」

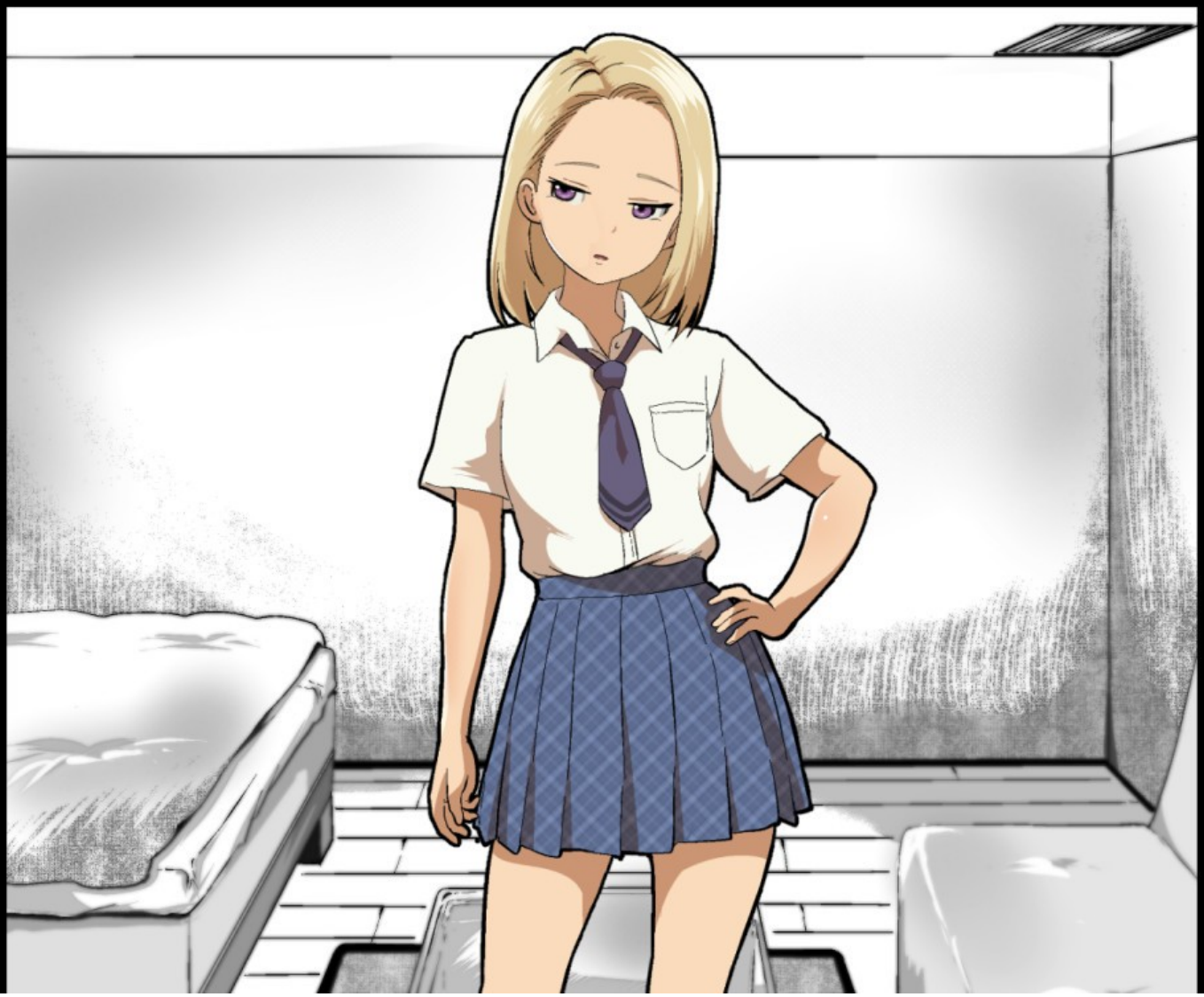
「ちょっとしたズレのせいで年齢や出会うタイミングが変わっちゃったとか言ってたじゃん？難しい事は分かんないけどさ」



璃音奈「もしその世界のアタシらに子供がいたとしたら…その子かわいそうじゃね？」

「生まれるはずだった子なんだよ？」

「だとしたらこの世界でだって楽しく生きていてほしいっていうか」

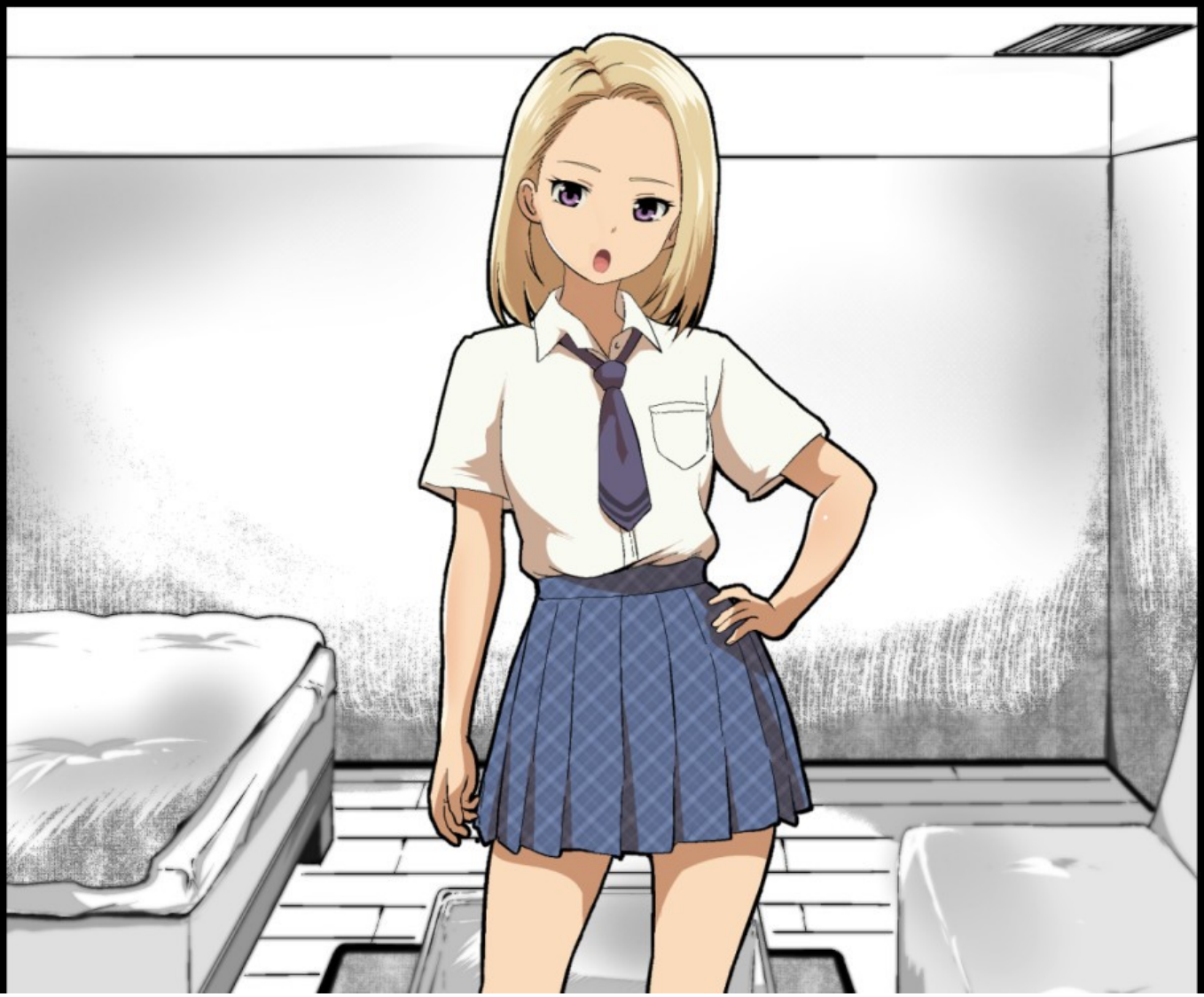


吉田「ギャルの癖に優し過ぎるし俺の子産んでくれる気でいるの可愛すぎるからセックスしまーす♡」

璃音奈「今はまだゴムしろよ♡」

おまけ②

璃音奈「なあ」
吉田「ん？」
璃音奈「アタシの金髪ってぶっちゃけどう？」
吉田「どうって…普通に可愛いだろ。似合ってるし」
璃音奈「ふーん…」
吉田「…校則で禁止じゃないならいいんじゃないか？」
璃音奈「いや、そういう事じゃなくて…」

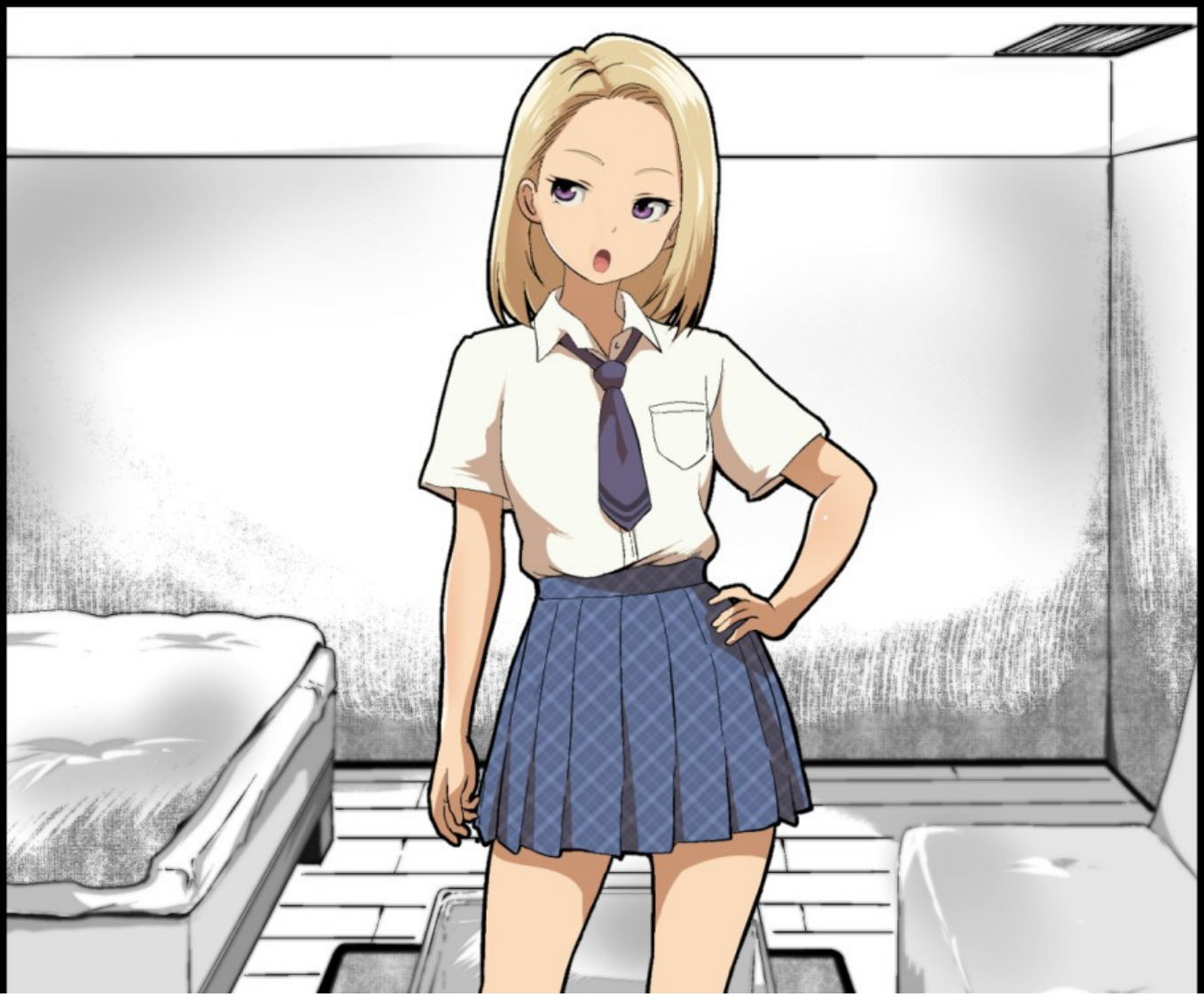


璃音奈「…黒髪の方が好きなら戻そうかな～みたいな」

吉田「…」

璃音奈「…」

吉田「…」



吉田「はい可愛い」

璃音奈「(笑)」

吉田「可愛すぎ罪でキモキモおじさんとのラブラブセックス3時間の刑です♥」

璃音奈「3時間だけかよ♪ちょれーww」

吉田「この…口答えする気か！5時間に変更する♥」

璃音奈「♥♥♥」

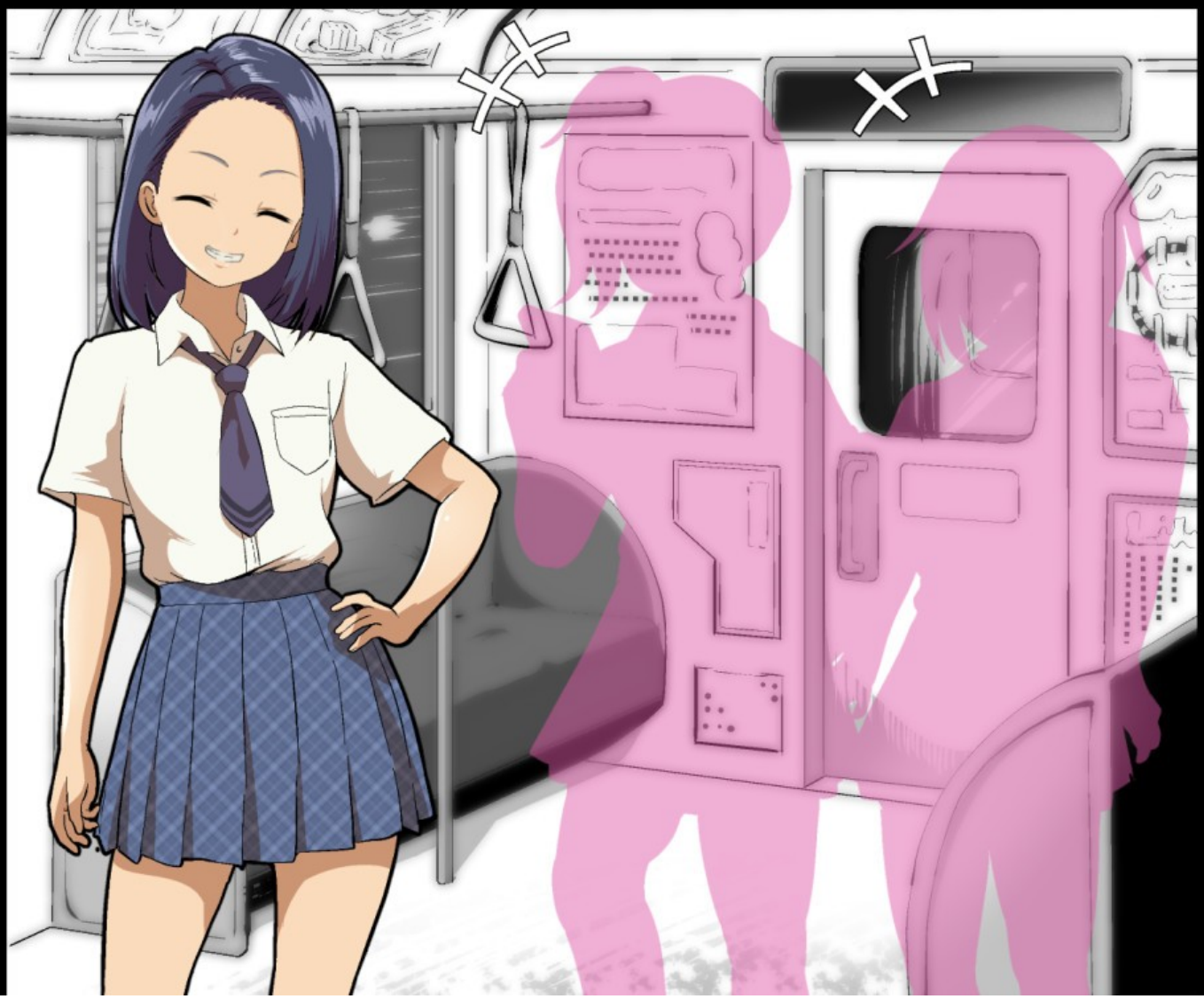
おまけ③

モブ子A「でもびっくりしたわー」
モブ子B「急に戻すんだもんね」

璃音奈「へへｗｗｗ」

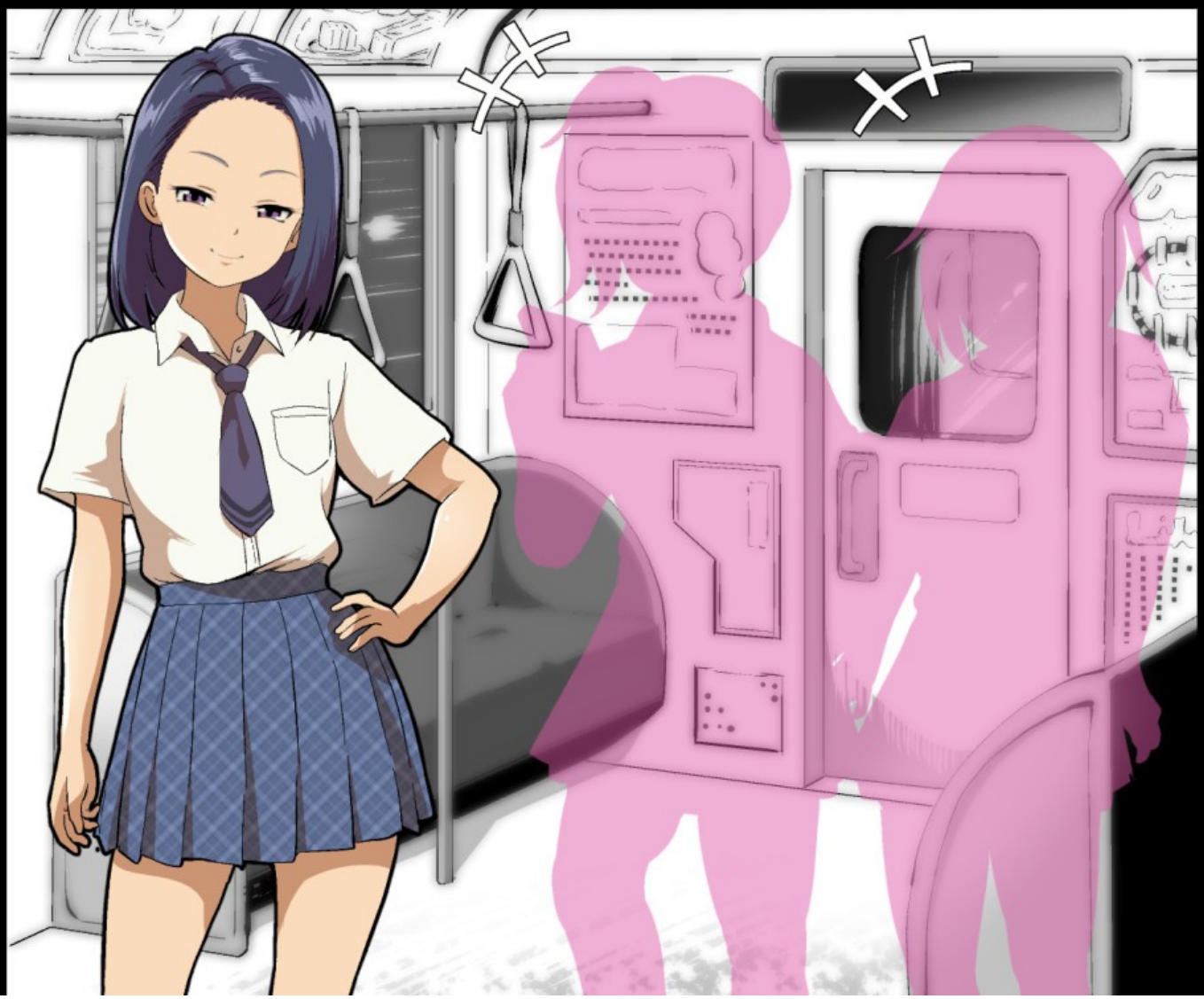
モブ子A「でも似合ってるし」

モブ子B「可愛い可愛い」



璃音奈「…」

吉田「…」



璃音奈「…～～～～」
モブ子A「～～～～？」
モブ子B「～～～～！」
璃音奈「～～～ｗｗｗ」

モブ子A「ちょっと璃音奈ｗやめときなって(笑)」
モブ子B「あんな冴えないおっさん絡むことないって…ｗｗ」
璃音奈「いーからｗいーからｗｗ見てて…(笑)」

璃音奈「ねー、おっさんｗｗ」

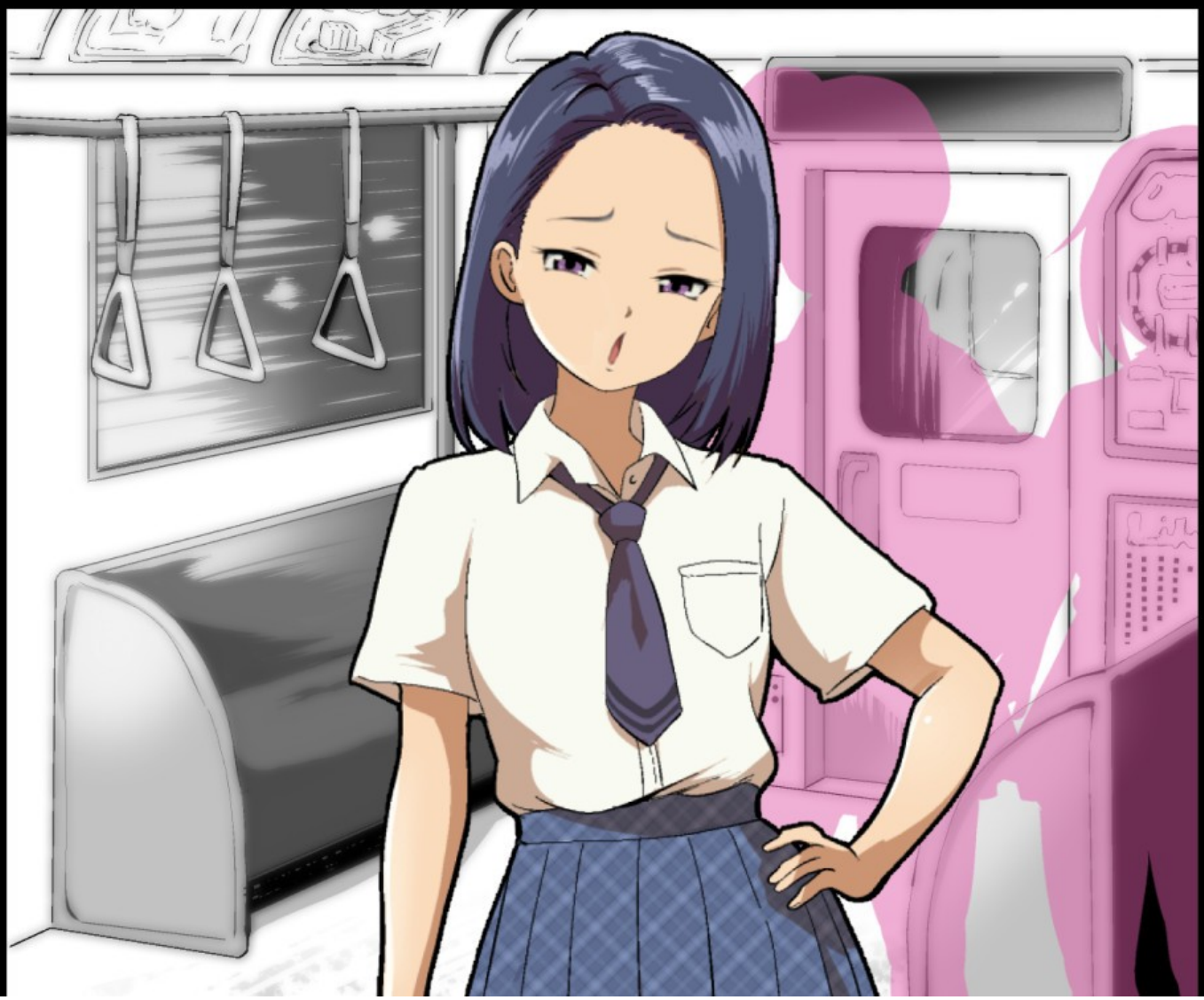
吉田「…」

璃音奈「さっきから何ジロジロ見てんの？視線とかフツーに分かるんだけどｗ」

モブ子ＡＢ「（笑）」

璃音奈「キモいからマジでやめてくんない？言いたいことあるならはっきり言ってみろよ（笑）」

璃音奈「何か文句
あるんですか～～～ｗｗｗ」



吉田「ありませんよ～～♥♥♥」

璃音奈「♥♥♥♥♥」

吉田「毎度毎度わざと挑発するようなことしやがって♥」

「いちいちやることが可愛いんだよ、この…♥」

璃音奈「キモw言う事がいちいちキモいんだよおっさんは（笑）」

吉田「黒髪可愛すぎ罪でキモキモおじさんと結婚の刑だよ♥」

璃音奈「キモｗｗていうか…それ罰じゃねーんだけど(笑)♥」

吉田「♥♥♥♥♥」

璃音奈「♥♥♥♥♥」

なんだかんだ
幸せに愛を育む
二人であった